2021 年度学位論文（博士）

現代日本に生きる人々の営みの記憶、行為の記憶のアーカイブとしての博物館展示研究

（Museum exhibition research as an archive of memories of activities and actions of people living in modern Japan）

京都芸術大学大学院
芸術研究科芸術専攻
青海（せいがい）　伸一

＜目次＞

序章　博物館資料と人々の記憶、思い出との関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
第１節　研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
第１項　本稿と関係する研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
第２項　フォーラムとしての博物館という概念　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
第２節　人々の記憶と博物館資料との関係を示す展示　・・・・・・・・・・・・・・・　6
第１項　人々の記憶とモノをつなぐ展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
第２項　展示資料と来館者の記憶をつなぐ博物館活動・・・・・・・・・・・・・・・　8
第３節　本稿における研究の視点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
第１項　【視点１】使用経験のある資料との出会いを通じた対話の機会の創出　・　10
第２項　【視点２】展示する側、展示される側、その展示を見る側という展示をめぐる立ち位置　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
第３項　【視点３】自分事化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
第４節　本稿の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

第１章　使用経験のある資料を常設展示で取り扱う博物館活動　・・・・・・・・・・・　15
第１節　研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
第１項　これまでの研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
第２項　研究史から見える課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
第２節　再現展示の事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
第１項　建物を再現する展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
第２項　商店や町並みを再現する展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
第３項　その他の特徴的な再現展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
第４項　再現展示から見えること　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
第３節　常設展示で昭和 30 年代以降の時代を取り扱う展示の事例　・・・・・・・・　22
第１項　昭和 30 年代以降の道具を取り扱う展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・　22
第２項　昭和の後半から平成にかけての時代を展示する博物館　・・・・・・・・・・　23
第３項　昭和 30 年代以降の映像や音楽を取り扱う事例　・・・・・・・・・・・・・　25
第４項　昭和 30 年代以降の時代を取り扱う事例から見えること　・・・・・・・・　26
第４節　常設展示における現代資料を用いた展示に関する考察　・・・・・・・・・・　26

第２章　使用経験のある資料を企画展示で取り扱う博物館活動　・・・・・・・・・・・　29
第１節　研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　29
第２節　昔の道具展の傾向と特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
第１項　経年調査から見る展示パターン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
第２項　展示における道具のグループ分けの方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・　31
第３項　再現展示がある事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　33
第４項　昔の道具展の傾向から見えること　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　33
第３節　昔の道具展に見られる平成に近い時代の道具　・・・・・・・・・・・・・・・　34
第１項　昔の道具展における平成に近い時代の道具の展示状況　・・・・・・・・・　34

第２項　昔の道具展における平成に近い時代の道具から見えること　・・・・・・　35
第４節　おもちゃ展の事例と特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36
第１項　おもちゃ展の実際の展示状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36
第２項　おもちゃ展から見えること　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37
第５節　平成展の事例と特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38
第１項　平成展の実際の展示状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38
第２項　平成展から見えること　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　41
第６節　企画展示における現代資料を用いた展示に関する考察　・・・・・・・・・・　42

第３章　地域博物館における回想法の整理とその応用　・・・・・・・・・・・・・・・　45
第１節　回想法の基本と研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45
第１項　回想法の基本　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45
第２項　研究史から見る課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　46
第２節　北名古屋市における地域回想法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　48
第１項　地域回想法の取り組み　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　48
第２項　北名古屋市歴史民俗資料館との関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　48
第３節　博物館がかかわる回想法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　49
第１項　福祉施設などで行う活動に対し、資料を貸し出す事例　・・・・・・・・・　49
第２項　博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法　・・・・・・・・・・・・・　50
第３項　事業としての回想法と展示活動との関係　・・・・・・・・・・・・・・・　51
第４節　回想法の視点を提示した博物館の展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・　51
第１項　常設展示を用いた事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　51
第２項　昔の道具展で回想法の視点を提示している事例　・・・・・・・・・・・・　52
第３項　展示活動に見る回想法との関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　53
第５節　回想法の手法を用いた展示への応用　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　54
第１項　博物館活動と回想法のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　54
第２項　回想法の応用事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　55
第６節　回想法の整理から考える博物館展示への応用の可能性　・・・・・・・・・・　56

第４章　現在生きている人々が経験したできごとのうち、現在進行形のできごとを記録
し、伝える博物館活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58
第１節　研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58
第１項　新型コロナウイルスの展示をめぐる研究史　・・・・・・・・・・・・・・　58
第２項　東日本大震災をめぐる研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
第２節　新型コロナウイルスと博物館活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　61
第１項　新型コロナウイルスを直接テーマとして取り上げる展示の状況・・・・・　61
第２項　新型コロナウイルスを展示の一部で取り上げる事例　・・・・・・・・・　63
第３項　新型コロナウイルスを取り上げる展示から見えること　・・・・・・・・　65
第３節　東日本大震災と博物館活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66
第１項　東日本大震災を取り上げる特徴ある展示事例　・・・・・・・・・・・・・　67

第２項　東日本大震災を取り上げる特徴ある展示から見えること　・・・・・・・　71
第４節　現在進行形のできごとと向き合う博物館の立ち位置の整理と現代資料を通した来館者との対話　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　73

第５章　現在生きている人々が経験したできごとを、経験していない世代の人々に伝えていく博物館活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　75
第１節　研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　75
第１項　本章全体にかかわる研究史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　76
第２項　戦争を展示する博物館に関する研究史　・・・・・・・・・・・・・・　76
第３項　公害を展示する博物館に関する研究史　・・・・・・・・・・・・・・　77
第４項　自然災害やダムに沈んだ村を展示する博物館に関する研究史　・・・・・　78
第５項　研究史から見える課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
第２節　人々の記憶にある時代のできごとを展示する常設展示　・・・・・・・・・　80
第１項　具体的な展示の事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　80
第２項　常設展示の事例から見えること　・・・・・・・・・・・・・・・・・　81
第３節　戦争や平和を主題とする展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　81
第１項　具体的な展示の事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　82
第２項　戦争や平和を主題とする展示から見えること　・・・・・・・・・・・　85
第４節　公害を主題とする展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　86
第１項　具体的な展示の事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　87
第２項　公害を主題とする展示から見えること　・・・・・・・・・・・・・・　88
第５節　ダムに沈んだ村を主題とする展示　・・・・・・・・・・・・・・・・・　89
第１項　具体的な展示の事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　90
第２項　ダムに沈んだ村を主題とする展示から見えること　・・・・・・・・・　91
第６節　現在生きている人々が経験したできごとを、経験していない世代の人々に伝えていく博物館活動から見えること　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　92

終章　博物館で現代資料を扱う意味、可能性、今後の課題　・・・・・・・・・・・・　96
第１節　各章のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　96
第２節　今後建設予定の博物館における人々の記憶の取り扱いとの関係　・・・・・　97
第１項　『（仮称）豊田市博物館基本計画』に見る人々の記憶と博物館活動の関係　98
第２項　『（仮称）豊田市博物館基本計画』から見えること　・・・・・・・・・・　99
第３節　本稿を通して見えてきたこと　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　99
第４節　全体のまとめと残された課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　101
謝辞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　104
脚註　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　105
参考文献一覧
資料一覧
資料
写真一覧

写真
図版一覧
図
表
発表論文リスト

序章　博物館資料と人々の記憶、思い出との関係

2020 年『民具マンスリー』にファミコンを紹介する論考が掲載された[1]。この論考を書いた寺農織苑によると、「現行の博物館法に定める日本国内の博物館で、恒常的にファミコンを展示しているところはない」[2]とのことである。

この論考が目についた背景には、筆者が勤務する福生市郷土資料室において、2015 年 4 月から民俗資料を常設展示しているコーナーにファミコンを展示していたことがある。福生市郷土資料室は博物館法で定める登録博物館でも博物館相当施設でもなく、博物館類似施設にあたることから、寺農による調査の対象外であり、把握されていないことは仕方ないことである。むしろこの記事に接したことで、福生市郷土資料室におけるファミコンの展示が、全国でもかなり早い段階から行われていたことを認識できたことは大きな収穫であった。

福生市郷土資料室でファミコンを展示した経緯は、東京都三多摩公立博物館協議会の会報である『ミュージアム多摩』にて既に報告したが[3]、展示のきっかけは、小学校での「むかしの道具調べ」という単元の学習対応を行うにあたり、学校の先生に対して行った聞き取り調査であった。授業との関係で、学校で想定している「昔」はいつぐらいを指すのかを確認したところ、「お父さんお母さんが子どもの頃」とのことであったのだ。それまで福生市郷土資料室で展示していた道具は電化以前の道具ばかりで、学校の想定する昔からは大きくかけ離れていたのである。

この聞き取りをした段階でも、お父さんお母さんが子どもの頃というのはすでに平成に入った時代であったことから、民俗展示コーナーにファミコンやレンズ付きフィルムなど、昭和末から平成にかけて使われた道具を加えたのである（写真 1）。

しかし、当時、全国の博物館での動向を押さえずにファミコンの展示をしたことから、他の博物館では実際の時代設定をどこまで下げているのか、どんな特徴を持った活動を行っているのかといったことまで検証していなかった。そこで、修士課程において全国の博物館における現代資料を用いた展示を確認する作業に入ったことが、本研究の端緒である。

その際調査を行ったのは、人々の記憶にある時代について常設展示で扱っている事例、企画展示「昔の道具展」での事例、そして回想法と博物館の関係などであった。

今回の研究では、新たに人々の記憶にある時代に起きたできごとを取り扱う事例についても調査対象に加えるとともに、2020 年以降感染拡大の続く新型コロナウイルスと向き合う博物館の事例まで含め、人々の記憶にある時代に対して博物館がどう向き合ってきたのか、それらの事例から得られる知見を基に、今後、人々の記憶にある時代に対して博物館はどう向き合っていくべきなのか考察するものである。

なお、本稿において考察を行う対象としての博物館は、主に市町村が設置主体となり歴史や民俗といった分野を取り扱う公立の博物館や資料館などの展示施設とする。そのうえで、これらの施設について、地域に根差した活動を行うという意味から「地域博物館」と呼ぶこととする。

本稿では、地域博物館における常設展示の時代設定についていつまでの時代を対象とするのか、どのような資料を収集するのか、展示を行うにあたってどのような展示が考えられるのかといったことを考察するものである。

調査の対象としては、地域博物館の事例を中心としながらも、比較のため都道府県立博

物館や国立の博物館の事例はもとより、それぞれのテーマに関連する私設の博物館や展示施設、企業博物館、時には類似するテーマを扱う商業施設やテーマパークをも含めて検討を進めることとし、それらとの比較によって地域博物館の特徴に迫っていきたい。

こういった考察を進めるにあたり、意識していく視点は大きく 2 つである。1 つ目の視点は、「フォーラムとしての博物館」という概念である。このフォーラムとしての博物館という概念は、日本では国立民族学博物館の館長である吉田憲司が紹介したもので、未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所とされている[4]。

多くの人が使用した経験を有する道具や体験したできごとについては何らかの記憶が伴うものであり、それらに接することで、思い出された記憶や思い出を基に、来館者と来館者同士や学芸員らとその経験などについて対話が始まる可能性を秘めている。そういった対話の場を提供することがフォーラムとしての博物館という概念に繋がるのではないかと考える。

そういったモノやできごとを展示する博物館は、従来からある何か新しいことを学ぶための施設としての博物館とは違い、自身の知っているモノやできごとに触れる機会を提供することで、来館者の持つ記憶を想起させ、それらをきっかけとした懐かしい記憶を語りだしたくなる場となることが想像できる。このような自身の知っていることに触れる展示をきっかけに、展示を見に来る人を展示されている世界に近づけることや、ともに展示を築いていく立場へと来館者の立ち位置を転換させる可能性がフォーラムとしての博物館という概念に包含されているのではないかと考えている。

本稿では、このような博物館において使用経験のある資料と出会うことで懐かしい思い出を語りだし、そのことを通じて世代を越えた対話の機会を創出することで、博物館資料の持つ価値を高める可能性についても検討していきたい。

2 つ目の視点は「自分事化」である。「自分事化」という言葉は、福島県立博物館で 2021 年 1 月 16 日から 3 月 21 日まで開催された令和 2 年度冬の企画展「震災遺産を考える　次の１０年へつなぐために」で使われていた表現[5]で、他の言い方として公害資料館での取り組みを通した「当事者意識を醸成した」[6]とか、広島平和記念資料館で所有する資料を用いた事例における「遺品の持つ、共感させ当事者感覚を引き出すことができる力を実感した」[7]といった表現に連なるもので、他人事の対になる概念としての自分事となるように物事を捉えていくということである。

博物館の展示を来館者は第三者的に、他人事として見てしまう傾向がある。震災や公害を取り扱う博物館では、防災教育や環境教育の場として利用されることがあるが、それこそ展示や体験を通して自分事化することができなければ、それはただの知識の吸収で終わってしまい（吸収されればまだいい方かもしれない）、せっかくの博物館経験を今後に生かすことは難しい。しかも、自分事化できなかった展示は、ある意味で消費されて終わってしまう可能性が高い。展示を通して何か次のステップに繋げてほしいということは、博物館が教育施設であれば当然に考えていることの 1 つといえる。その時、重要な視点となるのが自分事化である。

展示を通して何か一つでも自分事化できるものがあれば、その経験は他では得難いものとなる。そのための一つのポイントは広島平和記念資料館での事例で触れられた「共感」だと考える。共感することで、自分事化に繋がる可能性が高まる。そういう意味で、共感

を生み、自分事化を進めることのできる展示とはどういう展示なのか、この研究ではその視点を常に意識しながら確認していきたい。

本稿では、この 2 つの視点を意識しながら、現在生きている人々の記憶にある時代を博物館ではどう扱っているのかということについて、第 1 章において、現状把握のため、実際に博物館で見ることのできる現代資料を扱う常設展示の事例を確認し、第 2 章では、常設はされていないまでも、現代資料を実際に活用している企画展示での事例を確認する。常設展示のリニューアルにはそれなりの時間的経過が求められることから、現代資料を常設展示に反映するにはそれなりに時間がかかる傾向があるが、企画展示については、比較的早く新しい時代の資料を用いた展示を行うことができる。そういう意味でも、企画展示の事例を確認することは、より最近の博物館の動向を捉えることに繋がるものと考える。さらに、第 3 章では、現代資料を用いて人々の記憶を積極的によみがえらせる活動を行っている回想法と博物館との関係を確認し、現代資料を取り巻く状況を整理、分析し、課題や可能性を見出していく。

そのうえで、第 4 章からは、モノに対してだけではなく、人々の記憶にあるできごとを扱う博物館の事例を確認することとし、まずは現在進行形のできごとに博物館がどう向き合っているのかを確認する。そして第 5 章で、若年層などには一昔前のできごととして捉えられているものの、高齢層などを中心にまだそのできごとを直接体験したことのある世代の方がいるできごとをどう展示の中で取り扱い、後世に伝えようとしているのかといった事例を確認し、実際に経験した人々のいるできごとを取り扱う状況についても整理、分析し、課題や可能性を見出していく作業を行っていくものである。

こうした作業を通して、モノに対する取り組みとできごとを対象とした取り組みから得られた成果を総合的に検討し、人々の記憶にある時代に対して博物館がどう向き合うのか、そこにはどのような意義があるのか、そしてそれらに向き合うことで博物館展示に新たな価値観を生み出すことはできないか考察していくものである。

第 1 節　研究史

第 1 項　本稿と関係する研究史

人々の記憶にある時代を博物館で展示することとその記憶との関係を考える際に関連する研究は、主に社会学の分野で行われている。集合的記憶などの記憶論との関係を述べるもの[8]や、昭和を扱う展示に関しては、昭和ノスタルジーに関する研究[9]などは盛んに行われている。

また、4 章や 5 章で扱う人々の記憶にあるできごとを博物館で展示することに関連する考察としては、『文化遺産の社会学』[10]で、文化遺産とは何かということや博物館の社会学的位置などについての社会学的な問いを取り上げ、文化遺産の考え方や負の遺産についての社会学的な視点を提示した[11]他、『社会学で読み解く文化遺産』[12]では、『文化遺産の社会学』などの研究から 20 年が経ち、世界遺産をはじめとする遺産化が進行したことや、2000 年代以降の諸変化を踏まえ、社会学における文化遺産や負の遺産に連なる様々なテーマを整理し、最新の成果を反映し、そこに含まれる概念を再編し提示している[13]。

加えて、歴史学の分野での研究では、個人の記録を歴史学の中にいかに反映していくのかを考える研究も確認できる[14]。

他にも、こういった大きな流れとは別に、特に後半で触れることになるできごとに関する研究は戦争や公害といったそれぞれのテーマの中で行われている。

博物館学の関係では、博物館における資料収集と展示に関して、後藤和民は「無数にある資料の中から、特定の史料を選び出し、それらにある特定の価値や意義や解釈を与えながら、ある有機的な関連性において配列し、全体によってある特定な歴史的意義が表明されている以上、そこには当然ながら、ある特定な史観に基づく一つの特定な歴史が記述されているのである」[15]と述べている。また、金子淳は「博物館は、ものを集め、そしてそれを見せるという根本的な機能を有している。この＜集める＞あるいは＜見せる＞という行為自体、すぐれて政治的な営みであり、個人のコレクションから国家が保有する文化遺産にいたるまで、その規模や形態にかかわらず、ある一定の意図のもとでの価値のコントロールが伴っている以上、いわば不可避的に組み込まれているものだといっていい」[16]と述べ、ともに資料を収集し、展示するには一定の歴史観や政治性をはらむことを示している。つまり、集めるのも集めないのも、展示するのもしないのも、その判断に一定のイデオロギーが含まれているのであり、本稿において確認していく、いつまでの時代を展示するのか、どういった資料を収集するのか、といったことも、その判断をどのような考えに基づいて行っているのかを確認する作業に他ならない。

次に、第 1 章から第 3 章で主に取り上げる現代資料の収集について確認すると、柘植信行は歴史博物館の資料の可能性として「歴史博物館は、時代とともに、また研究の進展とともに新たな課題に対応する必要がある。博物館の収集する資料にも新たなものが加わることになる。近年、顕著となった資料の一つに現代資料がある」[17]と述べ、「地域博物館では、現代の生活資料や工業製品などの現代資料を取り扱うことが多くなっている。住民や地元企業などからの寄贈資料には、従前の民俗資料の定義に当てはまらない、とくに高度経済成長期前後の資料が増加している」[18]ことに触れ、「時代とともに生みだされる新たな資料を、歴史資料として対象化していくことも、博物館の課題である」[19]ことを強調している。ここでは 1999 年における現代資料について述べており、それは高度経済成長期前後の資料を指しているわけだが、同時に、時代とともに生みだされる新たな資料も対象化していくことを強調していることから、そこで述べられているような新たな資料に、20 年という時を経て、具体的にどういうものが含まれることになったのかを確認していく作業自体に、現代的な意義があるものと考える。

なお、現代資料の使用状況を記録しようとする方法としては、考現学を唱える今和次郎による現代風俗を対象としてスケッチなどにより記録を行った活動にも通じるものがある[20]。

この他にも博物館学の視点では、第 2 項で詳細について触れる吉田憲司によるフォーラムとしての博物館という概念が提起されており、本稿の作成にあたっては重要な視点を提示している。この概念については、伊藤寿朗が唱えた地域博物館論[21]における第三世代博物館の議論に続く現代の博物館の役割として加藤幸治が位置付ける[22]ほど、これからの博物館のあり方を考える上でも重要な位置を占めており、既に博物館のあるべき姿の 1 つとして定着していることもわかる。

そして、本稿と最もかかわりが深い論考は、2002 年 11 月に国立歴史民俗博物館で行われた第 41 回国立歴史民俗博物館フォーラム「歴史系博物館の現在・未来」というフォーラ

ムを基にまとめられた『歴史展示とは何か　国立歴史民俗博物館フォーラム　歴史系博物館の現在・未来』[23]である。本書の開催のあいさつで久留島浩は「来館して展示を見た人が、そこで知識や知識以外の何を得ることができるのか、どのようにすればそれを得ることができるのか、あるいは展示する側と観る側が展示された物や人の生活や文化をめぐってどのように交流できるか、さらには『同時代』を展示する場合には、展示された『文化』の担い手も交えてどのように交流できるか、ということなどが問われているのです」(p. 12)[24]と述べ、本研究に通じる博物館が抱える課題を提示している。そして、「現代展示のあり方については、刻々と変化するもののうち何を選択して展示するのかという点で、また博物館にとっては、そもそもこれから何を収集すべきか、逆に言うと何を残さないのか（捨てるのか)、という点でも大きな課題をもって」いることにも触れており、本研究が目指すべき方向は 2000 年代当初からの課題であることがわかる。

このフォーラムには、これまでに研究史で触れた吉田憲司や、金子淳、さらに第 1 章で中心的に取り上げる青木俊也などが国立歴史民俗博物館の久留島浩や小島道裕らと報告を行っており、これらの議論の現代的な進展や意義について確認していくことになるものである。

ただ、このフォーラムでは多くの重要な視点が示されてはいるものの、何かこうあるべきだという結論が示されたわけではない。また、博物館での実践は、時代とともに進展しており､特に東日本大震災や新型コロナウイルスの感染拡大による世界的な流行を踏まえ、フォーラム時点より社会的にも大きな変化が訪れている。こういった社会的な変化も踏まえ、現代的な意義を探ることには大きな意味があるものと考える。

第 2 項　フォーラムとしての博物館という概念

フォーラムとしての博物館という概念は、日本においては国立民族学博物館の館長である吉田憲司によって紹介された概念で、未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所という意味で、対をなす語にはテンプルとしての博物館というものがあり、こちらはすでに評価の定まった「至宝」を「拝みにくる」神殿のような場所という意味であると説明している[25]。

この用語を最初に用いたのは、当時のブルックリンミュージアム館長のダンカン・キャメロンで、1974 年に博物館・美術館のあり方の類型を試みたものである[26]。

吉田はさらに､「フォーラムという以上、そのミュージアムには、双方向的な対話性が必須のものとして要求されます。対話性とここでいうのは、展示する側と展示される側、さらにはそれを見る側とのあいだに、比喩的な意味でなく、文字通りの対話の機会が開かれていることをさします」[27]とも指摘している。

このように、フォーラムとしての博物館という概念には、展示を通した対話という視点と、展示をする側、展示される側、それを見る側という展示を取り巻く人々の関係性についての視点が示されている。これらの視点は､「次代のミュージアムに向けて―ささやかな提言」[28]という章の中で述べられていることであり、博物館の目指すべき方向として語られている。

展示を通した対話の必要性を説いていること、とりわけ展示する側、展示される側、それを見る側との対話の機会の必要性が説かれており、この視点自体は現在でもなお有効なものと考える。

ただし、本稿で取り上げる資料は現代資料であり、多くの人に使用経験のあるモノであることが圧倒的に多く、吉田のいう未知なる資料との出会いとは異なる。しかし、使用経験のあるモノとの出会いは、人々の中にある記憶、特に懐かしい思い出をよみがえらせることに繋がり、そのことをきっかけとして思い出話に花が咲くといった対話の機会が生まれる可能性を秘めている。

そこで、これらの考え方を整理したうえで、本稿では、使用経験のあるモノとの出会いによる対話の場の創出という視点で博物館における現代資料の収集や展示について考えるとともに、展示する側、展示される側、それを見る側の関係について、現代資料を通してどう関わることができるか確認していきたい。

第 2 節　人々の記憶と博物館資料との関係を示す展示

世の中にはさまざまなモノがあふれている。理屈の上では、そのすべては博物館の資料になりうる存在である。しかし、実際にはそれらの中から学芸員などによって一定の価値があると判断されたものだけが博物館の資料となる。歴史を語る資料としては、過去の大きなできごとに関係することが記録された資料や、地域の歴史を語る上で欠くことのできない資料などがこれにあたる。具体的に地域の歴史で考えるなら、その地域の名称が初めて確認された古文書であるとか、遺跡から出土した土器などがそれにあたる。

それぞれの博物館の目的に合致する学問領域の視点から価値を認められたものが、博物館資料となるということが基本的な視点かと考える。

ただし、博物館資料として一定の価値を与えるものは、必ずしも学問領域の視点ばかりとはかぎらない。一定のコンセプトがあれば、本来価値が認められにくいようなモノについても博物館資料とすることができる。そういったコンセプトの 1 つに、人々が持っているそのモノに関わるエピソードをモノに付与するというものがある。学術的な価値とは違う形でモノに意味を付与することで、展示される資料となりうるのだ。

ここではそのような形で展示されていた具体的な事例を取り上げ、人々の記憶とモノとを繋ぐことで、資料としての価値を与え、展示に繋げていく取り組みを確認したい。

第 1 項　人々の記憶とモノをつなぐ展示

・京都芸術大学「記憶と記録とエピソード展　茶碗」（2020 年 11 月 11 日～11 月 18 日）【表 12№29】

この展示は、京都芸術大学アートプロデュース学科の「アートプロデュース基礎演習Ⅱ」という授業の受講生による企画展示で、あいさつ文には「ひとりひとりが選んだ『茶碗』を手に、あらためて『記憶』をたどり、その茶碗にしかないエピソードを『記録』する試みです。無意識に使用していた『モノ』を見つめ、エピソードと共に語ることで『大切な何か』に変わる時間をお楽しみください。」とある[29]。

それぞれの受講生が茶碗を手に取り、その茶碗に関するエピソードを書き出し、茶碗とともに展示をする（写真 2）。何気ないモノにエピソードを添えることで展示資料になることを体験する授業の一環のようだが、確かにこのシンプルな手順の中に、ただのモノが資料となるプロセスが示されている。

展示されている茶碗には語るにふさわしいエピソードが添えられた茶碗もあるが、中には 100 円ショップで買ったという茶碗や、買ってはみたものの一回も使ったことのない茶

碗、さらにはもはや茶碗でもない電子レンジで温めるご飯のパックが展示されていたりする。しかし、それらの茶碗にもエピソードが添えられることで、そのモノの向こう側にいる人の存在が気になってきて、結果その茶碗にも興味が出てくる。

やっていること自体は難しいことでもなく、一見すると大したことのないような展示であるが、この展示にはモノと人々の記憶とを繋ぐことで展示資料にできるという重要な視点が盛り込まれている。

・アーツ千代田 3331　「別れの博物館　あなたとわたしのお別れ展」（2018 年 3 月 31 日～4 月 14 日）【表 12№3】

この展示は、クロアチアにある「Museum of Broken Relationships」という博物館の資料をもとに構成された展示である。

この博物館では、人々の別れにまつわる思い出の詰まった品々をエピソードとともに収集し、保存するだけでなく展示でも活用するなどし、別れにまつわる記憶を共有する活動を行っており、日本での公開はこの時が初めてということである[30]。

全体としては、失恋にまつわるエピソードが多かったが、離婚や死別などに関わる品々も紹介されていた（写真 3）[31]。

あいさつ文には「私たちが経験した『別れ』は住んでいる場所や国籍や宗教を超え共有できる」[32] とある。本を読むことにも通じるかもしれないが、やはり人々の経験に伴う記憶は共有できることを示唆している。

また、個人的な記憶であっても別れの記憶という共通項があれば、博物館資料としての一定のまとまりを示すことができ、それは、記憶が伴えばどのようなものでも博物館資料化できるということを示す興味深い取り組みである。

・福島県立博物館　「いいたてミュージアム」（2019 年 4 月 13 日～6 月 23 日）【表 7№1】

この展示は、東京電力福島第一原子力発電所の事故による影響で今も避難生活を余儀なくされている村人の記憶が詰まった道具とそれに対する語りを記録するプロジェクトで、東日本大震災後に飯舘村を支援してきた「いいたてまでいの会」という NPO 法人が行っていたプロジェクトなのだが、会の活動休止に伴い、資料が博物館に引き継がれたものである[33]。

展示では、飯舘村の人々が実際に使っていた一見すると何でもないようなモノに、その道具を使用していた人のエピソードが添えられている。添えられたエピソードは、それほど細かな記憶までは語られてはいないのだが、それでもやはり通常なら博物館資料にはなりにくいようなモノが、現実に博物館資料として展示されている（写真 4）。

震災があり、原発事故が発生したことで全村避難を強いられたという背景により、それまでであれば焦点を当てられることもなかったであろうモノについて、エピソードとともに収集されることになったと考えるが、なんでもなかったモノに記憶を添えることで博物館資料にできることを具体的に示す事例である。

何気ない日常は、あえて意識を向けることがほとんどないので、記録されることはほとんどない。しかし、震災のような日常を破壊し、奪っていくできごとが発生すると、それまで目を向けてこなかった在りし日の日常に目を向けるきっかけが生じる。こうやって目を向けられた在りし日の日常には、奪われて初めて気づく感情なども含まれており、震災前に感じていた感情とはまた違った感情が含まれていることは容易に想像できる。こうい

った奪われた日常に対する思いも含めて語られている資料を見た人が、そのエピソードを通して語っている人や奪われた日常に対し感情を揺さぶられているのではないかと感じる。

唐突にやってくる日常を失うできごとが、それまで目を向けることのなかった日常に目を向けるきっかけを与え、失われたことでこれまでとは違う意味が付与されるということも考える必要があることを示す事例となっている。

ここでは３つの事例を確認したが、これらはまさに人々の記憶にあるエピソードをモノに付与することで、モノに価値づけを行い、展示資料とすることに成功した事例である。博物館資料は、そのモノが持つ学術的な価値があれば個人的なエピソードがなくても、それだけで収蔵や展示することができる。縄文時代の土器などは、それを使用した人のエピソードを聞くことはできないわけで､学術的な価値に基づいて博物館資料となる｡しかし、多くの人にとって学術的に価値があると思われていないようなモノであっても、人々の記憶に基づくエピソードを添えることで、そういったモノにも展示に値する価値を見出すことができることをこれらの事例では示している。

このように、博物館での資料の収集や展示に値するかどうかの価値づけを行う際の視点に、学術的な価値を見出すということだけでなく、人々の記憶との関係というものも存在することが確認できる。学術的な価値に基づく博物館資料を博物館に見に行くことはテンプルとしての博物館に繋がる方向と考える。一方で、人々の記憶に基づくエピソードを添えられた資料は来館者の記憶とも繋がる可能性の高い展示を生み出すこととなり、フォーラムとしての博物館に繋がる方向として機能するのではないかと考える。

本稿では、これから現代資料を取り巻く博物館の状況を確認していくが、展示された資料の学術的な意味とは別に、これまで確認してきたように、展示されている資料から来館者の持っている記憶と繋がるような事例についても考えていく。すでに展示されている資料は何らかの価値が認められているから展示されているわけであるが、一方で、それらの資料に人々の思い出となっているエピソードという別の視点からの価値を付与することができる可能性もあるのではないかと考える。そのようなことを念頭に、資料に対して価値を与える様々な視点が存在することを積極的に意識しながら、人々の記憶を資料と結び付けていく方法についても検討していきたい。

第２項　展示資料と来館者の記憶をつなぐ博物館活動

本稿ではこれから、現在生きている人々の記憶にある時代を博物館でどう取り扱うのかということについて、様々な視点から実際の博物館の事例を確認していくものである。それに先立って、展示されている資料と来館者の持っている記憶とを繋げる事例と、人々の記憶を積極的に収集している博物館の事例について確認しておきたい。

・もりおか歴史文化館　テーマ展示「Where is This？　－写真の情報を探していますー」（2018 年 9 月 19 日～12 月 17 日）【表 2№6】

もりおか歴史文化館では、博物館で所蔵している写真のうち、どこの何を撮ったのかがわからないため資料として活用することができない写真を展示し、来館者などからその場所などに関する情報を収集しようという試みが行われていた（写真 5)。

全部で 20 枚の写真が展示されており、筆者が訪問した 2018 年 11 月 11 日段階で既に８枚の写真の内容が確定したことが展示で示されていた。

地域のことは地域の人に聞くのが一番であることは間違いないが、展示という形を取っ

て市民に直接情報提供を求めるという方法は、博物館における展示手法としてはまだまだ新しい発想なのではないだろうか。

加えて、この展示は一見すると博物館が市民から情報を一方的に収集しているようにも思えるが、この手法は、博物館資料を通して市民と博物館や学芸員が対話することであり、市民と博物館を近づける効果もあると考える。

・せんだいメディアテーク　「どこコレ？－おしえてください昭和のセンダイ」（2019 年 4 月 27 日～6 月 30 日）【表 12№8】

せんだいメディアテークは博物館ではないが、もりおか歴史文化館と同様に、昭和の仙台を写した写真について情報を確定させるプロジェクト「どこコレ？」という活動を行っている。

2012 年から 2021 年までに行った活動では、合計 429 枚のうち 268 枚が確定され、2,974 枚の付箋が集まったという[34]。仙台メディアテークでは展示期間中スタッフが常駐しており、写真を通した対話の場を生み出していることが確認できた。この活動は、もりおか歴史文化館の先をいく活動であり、写真を通した市民との共同作業と呼ぶべき活動といえる。

また 2019 年度には、同じ手法を用いて全国でも同様の企画を展開している。筆者が実見しただけでも長野県立長野図書館[35]、伊那市立図書館[36]、伊那市立高遠町図書館[37]、お茶ナビゲート[38]で行われており[39]、取り組みのスタイルを確立し、現在では全国の博物館などの古い写真を所蔵する施設でも申請を行えば同規格で導入できるようになっている[40]。

いずれも古い写真を用いて、地域の人の記憶を呼び起こすものであるとともに、写真の情報を確定する作業に地域の人々にかかわってもらう機会を創出する他、写真を媒介にして懐かしい記憶を語る機会を創出する事例であり、地域博物館において写真の持つ人々の記憶との関わりについて考える際の 1 つのあり方を示している。

・豊田市郷土資料館【表 6№6】

人々の記憶を積極的に収集しようとする博物館としては、豊田市郷土資料館が挙げられる。豊田市では新博物館建設計画があり（以下計画に従い「(仮称)豊田市博物館」という。)、その計画の中で人々の記憶を収集し、展示に活用していくことが述べられている[41]。2023 年度オープン予定の（仮称）豊田市博物館建設に先立ち、現在ある豊田市郷土資料館において、「未来の記憶」プロジェクトとして、市民の記憶を集める思い出の収集活動が行われている。

現在行われている取り組みの案内文では「新博物館では、市民の皆さんがもつ様々なエピソード（＝記憶）を集め、博物館資料として未来へ残していく『未来の記憶』プロジェクトを行っています。皆さんから集めた記憶は博物館で蓄積し、展示や研究に活用していきます。ぼんやり覚えている景色、昔食べた懐かしい味、機能感じた音や匂い…どんな記憶も立派な資料です。ぜひ、皆さんの心に残る記憶をお聞かせください。」[42]と述べるとともに、既に集まっているエピソードの一部はロビーにて展示されている。

（仮称）豊田市博物館物館での具体的な活動計画の詳細については第 6 章で触れるが、来館者の持っている記憶を今後の展示で生かすという視点を示した活動は、本研究を進める上でも大いに参考となる活動事例であり、(仮称) 豊田市博物館の展示が実際にどのようになるのかについては、強い期待を持つところである。

第 3 節　本稿における研究の視点

前節ではモノと人々の記憶の関係について、モノに人々の記憶を付与することで、展示資料となりうることを示す事例を確認してきたが、次に現在展示されている資料と人々の記憶が出会うことで生じる対話の機会の可能性と、その方向性について検討したい。

第 1 項　【視点 1】使用経験のある資料との出会いを通じた対話の機会の創出

本稿で取り上げる現代資料は、人々にその使用経験がある、または、実際の使用経験はなかったとしても、同時代を生きてきたことからテレビなどのメディアを通じてその利用状況や当時の状況について知っている道具であり、来館者にとって未知の資料ではなく、使用経験のある資料であることが圧倒的に多い。そういった使用経験のあるモノとの出会いは人々の記憶を刺激し、何か懐かしい思い出などを想起させ、語りだしたくなる可能性がある。

この使用経験のあるモノとの出会いによって生じる記憶や、思い出などを語るという対話の機会にはどのようなものが想定されうるのか、検討していきたい。

博物館における使用経験のある資料との出会いを通じた対話の機会には、大きく 2 つの方向が考えられる。1 つ目は、忘れられている日常生活に対する懐かしい思い出を語るというもので、語り伝えることを目的としない語りである。もう 1 つは、後世に伝えなければならない震災や戦争などの記憶・体験についての語りで、こちらは語り伝えることを目的とした語りである。前者をもう少し詳しく確認すると、①単純に懐かしい記憶を想起させる展示と②その思い出される懐かしい記憶を活用しようとする活動とに分けられる。そして後者については、③震災などのように比較的近年発生し、それ以降に生まれた子どもたちが大きくなるまでの間のように、多くの人々が経験をしたできごとを風化が進まないうちから語りはじめるケースと、④太平洋戦争のように大きなできごとの後に生まれた世代の人が人口の大多数を占めるようになってきて、経験をした人の方が圧倒的に少なくなってきた時代に、今語らないともう知っている人がいなくなってしまうという危機感から語るというケースがあるように考えられる。これらを模式的に表したものが図 1 である。

より具体的な事例に即して考えると、①のケースについては第 1 章や第 2 章で述べるが、近年昭和 30 年代以降の住宅を再現する展示や、昭和 30 年代以降の道具を紹介する小学生の学習支援を目的とする「昔の道具展」などが各地の博物館で行われている。これらの会場で来館者の様子を見ていると、多くの来館者から「懐かしい！」「こんなのうちにもあったね」といった声を聞くことができる。このような展示においては、懐かしい記憶を想起させることを展示の目的とはしていないものの、ついつい懐かしい声が上がっているものであり、そういった懐かしい記憶が想起されたことで、一緒に来館した人とその思い出を共有するといった形での対話が、展示する側が意図しているかどうかにかかわらず自然と生まれている。②のケースは、明らかに意図的に懐かしい思い出を活用する動きで、第 3 章で述べる博物館がかかわる回想法といった活動に繋がるものである。

③については、2020 年から急速に拡大した新型コロナウイルスによる社会全体への大きな影響であるとか、東日本大震災は発生から 10 年を迎えたが、福島第一原子力発電所の事故による影響などは現在も続いており、こういった現在進行形のできごとをテーマにした展示を通した語りの場面が想定される。そして、④としては、先に触れた太平洋戦争のように、今が当時を知る最後の世代の人がいる時代となったできごとや、公害による被

害、ダムに沈んだ村の存在などをテーマとして扱った博物館の展示などが想定される。

人々の記憶にある時代を展示している博物館と、それらの展示を通して生まれる対話の機会については、こういった形で整理することができるのではないかと考える。少し別の視点で捉えるなら、①、②についてはモノを中心とした事例であり、③、④はできごとを中心とした事例である。本稿では、この分類に基づき、様々な使用経験のある資料との出会い方や問題意識を確認する中で、使用経験のある資料との出会いを通じた対話の機会の創出について考察していきたい。

さらにはこれらの分類とは別に、対話の機会の創出を考えるということである以上、対話する相手についても考えていく必要がある。展示を通して記憶を刺激された来館者は、誰と対話するのだろうか。一義的には一緒に来館した同伴者や、たまたま横にいた人などということは考えられる。また、展示を解説する人とか語り部に対して語りかけるとか、アンケートなどによって学芸員などに語りかけるということも想定できる。さらには来館者の声を掲示するというやり方では、次にやって来る来館者に語りかけるということもありうる。

本稿では、こういった対話する相手についても視野に入れながら検討を進めていきたい。

第２項　【視点２】展示する側、展示される側、その展示を見る側という展示をめぐる立ち位置

第１節で触れたように、フォーラムとしての博物館の視点の中には、展示する側、展示される側、その展示を見る側との間での対話という視点が提起されている。これは、これまで民族学の展示では、一方的に他の民族を展示する（他の民族からすると展示される）状態にあり、展示する側からの一方的な視点に対する反省を込めた取り組みで、国立民族学博物館ではこれまで実践的な取り組みを行っている。

それは、民族学の展示では、「異文化」についての展示を行っており、その対象となってきた人々の「自己の文化」に対する覚醒の動きに伴い、従来の一方的な民族文化の展示のあり方に対する異議申し立てが起きていることとも関係するのだろう[43]。

この展示する側、展示される側、その展示を見る側という視点についても、現代資料の取り扱いから考察してみたいと考えている。

具体的には、東日本大震災などを経験した人が展示を行った場合は、展示をする人が展示される人となり、自分たちが経験、体験したことを展示し、来館者に見てもらうことで、多くの人にその経験など伝えていく博物館活動となることが考えられる。また、昔の道具展のように、来館者に使用経験のある懐かしい道具が展示されていた場合、一方的に見る側だったはずの人が、展示される側に近づく可能性もある。展示を見に来たはずの来館者が、あまりの懐かしさにその道具にまつわる思い出などを他の人に語りだしてしまうといったことは、展示を見ているだけでなく、展示される側の立場に回っている可能性が考えられる。さらには思い出掲示板などの事例では、展示を見て思い出を書き、書いた思い出が掲出されることで、展示を見る側だった人が展示する側にも回り、展示したことで見られる側（される側）にもなるという循環が生まれているのではないかと考える。

こういった、本来一方的に見る側である来館者に対し、現代資料を通した対話の機会を創出することで、展示をする側やされる側に近づけることができる他、博物館の展示が一方的に来館者に何か教える立場にある従来からある展示のあり方に対し、来館者の立ち位

置を変えることに繋がる可能性があり、そういった意味でもこれからの博物館展示のあり方を考える視点として意識していきたい。

加えて、今回取り上げる自然災害や公害といった事例から、展示する側、展示される側、その展示を見る側という関係について考えると、展示という形を使うことによって、辛く苦しい内容を動物園の折の中に入れてしまう効果があり、展示を見る人は安全な檻の外から安心して他人事として、辛く悲しいできごとを見てしまう可能性がある。特に、相手のあることを取り上げる時、取り上げ方を間違えると、取り上げた人の不幸を見せ物化し、檻の中に閉じ込めることになりかねない。そこには展示する側の暴力的な側面が存在する。そういった展示の暴力的な側面も含めて、展示をめぐる関係者の立ち位置について、場合によっては檻の中に展示を見る人を入れていくことも含めた立場の転換などの方法についても検討していく必要がある。

第３項　【視点３】自分事化

博物館に来る来館者は、どこか他人事として、または第三者的な立場から展示を見てしまいがちだが（知識を得るような見方）、戦争や災害などの展示においては、そこに具体的な「人の姿」を感じることができると、自分との共通性を意識したり、自分がこの立場だったらどうしただろうと考えたりすることになる。そうして展示の内容に共感をし、その共感をした体験から展示を自分事として捉えることに繋がり、そのことが結果として来館者の心に残る展示となるのではないだろうか。

人の気配、人の動き、人の心の機微、人の気持ちに触れられるなど、具体的な人の存在を展示の中に感じられると展示にリアリティが生まれ、来館者の共感に繋がりやすいと考える。

特に共感を得やすいのは、人の苦しみ、悲しみ、楽しさ、怒りなど、感情に訴えてかけてくるものと考える。ただし、実際には怒りは境遇、思想等によっては共感できない可能性は否定できない。また、何か達成した喜び、うれしかった、楽しかったなどの思い出や、苦労したこと、辛い時代を乗り越えた（例えば池江選手のオリンピック出場とか）、何か大切なものを失う悲しさは一定共感できる（本当の意味での共感は難しいかもしれないが）。こういった感情はモノそのものから直接感じることは難しい。そういった意味で、共感を生む際の１つのポイントはモノに付与されたエピソードだと考える。

例えば、広島平和記念資料館の展示室には、被爆により亡くなった中学１年生が持っていた黒こげになった弁当箱と水筒が展示されている。この弁当箱と水筒の横には、この弁当箱と水筒の持ち主の写真と、ごく簡単なエピソード（約 160 文字）が記されている（写真 6）。このエピソードには当日の彼の動きとお弁当を持たせた母親の想い、そして原爆後に変わり果てた姿の彼を見つけた母親の想いが記されている。限られた分量ながら、この弁当箱と水筒にこめられたエピソードは、見る人の感情に訴えてくるものがある。

焦げた弁当箱だけでも、もしかしたら原爆の威力などは伝わるかもしれない。しかし、写真とエピソードが添えられることで、修学旅行で来た中学生であれば、同世代の人が戦争を通して命を奪われたことに気づくことで共感しやすくなり、より自分事として想いを寄せることができるようになる。また、中学生くらいの子どもを持つ母親であれば、母親の立場から子を想う親の気持ちに共感でき、原爆によって奪われた命とその子を想う気持ちに想いを寄せることができる。モノにエピソードを添えることで、そういった効果が生

み出されていると考える[44]。

ここでは広島平和記念資料館の事例を紹介したが、展示資料に添えられるエピソードというものは、現代資料を通した対話から引き出せる可能性もある。資料からエピソードを引き出し、そのエピソードを資料に添えることで、人々の共感に繋がり、自分事化の役に立つ可能性が考えられる。

ところで、自分事化とはいうものの、自分事化ができた状態とはどういう状態であろうか。先述した広島平和記念資料館の事例では、展示全体が見る人の感情に訴えかけてくる展示となっていることから、展示室内にいると他の来館者が鼻をすする音が聞こえてくる状態を生み出し、展示を見ている人が共感していることを感じることができる。

しかし、通常の展示では共感を生み、自分事化できているかどうかを知ることは容易ではない。あえて自分事化できているかどうかを知ろうとすれば、その自分事化できた状態を一人称で表出してもらうといったことが必要となる。その表出方法の一つが語ることであり、言葉で記入することである。必ずしも文章の必要はなく、絵でも歌でもいいのかもしれないが、一般的には誰かに語りかけるとか、文字にして書き起こすといったことになる。そういう意味では、 思い出掲示板などは、自分事化した状態を可視化するための方法とも考えられる[45]。

いずれにしても、資料にエピソードを添えることで、来館者にとって共感が得やすい状態を生み出し､展示を他人事ではなく自分事として捉えられるようになる可能性が高まる。このことによって、展示が一方的に何かを教えるという立場から、来館者の心に何らかの影響を与え、展示の世界に一歩近づくことができると考えられる。展示をめぐる来館者の立ち位置を変える効果があることは、フォーラムとしての博物館でいう展示をする人、展示をされる人、その展示を見る人の関係を変えることにも繋がる重要な視点の 1 つと考える。

第 4 節　本稿の目的

これまで現代資料と人々の記憶の関係について述べるとともに、それらの関係を考える上で重要な視点としてフォーラムとしての博物館や自分事化という視点について述べてきた。これらの視点を通して、改めて本稿にて明らかにしたい課題を提示したい。

基本的には、現在生きている人々の記憶にある時代を博物館でどう取り扱っているのかを調査し、今後地域博物館で人々の記憶にある時代の資料をどのように取り扱い、どのように展示を行っていくべきかを考察していくものである。

調査対象としているのは、昭和 30 年代以降の生活の道具を用いた展示の事例【モノを中心とした事例】と、戦争や災害などのテーマを取り扱った展示施設での事例【できごとを中心とした事例】である。

調査方法としては、調査対象に挙げたモノやできごとに関連する展示を行っているという情報を得られた博物館等を実際に訪問し、その展示状況について実見し、どのような展示手法が存在するのか、また、どのような現代資料を収集し展示しているのかといったことを確認していくことにより行った[46]。ただし、通常予約もなく見学に行った場合に、館の方針として解説を行っているような場合には、解説を聞くことも含めて展示の一部と捉えることとした。

なお、基本的には展示室において得ることのできる情報を比較することで検討を行うものであるが、筆者が博物館関係者であることから、一般の来館者と全く同じ視点で展示室を見ているとは限らない。あくまでこれまでの経験を踏まえた視点、意識に基づいての比較であるが、できるだけ多くの事例を確認することで、特徴的であると考える事例を取り上げるよう試みた。

このようにして実際に見学することで得た事例について、第 3 節第 1 項で触れた①～④の順に確認していくことで、現時点で行われている現代資料を取り巻く取り扱いの有効な方法を確認するとともに、表現物としての展示のあり方について、特に人々の記憶にある時代を展示していく時に求められる手法の検討を行っていくものである。そのうえで、それらを基に、人々の記憶と博物館資料の関係の整理を行い、現代資料を博物館で扱う現代的意味を考察し、人々の記憶にある時代に博物館はどう向き合うのか、これからの日常の記憶を記録する博物館活動はどう行っていくべきなのか、具体的に検討することを目的とするものである。

その際意識する視点は、フォーラムとしての博物館、展示の自分事化である。これらの視点から、現代資料を博物館で扱うことで得られる効果、可能性を指摘し、今後の博物館活動に活かすとともに、使用経験のある資料との出会いを通じた対話の機会の創出の可能性、新たな博物館活動の目的、意義について見出すこと、さらに使用経験のある資料、特に現代資料との出会いにより想起される記憶をうまく形にしていくことで、博物館をめぐる立場の変更を通し、現代における博物館活動のありかたについて考察していくものである。

第１章　使用経験のある資料を常設展示で取り扱う博物館活動

近年、歴史展示の最後の部分に昭和 30 年代の住宅を実物大で再現する博物館が増えてきている。例えば、松戸市立博物館（写真 7）や、愛媛県歴史文化博物館（写真 8）などが挙げられる。

さらには、東京都江戸東京博物館のように 2000 年代までをも展示の対象とした博物館の常設展示も出てきた（写真 9）。

リニューアル前の東京都江戸東京博物館では、東京オリンピックが展示の最後の部分にあたっていたところである。かつて私は東京都江戸東京博物館において展示解説ボランティアを行っていたが[47]、私は東京オリンピックの解説をする際「戦後復興の象徴として、東京オリンピックが開催されました」と案内をしていた。東京オリンピックの話をしようと思えばこうなるということもあるが、もう一つ、展示の締めの話として「東京オリンピックを一つの契機として東京が発展していきました。めでたしめでたし。」といったニュアンスも含めて語っていた。

昭和 30 年代の再現にも、かつて東京都江戸東京博物館で私が語っていた趣旨と同じような傾向が見て取れる。それは、松戸市立博物館のように町が大きく変容を遂げていく時代の象徴として、団地を再現するといったことである。団地建設が町を大きく変化させた。しかもそれは高度経済成長期とも重なり、これから日本がどんどん元気になっていくことの象徴でもある。そういった視点から、この時代で締める展示が増えているような気がする。

また別の視点で考えると、昭和 30 年代は電化製品の普及期とも重なり、生活様式も一変した時代である。そのような時代の変化をこれらの再現展示を通して伝えようとしているともいえる。

一方で、北名古屋市歴史民俗資料館のように、昭和 30 年代の暮らしに焦点を当てた展示も現れてきた（写真 10～12）。これは、博物館で何か新しい今まで知らなかったことを学ぶという従来からある展示のあり方とは根本的に異なる性質のもので、現代を生きる私たちが見たことや使ったことのある道具を展示することで、自分の中にあった懐かしい気持ちをよみがえらせ、ついついそういった思い出を語りだしたくなるための装置としての展示であり、従来の展示にはなかった展示の概念ともいえる。

さらに、この時代の道具というのは、民俗分野で扱われることも多い。特に多いのは、小学３年生の学習単元「昔の道具調べ」に対応する展示である。多くの地域博物館では小学校での学習に合わせ、企画展示として昔の道具を展示したり、そのことを意識して常設展示の一角に昔の道具コーナーを設置したりしている。昭和 30 年代の道具はこれらの展示の機会に、電化製品が普及する以前と以後とでどう生活が変化したかを伝えるために引き合いに出されることが多い。

そういった活動とは別に、北名古屋市歴史民俗資料館のように、一昔前の道具が捨てられて行ってしまう現状を見かねて、現代に近い時代までの道具を収集している現実がある[48]。例えばファミコンなども収蔵していることがある。序章でも触れた通り、ファミコンは常設で展示されることは少ないが[49]、何かの記念でその時代を象徴するものとして展示されることもある（写真 13）[50]。

そのようなことを考えると、博物館ではいつの時代までの道具を収集すれば良いのか、

またどの時代まで展示すればよいのか、といった課題が浮かび上がってくる。この問い自体は古くて新しい博物館をめぐる課題といえよう。

博物館をめぐる展示年代の問題を考える時、私は以前博物館に勤務していた際[51]、そろそろ平成の展示が始まっても良いのではないかと考えていた。昭和 30 年代の再現展示が始まったのは、平成に入った頃であり[52]、当時から考えれば昭和 30 年代は約 30 年前のできごとである。平成も 30 年が見えてきた頃の発想としては、30 年前を展示するということは、事例の上からも可能ではあった。

そういったことも踏まえ、本章ではまず、昭和 30 年代以降を表現する全国の博物館の常設展示の事例を確認し、人々の記憶にある時代の展示がどのようになされているのか、どういった内容なら 30 年前のできごとでも展示されるのか、なぜ平成の展示がされていないのか、これから先、人々の記憶にある時代の展示はどのように行っていくべきなのかといった、現代資料を用いた博物館活動の課題や可能性について考察するものである。

第 1 節　研究史

第 1 項　これまでの研究

まずは、昭和 30 年代以降を表現する展示に関連する研究史について確認したい。

これまでに行われている展示に関係する研究は、昭和ノスタルジーを中心としたものと、博物館での取り扱い事例を中心としたものなどが確認できる。

2005 年に公開された映画『ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日』[53]を前後して、昭和 30 年代ブームやノスタルジアとの関係について社会学の分野での研究が続いている。これまで、昭和 30 年代ブームは 1990 年代には始まっていたとする研究が主流であったが、高野光平はすでに 1970 年代には始まっていたことを指摘した[54]。市川孝一は、この昭和ブームの流れの中には大きく 4 つの現象があるとしたうえで、その一つに博物館での昭和 30 年代の再現展示を挙げている[55]。このように社会学の分野では、昭和ブームの中に博物館での展示の流れも位置付けるような形での考察が行われている。

一方で、実際に博物館で昭和 30 年代を再現した側からの実践報告に基づく研究も行われている。積極的な考察を行っているのは、松戸市立博物館の青木俊也で、1 つには先に述べた昭和ブームの中で、他の商業施設やテーマパークと横並びで松戸市立博物館の再現展示が比較されることに対する苦い思いを述べる[56]とともに、博物館における一つのブームとなった昭和 30 年代の再現展示について、自館での展示の位置づけや今後の方向性を示すため、比較として全国での主な事例について確認作業を通した考察を行っている[57]。

青木は他にも、昭和 30 年代の道具を集める意味、再現展示を行う意味、そこから観覧者に何を伝えていくのか、どう伝わったのか、今後この再現展示はどこへ向かうべきかといった検討や、他館の事例については展示の特徴を類型化し、それぞれの展示の特徴や課題を挙げる他、比較の対象として、常設展示での再現展示、小学校の学習単元に対応した企画展示等での対応、北名古屋市歴史民俗資料館で行っている地域回想法での活用等を取り上げた研究などを行っている[58]。それらの研究の中で、展示にはメッセージがあるものの、「生活再現というモノの集積体の展示方法が、昭和 30 年代の生活革新などの説明としてではなく、自身の経験した暮らしの記憶を呼び起す舞台として、もしくは記憶にある生活資料の集積体の展示として受け止められていることを示している。いうなれば、懐かしさ

を探し出すために機能しているといえる」[59]ことを指摘し、再現展示の持つ、懐かしい思い出を想起させる力が大きく、本来あったメッセージがうまく伝わらないことを示している。

なお、青木俊也も触れている、北名古屋市歴史民俗資料館での地域回想法に関連する研究は、第 4 章で別に確認していく。

第 2 項　研究史から見える課題

ここまで研究史を確認してきた。筆者の疑問の 1 つに、はじめにで触れたように、昭和 30 年代の再現展示はあるのに、平成の再現展示はないのかというものがあったが、昭和 30 年代ブームの原因の一つに昭和が終わったことに言及する社会学的な考察[60]があることを考慮すれば、そろそろ平成に入ってからの展示というものの再現可能性も現実味を帯びてきても良いはずである。しかし、詳細は次章で触れるが、現実には平成が終わることが示されてから、平成を振り返るいくつかの企画展示と、平成の道具を展示する事例がごく一部に出てきただけで、令和も 3 年が過ぎようとしているが、まだ平成を再現しようとする博物館は出てきていないというのが実際の状況である。

そう考えると、昭和が終わったことは昭和をふりかえるきっかけにはなったが、それはきっかけにすぎず、やはり高度経済成長期にあたる昭和 30 年代が都市部への人口流入などに代表される社会生活の大きな変化の時期であったため、その時代を取り上げることになったと考えることの方が自然であろう。

道具という視点で考えても、家電製品の普及など、昭和 30 年代のように生活に影響を与えるほど道具に大きな変化があった時点はない。そういった事情が再現展示などにも影響を与えていると考える。

このように確認してみると、昭和 30 年代が博物館の展示として登場した背景には、30 年を経たという時間的な問題で展示に至っているということでもなければ、昭和が終わったから展示されたということでもなく、それらは過去を振り返るのに必要な時間であり、きっかけではあったが、むしろ昭和 30 年代に展示に値するだけの社会的な変化があり、生活スタイルの変化があったということに他ならない。だからこそ展示に反映されたと考えることが自然な流れかと思われる。

昭和 30 年代が取り上げられる理由は理解できたが、では、博物館の展示では一体いつまでの時代を展示すればいいのかという問題は解決してない。ひとまずは、地域博物館において現段階でどの時代までの展示をどのような形で行っているのかその実例を確認し、そこからより新しい時代を展示する際の視点や方法についての知見を得ることで、今後の展示の可能性や課題を探っていきたい。

なお、本稿作成にあたり調査にあたった博物館の一覧は表 1 のとおりである。

第 2 節　再現展示の事例

実際の展示の実例を確認するにあたり、昭和 30 年代以降を表現する展示の中でも特徴的な事例である建物の再現や町並みの再現を行っている再現展示の事例から確認していきたい。

第 1 項　建物を再現する展示

公立の博物館における事例としては、第 1 節でも触れたように高度経済成長期を象徴す

る展示として、歴史展示の最後に位置付けられていることが多い。その中でも団地や公営住宅などの建物を再現するとともに、その建物での生活の様子を再現する展示を行う事例が近年増えている。

昭和 30 年代に建てられた住宅の建物そのものを再現している展示のうち、鉄筋コンクリート造の団地を再現している事例としては、松戸市立博物館で常盤平団地（写真 14)、国立歴史民俗博物館で赤羽台団地（写真 15)、東京都江戸東京博物館でひばりが丘団地（写真 16)、四日市公害と環境未来館で高花平団地（写真 17）などが存在する。

また、昭和 30 年代に建てられた木造住宅の建物を再現している事例としては、流山市立博物館での日本住宅公団による江戸川台団地（写真 18）をはじめ、公営住宅の事例としては、足立区立郷土博物館で都営住宅（写真 19)、香川県立ミュージアムで県営住宅（写真 20）の他、石川県立歴史博物館では円光寺住宅団地の分譲住宅（写真 21)、北九州市立いのちのたび博物館では八幡製鉄所の社宅である中原住宅（写真 22）などが存在する。

さらには、特定の建物ということではないものの、昭和 30 年代の住宅を再現している事例として、葛飾区立郷土と天文の博物館（写真 23）や、岐阜県博物館（写真 24)、愛媛県歴史文化博物館（写真 25)、宮崎県総合博物館（写真 26)、姶良市歴史民俗資料館（写真 27）なども存在する。

その他に、建物の外観は再現していないものの建物内部を再現している事例としては、北海道博物館（写真 28）や八戸市南郷歴史民俗資料館、港区立郷土歴史館（写真 29)、杉並区立郷土博物館（写真 30）[61]、金沢くらしの博物館（写真 31）などがあり、建物らしさを再現しないまでも生活空間の一部を簡易的に再現して昭和 30 年代の様子を再現する事例として、氷見市立博物館（写真 32）などがある。加えて、昭和 30 年以前に建てられた住宅ながら、生活再現の年代設定を昭和 30 年代としている事例として、滋賀県立琵琶湖博物館（写真 33)、箕輪町郷土博物館（写真 34）なども存在する。

また、歴史展示とは別に民俗展示の中でいわゆる民家などの再現ではなく、昭和 30 年代以降の再現展示を行っている事例としては、2020 年度にリニューアルオープンした都城歴史資料館の他、国立歴史民俗博物館でも民俗展示室の中で、現代の家庭生活の様子を再現展示で紹介している。

これらの中から特徴的な再現展示を挙げるなら、大野城心のふるさと館で再現されている住宅は、建具や水回りの設備を入れ替えられるようになっていて[62]、「昭和 20 年代」、「昭和 30 年代」、「昭和 40 年代」と時代を入れ替える再現展示ができるようになっている。また、昭和 30 年代の再現展示が多い中、東近江市能登川博物館物館（写真 35）では昭和 40 年代の再現展示となっている他、新ひだか町博物館の「昭和の暮らし」というコーナーでは建物内部を再現する展示の再現年代が昭和 40～50 年代となっている。

展示の内容を確認していくと、住宅再現展示の場合、居間や台所を再現していることが多い。中には風呂場やお手洗い、ベランダなどが再現される事例も確認できる。居間や台所には、当時使われた道具類が生活の様子を再現するような配置で展示されており、従来からある展示ケースにこれらの道具を並べて展示するのと比べ、本来あるべき場所に道具が配置されている（ように見える）ことから、道具そのものが持つ価値だけでなく、それぞれが有機的に関連して、全体として生活感の演出に寄与しており、全体として昭和 30 年代の雰囲気を醸成している。

第 2 項　商店や町並みを再現する展示

商店の再現や町並みの再現は、住宅の再現と並んで、昭和 30 年代の記憶をよみがえらせるのに効果が高い。公立博物館での具体的な事例としては、東北歴史博物館の駄菓子屋兼住宅（写真 36）をはじめ、新潟県立歴史博物館（写真 37）や福井県立歴史博物館（写真 38)、愛媛県歴史文化博物館（写真 39）では 3 軒程度の店舗が再現されている。また、瀬戸蔵ミュージアムでは、昭和 30～40 年代の町並みとして、駅舎、瀬戸物を焼いている工房、瀬戸物屋が再現されており、地域の特性を示す再現展示となっている（写真 40)。

商店の再現で多く見られるのは駄菓子屋である。駄菓子屋の再現が存在する館は、東北歴史博物館、福井県立歴史博物館、北名古屋市歴史民俗資料館、愛媛県歴史文化博物館、宮崎県総合博物館（写真 41）などである。駄菓子屋は昭和 30 年代を象徴するアイコンの一つとして機能していることが窺える。

次に私設博物館の事例を確認すると、個人のコレクションを基に、イメージにある「懐かしの昭和 30 年代」の再現展示を行うものが多く存在する。主に温泉街などの観光地に立地する例が多いが、大きくは住宅を含む町並みなどの再現展示と道具に特化した展示が見られ、公立館での展示よりもむしろ積極的に行われているように感じる。

住宅の再現展示を含む町並みの再現事例としては、昭和なつかし館（写真 42)、人力車＆昭和レトロ館（写真 43)、氷見昭和館（写真 44)、高山昭和館（写真 45)、ぎふ清流里山公園（写真 46）[63]、湯布院昭和館（写真 47）などがある。

これらの館で確認できる町並み再現の多くは、架空の町の再現である[64]。いかにも昭和 30 年代にありそうな町並みを再現しているのだが、ポイントは「いかにもありそうな」というところで、イメージの中の昭和 30 年代を凝縮かつ美化した形で見事に再現しているため、むしろ「すごい！」と声をあげたくなる館も存在する[65]。

こういった人々の持つイメージを巧みに取り入れる手法は、飲食店街やテーマパーク的な施設でも確認できる。有名なところでは新横浜ラーメン博物館や（写真 48)、池袋にあるナンジャタウン、大阪の滝見小路（写真 49)、天保山のなにわ食いしんぼ横丁（写真 50)、お台場の台場一丁目商店街（写真 51)、福山にあるみろくの里という遊園地内にある「いつか来た道」という昭和 30 年代の町並み再現（写真 52）の他、近年では 2021 年にオープンした西武園ゆうえんちの夕日の丘商店街（写真 53）などが存在する。

なにわ食いしんぼ横丁は町並みの再現に力が入れられており、私設博物館の昭和 30 年代にいかにもありそうな美化されたイメージを再現した展示に近いものがあるが、ラーメン博物館は美化された町並みというより、場末の裏路地のような再現である。滝見小路は昭和のイメージで統一したこぎれいな感じであるが、ナンジャタウンや台場一丁目商店街はテーマパーク的な世界観で作り上げたつくりもの感を強く感じるものとなっている。

西武園ゆうえんちになると、昭和をテーマにしたテーマパークとして成立していて、夕陽の丘商店街をメインエントランスに据え、ディズニーランドのエントランスにあたるワールドバザール的な位置づけとして商店街が再現されている。町並みの再現度は高いが、実際には存在しない架空の町並みであり、実際交番の中に掲示されたポスターも架空のものであるが、本物らしい作りをしている（写真 54)。商店街には「所澤の自轉車」という西武園ゆうえんちの所在する所沢を意識した地域性も持たせている（写真 55)。徹底しているのは、掃除をするキャストが使うほうきが竹ぼうきだったりするところにも現れてい

る（写真 56）。また、園内にはリンゴの唄、青い山脈、スーダラ節などが流れ、街頭テレビからは文明堂の「カステラ１番、電話は２番～」の CM が流れている。さらに、商店街に住んでいる住人によるパレードという観客を巻き込みながら歌って踊ってバク宙をしたりするものや、歌謡ショーという名のイベントが行われるなど、ディズニーランドのパレードやショー的なものも行われており、昭和がディズニーランド化したエンターテイメントにまで昇華されている。

西武園ゆうえんちはその最たるものではあるが、いずれにしろ、私設博物館にしても飲食店街やテーマパークにしても、昭和 30～40 年代のイメージが集客効果のある演出として一定の成果を上げていることを強く感じずにはいられない。

第３項　その他の特徴的な再現展示

その他の特徴的な事例としては、まず、昭和 26 年に建てられ平成 6 年まで実際に使われていた建物そのものを博物館にした、昭和の暮らし博物館（写真 57）がある。こちらの館は、敗戦直後の住宅不足を解消するために、個人住宅の建設に低金利で融資をする住宅金融公庫という制度を使って作られた住宅で、実際の住宅を利用しているだけあって、その生活感は他館と比べても格段に高い[66]。

同様に、実際に使われていた住宅を再現している企業博物館の事例として、現在のＵＲがこれまでに建設してきた団地などのうち、昭和 30 年代に作られた団地の一部を移築復元している集合住宅歴史館がある。こちらの再現では、家具などの展示は少ないが、当時の貴重な部材を活かして再現されているうえ、憧れの団地生活の舞台をそのまま伝えている（写真 58）。

企業博物館の事例では、住宅の再現ではないが、東急電鉄が運営する電車とバスの博物館において、昭和 30 年代の高津駅の駅舎の再現がなされている（写真 59）[67]。

さらに、豊後高田市にある昭和ロマン蔵・昭和の町という施設も取り上げておきたい。ここは豊後高田の商店街そのものが昭和レトロを残しており、町全体を昭和の町として売り出している。その中心施設として機能しているのが本施設である。こういった町おこし的に昭和 30 年代を用いる事例（写真 60、61）[68]が現れてきているのも特徴といえる[69]。

第４項　再現展示から見えること

これまで確認してきたように、北は北海道から南は沖縄県まで全国にわたりその再現度に差はあるものの、昭和 30 年代を再現する展示を確認することができる。特に公立博物館においてもこれだけの広がりをみせていることは、1 つの流行と取ることもできる。

再現度の高い展示は見る人にインパクトを与える。何を感じてほしいのかという展示目的による面はあるが、一定の展示効果があることは疑いない。ただし、展示の流れとの関係は考えなければならない。北名古屋市歴史民俗資料館では、全館が昭和 30 年代の展示となっていて、同じ昭和 30 年代といっても様々な切り口からの展示があり、再現展示もその切り口の 1 つとして捉えられ、展示全体の中になじんでいる。しかし、福井県立歴史博物館のように、独立した展示室に昭和 30 年代の再現がなされていると、その展示室の中では特に問題は生じないが、展示の流れからは切り離されているため、展示全体から見ると浮いた存在となっている面は否めない。

再現展示の様子を昭和 30 年代に限定せずに確認しておくと、例えば東京都江戸東京博物館ではいくつもの実物大の再現展示が存在するが、展示ストーリーの中に再現展示が組

み込まれており、他の古文書や絵画資料、生活を表す道具、美術工芸品などが再現展示の周辺に展示されていることから、再現展示もまた展示物の 1 つとして違和感なく見ることができる。

また、江東区深川江戸資料館や大阪市立住まいのミュージアム大阪くらしの今昔館のように、展示室全体が江戸時代の町の再現となっている事例もあり、これはこれでその世界観に没入できる展示となっている。ただ、ここで取り上げた 3 館の事例は、ある一定の時代、ここでは例えば江戸時代の展示だという大前提があるから成り立っているようなもので[70]、地域博物館によくある時代を追う展示としての再現展示とはまた違った意味合いがあるようにも感じる。

他の事例では、新潟県立歴史博物館では、再現展示だけがされている展示室がいくつかあり、そこだけを切り取れば、江東区深川江戸資料館や大阪市立住まいのミュージアム大阪くらしの今昔館のようではあるが、縄文時代の再現や昭和 30 年代の町並みの再現は、再現展示に関連する資料が隣接する展示室で見られることから、再現される時代についての理解が、再現展示と資料の相互において深まるように工夫されている。

新潟県立歴史博物館のように異なる時代の町並み再現をする事例は、四日市市立博物館でも確認できる。四日市市立博物館では、中世の町並み再現が終わると、引き続き近世の町並み再現がなされている。東京都江戸東京博物館や新潟県立歴史博物館は再現展示と関連資料の両方が展示されているが、四日市市立博物館は、江東区深川江戸資料館や大阪市立住まいのミュージアム大阪くらしの今昔館のように、町並み再現だけがされていて、再現展示に関連する展示はされていない。しかも展示構成上、中世の町並みと近世の町並みが連続した展示コーナーとなっていて、展示解説パネルがない中、自力で展示を理解しようとするには困難を伴う[71]。

広島県立歴史博物館にも中世の町並みを再現する展示がなされているなど、ここでは一部の事例紹介にとどめるが、特に街並みの再現展示はインパクトが強いことから、他の展示との組み合わせをよく考えて用いる必要がある展示方法といえよう。

他にも、個別の住宅を再現する事例にあっては、展示の流れとの関係が不明な事例も存在するが、時代順に展示を行っている通史の展示にあっては、昭和 30 年代に例えば団地建設に伴い、人口増加や町並みの大きな変化を伝えるという内容を伝えるのに大きな効果を上げている。こういった事例では、歴史展示として再現展示がうまく位置付けられている。それは解説や他の資料との関係も含めてそう見えるよう意識が及んでいることを示している。

そういった個別の住宅を再現する事例の中でもその先鞭を切ったのが松戸市立博物館であり、地域の発展との関係を団地の再現によりうまく実現している。松戸市立博物館の事例をはじめとする住宅の再現展示では、その室内を実際の生活の様子で再現していることから、見る人に昭和 30 年代の家電製品が生活に入ってきて、社会が明るく発展していく時代の記憶を思い起こさせる効果の高い展示となっている[72]。また、都城歴史資料館のように民俗展示の位置づけで、道具を中心とした展示の中に室内の再現をしている事例も確認できる。

現代資料を並べる展示であっても、個々の道具に対する思い出が各人に存在するため、懐かしさを呼び覚ます効果はあるが、やはり住宅の再現展示の方が当時の雰囲気が伝わり

やすく、懐かしさを生み出す装置としての効果は格段に高い。

問題は懐かしさを生み出す効果が高いがゆえに、展示の位置づけがわかりにくくなってしまう点にある。それは、福井県立歴史博物館のように過去に行った展示で好評を博したことから常設化された事例があるなど、昭和 30 年代の再現展示に人気があり、常設展示の中に再現される事例も見られる[73]。

さらに、住宅そのものを具体的な建物として再現すれば、その建物の地域における意義を説明することで、地域の歴史の中に位置付けることができるが、昭和 30 年代以降、生活用品については工業製品が家庭に入ってくることとなるため、再現された生活の様子だけでは地域差を示すことが難しくなるという課題も存在する。そのような中、四日市公害と環境未来館では、ベランダの外に見える景色（写真 62）に地域性を出すという工夫も行われている[74]。

この他、公立博物館の展示と私設博物館の展示の違いについて考える中でもいくつかの課題が浮かび上がってくる。例えば、公立博物館ではできるだけ実際にあった状況に近いように再現する事例が多いのに対し、私設の博物館では昭和 30 年代のイメージを凝縮かつ美化した形で再現していることが多く、むしろ私設博物館での再現展示の方が見る人にとってよりインパクトを持って受け止められるといった状況も生まれている。商業施設の例では、昭和 30 年代の雰囲気の再現に力が入っているが、なぜかそこにリアリティは感じられず、つくりもの感を強く感じるものが多い。しかし、2021 年になって昭和をテーマにしたテーマパークを開設した西武園ゆうえんちでは、架空の世界でありながらそのリアリティの追及に力を入れることで、昭和をエンターテイメント化させており、昭和 30 年代ブームから始まる昭和の再現が、2021 年になっても有効であることを強く印象づけている。

このように、具体的な再現展示での事例に触れる中で、展示の目的や懐かしさを再現する装置としての機能のあり方、さらには地域性をどう表現すべきかといった課題や、今なお昭和 30 年代を再現することに対する人々の関心の高さが存在することなどについても確認できたところである。

第 3 節　常設展示で昭和 30 年代以降の時代を取り扱う展示の事例

前節では再現展示の事例を確認してきたが、ここでは再現展示以外の方法で昭和 30 年代以降の時代を取り扱う展示の事例を確認したい。

第 1 項　昭和 30 年代以降の道具を取り扱う展示

まず、家電製品などを歴史展示に位置付ける事例では、栃木県立博物館のように歴史展示の最後の展示ケース内で昭和 30 年代の道具を展示し、高度経済成長期を象徴的に展示している例や、相模原市立博物館では展示全体の最後の部分を「地域の変貌」というコーナーとし、その中で昭和 30 年代の生活の変化を表すのに、昭和 30 年代に使われた道具を用いている例も確認できる。

また、歴史展示ではなく民俗展示の中で家電製品を紹介する事例は、岩手県立博物館（写真 63）などで確認できる。

建物や町並みの再現展示とは違い、道具そのものを圧倒的な量で見せる形の展示としては、北名古屋市歴史民俗資料館（写真 64）や福井県立歴史博物館（写真 65）での展示があ

る。いくつかの道具を見せるだけでは伝わらないその圧倒的な数の資料によって、様々な角度から懐かしさを感じることができる展示で、建物や生活再現などとは無関係に、分類などによって道具そのものを見せる方法が確立されている。しかしこれらは道具の変遷を見せる展示とも違い、他の時代との比較を前提としていない展示といえる。

また、私設博物館で道具を中心とした展示では、昭和レトロ商品博物館（写真 66)、アトンおもちゃ館（写真 67)、みろくの里内の電話博物館（写真 68)、駄菓子屋さん博物館（写真 69)、昭和博物館～私はレトロ～（写真 70）などが確認できる。

これらの私設博物館で特徴的なのは、おもちゃに特化した展示をしている館が多いことである。こういった展示が多い理由には、子どもの頃の記憶が懐かしさを生み出すこととも関連するかもしれない[75]。

企業博物館でも、昭和 30 年代以降の道具を展示する事例がある。東芝未来科学館では、東芝が開発してきた様々な電化製品を展示しているコーナーがある（写真 71)。パナソニックミュージアムは、松下幸之助歴史館とものづくりイズム館があり、後者では、時代別ではなくテーマ別に新旧織り交ぜながらパナソニックで作ってきた幅広い道具を展示している（写真 72)。シャープミュージアムでは、シャープペンシルの開発から家電への商品展開を実際の道具を通して展示している（写真 73)。東京ガスが運営するガスミュージアムのくらし館では、ガス給湯器やガスコンロ、バランス釜など生活に密着した道具が展示されている（写真 74）[76]。ＮＴＴ技術史料館では、黒電話や公衆電話、携帯電話などが展示されている（写真 75）[77]。

企業博物館の事例では、人々の生活に密着している道具については懐かしさに繋がる一方、展示方法には懐かしさに重きを置いていない事例も存在する。ただし、展示の中には商品を紹介するＣＭが流されているものもあり[78]、これらのＣＭからは懐かしさを感じさせるものもあった。

第 2 項　昭和の後半から平成にかけての時代を展示する博物館

前項では昭和 30 年代の道具を中心に展示を行っている博物館の事例を確認してきたが、ここではより平成に近い時代から令和に至る時代についても取り上げている博物館の事例を確認していきたい。

・富良野市博物館【表 1№30】

昭和 30 年代の住宅の再現展示や戦後の電化製品というコーナーがある他、年表形式で昭和 20 年代から昭和 60 年代までの世相の変化を伝えるパネルがあり、主なできごとを書いた年表の他に関連する社会・風俗、音楽や映画、本やおもちゃ、家電製品などの道具を合わせて展示し、時代の移り変わりを昭和が終わるまで紹介するコーナーがある（写真 76)。

・都城歴史資料館【表 1№86】

こちらは 2020 年に展示のリニューアルがあり、歴史展示室、民俗展示室ともに展示内容が新しくなった[79]。新しい歴史展示では、終戦後を経て平成まで触れているが、平成の話は主に合併に関する情報が掲示されている。合併の話は地域博物館では比較的よく触れられる内容であり、これまであまり意識してこなかったが、確かに平成の話でもある。新しい民俗展示では「ザ・ショウワ」という昔の道具展を常設化した展示が存在する。

「ザ・ショウワ」では、時代別の展示として道具を中心に「1926～49 年代（昭和元年～24 年）のくらし」、「1950～60 年代（昭和 30 年代）のくらし」、「1970～80 年代（昭和 45

～64 年）のくらし」となっていて、「1970～80 年代（昭和 45～64 年）のくらし」では再現展示も含めてファミコンまでの道具を紹介している。

時代別展示の他にも道具の変遷を伝える「いろいろな道具のうつりかわり」というコーナーがある他、年表形式で昭和元年から平成 31 年までの道具と都城のできごとを紹介している。

・赤穂市立民俗資料館【表 1№.75】

ここは民俗資料を扱う博物館であるが、新しい時代の道具がかなり多く展示されているのが特徴である。具体的には、パソコンやオーディオ製品を 2000 年代まで集めて展示している。ＭＤ関係の家電が充実する他、パソコンもワープロからはじまって、一番新しいのは 2008 年モデルの WindowsVista 搭載とある（写真 77）。

電話も黒電話からＦＡＸつき、ポケベル、携帯電話も 2007 年製まであるし、炊飯器も 2006 年製のＩＨジャー炊飯器まである（写真 78）。

・東京都江戸東京博物館【表 1№.9】

リニューアル後の東京都江戸東京博物館では、歴史展示の最後の部分に「変化を続ける東京」というコーナーを設け、1960 年代から 2000 年代までを 10 年刻みで紹介する展示がされている。

ここでは、家電製品やキャラクターグッズ、おもちゃなどとともに、それぞれの時代を象徴するファッション、それも東京らしさを伝える竹の子族の衣装やボディコンスーツ、女子高生の制服とルーズソックス、メイドカフェのメイドの衣装などが展示されている他、東京をテーマに作成された音楽がそれぞれの年代ごとに聞けるようになっているなど、生活用品にとどまらない資料を収集し、展示している（写真 79）。

・滋賀県立琵琶湖博物館【表 1№.17】

滋賀県立琵琶湖博物館には道具の変化を伝える「私たちのくらし」というコーナーがあり、1960 年代から 2010 年代までについて、雑誌の表紙やレコードジャケット、ポスターなどで紹介するとともに、家電製品やおもちゃ、キャラクターグッズ、食品や洗剤などの生活用品、さらにテレビ、冷蔵庫、洗濯機の大型家電などを通して、時代の移り変わりや生活の変化を伝えている（写真 80）。

年代ごとに同じような種類の道具を展示していることから、その移り変わり等がわかりやすく伝わる展示となっている。

・南風原町立南風原文化センター【表 1№.90】

戦時中の展示に力が入っている博物館だが、戦後の歩みにも力を入れており、占領下の生活から昭和、平成、令和へと連面とした歴史を、年表、写真、道具を通して伝えている。新しい話では玉城知事の誕生、令和元年開幕、そして首里城焼失までとなっていて、県の歴史などに関係する話題について速やかな対応を行っていることが確認できる（写真 81）。

・尼崎市立歴史博物館【表 6№.9】

現代展示室では、「昭和 30 年代の尼崎」、「昭和 40～60 年代の尼崎」、「平成時代の尼崎」、さらに新型コロナウイルスの話にまで触れている。全体として様々な課題に直面しながら、それを乗り越えてきたかという視点で語られている。

阪神・淡路大震災の話では仮設住宅の看板が展示され、新型コロナウイルスでは臨時休館の話に触れていて、通史の中に新型コロナウイルスが展示されている（写真 82）。この

展示が将来的にもなされるのかは気になるが、最新の話題に触れている点で先進的な取り組みである。

これらの展示からは、昭和 30 年代より新しい時代の展示であっても、民俗展示に位置付ける事例のように、次章で詳述する昔の道具展に対応する展示を常設化したものが存在する他、デジタル化以降の道具を積極的に取り入れている館に加え、平成を意識したものまで存在していることがわかる。

また、年表形式で道具の変化や社会、生活の移り変わりを伝える事例が道具の展示の流れで確認できる他、歴史展示に位置付ける事例でも年表形式で社会のできごとを追いながら道具を合わせて展示する事例が確認できる。

そして、年表を追う歴史展示では、既に令和の時代のできごとを常設で紹介する事例も数こそ少ないが確認できる。尼崎の新型コロナウイルスについては第 4 章でまた触れるが、南風原町立南風原文化センターのように、日々展示を更新していく姿勢は興味深い。

第 3 項　昭和 30 年代以降の映像や音楽を取り扱う事例

本節ではモノを中心とした事例を確認しているが、企業博物館の事例にあったように、時にはモノだけではなく、映像や音楽などが人々の記憶と直結する事例にいきあう。ここではそういった事例についても確認しておきたい。

・アドミュージアム東京【表 1№117】

アドミュージアム東京は、広告の歴史を展示している博物館である。広告も懐かしさがついて回る時代を現すものの 1 つといえる。

例えば、ＮＥＣの「バザールでござール」のＣＭなどは、言葉を聞いただけでもＣＭが思い出されたりする（写真 83）。これはほんの一例だが、ＣＭは短い時間で記憶に残るように工夫されているため、流行語大賞に出てきそうなキャッチコピーが溢れている。

テレビが家庭の中心をなす時代において、無意識に刷り込まれたＣＭの持つ力を感じ、思い出を語る際の 1 つのツールとなることが確認できる。

・NHK 放送博物館【表 1№116】

NHK 放送博物館では、大河ドラマや朝ドラこと連続テレビ小説、紅白歌合戦にオリンピックなどといったテーマを取り上げていて、多くの人々の記憶と直結するコンテンツをＮＨＫが有していることを確認できる。特に印象的なのは、子ども向けテレビ番組の存在である。展示室には「おかあさんといっしょ」内の着ぐるみによる人形劇「にこにこぷん」の人形が三体展示されていたが（写真 84）、この番組は 2 歳から 4 歳を対象とした番組であり[80]、多くの子どもたちの記憶に繋がるコンテンツである。

子どもの頃の記憶が強く残っていることもあるかもしれないが、子どもの頃の記憶は経験が限られていることもあり、多くの人と共有できるという点で、子ども向け番組に力を入れているＮＨＫの強みを感じる[81]。

これらの事例はテレビの普及と関わることから昭和 30 年代以降を表現する展示である。取り扱うテーマがモノではなく、音楽や映像という違いはあるが、懐かしい記憶と直結するコンテンツであることが確認できる。特にテレビが家庭の中心を占めていた一昔前までの時代において、その影響は大きい。

誰もが見たテレビＣＭや誰もが耳にした音楽、皆が注目したテレビ番組は、その時代を知る人にとって共通の記憶として呼び起こされる可能性が高い。

第 4 項　昭和 30 年代以降の時代を取り扱う事例から見えること

本節では、再現展示を用いずに昭和 30 年代以降の時代を展示している事例について確認してきた。公立館では、歴史展示の一部として、昭和 30 年代の道具を通して時代の移り変わりを伝える展示が確認できる他、岩手県立博物館のように民俗展示の中で昭和 30 年代以降の道具を見せる事例も確認された。これは、昭和 30 年代以降の時代も展示すべき時代として多くの博物館で位置付けられていることを示している。

また、私設博物館においても多くの昭和 30 年代以降の道具は確認できるところである。特におもちゃに特化し、圧倒的な数を見せることで見る人に強いインパクトを与えている事例が多く確認できる。これはコレクターによる収集が公立博物館の資料収集活動に通じる面があるとともに、収集したコレクションを見せるという行為が博物館の展示に通じる面があることをも示している。強いてその違いを考えるなら、コレクターはニッチでマニアックなものまでを含めて収集、展示がなされているのに対し、公立館で展示される資料は、多くの人々に使用経験があり、その経験を共有できるものが展示されていることといえる。

企業博物館との比較では、やはり展示の目的が異なり、企業にとっての歴史という視点があるため、個別の道具に対する懐かしさを感じることはできても、懐かしさを演出することにはあまり力点が置かれていないことが読み取れる。

さらには昭和後期から平成、令和までをも展示する事例が少ないながらも存在することから、博物館における展示すべき時代の範囲は徐々に現在へと近づいていることを示唆している。特に、南風原町立南風原文化センターの首里城消失の話や、尼崎市立歴史博物館における新型コロナウイルスを取り上げる事例は、直近のできごとまでをも歴史展示の対象として取り上げようとする姿勢を強く感じさせる。

その他、第 3 項で触れたように、映像や音楽も懐かしい思い出に繋がることを示す事例が確認できた。テレビが家庭の中心を占めていた時代にあっては、テレビを通して映像や音楽が人々の間で共有されており、それらが共通する懐かしい思い出に繋がることも確認できる。

第 4 節　常設展示における現代資料を用いた展示に関する考察

本章では、昭和 30 年代の生活を再現している博物館を中心に、現代資料を用いた展示を常設で展示している博物館での事例を確認してきた。

まず、常設展示では歴史展示の一部として高度経済成長期を象徴する形で住宅を再現する事例が多く存在した。これらの展示は、平成に入った頃から始まるという意味で、展示が開始された当初から考えると 30 年前の時代を展示していたことになる。しかし、その後も昭和 30 年代を再現する展示が新たに作られ、それより後の時代を展示する博物館はなかなか現れない。まして平成を展示する博物館は滋賀県立琵琶湖博物館、東京都江戸東京博物館などの道具を中心とした事例とできごとを中心とする南風原町立南風原文化センター、尼崎市立歴史博物館など、いくつか存在する程度であり、再現展示としては存在しない。このことは、今から数えて 30 年前という時点にこだわりがあるのではなく、昭和 30 年代に対してこだわりがあるということの現れであり、ただ単に 30 年経てば展示の対象となるわけではないことを展示の上からも示している。

昭和 30 年代は高度経済成長期と重なり[82]、東京オリンピックが開催されるなど[83]、社会的にも大きな変わり目であったが、家電製品の普及など、道具の変化から見る生活史においても大きな変わり目の時期であり[84]、それはまた地域社会が大きく変容する時期とも重なっている。それゆえ、松戸市立博物館のように大型団地の建設等という目に見える形での町の変化を歴史展示に位置付けることができるのかもしれない[85]。

また、それ以降の時代の展示がなされないのには、これらの時代の評価が定まっていないということもあるが、まだ、それ以降の時代を展示する意義を見出せない、またはそういう雰囲気が生まれるきっかけが存在しなかったとも考えられる[86]。

そのような中、平成が終わり令和を迎えた現在、平成を振り返ろうとする機運はかつてより高まり、マスメディアを中心にそういった企画が世の中にあふれるようになったが、平成に関する展示は次章で触れるが、それほど多くは確認できなかったのも事実である。

とはいえ、これまで確認してきた事例から考えるに、今後歴史展示として平成を取り上げる博物館、とりわけ平成の住宅の再現展示をする博物館が現れる可能性は極めて低いと考える。それは、平成を象徴する存在が建物、とりわけ再現に向いているような住宅にはないと考えるからである[87]。

再現展示で平成という時代が語られる可能性は低いと考えるが、一方で、再現展示にも見られた道具に焦点を当てると、それらの道具の多くは工業製品であるがゆえに、個別のモノに対する記憶ではなくても、同じような工業製品に対して思い出があるという状況が生まれていると考えられる。例えば、ファミコンならどのファミコンでもいいのである。

人々の記憶と展示の関係を考えると、生活再現展示、町並み再現展示は、地域の歴史を象徴的に表す事例であっても、実物大で生活の様子が再現されることから、人々の持っている懐かしい思い出を呼び覚ます効果が高い。

また、町並みを再現する展示では、私設博物館においてイメージの中にある昭和 30 年代を凝縮かつ美化した形で再現しており、記憶の想起という意味では効果が高いが、それらは実際にある町並みではないうえ、本来持っていたはずのマイナスの側面が伏せられている面がある[88]。一方の公立博物館では、できるだけ現実に即した形で再現するため、イメージにある昭和 30 年代とのギャップが存在することがある。歴史的事実を優先するのか、イメージを優先するのか、この判断こそ公立博物館と私設博物館の違いと考える。

いずれにしても再現展示は懐かしい思い出を呼び覚ますことになるため、本来展示を通して伝えたいメッセージがうまく伝わらないという課題はあるものの、呼び覚まされた思い出を誰かに語りかけたくなる効果の高い展示であることは間違いない。そのため、再現展示は来館者同士の対話の機会を生み出すことには繋がっている。ただし、対話の機会を生み出すことが目的の展示ではないし、そうなることを博物館側が期待しているかどうかは展示からはわかりかねる。

次に、昭和 30 年代以降の住宅を再現する事例では、大規模団地を再現する事例が多く存在する。そこにはそれ以前の生活とは明らかに異なる憧れの団地生活という言葉に代表される新しい生活様式が展開されており、そういったイメージが多くの人々にあるのかもしれない。少なくとも日本の多くの人がこういった家電製品に囲まれた生活を経験してきたことから、この手の再現展示に懐かしさを感じるとともに、道具そのものだけの展示よりも、生活感あふれる展示が持つその全体の雰囲気や空気感が共感に繋がりやすいとも考

える[89]。

多くの人が懐かしさを感じる理由は、多くの人が経験したり自分では経験しなくてもそういう生活をしている人が身近なところにいたりしたことなどと関係すると思うが、そういったこととは別に、再現展示の場合、特に室内に入ることができる場合、完全に展示の世界に来館者が入り込むことができるので、他の展示を見ているよりも来館者が展示と向き合う時の立ち位置は変わっているものと考える。

こういった展示のあり方をうまく使うことができれば、フォーラムの博物館でいう、展示をする人、展示される人、その展示を見る人の関係に変化をもたらすことはできるのではないだろうか。

さらに、再現展示ではなくとも、昭和 30 年代以降の道具が常設で展示されている事例も確認してきた。すでに触れたように、再現展示と比べれば懐かしさの感じやすさは劣る可能性はあるが、実際に使用した経験のある道具を前にした時、来館者に懐かしい感情がよみがえってきていることは、福生市郷土資料室でも確認している。再現展示を行うことはスペースの問題や展示の流れの問題で難しいとしても、昭和 30 年代以降の道具を展示することで、人々の記憶を呼び覚ますことはできるのであり、再現展示のような効果を生み出すことは充分に期待できる。

このことはまた、平成の展示が住宅の再現としてなされる可能性が低いという予測の下においては、再現はしなくとも、平成の時代に使われていた道具を用いることで懐かしさを活用する展示を行うことができるということをも示していると考える。

ここまで現代資料を扱う常設展示の状況について確認してきた。少し資料そのものに視点を移してみると、序章では、何気ないモノでも個別の思い出が付与されれば展示資料になることを述べたが、これまで確認してきたような工業製品などの現代資料は、個別のモノに対する学術的な価値がそれ以前の道具と比べて下がっているとも考えられる。

従来から博物館資料として対象となっていた民具であれば、その多くは手作りであり一つ一つに違いがあり、代替はきかない。だからこそ、たくさん集めて比較する意味があるが、工業製品は代替がきくので、たくさん集めても展示用と保存用とか、教育普及活動での活用において、触って壊れても構わないとかという扱いにしかなりえない。強いて言えばきれいな方を展示しようかといったところなのではないだろうか。そういう意味で、工業製品と個別資料の違いについては、今後考えていかなければならない課題かと考える。

日々移りゆく日常の生活の様子は記録に残りにくい。当たり前すぎて誰も記録しようと考えないからである。そういう当たり前の日常に価値を見出したのが北名古屋市歴史民俗資料館である。価値が見出されれば、ただのモノであっても博物館資料となる。

人々が思い出を語りだしたくなるような仕掛けを作るためには、人々の記憶と直結する特徴的な資料を歴史が固定化される前に学芸員が気づき、先手を打って集め始める必要がある。世の中からなくなってからでは、それらの資料は集められない。常に新しい時代に対してアンテナを張っていなければ、それこそ平成や令和の時代を語るすべを失うことにもなりかねない。

そういう作業を通して、地域の記憶を記録し、歴史化していくことがこれからの博物館には求められるということを、これらの事例では強く示唆している。

第２章　使用経験のある資料を企画展示で取り扱う博物館活動

前章でも述べたが、筆者が以前博物館に勤務していた時、そろそろ平成の展示が始まっても良いのではないかと考えていた。昭和 30 年代の再現展示が始まったのは、平成に入った頃であり、当時から考えれば昭和 30 年代は約 30 年前のできごとである。平成も 30 年が見えてきた頃の発想としては、30 年前を展示するということは、事例の上からも可能ではあった。

しかし、実際には前章で確認したように、常設展示で平成の頃まで展示をしている事例は数えるほどしか存在しない。一方で、小学校の学習対応として行われる昔の道具展を中心とする企画展示では、平成の頃の道具が展示されることがしばしば行われる。常設展示では平成に入った頃の時代はまだあまり取り扱われていないようだが、企画展示では平成という時代まで踏み込んだ展示が現実に行われているのである。

本章では、こういった平成の道具を展示する企画展示の事例について取り上げ、博物館における平成の時代の扱いについて検討を行っていくものである。具体的には、まず常設展示の事例同様、昭和 30 年代以降の道具の展示事例として昔の道具展について確認し、その中に見られる平成の道具の状況について確認したい。そのうえで、近年話題を呼んでいるおもちゃ展を取り上げていきたい。おもちゃ展では、ファミコン以降の家庭用ゲーム機が取り上げられており、平成の時代に踏み込んだ展示がなされている。さらには、平成が終わり令和という新しい元号が始まったことで、平成という時代を振り返る企画展示が行われるようになったことから、これらの展示では平成という時代をどう取り上げていたのか確認していきたい。

直近では新型コロナウイルスに関連する企画展示も行われているが、新型コロナウイルスについては、できごとを取り扱う事例として第４章で取り上げることとし、本章では道具を中心とした事例と、本稿作成にあたり確認することのできた平成展の事例から、どのような道具が平成までの道具として紹介されているのか確認し、平成の展示の可能性について考察するものである。

第１節　研究史

小学校の学習対応として行われる昔の道具展は、松戸市立博物館の青木もすでに指摘しているように、博物館活動において一定の位置を占めている[90]が、昔の道具展そのものについての研究というものはあまり確認できない。

関係するものとしては、小学校の学習対応における博物館の実践報告や、学校側での活用に関するものである。博物館での実践報告では、八尾市立歴史民俗資料館の岡田清一による民具資料を学校教育との連携の中で活用する事例として昔の道具展についても触れる論考[91]や、2019 年度から移行期間となり 2020 年度から全面実施となった小学校の学習指導要領の改訂に伴う対応について述べた青森県立郷土館の福士道太の出前授業に関する論考が確認できる[92]。学校での活用についても学習指導要領の改訂を踏まえ、これまでの学習指導要領の改訂と歴史学習を述べた論考[93]などがあるが、いずれも昔の道具展同士の比較ではないのが特徴である。

おもちゃ展については、序章で紹介したファミコンをテーマにした寺農織苑による論考の中で、比較的近年に地域の博物館・資料館がファミコンを用いた展示会を開催した例と

して、城陽市歴史民俗資料館、大野城心のふるさと館、愛荘町立歴史文化博物館の 3 つを紹介し、これらの展示会は期間を設けて開催された特別展であり、常設展示として展示されているわけではないことを述べるとともに、現行の博物館法に定める日本国内の博物館で恒常的にファミコンを展示しているところはないと述べている[94]。

その他、はじめにで触れた平成の展示の可能性については、北名古屋市歴史民俗資料館の市橋が北名古屋市歴史民俗資料館のホームページ内にあるブログにて、昭和日常博物館としての活動を通して、昭和 30 年代の道具の変化を追うことや、平成の道具を視点に遡って比べるという視点などに触れ、「平成日常博物館」というコンセプトを試案してみたいと述べている[95]。

筆者が確認できた範囲ではあるが、いずれの研究においても、企画展示における平成の時代の道具についての研究や、平成の道具に関して、企画展示を比較検討するような形での論考は確認できない。特に、昔の道具展については全国的に取り組まれているものの、その具体的な様子についての研究が確認できないのが現状である。

このような状況を踏まえ、実際の展示の事例から現代資料の取り扱い状況を確認し、どういった展示の可能性があるのか、どのような資料が実際に扱われているのかを確認し、これからどのような資料を収集、展示していくべきか検討していきたい。

第 2 節　昔の道具展の傾向と特徴

地域博物館では、小学校の学習指導要領に対応するような形で、かなり多くの館で冬の時期を中心に「昔の道具展」を開催している。これらの展示は、主に小学 3、4 年生を対象にしたもので、昔の道具を通して社会の変化や身近な昔についての理解、関心を促すことを目的にしている[96]。

筆者は 2017 年度の冬期から論文執筆時までに開催された昔の道具展を 221 件見学した（表 2）。その中で得られた全体的な傾向としては、道具の変遷を通して、生活そのものが変化していったことを伝える展示となっていて、特に電気が生活の中に入っていくことで、生活様式が劇的に変化したことがわかる展示が多いということである。

第 1 項　経年調査から見る展示パターン

まず、本稿の作成にあたり経年調査を実施できた博物館の事例から確認すると、基本的なパターンはできあがっていて毎年ほぼ同様の内容で展示を行っているケースと、毎年テーマを変えて実施しているケースが確認できる。

前者の毎年ほぼ同様の内容で展示を行っているケースでは、対象となる小学生が毎年変わることから、すべての小学生に対し同一の内容を提供できるという意味で重要な意味を持っている。もっとも展示する側にとっても一度完成させたパターンをそのまま使いまわせるという点でメリットはあると考えるが、少なくとも学習指導要領が変わるまでの間は、小学校にとって必要としている展示の内容は変わらないはずである。また、毎年同じ内容で展示がされていることで、学校側でも展示の状況を把握しやすく、利用しやすいのではないかと考える[97]。一方で、毎年同じ内容で展示を行っていると、定期的に博物館に来館する来館者にとっては、また同じ展示かと思わせてしまう可能性も否定できない。ただし逆に捉えると常設展示のように、変わらない展示を毎年楽しみにしている人もいるのかもしれない。

後者の毎年テーマを変えるケースは、例えば柏原市立歴史資料館ではメインタイトルが「ちょっと昔の道具たち」で、年度別のテーマは「伝える」（2018 年度）、「おいしいお米ができるまで」（2019 年度）、「モノをハカル」（2020 年度）となっている。所沢市生涯学習推進センターではメインタイトルが「昔さがし展」で、年度別のテーマは「食べものとくらし」（2018 年度）、「水とくらし」（2019 年度）、「着るものとくらし」（2020 年度）となっている。八千代市立郷土博物館ではメインタイトルが「くらしのうつりかわり展」で、年度別テーマは「変わりゆく学び舎」（2017 年度）、「土地の使われ方からみる八千代の 100 年」（2018 年度）、「昭和と平成のくらし」（2019 年度）、「思いでの総合体育祭」（2020 年度）となっている。相模原市立博物館ではメインタイトルが「学習資料展」で、年度別テーマは「ちょっと昔のくらし 13　～ジイジ・バアバ、パパ・ママの子ども時代～」（2017 年度）、「まなべるくらべる学習資料展　～便利になった道具とふるさといろはかるたで見る移り変わり～」（2018 年度）、「ちょっと昔のくらし　～第 18 回東京オリンピックの頃～」（2019 年度）、「道具が変えるわたしのくらし　～過去から未来へ向かう記憶～」（2020 年度）となっている。

柏原市立歴史資料館や所沢市生涯学習推進センターのケースでは、取り扱う道具の種類をテーマとしている。かたや八千代市立郷土博物館では、道具の変化ではなく特集するテーマをタイトルにも設定している。実際八千代市立郷土博物館では、前半部分は衣食住を中心とした一定のパターン化された展示となっていて、後半部分が特集テーマの展示となっている。一方の柏原市立歴史資料館では、取り扱う道具の種類が毎年異なるので、年度によって見ることのできる道具が大きく異なる。さらに相模原市立博物館では、展示構成や展示室の使い方まで大きく変えるほど大がかりなテーマ変更を行っていて、年度によって展示室の雰囲気がまるで変わるほどの違いが確認できる。

その他には、杉並区立郷土博物館のように基本的なパターンはあるものの導入部分を年度によって入れ替える事例や、おもちゃコーナーの展示資料など、展示の一部を毎年入れ替えている事例も確認できる。

第 2 項　展示における道具のグループ分けの方法

次に展示する資料をどのようにグループ分けしているのかを確認すると、衣食住などのように道具を一定の分類に基づいて見せる事例と、世代別に時代を区切って、それぞれの時代に使われていた道具を集め、道具を含む時代について生活の全体を通して他の世代と比較して見せる事例が存在する。

道具を分類する事例では、例えば、武豊町歴史民俗資料館で 2020 年度に行われていた武豊町歴史民俗資料館企画展「むかしのくらし展」の展示構成は、「衣」、「食」、「あかり」、「音」、「音・映像」、「暖をとる」、「涼をとる」となっている（写真 85）。上越市立歴史博物館で 2020 年度に行われていた企画展「探検！むかしのくらし」では、「衣」、「食」、「住」、「学」、「雪」、「農」となっている。四日市市立博物館で 2018 年度に行われていた開館 25 周年企画展「昭和のくらし　昭和のまちかど　あの頃の四日市を語り会わへん？」では、「書」、「聴」、「録」、「視」、「写」、「映」、「聞」、「話」、「測」、「防」となっている。池田市立歴史民俗資料館で 2018 年度に行われていた企画展「ちょっと昔のくらしの道具」では、「ごはんと進化する台所」、「快適な眠りのくふう」、「変化する裁縫と洗濯」、「広がる余暇の時間」となっている。市川市立市川歴史博物館で 2019 年度に行われていた令和 2 年度

市川市立歴史博物館企画展示「昔のくらし」では、「くらべてみよう　生活の道具」、「昔の市川をみてみよう」、「知ってる？　昔のお金」、「子どものおもちゃ」、「昔の学校をみてみよう」となっている。

傾向としては、衣食住という分類が多いが、住については明かりとか音楽とかに細かく分けられていることが多い。また、昔の道具展では、小学生にとって身近な道具ということだと思うが、学校の道具やおもちゃなどの遊びの道具という分類がされていることが多い。その他、学習単元の関係だと思うが冬の時期に昔の道具展が開催されるケースが多いことから、時期的な問題で暖を取る道具は比較的多く展示されているものの、扇風機などの涼を取る道具はあまり展示されていない。

世代別に時代を区切るケースでは、北区飛鳥山博物館で 2019 年度に行われていた令和元年度小学校 3 年生対応事業「来て、見て、さわって！　昔の道具展」の時代区分は、「かなり昔の時代　薪や炭・井戸水を用いた時代（明治時代の終わり 1910 年頃）」、「けっこう昔の時代　ガスや電気・水道がひかれた時代（大正時代のおわりから昭和時代のはじめ 1920～30 年頃）」、「ちょっと昔の時代　ガス・電気・水道が普及した時代（1960 年代以降）」となっていて、2019 年度になってはじめて新しく「ほんのちょっと昔のくらし（今から 30～40 年くらい前）」というコーナーができていた。さいたま市立博物館で 2020 年度に行われていた「さいたま市のうつりかわりと人々のくらし展」では、「鉄道が通ったころのさいたま市　今から 135 年くらい前　明治 18（1885）年ころ」、「浦和市や大宮市ができたころのさいたま市　今から 85 年くらい前　昭和 10（1935）年ころ」、「東北新幹線や埼京線ができたころのさいたま市　今から 35 年くらい前　昭和 60（1985）年ころ」、「さいたま市ができたころのさいたま市　今から 20 年くらい前　平成 13（2001）年ころ」、「現在のさいたま市　平成 30（2018）年ころ」「これからのさいたま市」となっている。弥富市歴史民俗資料館で 2019 年度に行われていた弥富市歴史民俗資料館昔のくらし展「なつかしあたらし！あの日の昭和展」では、時代設定が子どもにも分かりやすいように映画やアニメからとっていて、「風立ちぬのころ（昭和初期）」、「火垂るの墓のころ（戦時中）」、「サザエさんのころ（昭和 20 年代）」、「となりのトトロのころ（昭和 30 年代前半）」、「伊勢湾台風と弥富」、「昭和の東京オリンピックのころ（昭和 30 年代後半）」、「ウルトラマンのころ（昭和 40 年代）」、「ちびまる子ちゃんのころ（昭和 50 年代）」、「クレヨンしんちゃんのころ（昭和 60 年代）」となっている。川越市立博物館で 2021 年度に行われていた「むかしの勉強・むかしの遊び展」では、「鉄道交通がさかんになるころ」、「自動車交通がさかんになるころ」となっていた（写真 86）。なお、川越市立博物館では、2018 年度の「むかしの勉強・むかしの遊び展」では、「おじいさんやおばあさんが子どものころ」、「おとうさんやおかあさんが子どものころ」となっていた。

世代別の展示にする場合は、常設展示の生活再現展示のように、1 つの時代についてまとまりをもってみせることができるとともに、時代が変わると生活の様子が変わることが一目でわかる効果がある。一方で、「お父さんお母さんが子どもの頃」といった設定にすると、本来は毎年毎年 1 年分新しい時代に更新していかなければならず、毎年はともかく数年後には時代設定が合わなくなることが想定される。そこで、今回紹介したようなできごとで時代を現すといった方法が取られるのではないかと考える。ただしここで考慮しなければならないことは、さいたま市立博物館や川越市立博物館の事例では、2020 年度に改定

された学習指導要領により、昔の道具を中心とした学習から町の変遷や交通との関わりなどについても学習することになったことから、時代の設定を変更した可能性も考えなければならない。なお、展示の内容についても、昔の道具を中心としたものから、町のうつりかわりや交通の変遷などについても触れるように展示の構成がガラリと変わった事例が確認されたところである[98]。

第 3 項　再現展示がある事例

これらの他に特徴的な展示を行っている事例としては、常設展示に負けないような再現展示を行っている事例がある。

大がかりな再現を行っているのは、岐阜市歴史博物館で、2020 年度に行われていた企画展「ちょっと昔の道具たち」では、教室の再現、駄菓子屋の建物再現、住宅の建物再現、電気屋の建物再現、銭湯の室内再現がある他、室内の再現はトイレやお風呂、居間などの再現、井戸や洗濯の体験などができるようになっている（写真 87、88）。

川越市立博物館では 2019 年度までの「むかしの勉強・むかしの遊び展」で、駄菓子屋の建物再現、住宅は台所と居間を建物で再現する他、教室の再現がされている（写真 89、90）。

入間市博物館では 2019 年度までの「むかしのくらしと道具展」で、昭和 40 年頃を再現した角栄団地の茶の間と台所と、囲炉裏と土間のある頃の住宅が再現されている（写真 91）。

その他にも室内の様子などを再現している事例は松戸市立博物館、吹田市立博物館、一宮市博物館、四日市市立博物館など常設展示のように再現のレベルに差はあるものの、この他にも多くの事例が確認できたところである。

第 4 項　昔の道具展の傾向から見えること

これまで確認してきた事例からは、毎年のように昔の道具展を実施している博物館であっても、テーマを変える館と変えない館があることや、展示資料のグループ分けについて衣食住を中心とした分類で行うのか、世代別に様々な道具を集めてみせるのかといった違いがあり、衣食住を中心とした分類が多いものの、世代別に道具を集めた方が生活の移り変わりはわかりやすいことなどの特徴が挙げられる。ただし、世代別の展示でも、その時代設定は年々時代が移っていくことになるため、時代設定の名称の付け方には工夫が必要である。例えば、親世代といっても 5 年経てば 5 年分新しい時代にしなければならない。そういう細かな対応をするというよりも、やはり昭和 30 年代の家電が入った頃といった時代設定となっている面も大きい。

また、小学校の学習支援という面から考えると、学習指導要領の改正によって、展示内容に大幅な見直しが必要となるなどの課題も存在する。

再現展示については、世代別展示や常設展示における再現展示同様に展示そのものに生活感が現れ、大人にとってということになるが、懐かしさを想起させる効果が高まることがわかる。一方で、再現展示は大がかりな作業が必要となるため、組み立てるためにお金がかかるため、予算削減の流れの中で、今後も継続的に展示されるかどうかは注視していく必要がある。

他にも、例えば、毎年継続して実施している館があるだけでなく、数年に一度実施する館がある他、松戸市立博物館のように企画展示で昔の道具展を実施しながら、常設展示にある団地の再現についても併せて見ることで効果を上げることを期待している事例なども

確認できる。

第３節　昔の道具展に見られる平成に近い時代の道具

前節では、昔の道具展の全体の傾向を確認してきた。本節においては、より具体的に昔の道具展においてどのような現代資料が展示されているのかを確認していきたい。特に、現代資料の中でも昭和の終わりから平成にかけての道具の状況を確認し、どのような資料が収集され、展示に繋がっているのかを確認してみたい。

第１項　昔の道具展における平成に近い時代の道具の展示状況

昔の道具展において、昭和の終わりから平成にかけての道具が展示されていた展示の中から、実際に展示されていた資料をまとめたものが表３である。

この表は、筆者が展示を見学した際の記録や写真を後から確認した中から平成にかけての道具を一覧にしたものである。そのため、記録漏れや筆者の認識不足により本来展示されていたにもかかわらず、表から漏れているものや展示資料を見たにもかかわらず筆者の力量の問題でうまく分類しきれずにまとめてしまったものなどがあることについて、あらかじめ断っておきたい。そういったデータではあるが、１つの傾向として、どのような道具が好まれて展示されているのかはつかめてくる。

ただし、データの利用にあたっては、同一館の別の年度での昔の道具展での事例も含まれており、毎年同じものを出していることも考えられるので、分析は慎重に行う必要はあるが、ここではそこまでの分析を行っていない。それでも一定の傾向は確認できる。

この表からは、少なくとも近年の昔の道具展においては、平成にかけての道具には明らかな偏りが確認できる。その多くは、ファミコンをはじめとする家庭用ゲーム機やおもちゃの類い、携帯電話やスマートフォン、ワープロやパソコン、ウォークマンなどのポータブル音楽プレイヤー等に集約される。

これは昔の道具展という制約がある中で、子どもにも身近な遊びの道具が多くを占めるとともに、やはり、それまで家庭の中でしかできなかったことを外に持ち出せるようになったポータブル性がこの時代の特徴として捉えられているからではないかと考える。

実際には、電話の変遷として携帯電話やスマートフォンが比較の対象として取り上げられていることも充分に考えられるし、変化のわかる道具としてテレビや IH クッキングヒーターが取り上げられているとも考えられる。

昔の道具展では、道具の変遷は生活の変化と表裏一体であるが、デジタル化、ポータブル化による変化がこの表からも明確に見て取れる。

ただし、この結果からもいくつかの疑問は出てくる。その一つは、これらの資料が積極的に地域博物館において収集されているのかという問題である。これについては、少し考えなければならない課題を含んでいる。というのは、これらの道具のうち所蔵を明記しているものの中に、個人蔵と書かれた資料がいくつも含まれているからである。

個人蔵ということは、博物館では収蔵していないということである。これらの個人蔵の個人とは、その多くが展示を担当する学芸員やその関係者である可能性が高い。それは、博物館では収蔵していないが、学芸員やその関係者が個人としては所有していて、それを展示することで昔の道具展の展示内容が大幅に充実するとの見込みから、個人での提供として展示されているのではないかと自身が展示を企画した経験を踏まえ考えるところであ

る[99]。

これらの道具には、個人的な思い入れがあったりして、博物館に寄贈するには至っていないのではないだろうか。それはどちらかというと、第１章で述べた私設博物館のオーナーのような気持ちに繋がるのかもしれない。思い入れがあるから手放したくはない。とはいえ、その資料があれば展示は充実する。自身が関係者である限り、特に寄贈していなくても展示には支障をきたさない。そのあたりの個人的な所有欲との葛藤は今後検討してみたい。

もう１つの課題は、これらの道具が変化の大きな道具であることは間違いないが、これらだけで時代を象徴することには違和感を感じずにはいられないということである。

時代とともに変わるものと変わらないものとが実際にはあり、併存していることもあるだろう。さらにいえば、より身近な商品からこそ生活の様子が見えてくるということもある。

その事を示すような展示をしていたのが、福井県立若狭博物館である。少し具体的に展示の様子を確認してみたい。

・福井県立若狭博物館　「ちょっとむかしのくらし展　洗濯へん」（2020 年 12 月 15 日～2021 年 3 月 14 日）【表 2№160】

この年の展示テーマは洗濯に特化したものであった。印象的な資料に、現在の洗剤としてアタックやアリエール、ボールド、ニュービーズ、トップなどの粉や液体の洗剤と、ソフラン、レノア、ハミングなどの柔軟剤、さらにワイドハイター、ブライトなどの漂白剤とキーピングなどの洗濯糊もボトルなどの実物資料が存在した。

これらの資料は、展示のために現在一般に売られている洗剤等を購入して資料としたもので[100]、悉皆調査に近い形で現在市販されている商品をそのままままとめて資料化する大胆な方法である。とはいえ、こういった形であれば毎年テーマを変えて、一定期間が経つと入れ替わってしまうような生活に身近な消耗品的な資料の収集を行うことができるのであり、日々失われていく資料を博物館が収集していく際の参考となる手法といえる。

特に洗剤などの日々の生活で使う道具は、１年２年では変わらなくても時代を表す資料になるので、昔の道具展に合わせて購入していくということは意味のある収集活動と考える。

第２項　昔の道具展における平成に近い時代の道具から見えること

本節では、昔の道具展において昭和の終わりから平成にかけてのどのような道具が展示されているのかを確認してきた。

常設展示で見られる資料と比べても、圧倒的におもちゃや家庭用ゲーム機の存在感が高いことが理解される。これは、昔の道具展が一義的に小学生向けの展示であることと大きく関係していると考える。この展示を見る子どもたちにとって身近な話題は、やはり自分達の経験していることということになるだろう。そうなると、子どもたちの遊びに関する資料は小学生にとって取っつきやすい道具ということになる。

それはまた、保護者世代がまさに実際に使っていた道具であり、親子での来館が期待できるという意味でも、大きな効果が見込まれる。それらの道具は、大人にとっては懐かしい道具であり、思わず語り出したくなる展示となっていることは前節で確認してきたところである。そういう意味では、子どもの学習に親の経験を話す機会を与えることにもなり、

家族での対話の機会にも繋がるであろう。子どもの頃の経験は学校を中心とした限られた世界の中で展開されることから、同世代にとっても共通の思い出になりやすいし、子供と大人が話す共通の話題としての親和性も高いといえる。

ただし、気をつけなければならないのは、第１章再現展示の話でも触れたように、懐かしさが前面に出ることで、本来のメッセージが伝わりにくくなるということである。さらに懐かしさが優先され、そういった資料を中心に現代資料の収集を行えば、その時代を適切に伝えるべき資料の収集を行わないことにも繋がりかねない。

第４節　おもちゃ展の事例と特徴

前節において、昔の道具展における平成に近い時代の道具の中心的な資料として、ファミコンを中心としたおもちゃ類があることを確認した。序章でも触れた寺農によるファミコンに関する論考[101]にもあるように、地域博物館においてファミコンを中心とした資料への関心が高まっていることも見て取れる。寺農によれば、ファミコンを中心とするおもちゃを主題とした展示として、「比較的近年に地域の博物館・資料館がファミコンを用いた展覧会を開催した例として、城陽市歴史民俗資料館（京都府）、大野城心のふるさと館（福岡県）、愛荘町立歴史文化博物館（滋賀県）の３つをあげておく」[102]としている。

このうち大野城心のふるさと館と愛荘町立歴史文化博物館の展示について、直接実見したので、その様子について確認したい。あわせて、私設の博物館ではあるが、日本玩具博物館でも平成のおもちゃをテーマにした展示が行われていたので、そちらについても確認をしていきたい。

第１項　おもちゃ展の実際の展示状況

・大野城心のふるさと館　大野城心のふるさと館開館１周年記念特別展「TOYs EXPO　－時代を越えて愛される　おもちゃ・ゲームの世界展－」（2019 年 7 月 20 日～9 月 1 日）【表 12№19】

この展覧会では、昭和 40 年代～平成にかけてのおもちゃを紹介している。

第１章「昭和の玩具とアナログゲーム」では、人生ゲームからツイスター、アメリカンクラッカー、カルタ、モノポリー、野球盤などが紹介されている。

第２章「アーケードゲームの時代」では、向かい合って対戦するタイプのアーケードゲームやスペースインベーダーのアーケードゲームが紹介されている。

第３章「デジタルゲームの創成と発展」では、ファミコン時代に繋がるテレビゲームやゲームウォッチなどの携帯型ゲーム機、そしてファミコン、ディスクシステム、ツインファミコンやドラゴンクエストの紹介がされている。

第４章「昭和から平成へ」では、拳闘士、シルバニアファミリー、ミニ四駆、リカちゃん人形、セーラームーングッズから、PC エンジン、スーパーファミコン、ゲームボーイ、プレイステーションなどが紹介されている。

そして第５章「おもちゃ・ゲームの意外な歴史」ではコリントゲームやテーブルトークRPG などが紹介されている。

また、スペースインベーダーやパックマンなどのアーケードゲームの体験もできるなど、充実した展示となっている。

・愛荘町立歴史文化博物館　令和２年度特別展「玩具伝説　－おもちゃの 60 年史－」（2020

年 7 月 23 日～8 月 30 日）【表 12№30】

大きくはテレビゲーム以前からある人形やミニカー、ボードゲームなどのアナログなおもちゃと、テレビゲーム以降の流れがあり、ここでもまさにその 2 つが展示されている。展示構成は「手遊びおもちゃ史」と「ビデオゲーム史」の 2 つとなっている（写真 92、93）。

手遊びおもちゃ史では、ブリキのおもちゃ、人生ゲーム、野球盤、ミニカー、リカちゃん人形、シルバニアファミリー、ミニ四駆、マジック・ザ・ギャザリング、たまごっち、バトルえんぴつなどが紹介されている。

ビデオゲーム史では、ファミコン以前のゲームウォッチはじめ、ファミコン以降もメガドライブ、PC エンジン、スーファミ、セガサターン、プレステ、ドリキャス、ゲームキューブ、ニンテンドーDS、PSP など各種ゲームが取り揃えられている。

・日本玩具博物館　企画展示「平成おもちゃ文化史」（2019 年 3 月 26 日～2020 年 3 月 10 日）【表 4№8】

あいさつ文には、「子どもたちが手にする玩具は遊びの道具でありながら、その造形、技術やテーマに文化のあり様が反映され、時代の精神が表現されている」[103]とある。また、平成時代のおもちゃは「ゲーム機器の発展が玩具界に大きな変革をもたらし、さまざまな玩具が電子化の影響を受け」[104]たことに加え、「マンガ、アニメの人気に加え、ゲームやテレビ CM に登場するキャラクター玩具も多く誕生しました。その一方で、木製玩具や地球環境に配慮したエコロジー玩具、ボードゲームなどのアナログ玩具などにも注目が集ま」[105]ったことや「平成時代には玩具が子どもだけのものでなくなり、若者や働く世代の癒しの趣味のアイテムとして楽しまれるようになった」[106]と述べている。

展示構成は「昭和 50～60 年代（1975－1988）」「平成初期（1989―1997）」「平成 10 年代（1998－2007）」「平成 20 年代（2008－2018）」となっていて、それぞれの時代で流行したアナログデジタルを問わず、キャラクターもののおもちゃや人形など、どの時代で子ども時代を過ごしても、必ず懐かし思い出があるであろう道具が展示されている。

さすがは玩具博物館だけあって、先に確認した 2 つのおもちゃ展にあった道具はもとより、時代時代ではやったキャラクターもののおもちゃが目を引く展示となっている（写真 94）。

第 2 項　おもちゃ展から見えること

大野城心のふるさと館の展示からは、ファミコンなどのゲーム機について、家庭用に限らずアーケードゲームから紹介することで、家庭用ゲームへと続くおもちゃの変遷をかなりきちんと押さえている印象を受ける。また、愛荘町立歴史文化博物館の展示からは、手遊びおもちゃとビデオゲーム史という分類を行い、おもちゃの変遷を考える上で重要な視点が提示されていた。また、おもちゃを専門とする博物館ではないにもかかわらずこういった企画がなされること自体に、おもちゃに対する関心が高まっていることを感じる。日本玩具博物館はおもちゃの専門博物館であるが、おもちゃの移り変わりから時代の流れを見ていけるということについて展示を通して示している。ただ、いずれの展示からも確認できることは、デジタル化によるファミコンなどのゲームの存在がおもちゃの世界でも大きな位置を占めていくことである。平成を語る際の欠くことのできない要素であることは間違いない。

一方で気になることは、昔の道具展にも通じることだが、愛荘町立歴史文化博物館で展

示されていた多くの道具が個人蔵となっていることである。このことは、家庭用ゲーム機などが展示されることは多くなっているものの、まだまだ多くの博物館で博物館資料とはなっていない可能性を示している。

印象的な資料としては、愛荘町立歴史文化博物館の「遊びの記録」と題したコーナーにあった手書きの攻略メモであった。展示ではあるゲームのダンジョンの様子を手書きでメモしたものが展示されていたが、「おもちゃの思い出を書こう」という思い出掲示板には関連するように、ドラゴンクエストもⅠ、Ⅱの頃の復活の呪文に関する思い出が掲示されていた[107]。この他にもおもちゃとの思い出は多く寄せられており、子どもの頃の遊びに関する思い出が鮮明に残っていることや、展示を通して懐かしい思い出を語りだしたくなることを示す良い事例である。

寺農が触れていたように、近年のおもちゃ展に対する流れを作ったのは城陽市歴史民俗資料館である[108]。しかし、おもちゃをふりかえる展示が、博物館でも一つの大きなブームを生み出していることは、ファミコン以降の家庭用ゲーム機を実際に体験してきた人々が年齢を重ね、社会の中心をなす世代になってきたこととも関係しているのではないだろうか。

第５節　平成展の事例と特徴

第 2 章の研究史で触れたように、平成が終わり令和という新しい時代を迎えたことで、平成をふりかえる展示が行われていた。筆者が実見した範囲では 10 館の展示を確認した（表 4）。想像していいたよりは数が少ない印象を受けるが、これらの展示では平成をふりかえった際にどのように平成を展示したのか具体的な事例から考えてみたい。

まずは展示の傾向であるが、地域博物館では平成の道具を取り扱う事例と地域の歴史との関係で展示する事例、さらに企業系の展示では、道具を中心とするもの、ポスターによりふりかえるもの、新聞の号外でふりかえるものが存在した。少し具体的に確認しておきたい。

第１項　平成展の実際の展示状況

・横須賀市自然・人文博物館　トピック展示「さよなら平成展」（2019 年 1 月 12 日～5 月 6 日）【表 4№.4】

展示ケース３つちょっとという小さな展示ではあるが、平成元年 1 月 8 日（平成元年初日）の新聞と、いくつかの道具が紹介されている。

平成を彩ったキャラクターたちとして、いくつかの人形と、カードダスなどのカード類、シングル CD では 8mm サイズのもの、また、パソコンや携帯電話、たまごっち、windows95、ルーズソックス等の道具と、それらにあわせて沖縄サミットの話や香港返還、ノストラダムスの大予言の本などが紹介されていた（写真 95）。

・生駒ふるさとミュージアム　令和元年度夏季企画展「さよなら平成」（2019 年 7 月 28 日～9 月 23 日）【表 4№.10】

あいさつ文によると、「平成という時代に、私たちの身近にあったものを紹介します」[109]とのことで、主な展示品は、切手やハガキ、紙幣、トレーディングカードゲーム、電話、テレビ、ビデオ、カセット、CD、MD、ワープロ、パソコン、スーファミ、プレステ、ゲームボーイなどとなっていた（写真 96）。

いくつかのテーマを設定しており、時代を表す道具であることが伝わってくる。例えば、切手は消費税の話とも関係するし、アナログからデジタルへの変化などは時代の変化を感じさせる。

・高知県立歴史民俗資料館　企画展「昭和から平成へ　－くらしのうつりかわり－」（2019年7月19日～9月16日）【表4№9】

展示は主に3部構成となっていて、第1部は「くらしの変化」、第2部は「サブカルチャーにみる昭和・平成」、第3部は「報道写真にみる昭和・平成の高知」となっており、平成の道具については第2部に見られる。

第2部は、娯楽の中心となったメディアの変遷を中心とした展示で、昭和から平成という最後のコーナーでは、ジブリ作品の映画ポスターが紹介されていた[110]。

また、流れとは別にあったおもちゃには、シルバニアファミリー、ルービックキューブ、ガンプラの他、電卓、ワープロ、電子辞書、ファミコン、スーパーファミコン、ゲームボーイカラー、ゲームボーイアドバンス、ニンテンドーDSLite等が紹介されていた。

・八千代市立郷土博物館　令和元年度「くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～」（2019年12月14日～2020年2月16日）【表4№12】

あいさつ文では、「平成から令和へ変わった節目である年であることから、平成期のくらしや八千代市の出来事を紹介しています。これまでのあゆみを振り返り、新たな時代を考える機会になれば幸いです」[111]とある。

展示構成としては、「Ⅰ　昭和のくらし」「Ⅱ　平成のくらし」「Ⅲ　平成の八千代」となっていて、平成の話はⅡとⅢとなっている。

「Ⅱ　平成のくらし」では、「情報技術の発達」「平成のあんなもの・こんなもの」に大きく分けていて、前半がワープロ、パソコン、電話、ゲーム機などとなっていて、これらの道具の半分くらいは例年八千代市郷土博物館では見ることができるのも特徴であるが、それらを改めて「情報技術の発達」としてまとめて、平成の特徴として示している（写真97）。それらに加え、MDプレイヤー、フロッピーディスク、2000円札や旧札等が新たに追加されていた。

「Ⅲ　平成の八千代」は、地図や市の変遷、国体の話、市内高校生の活躍として甲子園やサッカー全国大会の話等となっており、スポーツに強い高校があることで、それもまた展示の対象になるということを示していた。

・狭山市博物館　「わがまち狭山の平成展　ーできごとに見る30年の軌跡ー」（2018年12月19日～2019年2月17日）【表4№1】

こちらの展示は、基本的には年表形式の展示で、年表に対応するように世界の動きと狭山市の動き、さらにそれぞれの時代に関連する道具が展示されている。

展示された内容を分類すると、ゲームボーイ、スーパーファミコン、プレイステーションなどのゲーム関連の道具、ちびまる子ちゃんやドラゴンボールといった漫画の話とタイタニック、アナと雪の女王などの映画関係、ＭＤ、ＤＶＤプレイヤー、デジカメ、スマートフォンなどの音楽、映像、写真、電話などのデジタル機器が紹介されていた。

・三郷市立郷土資料館　令和元年度三郷市立郷土資料館企画展「さかのぼり三郷－平成の三郷を振り返る－」（2019年12月14日～2020年3月1日）【表4№11】

展示構成は「昭和から平成へ」という年表、「まちの発展と変化」、「皆がにぎわうまちへ

～三郷の魅力発信～」となっている。平成になる前、昭和 45 年に日本住宅公団によるみさと団地の建設が始まり、昭和 60 年にその脇に武蔵野線の新三郷駅が開設、平成に入り団地建設に関連する小学校の開校、統廃合、様々な公共施設の開設、さらに平成 17 年につくばエクスプレスが開通するなど、平成に入っても市は発展・変化を遂げていて、それらの市の発展の様子を伝える展示となっていた。

・中之条町歴史と民俗の博物館　中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」第 109 回企画展「平成展 1989→2019　30 年の記憶と足跡」（2019 年 4 月 27 日～6 月 16 日）【表 4№.5】

中之条町は、平成といえばこの人ともいえる小渕恵三元首相の出身地だそうで、平成展の始まりは平成を発表した時の小渕さんの写真から始まる（写真 98）。地域が生んだ偉人としてそのまま小渕さんが首相になった話へと続く。

さらに地域との関係で、合併の話や中之条ビエンナーレの話、朝ドラのロケ地になった話などがあり、できごとについては、地元の人が描いた絵手紙とともにサッカーワールドカップやオリンピックの話が語られていた。

平成を語る道具ではポケベル、携帯電話、テレホンカードなどが確認できた。

・港区立郷土歴史館　港区立郷土歴史館企画展「平成と港区」（2019 年 2 月 16 日～5 月 26 日）【表 4№.7】

構成は「平成の幕開け」「皇室と港区」「平成期の社会」「平成期のモノ」「区内の再開発」「平成期の港区の交通」「新交通ゆりかもめの関係資料」となっている。

「皇室と港区」では区内に赤坂御用地、高輪皇族邸があることを踏まえ、今上天皇が皇太子時代の御成婚の話や区内への行幸啓の写真がある。

「平成期の社会」では、バブル期のディスコ文化を象徴するマハラジャとジュリアナ東京が区内にあったことからそれらの関連グッズや写真と、サッカーＪリーグ開幕、サッカーワールドカップ日韓大会、東京オリンピック誘致の話が紹介される。

「平成期のモノ」では、ワープロとフロッピーディスク、携帯電話、コンパクトデジカメ、MD ウォークマンと MD、シングル CD、ノートパソコン、アイボ、ゲームボーイ、スーパーファミコン、たまごっち、テレビデオが紹介される。

「区内の再開発」では、汐留貨物駅が汐留シオサイトになった話と、防衛庁跡地が東京ミッドタウンに変わった話がされる。

「平成期の港区の交通」では、レインボーブリッジの開通、新交通ゆりかもめの開業、都営地下鉄大江戸線の開通、環状 2 号線の開通などが紹介されていた。

・パナソニックミュージアム　ものづくりイズム館企画展「THE "平成 KADEN"」（2019 年 3 月 7 日～4 月 20 日）【表 4№.2】

こちらは、平成の初期と現代の道具が比較されて展示されていた。これらの道具を見ると、まさに、この平成という時代において、生活に密着する道具の変化が大きかったことが確認できる。

平成初期の道具は、洗濯機、乾燥機、炊飯器、電子レンジ、照明、エアコン、掃除機、テレビ、ビデオデッキ、固定電話、携帯電話、CD ラジカセ、トランシーバー、ドライヤー、子ども向け家電が並んでいる。また、現代の道具は、インターホン、ななめドラム洗濯乾燥機、お掃除ロボット（自動掃除機）、衣類スチーマー（ハンガーにかけたまま使えるアイロン）、スチームオーブンレンジ、ホームベーカリー、IH ジャー炊飯器、LED シーリング

ライト、エアコン、4K テレビファックス、ブルーレイディスクレコーダー、デジカメ、移動できる持ち運び型液晶テレビ、美顔器、ワイヤレススピーカー、ドライヤー等となっている（写真 99）。

さらに平成が求めた家電としてテーマを 5 つ設定している。「女性の社会進出」「エコブーム」「超高齢社会」「健康ブーム」「デジタル化社会」である。これらは、道具の変化を考える際の重要な視点といえる。

・CCGA 現代グラフィックアートセンター　「ヘイセイ・グラフィックス」（2019 年 3 月 1 日～6 月 9 日）【表 4№6】

こちらは平成の 30 年間を所蔵するポスターからふりかえるもので、グラフィックデザインがどのように変化に寄り添い、どのように時代に影響を与えてきたかを検証するとあいさつにはある[112]。

ポスターはモノやできごとを象徴的に伝えるように作られているので、それを通して商品やできごと、それらを含む時代を感じることのできる資料と考える。道具そのものでなくとも時代を象徴するポスターなどの資料は印象に残りやすいことから、人々の記憶にも繋がりやすい資料といえよう。

・あべのハルカス近鉄本店　「読売新聞号外報道でふりかえる　平成プレイバック展」（2019 年 4 月 18 日～4 月 29 日）【表 4№3】

号外は、朝刊と夕刊を制作する合間のタイミングに少しでも早く伝えるべき大ニュースが起きたときに配布するもので、新聞本誌に盛り込んだ方が速い場合には発行されない場合もあるとともに、後から見れば歴史に埋もれるようなニュースでも当時圧倒的に注目を集める話題は号外が出たりするとのこと[113]。

号外で取り上げている内容からは、いくつかの傾向が見て取れる。①皇族関係、②国内の大きな事件や災害、話題などのできごと、③国際的なできごと、④オリンピックの金メダル、⑤スポーツ関係である（写真 100）。どんな話題に人々の関心があるのか、できごとから平成を探る時の大きな参考になる[114]。

また、できごとを展示しようとするにあたって、モノでそのできごとを伝えることが困難な場合に、新聞を資料として展示することの有効性が強く示されている。

第 2 項　平成展から見えること

これまで確認してきたように、地域博物館での事例では、横須賀市自然人文博物館、生駒ふるさとミュージアムではモノを中心とした展示を行っていた。モノを中心とした事例では、キャラクターやＣＤ、おもちゃなどから平成の流行などを確認でき、その時代を知っている世代にとっては懐かしさを感じるが、今の大学生くらいを意識するなら、しっかりとした解説が必要になることも感じた。

昔の道具展の中で平成を取り扱う事例として、高知県立歴史民俗資料館、八千代市立郷土博物館がある。八千代市立郷土博物館では、道具だけでなく地域の歴史との関係についても展示を行っている。昔の道具展との関係では、令和になった直後ということで、平成の時代についても触れやすい状況があったと考える。

地域の歴史との関係での展示は、狭山市博物館、三郷市立郷土資料館では時系列を中心とした展示が、中之条町歴史と民俗の博物館、港区立郷土歴史館ではテーマ別に地域の歴史との関係を含めて展示を行っていた。

狭山市博物館の年表形式の展示では、年代順に様々な種類の道具が分類されることなく示されることになり、道具の変化や生活の変化といったものはわかりにくくなっている。この展示を見学するまでは、使用経験のある道具を並べれば、懐かしさは想起されるのかと考えていたが、道具や生活の変化といった部分が伝わることが懐かしさに繋がるということを確認するに至った。また、三郷市立郷土資料館の展示は、市史の平成部分をモノで実現させた形となっており、どうしても行政色が強くなっており、市民の様子はあまり見えてこない。中之条町歴史と民俗の博物館のように、関係する人物を取り上げる事例の他、港区立郷土歴史館のように地域の変化を伝えていても、港区が文化の中心であるがゆえに、その変化が平成を象徴するもののようにも感じることができるなど、平成を取り上げるといっても様々な視点があることが確認できた。

企業系の博物館の事例は、パナソニックミュージアムでは、自社製品を通した平成初期と平成 31 年での道具の変化を伝えることで生活の変化が感じられたし、ＣＣＧＡ現代グラフィックアートセンターによる所蔵ポスターによるふりかえる展示では、いわゆる生活の道具ともできごととも違うポスターの持つ可能性を確認できた。このことは、第 2 章で触れた音楽や映像が持つ懐かしい記憶との関係性が窺える。そしてあべのハルカス近鉄本店で行われた読売新聞社主催の新聞の号外でできごとをふりかえる展示では、平成のできごとのうち取り上げるべきできごとは何かを示唆する内容となっていた。

平成をふりかえる展示を確認してきたが、事例数に限りがあることもあり、具体的に共通する特徴までは見出すことはできなかった。一方で、いずれの展示も筆者にとっては経験したことのある時代に関する展示であったことから、一定の懐かしさを感じることができたし、現に展示を見ている中で懐かしさについて発言されている人々の声も聞くことができ、これらの展示が懐かしい思い出を想起させる展示となっていることは間違いない。

ただはっきりとしていることは、これを展示すれば平成を象徴できるというものはなかなか存在せず、平成を象徴しようとすると小渕さんによる元号発表がある意味で一番わかりやすい資料のようにすら感じる。今回確認した平成展は、あくまで平成をふりかえることが目的であるから、意識的に平成をふりかえろうとするとこういうことになるということを示しているのかもしれない。それでも平成を展示する際の具体的な視点は確認することができた。

第 6 節　企画展示における現代資料を用いた展示に関する考察

これまで企画展示における現代資料の取り扱い状況を確認してきた。その中から見えてきたいくつかの課題について確認したい。

まず、昭和 30 年代以降に起きた道具の大きな変化を考えるなら、おそらくはデジタル化の前後を示す道具というものが一つのポイントになると考える。その理由は、電気を用いた道具を容易に持ち出せるようになった携帯性の向上が挙げられる。もちろんウォークマンなどはすでに登場していたが、デジタル化によって道具は飛躍的にその進化を遂げたといえる。デジタルカメラやスマートフォンなどがそれである。道具の変遷という視点で考える時、電化以降の大きな変化といえるだろう。

このような道具の変化という視点で捉えるなら、平成という時代は大きな変化を遂げた時代といえる。最大の変化はデジタル化とポータブル化である。昭和 30 年代以降の道具

が大きく変わらない印象を受けるのは、あくまでもアナログの範囲内で変化を遂げてきたからであろう。それが平成に入り、急速にデジタル化が進んだ[115]。デジタル化によって生活は一変した。電車に乗ればほとんどの人がスマートフォンに目をやっている時代など、平成に入った頃でさえも想像できなかった社会である。

そう考えると、こういった道具の変化が起きたのはまさに平成の時期ということになる。ただし、気をつけないとたまたま道具の変化を伝えようとすると平成の再現のようになる可能性がある。昭和や平成という時代区分は 1 つの大きな区切りではあるが、昭和から平成になったからということで社会が大きく変わるわけではない。ただ社会の大きな流れを考える際に、少なくとも日本においては元号によって時代を区切って捉えようとする傾向があることは間違いない。その元号を単位とした時代をどう捉えるか、それが展示にも反映されているのかもしれない。

道具の変化を取っても、たまたま平成という期間にデジタル化やポータブル化といった大きな変化は見られたが、西暦でいえば 2000 年前後ということになり、平成という区切りを必要とはしていない。平成という時代をそういう道具の変化の時代と捉えるならば、平成の道具は歴史展示というよりは、道具という視点から民俗分野で取り扱われる可能性が高い。

そして、生活の変化という視点で見た時には、家電製品導入時ほどの大きな変化とまではいえないだろう。そう考えると、平成の時代が常設展示として再現される可能性は低いと考える。平成の頃の道具というのは、昔の道具展のような道具の移りかわりを伝える展示の中でこそ、その持つ意味を強く発揮できるのではないだろうか。

その中でも特にファミコンからはじまる家庭用ゲーム機は、時代を象徴するモノとして存在する。それらには多くの場合比較的若い世代にとって懐かしい道具である。昭和 30 年代の道具は高齢者にとって懐かしさを生み出すが、ファミコンから始まる家庭用ゲーム機などの平成の道具[116]は、令和が始まったばかりの現在においては、まだまだ多くの世代の懐かしい思い出に繋がるであろう。また、これまで確認してきた事例から考えると、懐かしさは子どもの頃の記憶と繋がっていることが多い。

昔の道具展でファミコンから始まる家庭用ゲーム機の展示が積極的に行われているように感じるのは、筆者がファミコン世代（現在の 40 代前後）にあたることから目につくという側面もあるが、一方で筆者と同世代のファミコン世代の職員が展示企画の中心を担う立場になってきていることとも関係する可能性がある。先述したように、愛荘町立歴史文化博物館で展示されていた多くのファミコンなどの道具が個人蔵であったことは、おそらくは学芸員個人やその関係者の私物かと思われるが、そこには実際の使用経験が反映されているとも考えられる。

ファミコンに関連する展示では、どのようなソフトが展示されているのかということも、1 つの見どころである。誰もが遊んだことのある懐かしいソフトや社会現象になったソフトが展示されていれば、なかなかいいラインナップを揃えているなと来館者に思わせることになり、やはり展示の企画者がそういったことを心得ていることを示すことになる。重ねて、他に展示されるおもちゃでも、日本玩具博物館のように専門博物館であれば多くの資料を収集し、まとめて展示できるかもしれないが、地域博物館の企画展示などでは展示できる種類も限られており、その時代に流行したモノを意識的に選別することになるので、

ファミコン以外のモノにも懐かしさのあふれる資料が並ぶことになる。

福生市郷土資料室でも「福生市郷土資料室のコレクション展」において、おもちゃや学用品などを展示する「子どもの道具」というコーナーを設置した。その際、筆者が所有しているキャラクターグッズなどを展示したが、やはり同世代の方があまりの懐かしさに驚きの声を挙げている場面に居合わせた。一方で、少し上の世代の方からは世代間ギャップを感じるという声も聴かれた。子ども時代の思い出に繋がるおもちゃやキャラクターグッズは、数年単位くらいで移り変わりもあることから、ある意味社会の変化を映し出す鏡にもなることがわかる。

いずれにしても、子ども時代の経験は学校というシステムや習い事といった限られた世界の中で生きていることもあり、共通する経験を持っていることが多いので、子どもの頃に使った道具は、子ども時代を経験した大人たちにとって懐かしい思い出がよみがえる道具となることが見て取れる。懐かしさがあるがゆえに、展示室において来館者同士で懐かしい思い出話で盛り上がることや、時には思い出掲示板などに思い出を書いていく人も多くいる。思い出掲示板では、それらの思い出に触れることで関連する懐かしい思い出が芋づる式に引き出され、新たな思い出の掲示に繋がることもある。そういう意味では、思い出掲示板を通じた来館者同士の対話がそこでは生まれていると考える。

このように昭和 30 年代以降の道具には人々の記憶を呼び覚ます効果があることが理解できる。さらには、昔の道具展に自分が実際に使用したことのある道具が展示されている場合、そのこと自体に驚きを持つこともこれまでもニュースなどでとりあげられ[117]、これまで博物館には自分が生まれる前のことを展示しているとばかり思っていた大人たちが、展示される側の立場になっていることに初めて気づく機会が昔の道具展ということもできるかと思う。こういったことからも、使用経験のある道具は、展示を見る側と展示される側の関係に一石を投じる展示となっていることは疑う余地がないだろう。

第３章　地域博物館における回想法の整理とその応用

近年の博物館での取り組みの一つに、過去に使用した経験のある道具を用いて懐かしい思い出を語り合う「回想法」への取り組みが存在する。回想法とは、懐かしい思い出を語ることで脳を活性化し認知症予防にも役立つという、1963 年にアメリカの精神科医であるロバート・N・バトラーが提唱した心理療法のことである[118]。博物館では生活に関連する道具の収集や展示を行っており、博物館が所蔵するそれらの道具を用いて、高齢者に懐かしい思い出を語るきっかけを提供し、認知症予防に役立ててもらおうというのが基本的な考え方である。

博物館における回想法への取り組みとしては、現在北名古屋市となっている旧師勝町時代からの取り組みが有名である。北名古屋市においては、北名古屋市歴史民俗資料館で所蔵する資料を用いた回想法を通し、認知症予防に役立てるとともに、地域活動への入り口を提供する「地域回想法」を提唱し、実践がなされている。北名古屋市の取り組みは第 2 章で詳細を紹介するが、北名古屋市歴史民俗資料館は昭和日常博物館を名乗り、常設展示では郷土史の展示を行わずに、昭和 30 年代の日常生活に特化した展示を行っており、その展示と相まって、地域回想法は多くの成果を上げている。

北名古屋市歴史民俗資料館における博物館と回想法の関係をごく簡単に整理すると、大きく 2 点の特徴を挙げることができる。一つ目は、認知症予防に役立つ回想法を行うにあたって、博物館が所蔵する資料を提供することである。これは、地域回想法を中心となって行う回想法センターに所蔵資料を貸し出し、回想法センターが主体となってグループによる回想法を実践する際、実物資料を見ながら懐かしい思い出を語ることができるようにしていることである。

二つ目は、博物館における展示が、懐かしさを生み出す工夫にあふれているということである。よくある地域博物館では、地域の歴史を紹介するため、縄文時代から江戸時代を経て太平洋戦争前後までの時代を取り上げるのに対し、北名古屋市歴史民俗資料館の展示では昭和 30 年代のみに時代を絞り、道具の紹介にとどまらず、街並みの再現や店舗の再現などを行うことで、当時の雰囲気まで展示室において再現している。

この二つの特徴は、博物館と回想法の関係を考える際に重要な視点と考える。それは回想法を実践する場合に実物資料が果たす役割が大きいことから、回想法を行う主体が福祉部門であろうと博物館であろうと、博物館資料を用いることで効果を上げているという事実であり、また博物館の展示を通して自然と懐かしい思い出がよみがえってくるということである。

本章では、これらの視点を踏まえ、北名古屋市の事例を確認したうえで、福祉施設などで行う活動に対し博物館資料を貸し出す事例、博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法の事例、さらに回想法の視点を提示した博物館展示の事例にそれぞれ分けて、博物館がかかわる回想法の特徴や課題について整理を行い、回想法を応用した展示の可能性について確認していきたい。

第１節　回想法の基本と研究史

第１項　回想法の基本

先述した通り、回想法はバトラーによって提唱された心理療法である。

バトラーは、否定的に捉えられがちな高齢者の過去の回想を後ろ向きな行為ではなく、むしろ自然で、老年期を健やかにすごすための積極的な意味をもつものとして見出し、高齢になり、死が近づくにつれて過去を回想する頻度が高まるのは、自分の歩んだ人生を振り返り、その意味を模索しようとする自然で普遍的な過程であると考えた[119]。こうした高齢者の回想に対して聞き手が共感的、受容的、支持的に係わることで、人生の再評価やアイデンティティの強化、Quality of life（人生の満足度・生活の質）の向上、対人関係の形成をはかろうとする援助方法が回想法である[120]。

この回想法について、福祉の場面で従来から用いられていたのは、治療的回想法と呼ばれるもので、認知症予防を目的とした活動である。多くの場合は、グループ回想法といい、数名のグループに対して、リーダーなどが思い出をよみがえらせるきっかけとなる道具や質問を提示することで、グループ全体の思い出話が盛り上がるようにしながら、脳の活性化を図るという活動である。この活動は、通常一回限りのものではなく、例えば全８回といった形でプログラムを組み、それぞれの回ごとにテーマを設定して行われる。

博物館がかかわって行う回想法は、この認知症予防を目的とした回想法を基に開発された、北名古屋市での活動が先行事例となっている。北名古屋市ではこの活動を「地域回想法」と名付けている。

師勝町（現北名古屋市）で提唱された地域回想法は、回想法の一手法で、地域で行う回想法であり、回想をきっかけとして地域活動を始めるサポートをするものである。認知症の予防効果ももちろんあるが、認知症予防に重きを置いていない、あくまでグループの仲間意識の醸成、話のきっかけ作りを提供することに回想法を用いている活動である[121]。

その活動にあたって、北名古屋市歴史民俗資料館はそういった活動を支援する存在として貸出事業に協力する他、回想を促す実践の場として機能している。

なお、地域回想法については、来島修志によって次のように定義されている。

「地域回想法とは、回想法を通じて誰もが気軽に身近な地域で、その社会資源を大いに活用し、人の絆を育み地域のネットワークを広げ、いきいきとした『町づくり』に貢献する社会参加を目指すものである。とくに地域で暮らす高齢者にとっては介護予防を目的として、自分の人生を振り返り肯定的に捉えることによって、健やかで豊かな人生を歩みつづけていただくことを支援する手段の一つである。また同時に地域のもつ潜在している主体的な力（エンパワメント）を引き出し高めていくことを支援するものである」[122]。

一方で、他の博物館での活動として取り上げられている回想法は、北名古屋市での事例を参考にしてはいるが、博物館職員が認知症予防を目的として行う活動のことを「地域回想法」と呼んでいることが多い[123]。

北名古屋市で行っている地域回想法は、認知症予防の効果はあるものの、認知症予防そのものを目的としていないのだが、多くの博物館では博物館で認知症予防を行うことと捉えられており、そこには認識のずれが生じている。

本稿では、こういった認識のずれが生じている現状も踏まえ、北名古屋市で行われている活動を「地域回想法」と呼び、その他の博物館で行われている活動は「博物館がかかわる回想法」と呼ぶこととしたい。

第２項　研究史から見る課題

ここで博物館と回想法の関係について触れているこれまでの研究史を整理しておきたい。博物館関係者による研究では、松戸市立博物館博の青木俊也は、松戸市立博物館で昭和 30 年代の団地を再現している立場から、昭和 30 年代の再現展示について様々な角度から考察を行っており、それらの考察の 1 つとして、北名古屋市歴史民俗資料館で行っている地域回想法での活用等を取り上げた研究を行っている[124]。また、北名古屋市歴史民俗資料館の市橋芳則は、北名古屋市での地域回想法への取り組みの他、北名古屋市歴史民俗資料館が昭和に着目した経緯、地域回想法での具体的な取り組みについて詳細に報告を行っている[125]。さらに氷見市立博物館での活動については小谷超により報告されている[126]。

民具学の分野でも、民具を回想法に活用することがこれからの博物館活動の道を開くという立場に立った考察が岩崎竹彦らを中心に進められている[127]。その他関連する民俗学の分野で回想法との関係について述べたものには、介護現場での対応を通して回想法の取り組みに疑問を呈し「介護民俗学」を提唱する六車由実[128]や、回想法に懐疑的ながらも東日本大震災後の文化財レスキュー活動を通して、民俗学の聞き書きを行う活動が高齢者の回想に繋がることを経験的に示した加藤幸治の事例などが確認できる[129]。

回想法自体は、博物館で所蔵する資料を活かして高齢者の認知症予防に役立てることができるという面で、大変意義のある活動である。それに、回想法に取り組むことで、博物館の存在を社会的に価値あるものとして認識してもらえるという点でも貢献し得る活動と考えることができる。

しかし、博物館はいうまでもなく教育施設である。にもかかわらず、本来の博物館活動が実は福祉分野にも役立つというのなら話はわかるが、管見の限り、博物館は認知症予防のために回想法に取り組むべきだという方向ばかりで、これでは博物館は福祉のための施設と化してしまうのではないかとさえ感じられる。

仮に、博物館が福祉のための施設としての道を選ぶにしても、これまで語られている博物館がかかわる回想法は、現在の高齢者を対象としたものであって、そのため、回想法に使われる道具も昭和 30 年代に近い時代のものばかりが取り上げられ、そこに将来の高齢者（例えば筆者が高齢者となるのは約 30 年後）のために、今まさに使われているような道具を集めようという声は聞かれない。

その一方で、博物館の本来の活動では、小学生の学習支援を目的とした「昔の道具展」で確認できるように、各博物館では平成に入った頃の道具も収蔵し活用されている。そういう意味では、将来にわたって回想法を実施していくためにも、現在進行形で使われている道具の収集にも努めるべきだという論調も必要ではないかと筆者は考える。

また、博物館と回想法の関係を論じる中では、多くの場合がその目的を認知症予防と捉えており、本家である北名古屋市における回想法をきっかけとした地域活動を始めるためのサポートとしての取り組みと、認知症予防を目的とする博物館がかかわる回想法との間に、目的に対する認識のズレが生じている点も見逃すことができない。

博物館がかかわる回想法にはこういった課題もあるが、一方で大きな可能性も秘めている。六車が提唱する「介護民俗学」で示された視点もその一つである。

介護民俗学では、介護施設において行う民俗学の手法による聞き書きが、施設の利用者と職員の介護される側と介護する側という関係に固定されてしまうところを、語る側と聞く側という新しい関係を生み出すことになり、それまで上位に立っていた介護する側の若

い人が今度は話を聞かせてもらうことで、話をするお年寄りが上位に立つという立場の逆転が生まれるとしている[130]。

博物館も一方的に来館者に対して教える立場に立っているが、思い出を語る場を提供することで、博物館が来館者に何かを教えるということではなく、来館者が同伴者に何かを伝えるという新しい関係を築くきっかけにできるのではないかと考える。

もう一つの視点は、加藤が行った東日本大震災後の博物館的な活動として老人ホームで高齢者に対して民具の聞き書きを行っていた際に、施設の方から、高齢者が自分の人生に関心を持ってもらうことは、誇りを取り戻すことだと語られたことが紹介されている[131]。筆者はそれを回想法の手法を用いることで、その人を主役にすることができるということだと解釈をした。

これらの事例から博物館と回想法の関係を改めて考えると、回想法の視点を取り入れた博物館活動を行うことで、認知症予防ではなく、誰もが主人公となって懐かしい思い出を語ることのできる機会を創出することができるのではないかと考える。

こういった視点を踏まえ、博物館がかかわる回想法の現状を整理し、それらの特徴を生かし、博物館に来館する誰もが主人公となることができるような活動の可能性を探ってみたい。

第２節　北名古屋市における地域回想法

第１項　地域回想法の取り組み

まず、博物館と回想法との関わりにおける先行事例として、北名古屋市での事例を確認したい。北名古屋市での回想法の取り組みは「地域回想法」と名付けられ、福祉部門を中心に北名古屋市歴史民俗資料館との連携で行われているのが特徴である。

地域回想法では、グループ回想法によって、介護予防を視野に入れながら、回想法を楽しむだけでなく、回想法を通じて作られた参加者同士の絆を原動力として、そこから社会参加に展開していくよう導いていく仕掛けとして「回想法スクール」を設定している[132]。全８回のスクールを終えると、回想法スクール卒業生の継続的な活動組織である「いきいき隊」という組織へ移行し、一緒にグループ回想法を行った仲間との自主活動を行うとともに、それまでの卒業生と一緒になって行う活動や、子どもたちとの交流を行う活動など、様々な活動で活躍する機会が設けられているというのが特徴となっている[133]。

こういった北名古屋市における地域回想法の中心をなす施設は、北名古屋市回想法センターで、市の福祉部門との協働事業としてＮＰＯ法人がその運営を行っている[134]。室内は、片面に教室を再現した黒板が設置され（写真 101)、もう半分は皆で丸くなって話し合いができるようになっており（写真 102)、奥にある倉庫には多くの懐かしい道具が収蔵され、いつでも自由に触れることができるようになっている（写真 103)。

基本的にこれらの道具は北名古屋市歴史民俗資料館の資料で、それをＮＰＯ法人で借りている扱いになっている。また、収蔵庫の奥には貸出用の回想法キットが積んであり、これらの貸し出しもＮＰＯ法人が窓口となって行っている。

第２項　北名古屋市歴史民俗資料館との関係

回想法センターの活動に協力する形を取っているのが北名古屋市歴史民俗資料館である。北名古屋市歴史民俗資料館では、昭和時代を伝えるさまざまな日用品や電化製品などが捨

てられていく現状を踏まえ、昭和時代の資料の大切さを伝え残していくことが急務と考え、館の方針としてこれらの資料の収集活動を行っていた[135]。そういった活動が基となり、地域回想法との連携がうまく行えたともいえる。

北名古屋市歴史民俗資料館は現在、来館することで実際に回想法を体験する場としても機能している。展示室全体が昭和 30 年代に特化した展示となっており、何か新しいことを学ぶ場というよりも、知っていることを懐かしみに行く場として機能している全国でも珍しい博物館である。

エレベーターを降りると、目の前に 3 軒の店舗が再現されている（写真 104）。再現度の高さにいきなり驚かされるとともに昭和 30 年代の世界に引き込まれる。展示室を進むと、昭和 30 年代のお茶の間の再現（写真 105）、それ以前に建てられた住宅における昭和 30 年代における利用状況の再現、別の展示室には街並みの様子が再現されている。再現展示に限らず、全館どこを見ても昭和 30 年代の道具であふれている（写真 106）。

また、「お出かけ回想法」として、高齢者施設の人たちの見学を推進している。受付の方の話によると、高齢者にとって懐かしいモノがあふれていることから、来館者が笑顔になり生き生きと話しだしたりするとのことであるが[136]、そうなることもうなずける展示内容となっている。

北名古屋市での取り組み事例からわかることは、あくまでも地域回想法の主体は福祉部門にあるということである。その活動をより充実したものとするために博物館との連携がしっかりとできていて、博物館活動もまた地域回想法の一部を担っている状況にある。そして、北名古屋市歴史民俗資料館の展示を通して懐かしい思い出がよみがえるとともに、そういったことを語りだしたくなる装置として展示全体が機能しているという点は、他館には見られない最大の特徴といえる。

第 3 節　博物館がかかわる回想法

これまで北名古屋市での事例を確認してきたが、他の博物館で行っている回想法と関係のある活動についても確認してみたい。

博物館が回想法にどういった形でかかわるかという視点で整理すると、①福祉施設などで行う活動に対し、博物館資料を貸し出すもの、②博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法、③回想法の視点を提示した博物館展示の 3 つに分類することができる。これらのうち①と②はグループ回想法に博物館がかかわる事例であり、③は回想法を展示に反映させた事例といえる。ここではまず、①と②のグループ回想法に博物館がかかわっている具体的な事例を確認したい。

第 1 項　福祉施設などで行う活動に対し、博物館資料を貸し出す事例

まずは、回想法のために貸出キットを用意している事例から確認したい。第 2 節で取り上げた北名古屋市では、回想法センターで貸出用の「回想法キット」として「スターターキット」と「テーマ別キット」を用意している[137]。また、北名古屋市にならい回想法に積極的に取り組んでいる氷見市立博物館でも、介護福祉施設などに民具セットの貸し出しを行っている[138]。

次に、回想法用に介護福祉施設などに貸し出すだけでなく、同じキットを小学校の学習対応としても貸し出している事例を確認したい。

愛媛県歴史文化博物館では、「れきハコ」という貸出教材キットを用意しており、その中の１つに「昔のくらしパック－衣食住の道具」というものが存在する[139]。宮崎県総合博物館では「昔の道具貸出キット（民俗）」というものを用意している[140]。滋賀県の東近江市でも、東近江市東近江市能登川博物館物館で「回想法セット」の貸し出しを行っている[141]。

このように、回想法のために貸出キットを用意している事例と、小学校での学習と回想法とのどちらにも対応できる貸出キットを用意している事例とが存在することが確認できる。回想法に役立つ道具がそのまま小学校で学ぶ「昔の道具調べ」の学習で使用する道具と重なるのは納得のいくものであり、回想法のためだけに貸出キットを用意するよりも学校での利用も想定した方が汎用性は高まる。

グループ回想法を行おうという時には、実物資料があることで高齢者の記憶に直接働きかけることができることから、博物館で所蔵する資料を借りられることはグループ回想法を行おうとしている福祉施設などにとって、高い効果を得ることに繋がることは間違いない。

ただし、これらの活動においてグループ回想法を行う主体は、福祉施設などである。そのため、グループ回想法を行える人材が福祉施設などにいることが前提となっている。そういう面でのハードルがあることからか、北名古屋市回想法センターではグループ回想法のやり方や貸出キットの使い方をレクチャーしたＤＶＤを「スターターキット」の中に同梱するといった配慮も確認できる[142]。

第２項　博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法

博物館の活動として、博物館職員が博物館資料を用いて回想法の実践を行う事例が存在する。これには大きく２つのパターンがある。一つは博物館職員が博物館資料を持って福祉施設などを訪問して実施するグループ回想法、もう一つは福祉施設などから高齢者が博物館を訪問して実施するグループ回想法である。後者をもう少し細かく見ると、博物館の中でも会議室などで行われる場合と、展示室で行われる場合とがある。

いずれにしても博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法は、福祉施設などにグループ回想法の実践を行える人材がいない場合に大きな効果を生むと考える。もっとも回想法に認知症予防の効果があるということを福祉施設などの側で認識していなければ、こういったメニューを用意してもなかなか利用には繋がらないので、回想法の効果に対する普及活動は別に必要となるだろう。

実施場所の違いは、高齢者が外出できる状況にあるのかといったことや、より多くの資料に触れられるか、または再現展示などを用いることでより効果のある活動ができるかといった違いと考える。こういったことも意識したうえで、少し具体的な事例を確認しておきたい。

氷見市立博物館では、移築復元された明治中期の民家内で、明治期から昭和 30 年代頃まで使われていた民具を用いた、「博物館見学＆思い出語りの会」を行っている[143]。また、職員自らが地域の高齢者のもとに出て行き実践する出張回想法や介護施設でのグループ回想法も行っている[144]。

和歌山立博物館では、高齢者福祉施設から来館してもらい、民俗展示としての復元民家の見学と合わせて、別室にて生活道具に触れられるようなコーナーを作っている[145][146]。

調布市立博物館では、本会議において、北名古屋市へ視察に行った議員からの質問がき

っかけとなって、地域回想法の取り組みが始まっており[147]、博物館の民俗担当学芸員が、小学校への出張授業用の道具セットを利用する形で、高齢者施設等へ足を運んで回想法を実践している[148]。

第 3 項　事業としての回想法と展示活動との関係

第 2 項で取り上げた通り、博物館職員が博物館資料を用いてグループ回想法を行い、認知症予防に繋げるこれらの活動を指して地域回想法とか博物館で回想法に取り組んでいるというケースが多く見られる。時には博物館と福祉部門との連携事業として「博福連携」という言葉で語られることもある[149]。

博物館が主体となって福祉的な活動を行うこと自体は悪くないし、それによって博物館の存在価値が高められていることも事実である。

ただ、これらの多くは博物館の事業としてその活動に取り組んでおり、展示活動が回想法に対応しているというわけではないので、回想法に取り組んでいるという情報を基に博物館を訪れて展示を見ても、民俗分野での再現展示や、歴史分野で家電製品が導入された頃の話をしている状況であり、通常の展示の流れの中に回想法にも用いることができる道具が組み込まれているだけで、展示に対して回想法を行うための特別なきっかけは提供されていない。

このように、多くの博物館では博物館の事業として回想法を取り入れた活動は行っていても、それらの取り組みを展示に活かすところまでは至っていないのが現状といえる。

第 4 節　回想法の視点を提示した博物館の展示

これまで確認してきた事例は、博物館資料を用いてグループ回想法に取り組んでいる事例であったが、こういった活動をさらに展開し、展示を通して懐かしい思い出を積極的に思い出してもらうよう働きかけている博物館も存在する。この事例にも大きく 2 つのパターンがある。一つは常設展示を用いた事例、もう一つは小学生の学習支援を目的とした企画展示「昔の道具展」の中でそういった視点を提示した事例である。本節ではそれらの事例について確認したい。

第 1 項　常設展示を用いた事例

まずは常設展示に一工夫加えることで、回想法を実践してもらうことを意図していることが明白な事例から確認してみたい。

・益田市立歴史民俗資料館（平成 31 年 4 月 1 日より休館中）【表 1 №77】

常設展示室には、「若返りの間」という展示室があり、入口には「昔の生活用具を見て人とお話をすると脳が活性化されます。医学的には『回想法』と言われます。皆様の健康増進に役立てば幸いです」[150]と書かれた掲示がされていた。

展示品は明治から昭和初期までの民具で、家電製品はない。畳を敷いてちゃぶ台が置かれてはいるが、回想を促すために手の込んだ仕掛けをしているわけではなく、入室記念証というものを作っている程度の活動状況である[151]。

・東郷町郷土資料館【表 1 №69】

スポーツ施設や図書館、地域包括支援センターなどの機能を有する複合施設の中にあり、郷土資料館と昔体験館という 2 つのスペースを有する。

展示室に入るとすぐ「教えてください昔のこと…　聴かせてくださいあなたの思いで…」

と大きく書かれている（写真 107）他、民具などの横には質問がイラストとともに掲示されている。また、小学生などの学習でも対話を促すようなパネルがあるなどの工夫が確認できる。展示物は主に電化以前の道具で、展示室中央には住宅内部の再現があり、居間と土間が再現されている。

昔体験館は、昭和 30 年代の学校の教室が再現されており、回想法教室も行われるなど、全体として回想法を意識した展示がなされている。

・北区飛鳥山博物館「＜回想のための＞テーマ展示　オボエテマスカ？－懐かしの暮らしと道具－」【表 12№1、33】

北区飛鳥山博物館では、2012 年からほぼ毎年、「＜回想のための＞テーマ展示　オボエテマスカ？－懐かしの暮らしと道具－」という回想法のための展示を行っている[152]。

この展示は、常設展示室内にある大正期の住宅の建物とその内部に、戦前・戦後の道具を用いて生活の様子を再現しているのだが、それらの展示物の横に思い出を語ることに繋がる質問パネルを設置して回想を促す展示を行っている[153]（写真 108）。

回想は道具があればできるような気もするが、うまく誘導していくことで、より豊かな回想が行えることを見事に体現する展示であり、パネルの設置方法や質問の仕方など、回想を促す展示のあり方として先進的な取り組みといえる。

ここでは 3 つの事例を確認してきたが、これらの事例では、回想法という手法を示すことや、懐かしい思い出を語ることを促すという方法がある他、グループ回想法などで行われる質問を掲示することで、展示そのものを通して回想を促すという方法が存在することがわかる。

第 2 項　昔の道具展で回想法の視点を提示している事例

回想法を主たる目的としていない展示でも、回想を促すような事例は存在する。特に、懐かしい思い出に繋がりやすい道具を展示している小学生の学習支援を目的とした「昔の道具展」において確認できる。ここではあいさつ文で回想法的な視点が示されている事例と、懐かしい思い出の共有を図っている事例とを確認したい。

・八千代市立郷土博物館　令和元年度「くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～」（2019 年 12 月 14 日～2020 年 2 月 16 日）【表 2№121】

あいさつ文には、「小学校の 3 年生は、『昔の道具』について学んでいますが、実物を見ながら理解を深めていただくことを目的に開催しています。また、実際に昭和の暮らしを体験してきた方々には、昔を懐かしみ、活力を取り戻していただく機会となることを期待しております。」[154]とある。

・群馬県立歴史博物館　群馬県立歴史博物館第 16 回テーマ展示「昭和のくらしをのぞいてみよう」（2020 年 10 月 3 日～2021 年 2 月 7 日）【表 2№147】

あいさつ文には、「小学生たちにはくらしの変化を考えるよい機会となり、昭和を知る世代の方たちには懐かしく思い出を語り合う機会となれば幸いです。」[155]とある。

・豊田市郷土資料館　豊田市郷土資料館企画展「－くらしのうつりかわり－『食べものと道具』」（2019 年 12 月 14 日～2020 年 3 月 8 日）【表 2№116】

あいさつ文には「今回の展示をご覧になり、『同じような道具を使っていた』という記憶やそれにまつわる思い出がよみがえってくる方もいらっしゃることでしょう。こうした記憶や思い出を郷土資料館にお寄せいただければ幸いです。」[156]とある。

・新潟市歴史博物館　「みなとぴあむかしのくらし展『にいがたの昭和』」（2020 年 9 月 12 日～11 月 3 日）【表 2№.148】

あいさつ文には、「昭和という時代を題材に、当展が世代を超えた歴史の語らいの場になることを期待しています」[157]とある。また、展示の最後にあった「私の昭和」というコーナーは、来館者が記入した思い出を掲出するコーナーとなっていて、自身の思い出を振り返るだけでなく、その思い出を共有するツールとなっていた（写真 109）。

・相模原市立博物館　「学習資料展　ちょっと昔のくらし 13　～ジイジ・バアバ、パパ・ママの子ども時代～」（2017 年 11 月 14 日～2018 年 2 月 25 日）【表 2№.26】、**「まなべるくらべる　学習資料展　～便利になった道具とふるさといろはかるたで見る移り変わり～」**（2018 年 11 月 1 日～2019 年 2 月 24 日）【表 2№.64】、**「学習資料展　ちょっと昔のくらし　～第 18 回東京オリンピックの頃～」**（2019 年 11 月 1 日～2020 年 2 月 24 日）【表 2№.97】、**「学習資料展　道具が変えるわたしのくらし　～過去から未来へ向かう記憶～」**（2020 年 12 月 5 日～2021 年 1 月 31 日）【表 2№.166】

毎年実施されている学習資料展の最後には「思い出掲示板」というコーナーがあり、自由記述のアンケートがそのまま掲出されており、お父さんお母さん世代をはじめとする来館者の声に直接触れることができる機会を創出していた。

これらは回想法的な視点と関わる事例の一部ではあるが、あいさつ文において回想を促すような記述や対話の機会創出を促すような記述がある他、記憶や思い出を博物館に寄せてほしいと呼びかける事例も存在する。

さらに呼びかけるだけでなく、実際に懐かしい思い出を記入し、掲出する場を設けている事例も存在する。思い出を掲出する展示においては、他の来館者の思い出に触れることができるうえ、それらの思い出に触れることで関連する思い出がよみがえるといった状況も生じるなど、掲出された思い出を通した対話の機会となっていることも確認できる。

昔の道具展では、一義的には小学生の学習支援を意図した展示となっているが、一方で、見学者には小学生と一緒に来館する保護者や小学生から見た祖父母世代なども存在しており、それらの人たちにとって、展示されている資料は実際に使用したことがある懐かしい道具であり、思い出を語りたくなる道具であることは間違いない。そういった人に向けてあいさつ文で語りかける他、思い出掲示板を設置することで、展示されている資料に関連する思い出を語ってもらうシステムができあがっている。これらの事例は回想法を目的とした展示ではないものの、懐かしい思い出を語るという点では、回想法を意識した展示と同列に位置するものと捉えることができる。

第 3 項　展示活動に見る回想法との関係

本節では回想法の視点を提示した博物館の展示事例を確認してきたが、これらの事例からは、グループ回想法とは異なり、発話を引き出すにあたりリーダーなどの人による介入が存在しないという特徴が見て取れる。

常設展示を用いた事例からは、回想法の効能を端的に示すことや思い出を聞かせてほしいと語りかけるとともに、展示資料に対して質問を設けるなどの工夫をすることで、展示を通して認知症予防に繋げていることがわかる。

ただしこれらの事例にも課題はある。特に大きな課題は、グループ回想法などと比べると、認知症予防に繋がる継続的なプログラムとしての提供ができないことである。認知症

予防としては、一定の間隔を開けながらも継続的に取り組むことでその効果が次第に現れてくるものであるが、博物館の展示を見学するのは来館者の都合によるので、何度も継続的に見てもらうことは難しいし、その都度新しいテーマを提示することも難しい。そういう意味では認知症予防にどれくらい効果があるのかはわかりにくい面があるのも事実である。

それでも回想法に取り組むきっかけは提示できているし、益田市立歴史民俗資料館ではリピーターも多いという話[158]であったので、懐かしい思い出を語る場所が提供されている意味も大いにあると考える。

また、認知症予防という視点を展示に反映させるということ自体は、従来の展示には見られない手法であり、これまで一方的に教えられる立場であった来館者に、展示の世界へ入り込むという新たな立ち位置を与えることにも繋がっている。

昔の道具展の事例では、高齢者に限らず、比較的若い保護者世代に対しても懐かしい思い出を語るための工夫があいさつ文や思い出掲示板を通してなされている。懐かしい思い出を語りだしたくなることは高齢者に限ったことでなく、適切な道具やきっかけを示すことができれば、若い世代の人でも懐かしい思い出がよみがえってくることがこれらの事例からも見て取れる。

博物館で所蔵する資料が回想法と相性が良いことは紛れもない事実である。それらを用いた認知症予防のためのグループ回想法への協力や参入という前節での活動は、あくまでも回想法に博物館が寄っていった結果と考えられるが、本節で取り上げた事例は、グループ回想法を取り仕切るリーダーなどの人を介在しない形で回想法に取り組んでもらうという展示のあり方を示したもので、展示の中に回想法の手法を取り入るという新たな展開を示す活動となっている。

さらにフォーラムとしての博物館という視点で考えると、現代資料を用いた展示に回想法の視点を取り入れることで、展示資料を通した対話の機会を生み出すことに繋がっていると考えることができる。資料を通した対話の機会を生み出すことは、これまで一方的に教える立場にあった展示のあり方に大きな変化をもたらす。しかも、これまで見る側だった来館者が、回想法の手法を通して展示される側に近づいてくることになる。自分が知っている道具が展示されていて、それに関する思い出を語ることは、展示を見ていた人が展示する側の立ち位置となって、他の来館者などに対して語りかける存在にもなりうる。回想法の手法を展示に応用することは、まさに対話の機会の創出や展示における立場の転換を図る可能性を秘めているといえよう。

第 5 節　回想法の手法を用いた展示への応用

第 1 項　博物館活動と回想法のまとめ

これまで確認してきた博物館における回想法との関わりを改めて整理すると、福祉施設などにおける回想法への支援から、博物館職員による回想法の実践を経て、展示を通した回想法の実践、さらに昔の道具展などでも懐かしい思い出を語る取り組みなど、懐かしい思い出をめぐる博物館活動との関係は幅広いものとなっていることがわかる。これらの事例と今後の応用に向けた視点も含めてまとめたものが表 5 である。

北名古屋市として行っている地域回想法では、認知症予防を目的とはしていないが、多

くの博物館で行われている回想法の取り組みは認知症予防が目的となっている。ただ対象はともに高齢者となっている。それぞれ実施主体や実施場所、実施方法などが福祉の場面から博物館の場面へと移るように表は作成したが、ここに昔の道具展の取り組みも含めてその活動を再考してみたい。

前節で確認してきたように、回想法の手法を展示に取り入れる事例がある他、昔の道具展でも回想法的な視点が示されている状況がある。昔の道具展では保護者世代が懐かしい思い出を記入しているケースも良くあり、回想法と聞くと一見高齢者向けの取り組みに見えるが、懐かしい思い出を語るためのツールとして捉え直すと、何も高齢者向けの取り組みではないことがわかる。

例えば、筆者が参加した回想法の研修においても、まず参加者同士でグループを作り、グループ回想法の参加者となって体験してみるという時間が存在した。研修の参加者はグループ回想法を進行する立場を目指す人たちの集まりであるから、参加者はもちろん高齢者ではない。それでもグループ回想法を体験してみると、懐かしい思い出を語るということが何も高齢者に限ったことではなく、若い人であっても話しやすいテーマ設定をうまくできれば、参加者同士で話が盛り上がるということを体感した[159]。

筆者が勤務する福生市郷土資料室で 2020 年 8 月に実施した実施した博物館実習においても、回想法の取り組みについて説明をする際に、懐かしい思い出を実習生同士で話してもらう機会を作ろうと、あらかじめいくつかの質問をくじ引きのようにして用意し、引かれた内容に基づいて皆で懐かしい思い出を語るということをゲーム感覚で実施した[160]。回想法を懐かしい思い出を語るためのツールとして捉えれば、20 代であっても子どものころの懐かしい思い出などは共有できるのである。

このように、回想法で用いる質問自体は認知症予防に役立つだけでなく、世代に関わらず懐かしい思い出を共有するためのツールとして活用できることがわかる。また、様々な世代の人が交わりながら回想法をツールとした対話を行うと、世代ごとの特色が出るなどして、世代を超えた対話の機会へも繋がっていく。

そこで、回想法を懐かしい思い出を語るためのツールと捉え直し、それを展示の中に応用することで、認知症予防を目的としない、対話の機会を生み出すことを目的とした展示活動ができるのではないかと考えたものが、表 5 の右側の列にある回想法の手法を用いた博物館展示である。

回想法の手法を用いた博物館展示では認知症予防を目的としないものの、回想法においてきっかけとして提示される懐かしい思い出を語りたくなるような質問を、展示資料の近くに掲出するなどの方法で実施することを想定している。この時、来館者が心の中で懐かしい思い出を思い出すだけでなく、その思い出を何らかの形で表出できる仕組みがあった方が、他の来館者との対話の機会の創出に繋がると考える。

第 2 項　回想法の応用事例

具体的な応用方法としては、シールを貼ってもらうタイプの質問を設置するとか、付箋に思い出を書いてもらって自由に張り出してもらうとか、思い出掲示板の設置などが考えられる。これらの具体的な活動については、筆者が勤務する福生市郷土資料室において、シールを貼ってもらう質問の設置として実践を行ってみたところである（写真 110）この取り組みについては『福生市郷土資料室研究紀要』第 2 号で報告しているので[161]、詳細に

ついてはそちらに譲るが、ここではそこで得られた課題や可能性について触れておきたい。

課題は、シールを貼ることに対しては心理的ハードルが低い一方、途中から実施した記入式の思い出の掲出については心理的ハードルが高いことである。思い出の掲出への記入が少ない状況は、展示される側に回りたくないという心理が働いていることが考えられる。書いたものを掲示しますとうたっているので、語りたいという気持ちと、その気持ちを見られたくはないという心理が裏表となっているのではないかと考える。

思い出の掲出では、展示を見る人が展示をされる側となることから、展示する人、展示される人、その展示を見る人という関係の転換にも繋がると考えたが、この関係を転換するにはもう一工夫必要だということが確認できたところである。

ここで考えなければならないことは、「展示されること」が「動物園の折の中に入れられる＝見世物になる」と捉えられ、展示されることに嫌悪感が生じているのかもしれないということである。懐かしい思い出を語りだしたくなったとして、家族や知り合いとその思い出を共有するのはいいとしても、展示室に自分の思い出を掲出することで、自分が見世物になるのは嫌だと感じる。この心理を解くための工夫も考えなければならない。

心理的な段階を考察すると、①こんなことあったなと自分の心で思う、②隣にいる人に思わず話す、③アンケートなどに書く（公表されない前提で館の人には伝えたい）、④共有を目的として用紙に思い出を書くといった段階があるのかもしれない。シールを貼るという調査方法は、②と③の間くらいに位置する絶妙な立ち位置で思い出を表明する方法だった可能性がある。

今回の実践を通して得られた回想法の手法を用いた博物館展示の持つ可能性としては、福生市郷土資料室で従来から行っていた小学生クイズとシールによる調査の場所が近接していたことから、小学生とその親世代の参加が多く確認できた[162]。小学生やその親世代の参加があるということは、世代を超えた会話を生み出すことに繋がっているとともに、さらに上の世代が参加することで、多様な世代での対話を生み出す可能性がある。

今回の実践を通して、回想法の手法を用いた博物館展示が来館者にとって常設で展示している民俗資料にこれまで以上の関心を持ってもらうことに繋がる可能性を確認できた。常設展示はいつ来ても変わらないというイメージもあり、なかなか目を向けてもらうことが難しい面があるが、新たな視点を提示することで、資料に関心を持ってもらうことや、資料を通して学ぶという従来の博物館活動から、展示されている自身も使用したことのある道具を通して世代を超えた会話を生み出す場へと博物館活動を転換させることができる可能性をも感じることができた。

第 6 節　回想法の整理から考える博物館展示への応用の可能性

本章では、博物館における回想法との関わりについて整理するとともに、回想法を懐かしい思い出を語るためのツールとして捉え直し、その視点を展示に反映することで、世代を超えた対話の機会を創出することができるのではないかということについて考察を行ってきた。

さらに、回想法の持つ可能性として、博物館における展示のあり方を転換させることに繋がるという視点は、フォーラムとしての博物館の考え方にも近いものがあり、そういった視点で博物館の展示を見直すことで、博物館展示の持つ可能性を捉え直そうと試みたも

のである。

実践に移すにはまだ技術的な工夫が必要なことはこれまでの福生市郷土資料室での活動からも明らかであるが、回想法の手法を展示に反映させることで、多世代にわたる来館者一人一人が主人公となって思い出を語ることのできるツールとして機能させることは十分にできると考える。

これまで多くの博物館では回想法を認知症予防として捉え取り組んできたところであるが、この回想法を、今後、懐かしい思い出を語るツールとして捉え直し、展示に懐かしい思い出を語りだすきっかけとなる質問を提示するなど、回想法の手法を反映していくことで、博物館と来館者の関係を転換させ、博物館が自分自身を語るために必要な施設となり、懐かしい思い出を語ることで他の人と繋がるための施設となることが期待されるところである。

第４章　現在生きている人々が経験したできごとのうち、現在進行形のできごとを記録し、伝える博物館活動

2020 年、新型コロナウイルスの流行により、社会生活は大きな変化がもたらされた。博物館にあっても臨時休館や事業の変更など様々な形でその影響が現れたが[163]、同時にあまりに大きな変化ゆえに、現在進行形にもかかわらず、多くの博物館で新型コロナウイルスに関連する資料の収集を始め、早くも新型コロナウイルスをテーマとした展示が企画された他、展示の一部で新型コロナウイルスに関連する資料が展示される事例も確認できるようになっていた。

資料収集といっても、現在進行形のできごとであるがゆえに、もちろん基準は存在せず、それぞれの館で意識を持った学芸員がこのできごとを記録し、未来に伝えるためにと気づいた範囲から資料収集にあたっていった。

なにしろ 2020 年に始まったできごとであるから、博物館における資料収集に関連する論文なども、2020 年度末における報告などまだまだ限られたものとなっている。現に現場にいる一人の担当者としては、まだまだ試行錯誤を繰り返しながらその対応にあたっている。

新型コロナウイルスの感染拡大は、今後教科書に取り上げられるような世界に影響を与えたできごとであり、こういった特徴的なできごとだと認識できるがゆえに、博物館にあっても記録をしておかなければならない、資料を収集しなければならないと感じたわけだが、非日常のできごとに直面したことで、これまであまり顧みられることのなかった日常生活を取り巻く現代の資料について、どのような視点で収集に取り組むのか、収集した資料はどのような形で展示していくのかといった課題に、ある意味では目を向けさせるきっかけを与えたとも考えることができる。

これまでも、例えば東日本大震災について、同時進行的にそのできごとと向き合い、資料の収集を行い、記録した記憶を展示し、後世に継承していくという取り組みはなされてきた。また、福島では原発事故の影響により震災及び原発事故発生から 10 年を経てなお現在進行形のできごととして資料収集や展示にあたっている。と同時に、震災から 10 年を経てなお新しい展示施設や震災遺構が公開されているのも現実である[164]。

そこでは失われた生活、被害の状況、そのすさまじさ、震災と向き合ってきた人々、そして復興への道のりなど、復興は道半ばではあるが、そういったものが記録され、資料収集とともに展示がなされている。

現代社会の課題と向き合うことは、博物館の使命の一つであると考える。また、そこで収集された資料を未来へ向けてしっかりと保存し、保存した資料をもって後世の人々へ向けて記憶を継承していくための施設の中核をなすものであると考える。

そこで本章では、現在進行形のできごとに博物館がどのように向き合い、取り組みを行っているのかについて、新型コロナウイルスと東日本大震災に対応した事例の中から特徴的な博物館活動を確認する作業を通して、博物館がどう現代資料に向き合っていくのか、その可能性を探るものである。

第１節　研究史

第１項　新型コロナウイルスの展示をめぐる研究史

新型コロナウイルスは 2020 年から感染拡大が始まったため、まだまだその実践報告的なものが出始めたばかりである。特に積極的な発信を行っているのは、第 2 節で触れる、これまでの間に新型コロナウイルスについての展示活動を行っている博物館の学芸員によるものとなっている。

浦幌町立博物館の持田誠は、2020 年 11 月と 2021 年 1 月に論考を発表している。2020 年 11 月の論考は「コロナ関係資料収集の意義と必要性」というテーマで、新型コロナウイルス関連資料をなぜ収集するのか、集めている資料がエフェメラ資料と呼ばれる一過性のお知らせや張り紙であること、資料提供を求める際に市民にとってイメージを持ちにくいことから対策をどう行ったか、資料収集にあたって関連するエピソードを収集することでその価値を高めること、資料収集を行うタイミングとして渦中にある「今」行う必要性があること、地域博物館としては公式の記録ではなく素の日常を記録しておく必要があること、収集しきれていない資料があることなどを具体的に挙げ、これからの博物館の役割について述べている[165]。

2021 年 1 月の論考は、「コロナ関係資料からみえてくるもの」というテーマで、収集している資料についてエフェメラ資料であることを述べ、後述する 2 度にわたって開催された展示の紹介を行い、そこに展示した具体的な資料を通してどのようなことがわかるのかを報告し、エフェメラ資料が生活の実相を事細かに伝えるまたとない歴史資料になること、さらにコロナ関係資料の収集が非常事態下における資料収集と地域の記録化という博物館による現状分析と博物館資料上の課題であることを指摘している[166]。

吹田市立博物館の五月女賢司は、2021 年 1 月に「吹田市立博物館における新型コロナ資料の収集と展示」というテーマで、こちらも後述する実際に行った展示の紹介と合わせて、博物館の存在意義について、モノだけを重視する思考からコトをも重視する思考への転換と民主的な対話を重視する姿勢の重要性や、後世にモノを残すだけでなくモノに宿るストーリーを残し、それらを基にした対話を住民に促すことが大切だと述べ[167]、エピソードを収集することの重要性を説いている。

演劇の専門博物館である早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の後藤隆基は、2020 年 11 月に「演劇が失われた時間」というテーマで、専門博物館の立場から、中止や延期となった公演の調査や資料収集を行うに至った経緯などについて述べたうえで、開館以来の指針に基づき、同時代の社会状況に即応し、特化した資料収集としてチラシやポスター、プログラム、台本、公演中止を知らせるＤＭなどを対象として行い、実際に起こったできごとは記録され、やがて歴史化されるが、起こらなかったことは歴史的記述からは抹消され埋没してしまうので、そういった起きなかったできごとも記録し、歴史化していくことの必要性を述べている[168]。

筆者も 2021 年 5 月に、後述する福生市郷土資料室での資料収集と展示の実施報告を行い、資料収集については明確な基準があったわけではない中、現在進行形であるがゆえに日々捨てられていってしまうものに目を配り、記録しておくべきものと判断できたものから収集にあたったことや、展示については資料収集活動を行っていることを知ってもらう方法であること、新型コロナウイルス関連資料をテーマとした研修を通してとにかく失われてしまう前に集められるだけの資料を集めておくことが現在求められていることであることなどを指摘した[169]。

これらの論考からは、新型コロナウイルス関連資料は渦中にあるうちに収集する必要があること、また、収集するにあたり、エピソードをともに収集することで資料の価値を高めることや､そのことを通して公式な記録とは異なる素の日常を記録することになること、さらに収集したエピソードを基にした対話を住民とすることの必要性などの重要な視点が示された他、未曽有のできごとに直面し、起こらなかったできごとをも歴史化していくという視点を示している。これらは日常生活に大きな影響を与えるような事態に直面した博物館におけるそれらの事態に対する対応方針を示すものと考えることができる。

一方で、こういった新型コロナウイルスに対応しようとする博物館の動きは、平成の時代などの人々の記憶にある時代の資料を博物館が収集する際にも応用できる視点であることから、具体的な取り組み状況を確認することが、博物館活動としてどのように人々の記憶にある時代の日常生活を記録していくべきなのかを考える指針となることが想定される。

第 2 項　東日本大震災をめぐる研究史

東日本大震災の関係は、発生から 10 年を経る中で多くの展示施設が設置されたことから、これまでに設置されたそれぞれの展示施設での活動や展示状況などの博物館活動をまとめる形での論考が確認できる。例えば、リアス・アーク美術館の展示について述べたもの[170]や福島県環境創造センター交流棟の展示について述べたもの[171]などがある。

また、自館での取り組みを報告書にまとめている事例としては、福島県立博物館でのライフミュージアムネットワークの取り組みが大きな位置を占める。東日本大震災ならびに福島第一原発事故に直面し、博物館として震災にどう向き合うのか、これまでの実践や先進地調査、さらには博物館のあるべき姿の追及など、これまで実践してきた一連の活動を報告する活動記録集[172]が刊行されている。

加えて、東日本大震災をテーマにした特別展示や企画展示などの展示での取り組みをまとめた図録にもそれぞれの館での取り組みの様子が多く示されている。先述した福島県立博物館での『震災遺産を考える　－次の 10 年へつなぐために－』[173]や『リアス・アーク美術館の常設展示図録　東日本大震災の記録と津波の災害史』[174]などがそれである。これらの展示の事例については第 3 節で具体的に取り上げながら確認していきたい。なお、リアス・アーク美術館については特に早い段階からの活動があることに加え、その特徴的な展示についての積極的な発信も確認できる[175]。

さらに、これまでに開館した東日本大震災の様子を伝える展示施設について、展示内容に対する批判的な内容も含め､新聞などで取り上げられることもある｡特に東日本大震災・原子力災害伝承館やみやぎ東日本大震災津波伝承館などには強い批判が存在する[176] [177]。

他にも、今回事例でも取り上げる「いいたてミュージアム」の取り組みや宮城県において定点観測による写真記録を主体としたプロジェクトの取り組みなど、東日本大震災に関連する記憶を記録していく活動にあっても、その活動の記録などをまとめた資料が作成されており[178] [179]、福島県立図書館では東日本大震災関連書籍を集めたコーナーができるなど、多くの記録や書籍が刊行されている。

本稿に関連する視点を提示したものとしては、深谷直弘が東日本大震災について、評価が定まらない中、資料収集や展示を行うことについて述べる[180]他、県立大野病院という病院の 1 階ロビーのテーブルの上に置いてあった 3 月 12 日付の新聞について「この『新聞』の内容に特別な価値はない。そこに置かれていたことに重要な意味・価値がある。それは

当時の緊迫した状況下にありながら、平常通り大野病院に新聞が届いていたということと、新聞が開かれないまま置いていたことから、発災から 2 日間がどういう状況であったのかを知ることができるからである。さらに 6 年半の間、そこに置かれたままであった『新聞』は原発事故が起きるとどのようなことになるのかを想起させる資料となっている」[181]と述べ、ただのモノにエピソードが添えられることで資料としての価値を有するに至った事例について述べている。また、資料の種類についても言及しており、「生活被害の様相」と「緊急事態での瞬時の活動」といった分類を示し、さらに、被害状況が視覚的に伝わらない、視覚的なインパクトを欠く資料との向き合い方として、震災遺構であるとか展示における提示の工夫などについても述べている[182]。

深谷の視点のうち、評価が定まらない中、資料収集や展示を行うことについては、新型コロナウイルス関連資料を収集することにも通じ、本章を独立させて論じようとする筆者の視点と共通するものがある。であるならば、やはり新型コロナウイルスについての展示を確認していくことと同様に、どのようにして人々の記憶にある時代の日常生活を記録していくべきなのかを考える指針となることは想像に難くない。

東日本大震災についての研究史を確認してきたが、その中心となるのはこの 10 年の間にできた施設の活動や展示の内容について述べたものである。東日本大震災が現在進行形でもあり、2021 年に至っても新しい展示施設ができるなど、まだ総括する段階にないことが研究史からも確認できる。それでも東日本大震災について多くの展示施設が存在することから、それらの事例を通して、人々の記憶にある時代の日常生活を記録するために必要となる考え方、課題などは探れるものと考える。

第 2 節　新型コロナウイルスと博物館活動

2020 年に急速に感染が拡大した新型コロナウイルスは、社会全体に大きな影響を与えたが、ここでは特に博物館における資料収集活動や展示活動の取り組みについて現段階でわかる範囲で確認したい。

筆者が直接確認した展示の事例は表 6 の通りである。新型コロナウイルスを直接のテーマとした展示が 3 館 4 展示、企画展示などの一部で新型コロナウイルス関連の資料を取り扱っていた事例は 5 館 5 展示、さらに常設展示の一部で新型コロナウイルスを取り上げている事例が 1 館確認できた。

第 1 項　新型コロナウイルスを直接テーマとして取り上げる展示の状況

まず、新型コロナウイルスを直接のテーマとして取り上げた展示について、その展示の概要と特徴について展示開催順に確認したい。

・豊田市郷土資料館　「スペイン風邪とコロナウイルス」（2020 年 7 月 14 日～11 月 29 日）【表 6№6】

流行り病としてのスペイン風邪と新型コロナウイルスを関連付けた展示で、新型コロナウイルスの関係では、手作りマスク、フェイスガード、新聞、チラシ類をはじめ、小学生が通学の時にソーシャルディスタンスを保つためにみんなで傘をさして登校している様子の写真や傘そのもの、小中学生が休みの間に書いた日誌、疫病退散を願って全国一斉に打ち上げられた打ち上げ花火の話などが展示されていた（写真 111）。

新型コロナウイルスに関連する体験も収集していて、紙のみならず映像でも収集に取り

組むなど、積極的な取り組みの様子が見て取れた（写真 112）。

パンフレットには「（仮称）豊田市博物館の中心的取組である『記憶の収集と継承』の一環として『コロナの中の暮らしの記憶』を集め、未来へと継承するとともに、当展覧会で紹介します」[183]とあり、こういう取り組みに力を入れようとしていることも窺える。

・吹田市立博物館　「新型コロナと生きる社会　～私たちは何を託されたのか～」（2020 年 7 月 18 日～8 月 23 日）【表 6№3】

新型コロナウイルスに関係する資料収集を行っている博物館の事例として、インターネットで調べた範囲では、かなり早い段階でその取り組みを確認できた博物館の 1 つである。

展示資料は、各種マスクを始め、病院の掲示物、学校のおたより、店舗の掲示物やチラシ、保健行政で使用した防護服、行政のお知らせや掲示物、新聞の折り込みチラシをはじめ、市内で行われていた活動の様子を示す具体的な資料として、お寺で行っていた食料配布事業で使われたクーラーボックスとその設置の様子を示した写真、配布された品を記したリスト、また、市内の写真ではライトアップされた太陽の塔やマスクをつけた二宮金次郎像、マスク購入のための行列の様子などが紹介されている（写真 113、114）。

その他、資料提供をお願いするポスターが掲出され、実際の新型コロナウイルスに関係する体験談も掲出されていた。

展示全体を通して見えてくることは、学芸員がかなり積極的に新型コロナウイルスによる社会変化に意識を働かせ、市民などに直接働きかけて資料収集に取り組み、多角的に新型コロナウイルスに立ち向かう地域の様子を記録しようと取り組んでいる様子である。

・浦幌町立博物館　「コロナな時代のマスク美術館」（2020 年 8 月 1 日～9 月 27 日）【表 6№4】

新型コロナウイルス関連の資料の収集をいち早く始めたことで有名な博物館で、その収集した資料の一部をロビーで展示しながら資料収集を呼びかけ（写真 115）、そうして集まったモノの中からマスクをテーマにした展示が組まれていた。

例えば、手作りマスクを市民らから集めるだけでなく、どんなところを工夫したかなどの製作に至るエピソードなどとともに紹介されている。また、高校生が作ったマスクや、アベノマスクのリメイクとか、かなり特殊なマスクが出ているなどの工夫もある（写真 116、117）。

展示期間中にも新しいマスクが寄贈されたりしていて、博物館実習の学生が追加で展示も行っていた。

マスクの歴史にも触れる他、地域の神社での取り組みなどにも触れられている。

・浦幌町立博物館　「コロナな時代を語り継ぐために」（2021 年 2 月 27 日～4 月 11 日）【表 6№11】

浦幌町では、同一年度に 2 回目となる新型コロナウイルスをテーマにした展示が実施されていた。前回はマスクに特化していたが、今回はより広範囲に新型コロナウイルスに関連する資料の収集の様子を伝えている（写真 118）。

展示構成は「臨時休館と入館規制　緊急事態宣言の社会」「『中止』と『自粛』の時代　行事がなくなり広告が消える」「外食自粛とテイクアウト　選抜高校野球の中止も」「『おうち時間』とオンライン　オンライン・デジタルの急速な浸透」「変わる？信仰のかたち　コロナが民俗におよぼす変化」「『新しい生活様式』の時代　マスク定着の光と影」となってい

る。

マスクももちろんあるが、チラシなどを中心に収集しており、資料の幅の広さを物語っている。配られた案内文などもコロナと関わりがあるものはしっかりと取ってあり、例えばヤクルトの配達のお知らせや、職場あてに送られてきた古書店の案内文、感染防止のために設置する透明な衝立の広告文、役場からの配布物はもちろん、神社や教会での掲示物、葬儀を近親者のみで行うことを記した案内文、さらには職員組合のニュース、企業が従業員に配った商品券と案内文なども資料になっている（写真 119）。新聞に入れられている折込チラシは新型コロナウイルス以前から収集している[184]とのことだったが、そこに見られるコロナ関連の文言にも目が行き届いている。他にも、鉄道関係として減便の案内文や利用促進のために設定された北海道のフリーパスのチラシも展示されている[185]。

浦幌町立博物館では、当初、新型コロナウイルス関連資料を集めているといっても、コロナ関連資料がどのようなものを指すのかが具体的にイメージしにくいということから、見本展示を始めたというが、実際に展示の形で収集している資料を示すことは、他の資料の寄贈等に繋がることが期待できることもあり、展示という形にすることの効果は大きいと考える。

・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館　「ロスト・イン・パンデミック　失われた演劇と新たな演出表現の地平」（2021 年 5 月 17 日～8 月 6 日）【表 6№.12】

コロナ禍により中止や変更などが迫られた演劇界の失われた 1 年を記録した展示で、演劇界がどうコロナと向き合い、演劇を見つめ直してきたのかが語られている。

展示構成は「新型コロナウイルスと演劇年表」「失われた公演」「オンライン」「社会的距離」「マスク」「新しい日常」「COVI-19 影響下の舞台演劇-欧米編」となっている。

どれも演劇を取り巻く記録で、展示構成からは一般的なコロナ展にも見えるが、それぞれが演劇の世界ではどうだったかに触れられている。

ポスター、チラシ、ラフ画、衣装としてのマスク、劇場で販売された特製マスクなどの資料とともに、それぞれコメントみたいなものと、映像記録も展示されている。

あいさつには「本展は、コロナ禍の影響下にある<いま・ここ>を、演劇という視座から歴史化し、未来に伝えることを企図している。」[186]とある。

専門博物館として特定の分野における記録のあり方はどうあるべきかということに真摯に向き合う姿勢が伝わってくる。

第 2 項　新型コロナウイルスを展示の一部で取り上げる事例

次に、企画展示の一部で新型コロナウイルス関連資料を取り扱う事例と、常設展示の一部で新型コロナウイルスについて触れている事例について、その展示の概要と特徴について展示開催順に簡単に確認したい。

・北名古屋市立歴史民俗資料館　開館 30 周年記念特別展「くらしの移り変わりを知る“collection”30」（2020 年 11 月 1 日から 2021 年 1 月 31 日）【表 6№.5】

昔の道具展的な位置付けの展示でありながら、北名古屋市歴史民俗資料館で取り組む地域回想法の取り組みの紹介や、普段の展示では触れられていない地域の歴史である古墳の話や戦争の話、伊勢湾台風の話、合併の話がされる他、平成の道具をどう集めていくか、新型コロナウイルスをどう記録していくのかといった話題にまで触れた展示となっていた。

新型コロナウイルスについては「ウィズ・コロナ／アフター・コロナをモノとして記録

する」というテーマで紹介しており、具体的には、各種マスク、フェイスシールド、アルコール消毒液、ゴム手袋、イソジン、新型コロナウイルス関係のチラシなどとなっていた。

・相模原市立博物館　開館 25 周年記念企画展「学習資料展　道具が変えるわたしのくらし　～過去から未来へ向かう記憶～」（2020 年 12 月 5 日～2021 年 1 月 31 日）【表 6№.8】

毎年行われている昔の道具展の中で、2020 年度は「新しい生活様式」として新型コロナウイルス関連の道具が紹介されていた。具体的には、アベノマスクや手作りマスク、マスクの作り方の新聞記事、フェイスシールド、除菌用アルコール、除菌シート、新しい生活様式を知らせるチラシ、アマビエの関連グッズなどが確認できた。

・杉並区立郷土博物館　収蔵資料展「家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし」（2020 年 12 月 19 日～2021 年 2 月 28 日）【表 6№.7】

こちらも毎年行われている昔の道具展だが、導入の話が新型コロナウイルスとなっていた。具体的には、アベノマスクや手作りマスク、マスクの送りつけ商法、ドアオープナーが展示されるとともに、過去の病いとの関係で、三峯神社や御嶽神社のお札、角大師のお札、アマビエグッズなどが展示されていた（写真 120）。

・武蔵野市立武蔵野ふるさと館　企画展学校連携展示「武蔵野のくらしとそのうつりかわり」（2021 年 1 月 16 日～4 月 22 日）【表 6№.10】

こちらも例年行われている昔の道具展で、2020 年度は「平成・令和の武蔵野」というコーナーに、パソコン、フロッピーディスク、iPhone と並んで不織布マスクが展示されていた。マスクには 4980 円と値段がついていて、コロナ禍でのマスク需要の話になっていた（写真 121）。

・福生市郷土資料室　福生市制施行 50 周年記念企画展示「福生市郷土資料室のコレクション展」（2021 年 2 月 6 日～4 月 18 日）【表 6№.14】

こちらは筆者が勤める博物館で、筆者が担当した展示である。福生市郷土資料室で収集している様々なコレクションを 10 のテーマに分け紹介した中の一つで、「新型コロナウイルス関連資料」として取り上げたものである。展示資料は、緊急事態宣言中の市内の写真、アベノマスクや手作りマスク、SHARP のマスクなどのマスク類、定額給付金のチラシや Go to Eat キャンペーンのチラシなどのチラシ類、フェイスシールドやアルコール消毒液などの感染症対策用品となっている（写真 122）。これらの資料の収集から展示に至る経緯については『多摩のあゆみ』で紹介した[187]。

・尼崎市立歴史博物館【表 6№.9】

こちらは 2020 年 10 月 10 日に開館したばかりの博物館で、現代展示室において、公害、阪神・淡路大震災の話に触れていることに加え、新型コロナウイルスの話題にも触れている。具体的には図書館の休館の掲示物と写真、マスクポストが展示されている（写真 123）。通史の中に新型コロナウイルスまで触れている展示としては先進的な事例である。

現代展示室全体としては、様々な課題に直面しながらもそれを乗り越えてきたという視点に立った展示となっているが、そのような流れとはいえ新型コロナウイルスについて触れていることには意義がある。

・岩手県立博物館【表 6№.13】

こちらでは、昭和 30 年代の道具などの展示も見られる「いわて文化史展示室」という通史とは別のテーマ展示室にて、トピック展示という形で新型コロナウイルス関連資料の展

示を行っている。筆者が訪れた 2021 年 10 月は「コロナ禍における祈りの造形　－アマビエさまの大集合－」と題し、アマビエグッズの紹介とあまびえコンテストの応募作品が展示されていた。

解説パネルによると、「本コーナーは、新型コロナウイルス感染症に関する資料収集活動の周知と、本県におけるコロナ対策の歩みの記録を目的として設けているトピック展示です。身の回りに資料になりそうなものがございましたら、ぜひご寄贈についてご検討ください。」[188]とある。同様に、展示ケースの横には資料を収集していることを伝えるチラシも置かれている。

岩手県立博物館での新型コロナウイルス関連資料の収集及び展示については、新聞で取り上げられていた[189]こともあり、一定の周知がはかられていると考える。他県でも新型コロナウイルス関連資料の収集を行っているという情報を得た事例はあるが[190]、展示を行っているという情報は得られない。やはり、展示をすることで新たな資料収集に繋げるという考えは重要なポイントであり、そのために常設で展示スペースを確保していることは高く評価できる。

第 3 項　新型コロナウイルスを取り上げる展示から見えること

ここまで実際の展示の事例を確認してきたが、新型コロナウイルスを直接のテーマとした展示からは、博物館で働く学芸員が新型コロナウイルスという先行きも見通せない現在進行形のできごとに直面して、積極的かつ意識的に資料収集に当たっていることを、展示を通してさらに市民へ伝えていき、より大きな活動としていこうという強い意志が見て取れる。さらにこれらの意識のある博物館では、共通して関連するエピソードの収集にも取り組んでいることが確認された。これについて浦幌町立博物館の持田は、モノにエピソードを加えることでそのモノの価値を高めることができるとも述べており[191]、現在進行形のできごとを記録する際の重要な視点を示していると考えるとともに、そうした活動を積極的に発信していく姿勢が発表論文からも確認できる。

また、企画展示などの一部で新型コロナウイルス関連の資料を取り扱っていた事例からは、企画展示の中に少しでも時期にかなった内容を展示に反映させようという姿勢が見て取れる。特に昔の道具展では、展示の導入部分や比較対象用の資料として、また時代を象徴する道具として新型コロナウイルスについて触れている。北名古屋市歴史民俗資料館や福生市郷土資料室では博物館におけるこれまでの取り組みを伝える展示の中に、新型コロナウイルスについても組み込んでおり、単独で新型コロナウイルスをテーマとすることはできなくとも、展示のテーマ設定によっては展示に引き寄せて新型コロナウイルスも展示の中に組み入れることができることを示している。

企画展示自体は年間スケジュール等が前年の内から決まっていることもあり、新しいテーマを後から追加してまで行うことは難しいという事情もあると思うが、うまくテーマに引き寄せられれば、このような形で新型コロナウイルスの話に触れることができることがわかる。

最後に、常設展示で新型コロナウイルスを扱った事例では、通史の中で新型コロナウイルスについて取り上げた尼崎市立歴史博物館については、まだ現在進行形のできごとであるがゆえに、この展示が将来的にもなされていくのかは気になるが、それにしても最新の話題についても常設展示されていることに驚きを隠せない。そして、岩手県立博物館では、

資料収集に力を入れていく姿勢を強く示しているという点で、コーナーを常設展示の中に設けた意義は大きいものと考える。

これらの事例から確認できることは、まずは現在進行形のできごとを記録しなければという意識が学芸員にあったことである。将来歴史の中のできごととして語られるであろうできごとに直面し、博物館としてどう向き合い、資料を収集しておかなければならないと考え、行動に繋げるには、学芸員の意識がなければならない。この時どんなに意識があっても、何を収集すべきかという次なる課題に直面することは、筆者も経験したところである[192]。この収集すべき資料については、これまでの事例から明らかになったように、日々失われていくエフェメラ資料である。これらの資料は、今収集しないと関連する資料がどんどんとなくなってしまう消費されゆく資料である。そういったモノを渦中にあるうちに収集にあたることが重要だということも指摘されていた。

そして、ただ資料を収集するだけでなく、収集していることを伝える展示を実施し、その取り組みを広く発信することをはじめ、ホームページや論文等で積極的な発信をすることで、広く市民へも資料提供を求めることができる。さらに資料収集にあたっては、エピソードを合わせて収集することが資料の持つ価値を高めることも示されたところである。

こういった活動については積極的に情報発信するとともに、他の博物館と情報を共有することでその輪が広がり、各地での記憶を記録することに繋げていく必要があると考える。

いずれにしても、時期を置かずにこれほど多くの博物館が取り組んだ事例は珍しいことと考える。そして、これまでにない事態に直面し、手探りで資料収集の方向性を見出していったこれらの博物館の活動は、今後予期せぬ事態に直面した際の 1 つの指針となる活動と考える。

第 3 節　東日本大震災と博物館活動

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、早くも発生から 10 年という時を迎えた。10 年経ってなお復興には程遠い現実があることは、現地で車を走らせるだけでも見えてくる。そして 10 年を経てなお、新しく展示施設が開館する状況があるだけでなく、福島県においては福島第一原発事故の影響を踏まえ、今なお多くの方が避難生活を強いられている現実がある。そういう意味でも東日本大震災は現在も進行中のできごとである。

そもそも震災は発災直後から人々が生きていくために向き合わなければならないことが次々とやって来る。目の前にやってくるそれらの 1 つ 1 つに立ち向かい、乗り越えなければ、なかなか博物館活動に注力することもできない。そういう意味では、10 年経たないと記憶を継承していく段階に入らないのかもしれない。現在進行形とはいいつつ 10 年という時が経つ中、今だから見えてくることがあるはずである。

東日本大震災では、とりわけ津波による被害が広範囲に及んでいて、北は青森県から南は千葉県まで甚大な被害をもたらした。そのようなこともあり、津波被害を中心とした震災の記憶を伝承しようとする施設が海岸沿いに各市町村にといってもいいほど展開している。

これらの施設は、国土交通省東北地方整備局企画部が事務局となっている「3.11 伝承ロード」というネットワークで結ばれているものもあるが[193]、その活動は様々で、被災前の様子を伝えるもの、被害の大きさを伝えるもの、復興の過程を伝えるものなど、どこに力

点を置くかといったことも含めてその取り上げ方は千差万別である。

本節では、これらの施設の中から博物館活動や現代資料との向き合い方を示すような特徴的な事例を取り上げ、人々の記憶に新しい東日本大震災に博物館がどう向き合ってきたのかを確認するものである。

なお、本節に関わる東日本大震災をテーマとする展示施設、企画展示の調査一覧は表 7 のとおりである。

第１項　東日本大震災を取り上げる特徴ある展示事例

まずは、東日本大震災をテーマにした展示施設の中から特徴的な事例を確認し、博物館が現在進行中のできごととどう向き合い、どのように人々に働きかけているのか、博物館ならではの活動やその可能性について確認してみたい。

・リアス・アーク美術館【表 7№104】

ここは気仙沼市と南三陸町とを母体とする一部事務組合で行っている公立館であるが、その職員が被災直後から現場に入って写真による記録を行っている他、被災したモノなどの収集を行い、美術館ながら、常設で「東日本大震災の記録と津波災害史」という展示を行っている（写真 124）。

展示されている写真には１枚１枚マットがついていて、どの写真も水平垂直がしっかりととられている。写真の心得のある人の写真であることがわかる。こういうところがしっかりしていることは、内容に集中させるために重要なことである[194]。

さらにこれらの写真にはそれぞれ、撮影した人の感想や当時現地で考えたことなどがコメントとして付けられていて（写真 125）、これが現地で体験した人ならではの気持ちのこもった文章となっており、見学する者はこういったところから撮影者の存在や意識を強く感じることとなり、それがかえって自分ならどうしただろうかと考えることに繋がる。そういう意味で、人の見える、人の気持ちが伝わってくる写真展示となっている。

さらに途中途中でキーワードというコラムのようなキャプションがあり、ここに震災に臨む館の姿勢、学芸員の思いが深く記されている[195]。時には行政に、時には住人にも厳しくも愛情のある文章が記されていて、震災と向き合う姿勢が示されている。

被災したモノの収集にも力を入れていて、それらのモノにはキャプションのような形で体験談が記されている（写真 126）。この体験談は、学芸員が被災者とふれあう中で得たイメージを基にしたフィクションで、被災物を通してそれらが使われていた震災以前の人々の暮らし、日常、さらには被災者の思いを想像するための補助をするものとして設置しているという[196]。

いずれも東日本大震災を経験し、向き合ってきたからこそ含蓄のある言葉として見る者の心に訴えかける力を持っている。

こういった視点に貫かれた展示であるからこそ、見る者を第三者的な立場に置きざりにせず、しっかりと自分事として考える方向に持っていくことができていると感じる。

・閖上の記憶【表 7№110】

こちらは民間による展示施設である。東日本大震災関係では行政や関係団体などによる展示施設が多くある中、子どもたちを津波で亡くした遺族の方々の手による展示施設で、遺族の方々がその事実とどう向き合ってきたのかが語られており、見る者を引き込む力がある。

亡くなった子どもたちが生きてきたことがなかったことになってしまうという思いと、そこで生活していたことの記憶やそれらを失ったことの記憶、それらを整理し、向き合うための場として活動をして来た経緯があるという。

案内の人の話では、地域内に震災の前年に心療内科の先生が来られて、震災後に心のケアにあたりながらも抱え込まずに話していくこと、向き合っていくことで先に進むよう尽力されたのだそうである[197]。

パンフレットには次のようにある。

「自分たちが確かにそこに生きてきた『記憶』。そして津波によって多くのものを失った『記憶』。それらは感情を伴って心の中の大きな部分を占めています。しかし、その記憶がきちんと整理されていないと、人はなかなか立ち上がれず、そこから前に進めません。自分の記憶や感情に向き合い、その人にとって大切な『記憶』を整理するための場所として、『閖上の記憶』という名称にしました。心の復活には人によって時間のずれがあり、5 年後、7 年後に心の整理を始める人もいます。その時も『閖上の記憶』が心の復活のための場所を提供できますように。皆様の末永いご支援を宜しくお願い申し上げます。」[198]

東日本大震災を伝える展示施設の多くは、震災前の地域の様子や、被害の状況、そこからの復興の状況などについて来館者に伝えるものとなっている。しかし、閖上の記憶は地域の変化を伝える場としての機能よりも、被災者の心の整理を進める場として機能していることが確認できる。

これは、閖上の記憶の立ち上げにもかかわった心療内科医である桑山紀彦の考えを反映したもので、桑山は、PTSD にならないために大切なこととして、向き合い、整理し、乗り越えていくことを挙げ、そのための方法として「心理社会的ケア」に取り組むことの重要性を説いている[199]。

この施設は他の東日本大震災を扱う展示施設と比べても明らかに異色の存在で、展示が来館者に見てもらうためのものとして存在するだけではなく、展示施設という場を通して、被災した人の心理療法にも役立てることができるということを示す貴重な事例である。

・福島県立博物館　福島県立博物館令和 2 年度冬の企画展「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」（2021 年 1 月 16 日～3 月 21 日）**【表 7№.124】**

震災から 10 年という節目にあって、この 10 年を振り返り、これからの 10 年を考えるきっかけとするため、福島県立博物館が取り組んできた、震災に関するあらゆる資料を「震災遺産」と名付け資料の収集活動に当たってきた様子を展示している（写真 127）。

あいさつ文には「博物館はモノを収集、保存することを大切な責務としています。保存したモノの展示を通じて、そのモノの背景にある過去の記憶を未来へと伝えていく大切な役割が博物館にはあるのです」[200]とある。

また次のパネルには「震災遺産収集の背景や、収集にたずさわった学芸員の思いなど、新たな視点を加えた展示です。本展を通して、これからの 10 年を一緒に考えてみませんか」[201]「災害を自分事化できるように、そしてこれからの未来を考えられるように、本展が自分との対話の場となるように」[202]と、担当学芸員の展示に臨む姿勢が示されている。

展示物としては、明らかな被災物、復興時の資料（写真 128）、富岡町の急な全町避難の結果そのまま残された災害対策本部の復元展示（写真 129）、避難所に残された掲示物など

の資料（写真 130)、止まってしまった時を表す資料、人々の物語に関わる資料、除染工事の様子を伝える資料（写真 131)、被災状況を伝える資料、今取り組まれている復興へ向けたプログラムの成果や復興への思いなどの語りが展示されている。

解説パネルの中には次のような視点も示されている。

> 東日本大震災のできごとを後世に伝えるという私たちの仕事は、モノを残すことだけでは終わらない。それが生まれた経緯、おかれていた状況、そこに込められた思いや経験、つまりモノの背景にある「物語」をあわせて記録し、資料として継承していくことが求められる。私たちの身の回りには、一見ありふれていても一人ひとりの思いが込められた大切なモノがあるように、震災という状況下で特別な意味をもち、残され、伝えられたモノがある。ここで紹介する資料は一見しただけでは分かりにくい、しかし重要な物語を後世に伝える震災遺産である。また同時に、震災遺産はもうひとつの可能性をもっている。それは、見る人自身がモノを通じてそれぞれの記憶や経験を思い起こし、語ることができるということだ。皆さんは展示室に並んだ様々なモノを目の前に、何を思うだろうか。私たちは震災遺産の保全を通じて、そうした一つひとつの多様な物語を、未来に向けて無数に紡ぎ出していきたいと考えている[203]。

東日本大震災によって新たに直面した課題に対して、博物館は何ができるのか、そんなことを深く考えさせる展示となっている。

・福島県立博物館　テーマ展示「いいたてミュージアム」（2019 年 4 月 13 日～6 月 23 日）【表 7№1】

この展示は序章でも取り上げたものだが、東日本大震災後に飯舘村を支援してきた「いいたてまでいの会」という NPO 法人が行っていたプロジェクトで、会の活動休止に伴い、資料が博物館に引き継がれたものである[204]。

ここで取り上げたいのは展示の内容ではなく、活動と資料の行方の話である。いいたてミュージアムの取り組みは、最終的に福島県立博物館に資料が引き継がれはしたが、取り組み自体に大きな意義があるものの、ＮＰＯ法人が行っていたことで、資料を継続的に保管していくことが困難になった事例である。逆に考えれば、博物館としてこういった活動を行えば、基本的には資料は半永久的に残される前提となるものであり、博物館の機能を考える上で重要な視点を提供している。

・南相馬市博物館　「南相馬の震災 10 年」（2021 年 3 月 6 日～5 月 5 日）【表 7№130】

南相馬市では、地震による建物やインフラの被害だけでなく、津波被害は市域の約一割、原発被害では市域の約 1/3 が福島第一原発から 20km の警戒区域にあたり、もう 1/3 が緊急時避難準備区域にあたり、山沿いの方は計画的避難区域に指定されており、原発事故後には、市民約 71500 人のうち約 50000 人が避難したといわれている[205]。

展示では被害の大きさ、集落の解散、学校での様子と閉校、避難所の話、原発事故によりメディアが撤退したことから孤立無縁な状態になったこと、原発事故による立ち入り制限、置いていかざるを得なかった家畜の話、支援に来てくれる人やその人たちへの市民の心の動き、子どもを取り巻く状況、津波跡地の植物、郷土食や芸能の継承、地域メディア、鉄道の復旧など、様々な記録が実物、写真、そして人々の声とともに紹介されている（写

真 132)。

あいさつ文には「震災により当市で何が起こり、人々は何を考え、どのように復興への道を探ってきたのか。その有り様を伝える『震災遺産』とよばれる資料をはじめ、震災発生から現在への道のりを捉えた写真、震災を経験した方々・支援いただいた方々が発した言葉などから、この 10 年をふりかえります。これらは、甚大な被害を受けた私たち南相馬市民が踏ん張り、立ち上がってきた歴史を物語る、貴重な遺産といえます。」[206]とある。

福島県立博物館の支援を受け、福島県立博物館の「震災遺産」という考えを地域の中で実践してきたことが見て取れる内容で、震災、津波、原発という一連の災害に対して、地域の博物館がどう向き合うのか、どう人々に伝えていくのか、そんなことを強く考えさせる展示となっている。

そして展示の視点は、市内のできごとにどう向き合ってきたかではあるが、行政に荷担しすぎず（行政寄りの視点ではなく)、第三者的に事実を淡々と伝えるでもなく、人々の声をうまく生かしながら、市民にも他所から来た者にも分かりやすく、他人事ではなく自分事化できるようにする視点に貫かれていた。

・国文学研究資料館　特別展示「復興を支える地域の文化－3.11 から 10 年」（2021 年 8 月 4 日～9 月 29 日）【表 7№.132】

本展示は、国立民族学博物館で 2021 年 3 月 4 日～4 月 24 日まで同タイトルで開催されていた展示の巡回展で、内容の一部が展示されていたものである。

展示構成は、「第 1 章　復興を後押しする地域文化の可能性　郷土芸能の持つ力」「第 2 章　地域文化を再生する　文化財レスキュー事業」「第 3 章　災害を契機とした地域文化の再発見　福島浜通りの歴史」「第 4 章　災害に備えて　津波碑から学ぶ地域の防災」「第 5 章　地域文化の継承　人と人をつなぐもの」となっていて、民俗芸能の話と、文化財レスキューの話、さらに国立民族学博物館のシンポジウムで取り上げられていた話を中心に、震災そのものではなく、復興において博物館がどう関われるかを示した展示となっている。

オンラインで行われた展示解説会[207]の中で、加藤幸治による復興キュレーションの活動を伝える展示コーナーについて、次のような説明があった。「民具にまつわる暮らしのエピソードを聞き取る作業からは、アカデミックな民俗誌では見えてこなかった地域の生きた生活の記憶が見えてくる。博物館はアカデミックな情報をしっかりと見せることも役割であるが、それらの資料がどういう文脈で使われてきたのかといった情報も提供できると、勉強しにくるだけではない、自分の暮らしにひきつけられた自分の身近な博物館としていろいろな人に受け入れてもらえるのではないだろうか。地域博物館の中で、情報の取り方、見せ方が様々な課題を抱えているといわれる地域博物館の課題を解決していく一つのやり方になるのではないか」という話があり[208]、平時ではないからこそ見えてきた博物館の機能を考える貴重な視点を提示している。

・東京電力廃炉資料館【表 7№.62】

ここは、東京電力がエネルギー館として運営していたものを改装し、2018 年に廃炉資料館として開館させたものである。

基本的に福島第一原発事故を起こしてしまったことを強く反省し、廃炉に向けた取り組みを行うことを表明する施設となっている。最初に見る映像では、おごりと過信、迷惑を掛けたことに対する深い反省、正面から向き合うなど、謙虚な言葉が何度となく出てくる。

ナレーターの声のトーンも低く押さえていて、反省しているという演出はとても良くできている。

全体的には映像を主体とした展示で、展示構成は、「プロローグ」「記憶と記録、反省と教訓」「廃炉現場の姿」となっていて、原子力発電の仕組みから、事故がどうして起きたのか、今どうなっているのか、それをこれからどうしていくのかということを説明している。

加害者側の視点から描かれた展示は珍しいが、展示を見る限り、現場の人はよくやっているように感じる。どちらかというと、被災地の公務員を見ているような感覚を受ける。被災地の公務員も自らも被災しながら、災害対応にあたっているのだが、なかなかその苦労を読み取ってもらうのは難しい。そういったところに視点があてられているように感じるし、そう見せたいという思いがうまく表現できている可能性もある。いずれにしても東京電力が反省していることに驚くとともに、加害者の立場から謙虚な姿勢で展示を行う事例としては貴重な存在と考える。

第２項　東日本大震災を取り上げる特徴ある展示から見えること

本節の冒頭でも触れたとおり、東日本大震災では、津波による被害が広範囲に及んでいて、北は青森県から南は千葉県まで甚大な被害をもたらした。その結果、津波被害を中心とした震災の記憶を伝承しようとする施設が海岸沿いに多く展開している。

しかし、これらの施設の多くは展示施設であり、いわゆる博物館ではない。博物館の定義をどうするかは難しいが、公設のものもあれば私設のものもあるし、資料収集を行うところもあれば、教育普及活動を行うところもある。そして、はっきりしているのは全ての施設において展示をしていることである。

そのような状況の中、展示施設での展示と博物館での展示の違いについて、リアス・アーク美術館では明確に「私たちに与えられた役割は、単に記録資料を残すことではなく、それを正しく伝えていくことです。伝えるためには『伝える意志と伝わる表現』が必要です。私たちは、これまで美術館として蓄積してきたノウハウを駆使し、多様な視点で東日本大震災を表現することに努めました」[209]と答えを出して展示をしていたのである。

博物館の展示は伝えたい何かがあって、それをモノを通して展示という形で伝えていくものだと普段から考えていた筆者にとっては、これ以上納得のいくものはない。そういった視点でこれまで確認してきた様々な展示施設について考えていくと、一見すると、いわゆる展示を専門とする業者が入り、見栄えのするわかりやすい展示も多く存在するのだが、そこには学芸員的な視点で博物館の機能を意識した活動を行う人、またはそういった視点で統括する人が配置されていないのではないかと感じられる事例が多く確認できた。

そういう意味では、リアス・アーク美術館の展示は、来館者の心に何かを伝えるということを強く意識した展示となっており、そこに学芸員ならではの視点、方法が詰め込まれていることが理解できる。

それは、例えば展示資料でいえば、それこそガレキの中からよくこの被災物を資料として拾い出し、収集しようとしたということであり、また、学芸員ならではの視点としては、失われていく中から何を残すか、どう残すのか、そしてそこから何を伝えるか、そこにはどんな背景や物語があるのか、さらにそれに接した学芸員が何を感じたのか、そういったことまで含めた展示がされている。

来館者の多くが東日本大震災を経験していることから、これらの資料を見て何か思うと

ころがあるという面もあるとは思うが、展示されている写真やモノに人の心の機微が見て取れるため、この展示を見た人も何か心が動かされるのではないかと感じずにはいられない。押しつけではなく、考えるきっかけを提供する。そのことによって自ら考え、考えるがゆえに自分事化へと繋がっていく。そういった好循環を生み出している。

福島県立博物館の事例でも、博物館が震災とどう向き合うべきなのか、博物館にできることは何か、学芸員はどうあるべきかといった視点が示されている。

例えば内容や切り口については「被災したモノ」、「現場の記録」、「当事者の声」、「集めた人の思い」など様々な視点が存在する。そして、震災というテーマで真摯に向き合ったことが見学者の心に響き、多くのアンケートの記入に繋がっているという話を聞き[210]、展示を通した対話の機会が作られているなど、震災の展示が持つ可能性についても確認できたところである。

そして福島県立博物館でもモノを通じた記憶の想起と語りの可能性を指摘している。震災について、展示資料を通して来館者の心を揺り動かすことができなければ自己表現としての語りには至らない。展示を通した自分事化の可能性を示しているともいえよう。

これらの震災の経験を通して示された視点は重要であり、博物館の展示は、その実践を通して可能性が語られるということを体現していたようにも感じられた。

東日本大震災に向き合う展示からは、必ずしも博物館ではない展示施設が多く存在する中、改めて博物館ならではの視点は何か、博物館ならではの語り口は何か、そういうことを考える上でのヒントが確認できた。それは、学芸員の想いがあふれる展示であり、伝えたい何かを展示や事業という形に具体的にして伝えていくことである。そういう視点が随所に見られた。

また、閖上の記憶からは、多くの博物館が伝えたい何かを展示を通して伝えるための施設として存在するのに対し、心のケアを行う場として機能することがあるという、これまで少なくとも筆者が想定していた展示のあり方とは異なる展示施設が持つ機能について示されており、貴重な事例となっている。

さらに、国立民族学博物館の事例では、博物館で従来から考えられているアカデミックな情報だけではないエピソードを収集することについても言及されており、このことは震災に限らずこれからの博物館活動に求められる重要な指摘である。

この他にも、今回の調査では多くの東日本大震災関係の展示施設を確認してきた。ここではその中でも特徴的な事例のみを取り上げることしかできなかったが、今回取り上げられなかったこれまで確認してきた多くの展示の状況から見えてきたこともある。その 1 つが、震災の展示では、被災前、発災から発災後の生活が落ち着くまで、復興期の大きく 3 つの時期区分があるということである。このうちどの時期に軸足を置いているかで展示のイメージは当然に違ってくるし、それを伝えることでどこを目指そうとしているのかといったことによっても大きくイメージが異なってくる。

ただし、本稿でこれまでも述べている懐かしい記憶と繋がる展示という視点で考えるなら、それは被災前の生活に焦点を当てた展示ということになる。被災前の生活についてはあらかじめ収集していた博物館が存在する場合もあるが、被災したことでその生活に関連する資料には新たな意味づけがなされたことも見て取れた。

また、東日本大震災については博物館に限らない様々な主体が資料の収集を行い、展示

活動を行っていることも確認できる。そこからは、1 つは人々に震災の記憶を伝える役目を持つそれらの展示施設がいつまで維持されるかという問題が存在する。博物館ではなくても行政が行っている場合には一定の継続性が見込まれるが、行政が行うものでも、展示のみを行い資料の収集を行わない事例がある[211]他、福島県立博物館と東日本大震災・原子力災害伝承館のように博物館とは別に県として展示施設を設けるなど、県としての統一的な対応が取れていない事例も確認され、今後のあり方について疑念が残る事例も存在する[212]。

一方で、民間が設置している場合には、閖上の記憶でも補助金の廃止があったが、福島県立博物館に資料が収蔵されることになったいいたてミュージアムのように、活動の終了とともにせっかく収集した資料が散逸する可能性も考えなければならない。

博物館で基準も設けずにどんなものでも収集をし続ければ、収蔵庫の容量の問題が生じることは間違いないが、基本的に博物館は一度収集した資料は手放さないことが前提となっているはずである。時に、収蔵庫の問題でそういった対応に迫られることはあるようだが、それはまだ特殊な事例であり[213]、基本的には博物館の機能として、関係する資料は将来にわたって収集し、保存され続ける。それが博物館であり、どこかの時点で収集した資料を破棄するという性格ではないはずである。そのあたりが民間で行う展示施設との大きな違いの 1 つと考える。

このように、東日本大震災を展示する施設からは、博物館の機能や博物館ならではの視点について改めて考える機会となる他、様々な主体が展示に取り組むことによって多くの課題が存在することも確認できる。

第 4 節　現在進行形のできごとと向き合う博物館の立ち位置の整理と現代資料を通した来館者との対話

本章では新型コロナウイルスをテーマにする事例と、東日本大震災をテーマにする事例を確認してきた。これらの事例からは、まずは現在進行形のできごとを記録しなければならないという意識が学芸員にあったということである。将来歴史の中のできごととして語られるであろうできごとを前に、博物館としてどう向き合い、資料を収集しておかなければならないのかを考え、行動に繋げるには、なんといっても学芸員の意識がなければならない。

そういったきっかけを与えたのが新型コロナウイルスや東日本大震災のような日常生活に大きな影響を与えるような事態であり、こういった事態に直面したことで、博物館においても展示に直結しにくい現在進行形の普段目を向けることの少ない日常生活に目が行くようになる。その時、共通して確認できた取り組みが、できごととの関係でモノとエピソードを組み合わせる形での資料収集活動であり、それらを組み合わせた展示であった。このことは、前章までに確認してきた現代資料の収集に関しても、誰がどんなきっかけで日常に目を向けるのかという差でしかなく、日頃から意識的にエフェメラ資料をはじめとする、人々が生活していくうえで消費している日用品や生活雑貨の収集を、エピソードとともに集めておくことの重要性を示唆している。

よくよく考えてみれば、日用品や生活雑貨にこそ人々のこだわりやエピソードが詰まっているのかもしれない。例えば、洗剤は液体か粉末かとか、歯磨き粉はどこのメーカーの

モノを使うのかとか、いくつもの選択肢がある中からなにがしかの理由があってその商品を選んでいるはずで[214]、そこにある理由を聞くことはエピソードの収集になるし、対話を生み出すきっかけになるかもしれない[215]。

浦幌町立博物館では、新型コロナウイルスの関連資料を見本展示していた時の反応で最も多かったこととして、「こんなものをわざわざ残すのか？」というものであったと述べている[216]が、浦幌町のお知らせ類をはじめ、東日本大震災における被災物や災害対策本部のデスク周りの様子など、こんなものと思われるようなものに目を向けるきっかけとなったのが現在進行形を経たことで得られた博物館ならではの視点であり、こういった普段であれば意識を向けられることもないような資料を収集するという視点は、日常生活を構成する何気ない道具を含む現代資料の収集にも役立てるべき視点だと考える。

加えて、東日本大震災に関連するまとめで触れたように、現在進行形のできごとを通して、博物館とはどういう施設なのかを改めて考える機会になることも間違いない。様々な機能が博物館にはあるが、それらについて改めて考える機会となる。とともに、そうやって考えながら実践している取り組みが、現代資料を収集し展示することにも大きな指針となることが確認できたところである。

前章までに確認してきたように、モノを中心とした展示においてもエピソードとの関係の重要性が確認できたが、現在進行形のできごとを展示する事例においても、エピソードと資料の収集の関係が重要であることが確認された。

そして、このエピソードの収集と展示という取り組みが、来館者の立ち位置を変える重要なポイントとなる。エピソードがあることで、展示を自分事化する際に役立つとともに、ただ見るだけの立場から、一歩も二歩も展示の世界と来館者を繋げることになる。エピソードを通じたモノとの対話から、人々の意識への働きかけがなされることがこれらの取り組みから確認できたところである。

第５章　現在生きている人々が経験したできごとを、経験していない世代の人々に伝えていく博物館活動

前章では、現在進行形のできごとと向き合う博物館の事例から、博物館がどう人々の記憶にある時代のできごとと向き合っているのかを確認してきた。本章では歴史の教科書などでも取り上げられるような一定の評価が定まった、または定まりつつあるできごとを主題として扱う博物館の事例を確認する。それらを通して、どんな視点からの語りが存在するのか、何を後世に伝えようとしているのか、そして人々の記憶をどう展示に活かしているのか、こういった取り組みを確認することで、2021 年なら 2021 年という時代とどう向き合い、未来に伝えていくべきなのかといったことについて考えていきたい。

人々の記憶にある時代のできごとを展示するといった場合、現実にはどのようなテーマが博物館などでは取り上げられているのだろうか。前章では、新型コロナウイルスと東日本大震災の事例を取り上げたが、他にも記録し継承すべき課題として認識されているテーマはいくつもある。ここで取り上げるのは、戦争、公害、ダムに沈んだ村、さらには東日本大震災以外の自然災害についても一部考えていきたい。これらをテーマにする展示は、展示する側の立場の違いが顕著に表れる事例でもあり、さらに平和学習や環境学習といった視点ともかかわり、様々な角度から検討すべき課題を提供してくれる事例ともいえる。

本章で取り上げるできごとは、負の遺産とも呼ばれている[217]。海外ではこういったテーマを取り上げる博物館や現地を訪ねることをダークツーリズムと呼んでいるようだが[218]、日本でも以前より平和学習として広島に訪れるなど、修学旅行などを中心にしつつ、個人旅行でもそういった場所を訪れることは行われてきた。

ここではそういった負の側面を持つできごとを中心に確認していくが、現実にはその他にも人々の記憶にある時代のできごとをテーマにした展示は存在する。例えば、オリンピックや万博、サミットなどがそれである。負の遺産に対峙する言葉を筆者は知らないが[219]、いずれにしても、負の遺産が記録しておくべき記憶と考えられるのに対して、地域または行政など少なくとも展示する側にとって記録しておきたい、ある意味では都合の良い記憶とか、古き良き思い出として将来語りたくなるような記憶、あるいはその地域にとって価値のある記念碑的なできごとについて展示をしている事例というものが存在する。

そういったできごとには、時には人的な要素が含まれることもある。芸術の分野や政治の分野、歴史に名を残した人、スポーツで活躍した人、芸能界で活躍した人などにゆかりのある地に関係するような展示施設ができることがある。例えば、正岡子規ゆかりの松山市に松山市立子規記念博物館や、伊能忠敬ゆかりの香取市に伊能忠敬記念館があるのはその一例といえる。

ここではそういった負の遺産に対峙するような記念碑的な内容をテーマとする展示施設があることを承知の上、実際には表 8 のような施設も実見したが、ここでは多くの人にとって記録すべき記憶として認識されている負の遺産に焦点を当て、それらから特徴などを確認していくものである。

第１節　研究史

本章では、戦争や公害、ダムに沈んだ村などの様々なできごとを主題とする展示について確認していくので、ここではそういったできごとと展示の関係を対象とした研究史につ

いて確認しておきたい。

第１項　本章全体に関わる研究史

本章で取り上げる戦争や公害、自然災害などのできごとは、先述の通り「負の記憶」[220]とか、それらの痕跡を留めるものを「負の遺産」[221]と呼んだりしている。負の遺産は、文化遺産という概念の中で述べられており[222]、負の記憶として語られるものは、「二度と繰り返してはならない悲惨な出来事」[223]であり、「語り継がなければならない記憶」[224]ということになる。これらの負の記憶を後世に伝える場として博物館の存在が大きな位置を占めることから、負の遺産について触れる中で、博物館の展示との関係も取り上げられている。

負の記憶と博物館との関係を具体的な事例を集めて述べたのが『ミュージアムと負の記憶』[225]である。この中で取り上げているできごとは、戦争、公害、自然災害に加え、ハンセン病で、「大量の死が生み出された出来事を記憶するべく設置されたミュージアム」[226]である。また、これら負の記憶を展示する博物館全体に関連して、「さまざまな問題の所在を通じて、来館者の意識と感性の双方に訴え、多様な議論を引き出していくこと。これこそが、フォーラムとしてのミュージアムの特徴であり、使命であるだろう」[227]とフォーラムとしての博物館という視点から捉えることをも述べており、本稿の視点とも通ずるものがある。

社会学における視点は序章で触れたが、それらの中からいくつかの視点を取り上げてみると、荻野昌弘は、博物館において負の遺産を地域外の人に見せるにあたって、「風土の記憶を表現するためには、いたずらに地域外の人々の漠然とした期待に添うような展示をすることは、適切な方法とは言えない」[228]と述べている。これに関連して向井良人は、語り部を通した議論の中で「広く知られる出来事であればあるほど、それが知られる過程には、メディアを通じて、教育を通じて、そして資料館の展示を通じて形成された、モデル・ストーリーが存在する。聴衆はモデル・ストーリーを念頭に＜語り部＞の話を聴く」[229]と述べ、博物館に新しいことを学びに来るというよりも、事前に学んだことの答え合わせに来る、確かめに来るという面が、負の遺産を扱う展示には起こりうることを指摘している。

また、乙須翼は人間の苦痛を展示する博物館と学校教育の関係から、「近年、学校や博物館、そして社会全体が「わかりやすさ」の方向に進んでいる。そこでは単純なストーリーが好まれ、マニュアル化した段取りが好まれる。」[230]と述べ、展示することが物語を単純化することに繋がること、ステレオタイプを生み出すことを指摘している。

第２項　戦争を展示する博物館に関する研究史

戦争に関連する博物館についての考察を確認すると、暉峻僚三は、平和のための博物館の種類として、「過去の戦争を地域という視点から展示している施設」と「平和学的なデザインがされており、過去の戦争や武力紛争に限らず、様々な平和を脅かす要素を展示することで、来場者が包括的に平和を考えられるようになっている施設」の２種類があることを指摘している[231]。この視点は戦争関係の展示を見る際に重要な視点で、戦争の悲惨さと地域性の関係を捉えるものは比較的理解しやすいものの、戦争だけでなく人権問題なども扱い、さらに平和についても考える博物館と同じ戦争関係の展示として位置付けることに筆者としては個人的に違和感を持っていたが、そこに明確な違いがあることを示す分類となっている。

吉田菜美は、長崎原爆資料館でおきた展示論争について展示の変遷を丁寧に追う中で、

加害と被害の関係性が戦争においては単純な構図では語れないことを示している[232]。また展示論争では、政治的な話として論争が展開される部分があり、他の博物館などで被害者に徹する形での展示が多くなっていることとの関係を考える視点を提示している。

山根和代は平和のための博物館の今日的な意義について、教科書に載っていない事柄などを大いに学び、さらに平和のために自分が何をしたら良いのかを考え、話し合うことができることの貴重さや、平和のための博物館では過去の歴史を振り返りながら現在の諸問題を考え、未来を担う次世代を含めあらゆる世代が集う場として大いに活用することが重要だと述べ[233]、フォーラムとしての博物館に通じる対話の場の機能の重要性を指摘している。

戦争展示におけるフォーラムとしての博物館の可能性については、乙須翼も指摘している[234]。また、寺岡聖豪が被爆体験者がいなくなっていく中、原爆投下を伝えるメディアとしての博物館の役割の大きさについて述べ、被爆体験の継承にフォーラムとしての博物館の視点からの捉え直しを行っている[235][236]他、福島在行がフォーラムとしての博物館としての平和博物館は可能かと考察する[237]など、フォーラムとしての博物館を通した考察も確認できる。

福島在行はフォーラムとしての博物館の視点について、平和博物館との親和性を指摘するとともに、これまでの平和博物館の展示を見直しその新たな可能性をも指摘している[238]。そのうえで、フォーラムとしての博物館という視点を実際上の対話を前提に理解した場合、死者の問題が欠落することを指摘し、死者は発言することができないうえ、吉田憲司の提言が比喩としての対話ではなく実際の対話を強調し、他者を代弁することを回避する立場であるはずであるから、展示される死者との対話は行えないことになるため、フォーラムとしての博物館という視点も平和博物館のこれからを考える際の特効薬とはならないと指摘している[239]。

第３項　公害を展示する博物館に関する研究史

公害の関係では、公害資料館ネットワークの立ち上げにかかわった公益財団法人公害地域再生センターに所属する林美帆による整理が進んでいる[240]。まず、四大公害病に関する公害資料館の建設の経緯を公害訴訟との関係でまとめるとともに、公害資料館ネットワークに加盟する私設の資料館の設立の経緯などについて触れたうえで、「公立の資料館の目的は『公害の経験を伝える』ことと『正しい知識を伝える』ことに集約される。『公害の経験を伝える』ことは公害の経験はひとまずの着地点がはっきりしたからこそ語ることができると判断された」[241]ことや、「学習プログラムの柱は『展示』と『語り部』である。特に『語り部』では公害の被害者、または家族が被害の苦しみについて語る。学習する人たちは、そのような悲惨の過去があったことを知り、その歴史を繰り返してはならないと感じるのである」[242]と述べている。

加えて、私設の資料館については、「民間立の資料館の母体は公害反対運動である。1970年代の公害運動を先導する公害教育と民間立の資料館の公害教育は似ているようで差異がある。それは、裁判が和解する中で、『運動＝教育』の図式が変化したからである。」[243]ことに加え、「公立の資料館では、現在の問題点が見えにくくなってしまう問題がある。たとえば、日本の公害問題は公害反対運動の上に成り立っていることから、運動を語らざるを得ないのであるが、その部分については公立の資料館では結果しか語られていない。公害

反対運動が果たした社会への影響は見えにくい。民間の資料館は運動と結びついており、現在に残されている問題点が言及しやすい」[244]と述べている。

語り部との関係では、語り部の高齢化に触れたうえで、「語り部は、ある意味『生きる一次資料』である。加工されていない。だからこその迫力があり、言葉にはならないものを受け取る」[245]とか、「目の前に被害者がいて、その人の公害によって奪われた人生を知り、言葉にならないものを受け取る。論理的に考えて、公害を繰り返さないということではなく、その目の前にいる人の存在を受け止めるのである。」[246]と、自分事化へ繋がる視点を提示している。

さらに、公立館、私設館のそれぞれの立ち位置が異なることに触れたうえで、公害資料館における展示の視点は設立したものの意図が強く反映したものとなっていることに留意が必要であると述べている[247]。

この他、具体的な博物館へ言及するものとしては、平井京之助による水俣病をめぐる公立館と私設館に関する論考[248]や、池田理知子による四日市公害と環境未来館についての論考[249]などが確認できる。なお、具体的な博物館についての状況については、第 4 節で確認していきたい。

第 4 項　自然災害やダムに沈んだ村を展示する博物館に関する研究史

負の遺産としては自然災害も関係があり、それらについて述べるものも多く存在する。まず、寺田匡宏によると、自然災害と博物館展示の関係について、日本では地震、火山噴火、津波を専門とした博物館はあるが、台風、干ばつ、大雪に関する博物館は存在せず、県立や市立の歴史博物館で一つのエピソードとして扱われていることを述べたうえで、津波については東日本大震災以降意識されるようになったことを提示している[250]。

火山関係の博物館については、関俊明が全体の概観や特徴的な博物館などについて取りまとめ、分類としては、砂防の分野の展示、国立公園内のビジターセンター、ジオパークの拠点施設としての博物館が存在することや、自然科学分野での取り扱いと人文系での取り扱いがあり、全国で 122 施設あることなどを紹介している[251]。

阪神・淡路大震災の関係では、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターの展示を巡って関係者からの論考[252]が存在する他、奥村弘は、阪神・淡路大震災から 20 年を経て、直接体験したことのない世代が学生となり、歴史としてそのことを勉強しないとわからない段階に入ってきたことを指摘し、体験者の記憶を次の世代へと社会的に継承するために、震災の記憶を歴史として再構成し、それを社会的に引き継いでいく時期にきたことを述べている[253]。

また奥村は、記憶の継承にあたっての課題として、記憶の一般化が起こり、極めて抽象的な教訓となること、一方で本来個別の記憶は一般化された内容と異なるものが抽出され、それらを通じて、より当時の様々なリアルな状況に迫ることができ、記憶の記録化にあたって相反する状況が生じていることも指摘している[254]。

阪本真由美は、災害を主題とした博物館の共通点として、被災後に設置されたことと災害により破壊された建物の断片、災害が起こったその瞬間で止まった時代、避難所でのやり取りを記したノートなど、災害に関する記憶をとどめる一次資料が収集・保存展示されている点を挙げている[255]。

さらに阪本は、災害の記憶についても分類を行い、できごとを経験した人が持つ記憶、

すなわち自らの中にある記憶を想起することにより思い出される記憶（レトロスペクティブな記憶）と、災害を経験していない人が、記憶がとどめられた場を通して、そのできごとを自らの記憶として追想する記憶（プロスペクティブな記憶）があることを述べたうえで、災害の記憶の継承とは、レトロスペクティブな記憶を通して、プロスペクティブな記憶を想起するということでもあるが、そこには常に忘却と想起をめぐる葛藤がみられると述べている[256]ことは注目に値する。

今回取り上げるこれまで確認してきた負の遺産と呼ばれるできごとを取り扱う博物館の事例からは、その背後に失われた人命や生活が存在したことが見て取れる。本稿ではこういった失われた生活もまた記録すべき対象となりうるという立場から、ダムに沈んだ村についても調査対象に加えたところである。

しかし、ダムに沈んだ村に関しては、ダム建設と集落の移転状況についての論考[257]などは存在するものの、他の負の遺産と比べてあまりそのできごとに対して焦点が当てられていないのか、特にダムに沈んだ村と博物館の関係を記した論考について、筆者は確認することができなかった。

とはいえ、これまで確認してきた他の負の遺産の流れの中には、ダムに沈んだ村と博物館との関係を考える重要な視点がいくつも確認できたところであり、それらを参考に、実際の展示を通して検討を加えていきたい。

第５項　研究史から見える課題

これまで確認してきたように、戦争にしても公害にしても、加害と被害の単純な二項対立で捉えられないことは、多くの研究で指摘されているが、特に行政が関係者の一人である公害を伝える博物館については、関係者であるからこそ、自分の立ち位置を良く見せるために公害を克服したことをアピールする方向に進んでしまい、展示を通して公害の実態をつかみにくくしているという面が指摘されている。

公害の例で考えるなら、公立館に対する一定の信頼があるからこそ来館者も多く、学校での利用なども行われるのに対し、その実を理解することを困難にしている。それはどこか他人事として展示を見ることに繋がってしまう可能性を強く秘めている。

また、公害に限らず戦争を主題とする博物館においても、公立館が公立であることに対する信頼があるのに対し、私設館は被害者団体などの反戦運動や公害反対運動の流れを汲んでいることを来館者側がどこかで感じていて、偏った展示をしているのではないかと警戒されている可能性も考えられる。政治的中立性という話題もあるが、運動は政治的な動きと強く繋がりがあり、そういうところを警戒してしまう可能性は否定できない。

しかし、実際の展示を確認していくと、これまでの研究からも明らかだが、公立館も政治的に中立ではないことがよくわかる。それでも公立館であることの一定の信頼があることは間違いないのだろう。強いて言えば、公立館であれば一度収蔵した資料は廃棄される可能性は低い。そして、川崎市民ミュージアムのように災害による被害などを受けない限り、永続的に施設が維持される可能性は、私設博物館よりは高いと考える[258]。

これらからは、博物館には伝えたい何かがあるから展示を行っているはずであるが、負の遺産をめぐる展示では、この伝えたい何かにイデオロギーが強く反映されていることが理解できる。

他の注意すべき視点は、負の遺産の記憶を伝えようとすると、記憶の一般化が起こり、

極めて抽象的な教訓となってしまうことや、一定のモデル・ストーリーや単純なストーリーと化してしまう危険性が指摘されていることである。その一方で、語り部などの個人的な記憶、体験に触れることで、自分事化に繋がる可能性も示唆されている。さらに、フォーラムとしての博物館の視点が記憶の継承にも役立つ可能性が高いことを述べる研究も多く存在するところである。

そういった状況を念頭に、強いて共通項を求めるなら、それはいずれの展示においても記憶の継承が課題の一つとして存在するということではないだろうか。記憶の継承という視点に立つ時、博物館ならではの役割とはどういったものであろうか。またその役割は具体的にどう展示に反映されているのだろうか。立場が異なれば記憶の継承に果たす役割も異なるのだろうか。

そこで改めて考えたいのがフォーラムとしての博物館としての博物館のあり方である。再掲になるが、竹沢尚一郎は「さまざまな問題の所在を通じて、来館者の意識と感性の双方に訴え、多様な議論を引き出していくこと。これこそが、フォーラムとしてのミュージアムの特徴であり、使命であるだろう」[259]と述べている。本章では、竹沢の視点を踏まえ、これら負の遺産をめぐる展示を行う具体的な事例を通し、博物館では来館者の意識と感性にどのように訴えているのか確認していきたい。そしてそれらの事例から、展示する側、される側、そしてそれを見る側にとって博物館がどのような機能を果たしているのか検討していきたい。

第 2 節　人々の記憶にある時代のできごとを展示する常設展示

本章ではこれから戦争や公害、ダムに沈んだ村などを主題とした博物館や展示の事例を確認していくが、ここではまず、それぞれのテーマを専門に扱っているのではない、地域博物館での取り扱い状況を確認しておきたい。

第 1 項　具体的な展示の事例

戦争を扱う事例では、熊谷市立図書館郷土資料展示室では通史の流れの中に熊谷空襲のコーナーが存在する。他にも富良野市博物館でも通史の中で空襲について取り上げており、空襲があった多くの地域において、空襲だけを伝える展示施設が存在する中、歴史展示の一部を構成する事例も確認できる。

ダムに沈んだ集落の事例では、東大和市博物館で村山貯水池建設により水没した地域の話に通史の中で触れている。水没前の集落の分布の模型や、水没前の集落の写真、反対運動の記録、工事中の写真など、その歴史について紹介するコーナーが全体からすると広めにとられている。一方で、北杜市立郷土資料館では、合併前の地域について紹介するコーナーの中に、「塩川ダム」というパネルが 1 枚あり、ダム建設とダムに沈んだ集落の紹介がされている。大きな市で、伝えるべき歴史が多く存在する博物館にあっては、パネル 1 枚とはいえ、その話に触れることは展示全体の中では大きな意味を持つ。

公害の関係では、尼崎市立歴史博物館では、現代史を伝えるコーナーの近くのロビーでパネルによる展示がされている。前述した新型コロナウイルスに関する展示は現代展示室内にあるが、同じ現代展示室の中には、阪神・淡路大震災のことを伝えるコーナーも存在する。もちろん全体からすれば小さなスペースかもしれないが、地域の歴史を語る上で欠くことのできないものとして位置付けていることが窺える。

自然災害の関係についても触れておくと、同じ阪神・淡路大震災については、神戸市立博物館の常設展示でも最後にパネルが一枚展示されている。阪神・淡路大震災については、市内に阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターがあり、そちらでより詳しく学べるということかもしれないが、教科書に出てくる五色塚古墳や大和田泊がある他、明治の開港地になったなど、歴史に名を残すできごとや史跡を多く抱える神戸市にあっては、阪神・淡路大震災だけを大きく取り上げることができないという事情も一定理解できる。

他にも、弥富市歴史民俗資料館では伊勢湾台風による被害について伝えるコーナーが設けられている。その一方で、東日本大震災になると、なかなか地域博物館でも取り上げられておらず、亘理市立郷土資料館では映像の中で紹介しているのと年表に記されているくらいである。釜石市郷土資料館では、「歴史・考古」「戦災」「民俗」「製鉄」「自然」と並んで「津波・震災」というコーナーが設けられているが[260]、岩手県立博物館でさえも通史とは別のテーマ展示室「いわて文化史展示室」の一角に「東日本大震災 3.11 を忘れない」という展示コーナーが全体からするとごく小さく設けられている程度であり[261]、福島県立博物館ではまだ常設ではコーナーを持っていない状況にある。これは直近のできごとであるため、展示にまだ反映しきれていないとのことである[262]。

この他最新のできごとを展示する事例としては、第 2 章で触れた南風原町立南風原文化センターの首里城焼失について新聞を通して示す事例と、尼崎市立歴史博物館における新型コロナウイルスを伝える事例が存在している。

第 2 項　常設展示の事例からみえること

これまで常設展示における負の遺産などのできごとを取り上げる展示の状況について、一部ではあるが確認してきたが、それらのできごとを常設展示で取り上げるには、他にもとりあげるべき歴史が多く存在する中、限られたスペースで触れることしかできない状況にあることが確認できた。

第 1 章で触れた昭和 30 年代以降の道具を用いた展示であっても、建物の再現がなされれば、展示スペースとして広いスペースを与えられることにはなるが、それでも全体に占める割合は決して高くはないことを考えれば、人々の記憶にある時代のできごとも限られたスペースでしか語られないことはやむを得ない面があると言わざるを得ない。

だからといって、これらの博物館で資料収集や調査研究が行われていないというわけではない。その一部が展示されているのであって、いずれの博物館も所有するものをすべて展示しているわけではないことを踏まえれば、展示に見られる部分は当然にその一部でしかありえない。

地域博物館ではこのような状況があることから、戦争に関する展示を企画展示として実施したり[263]、東日本大震災についても前章で触れたように企画展示として行われていたりする[264]。それとは別に、これらのできごとを主題とした展示施設を設ける事例が確認できるところである。本章においては、これらの負のできごとを主題とする博物館や展示施設を取り上げ、負の遺産を取り上げる意味や展示の特徴、さらには資料収集から展示へ至るまでの工夫などについて確認をしていきたい。

第 3 節　戦争や平和を主題とする展示

戦争であれば戦後 75 年を迎え、戦争を経験した人々から直接話を聞くことのできる最

後の時期にさしかかっている。戦争は今どう伝えられ、この最後の世代の人々の記憶と博物館がどう向き合うのか、さらに平和学習との関係も含め確認していきたい。

戦争に関連する展示としては、基本的に被害者の立場から語られるものが多い。特に空襲があった地域にあっては、その被害の様子を伝える資料館が多く作られている。大きな被害である原爆被害については、いわゆる原爆資料館と呼ばれるものだけでなく、広島、長崎の両市内にある学校に併設される資料館がいくつも存在する他、被災建物を紹介する展示や、救護施設が作られたところを紹介する展示など、場所性を強く感じる展示がなされているのが特徴である。なお、加害の側面を伝える施設は主に民間によるものとなっている。

また、軍関係の施設があったところでは、そういった記憶を記録し、後世に伝えることを意識した施設が存在する。特に、予科練などの学校があった場所ではその学校の様子と特攻の歴史を伝える施設が多く確認できる。また、特攻隊の出陣基地などがあった場所でも知覧特攻平和会館のように多くの施設を確認することができる。

そして、いずれの展示にあっても平和学習と組み合わせた利用が見られ、戦争を学ぶことは平和を学ぶこととして、平和学習の一環に位置付けていることがわかる。

全体としてはそういった傾向が見て取れたが、ここではそれらの中から、人々の記憶との関係が深いと思われる事例を中心に、特徴的な事例を確認していきたい。

なお、本節に関わる戦争をテーマとする展示施設の調査一覧は表 9 のとおりである。

第 1 項　具体的な展示の事例

・広島平和記念資料館【表 9№6】

広島平和記念資料館の本館は 2019 年 4 月に展示のリニューアルがなされた[265]。全体として見る人の感情に訴えかける展示となっている。感情に訴えていることは、見ている人が鼻をすする音を度々展示室に響かせていることから理解できる。

実際に被害にあった人、被害にあった人を見た人、原爆で家族を失った人、その後に発症した人など、様々な立場で苦しんだ人たちの話が語られていて、涙なしには見られない展示となっている。

特にリニューアルにあたって、人々の記憶を記録して伝えることに力が入れられていたことがわかる。その時、モノ、写真、言葉の三点セットが大きな効果を生み出している（写真 133）。

・のぼり平和資料室【表 9№20】

広島市立幟町小学校の校舎内にある教室を使用した資料室で、基本的に案内付きでの見学ということで予約を受け付けている。案内は地元出身の方で、祖母、母ともに原爆当日も市内にいながら偶然原爆に直接合わずに助かったそうで、戦後生まれながらこちらの小学校の卒業生である。

自身で調査されたことや家族、地域の人から聞いた話等も踏まえ、小学校開校から被爆時の周辺の話、学校出身者の話、さらに、原爆の子の像の基になった佐々木禎子さんの出身校でもあることから、その経緯などの話があった[266]。

さすがに地域のことに詳しく、学校の歴史にとどまらず、多くの人々の記憶も語られる。展示は一種の語りのための装置であることを示す活動である。

・呉市海事歴史科学館【表 9№18】

こちらは戦艦大和を主題とした博物館で、呉市が軍港として密接な関わりをもって発展してきたこと、その技術が高かったこと、軍港ゆえに空襲で狙われたこと、軍港としての設備・技術があったから戦後の平和利用ができ、また発展できたことなど、呉市にとっての軍との関わりを中心とした歴史がどちらかというと美談として語られているような印象を受ける[267]。

そして、呉市にとっての軍港と戦艦大和の偉大さ、そこに注ぎ込まれた技術が戦後の社会の発展に寄与したことに力点があるように見えるので、戦艦大和とともに命を散らした人々の話には感情移入しにくい展示となっている（写真 134）。戦艦大和の乗組員を紹介するコーナーは存在し、そこで起きた悲劇的な話も展示されている。歴史的な説明もある。乗り込んでいた人々の写真や関連する資料もある。しかし、その悲しさよりも、戦艦大和の凄さが前面に出ているように見える。

・回天記念館【表 9№.19】

回天とは、人間魚雷のことで、神風特攻隊は飛行機で敵艦に突っ込むが、回天は魚雷として敵艦に突っ込んでいったもので、この施設は回天の訓練基地があった島に作られた記念館である。

展示パネルでは、回天をめぐる歴史が分かりやすく解説されるとともに、遺影を始め、遺書や手紙類も多く、国を守るため、大切な人を守るためという搭乗員たちの強い思いを伝えている。

さらに手紙などからはもちろん規制もあったとは思うが、家族への思いや縁談の話、妻へ向けた愛情などが読み取れ、回天と関わった個人が見えてくる展示となっている。

回天については、呉市海事歴史科学館でも触れられていたが、戦艦大和の乗組員の話とも取り上げられ方が異なり、回天記念館では、広島平和記念資料館と同様、具体的な人の存在を感じることができ、共感に繋がりやすい展示となっている（写真 135）。

・舞鶴引揚記念館【表 9№.4】

舞鶴は戦後海外に残された人々を受け入れる引揚港に指定され、660 万人の引揚者のうち 66 万人を受け入れた地である。

展示では、戦争からシベリア抑留への流れ、抑留中の人々の生活ぶりを伝えるとともに、舞鶴における帰還事業の様子や帰還を待ちわびる人々の様子を伝えている（写真 136）。

戦争の悲惨さはもちろん、抑留生活の厳しさも伝わるが、ここではそこに関係する人々の気持ちが前面に出ていて、歴史的事実を伝えるということに徹するというよりも、地域の人々の記憶を後世に伝えようという意思が表現されている。

舞鶴は確かに引揚港に指定され、抑留された人々の記憶ももちろん存在するし、その引揚者が舞鶴に抱いた気持ちも存在すると思うが、それと同時に、舞鶴市民が引揚者を温かく迎え入れたということもまた後世に伝えるべき歴史であり、そこに舞鶴市民の心が現れている。

そういったこともあってか、戦争に関する展示でありながら、悲惨さよりも人々の持つ心の温かさが伝わる展示となっているのが特徴といえる。

・北九州平和資料館【表 9№.65】

こちらの館は、市に対して 25 年にわたり平和資料館の建設を要望してきた団体が、なかなか市が動かない中、私設の博物館を立ち上げ活動をしているものである。

北九州市は、8 月 8 日に八幡の空襲があり、8 月 9 日には原爆を落とす候補になりながら、天候不順などで小倉を諦め長崎に飛行機が向かったことなど、語らないわけにはいかない地域との関連を意識した展示がされている（写真 137）。

もう一つ特徴的なのは、展示の中で日本軍による加害の側面にも意識的に触れていることである（写真 138）。公立館ではどうしても触れにくい面であり、展示スタンスとして被害者に徹してしまうのだが、職員の方からは、加害責任についても触れないと戦争を語ったことにはならないという趣旨の話があった[268]。同様に、八幡の空襲の話でも、八幡製鉄所に来ていた朝鮮半島出身の人の話題にも触れられていた。

・南風原町立南風原文化センター【表 9№9】

展示室は、施設のある場所の裏山に現存する沖縄陸軍病院が置かれた壕の再現から始まる（写真 139）。沖縄陸軍病院は那覇から戦線の南下に伴って、南風原に展開された病院で、最初は国民学校にあったものが山あいに壕を掘って病院として使用されていたもので、ここは有名なひめゆり学徒隊が動員されていた病院でもある。

また、この壕は、戦争遺産として日本で初めて文化財指定された史跡でもあり、戦争に意識を向ける町の姿勢が窺える。

壕の復元展示の後は、「南風原国民学校の戦時教育」「南風原が語る沖縄戦」「御嶽の神社化」「兵士と戦場」「忠魂碑」「学童疎開」「南風原に配備された部隊」「戦場になった南風原」「南風原村民の戦死状況」「移民の戦争体験」「戦争遺跡」と展示の半分は戦争の展示となっている（写真 140）。

村民の 44％が亡なくなっており、多くの証言をもとに構成されているのも特徴となっている。

また、「戦後　ゼロからの再建」として戦後の歩みの展示にも力を入れており、占領下の生活から、昭和平成へと連面とした歴史を年表、写真、道具を通して伝えており、第 1 章でも触れた通り、展示の最後は首里城焼失までとなっている[269]。

・ひめゆり平和祈念資料館【表 9№12】

ひめゆり平和祈念資料館は、亡き学友の慰霊と平和への願いを発信する場として、同窓生たちが 1989 年に開館したもので、写真や遺品、実物資料、生き残った学徒の証言により作られたとある[270]。

あいさつ文には、「戦争を知らない世代が人口の過半数を超え、未だ紛争の絶えない国内・国際情勢を思うにつけ、私たちは一人ひとりの体験した戦争の恐ろしさを語り継いでいく必要があると痛感せざるをえません。平和であることの大切さを訴え続けることこそ亡くなった学友・教師の鎮魂と信じ、私たちはこの地にひめゆり平和祈念資料館を建設しました」[271]とある。

また、「戦争体験者が年々少なくなっていく中、若い世代に戦争の実態をより分かりやすく伝えるために、2004 年に全面的な展示改装を行」[272]っているが、さらに時間が経ち、語り部として活躍される方々の高齢化に伴い語り続けるのが困難になってきた現状を踏まえ、2021 年に見てわかる展示へのリニューアルを行う[273]とともに、語り部に変わる説明員を採用し、聞き取りや体験を継承する人の養成などの活動にも取り組んでいる[274]。

・戦没画学生慰霊美術館　無言館【表 9№82】

無言館は、出征していった画家を志していた青年たちの遺作と、残された家族によるエ

ピソードが遺品と共に展示されている美術館である。

東京美術学校を卒業した者や独学で絵を学んだ者もいるが、さすがに絵の心得があるだけあって、どれもしっかりとした作品である。絵によっては、自分が亡くなることを前提に描かれたものもあるだろうが、それらも含め、一点一点がしっかりとした作品であり、本来はその絵の持つ技術や画力をもって評価されるものである。それが、戦死した学生の絵であるという違う意味を持つこととなる。と同時に、それらは彼らが生きていたことを示す数少ない証となっている。

出征を前にした画家の言葉として、「あと 5 分、あと 10 分、この絵を描き続けていたい」[275]「生きて帰ってきたらこの絵の続きを描くから」[276]といったものも見られる。絵に傾ける強い想いを感じる言葉である。

芸術作品を作るということは、生きてきた証を残すことであり、それを通して、何かを伝えられるということなのかもしれない。そういう意味でも、戦争を考えるとか、生命の大切さを考える時に、芸術作品の持つ可能性を感じる。生命そのものや戦争そのものを画題にしなくても、戦死したこととともに伝えることで、そこに深く想いを馳せざるを得ない状況が生まれる。そうすることで、作品にそれを描いた人の存在が感じられ、見る者の心が揺さぶられる展示となっている。

第 2 項　戦争や平和を主題とする展示から見えること

これまで戦争や平和を主題とする特徴的な展示を確認してきた。広島平和記念資料館や回天記念館、舞鶴引揚記念館や無言館の事例からは、資料の向こう側に人の存在を強く感じられる工夫がなされており、展示を見る人の共感を生みやすい状態にあることが確認できる。広島平和記念資料館の事例については序章でも触れたが、例えば回天記念館や今回は触れなかったが知覧特攻平和会館のように遺書などを通して戦地へと向かう死を覚悟した人の様子に触れることは、具体的な人の心の機微に触れることになり、共感を生み、自分事化することに役立っていると考える[277]。

また、舞鶴引揚記念館や呉市海事歴史科学館の事例からは、戦争と地域のアイデンティティに関わる意識というモノが存在することがわかる。舞鶴引揚記念館では地域の良い面を中心に語られているが、呉市海事歴史科学館の場合は、戦艦大和に繋がる技術が戦後日本の発展に繋がる要素となっており、そのことを伝えることが市民のアイデンティティに繋がっているのだろう。戦争が地域に与えた影響の大きさとその表明としての展示の存在については改めて考える必要がある。

北九州平和資料館の事例からは、戦争における加害と被害の関係について、特に公立館と私設館における考え方の違い、立場の違いが確認できる。1 つには公立館の動きが遅いことがある。その点南風原町では全国に先駆けて戦争遺跡を文化財指定するなど動きが早かったが、沖縄は全面的に被害者の立場に立って戦争を語れるという強みがあるかもしれない。

また、加害の問題は、北九州平和資料館以外にもアクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館や岡まさはる記念長崎平和資料館などでも積極的に語られている。しかし、加害の側面を前面に出されると、同じ日本人という立場を有しているという認識が意識されることになり、見ていて辛い思いをするという面がある。そういう意味で、展示内容と見る人の立場についてはよく考えないとならないテーマの一つといえる[278]。

沖縄戦の関係については、国内で唯一の地上戦が行われ、壊滅的な被害をこうむったうえ、その後の占領、基地問題へと現在に繋がる課題があり、基本的には常に被害者目線で語れる強みがあると考える。そういったこともあり、地域の歴史を語る際に欠くことのできない要素となっているのが、本州の博物館とは大きく異なる点である。また、基地問題の高まりも含め、沖縄県民にとっては戦争が身近な話題として存在していることも感じることができる。

そういった活動の延長に位置するのか、ひめゆり平和祈念資料館においては、実際の戦争を生き延びた方による語りが限界を迎えつつある中、次の世代の育成にあたるとともに、語り部なしでもわかる展示へのリニューアルを重ねているところである。語り部に接することで得られる学びはとても大きなものであるが、一方で世代的な問題で残された時間は限られている。設立に携わった方々の想いを受け継いでいくことは残された者の使命であり、その際に博物館が語りの装置として機能していくかどうかは引き続き注視していきたい。

のぼり平和資料室もまた、語りの装置としての機能を有していた。語り部の方の存在はとても重要で意味のあるものであるが、ひめゆり平和祈念資料館のように次の世代の育成も考えなければ、今後の運営がどうなってしまうのか気になるところである。語りの装置としての展示は、特定の人にしか語れない展示となっていると、その人がいなくなってしまった時に困ることとなる。場合によっては展示だけで内容を理解することができなくなってしまうからである。

一方で、当事者以外の人が語ることを意識した展示があれば、それは次の世代に記憶を継いでいくことができる可能性が高くなる。特に直接体験した人と関わりのあった世代は、体験した人の話を直接聞いているので、自分事として語ることができる可能性が高い。戦争にしても、まだ直接体験した人と関わりのあった世代による語りであるが、将来直接体験した人のことを知らない世代へ記憶を継承するための模索はまだ続くものと考える。

第 4 節　公害を主題とする展示

公害については、四大公害に関する博物館が整備され、公害によって破壊された環境も改善が進む中、環境学習との関係で語られることがある一方、行政の立場と被害者団体の立場などで、展示に現れる表現が明らかに異なり、博物館をめぐる展示する側の視点について、検討の材料を提供する事例であるとともに、1 つのできごとに対し博物館がどのように向き合えるのかを考える際の好事例といえる。

具体的には、四大公害を伝える博物館と、その他の地域で被害を出した公害について語る施設とが存在する。

公害について語る視点は戦争よりも複雑で、特に行政が運営する博物館では、第三者的な視点で語っているように見せかけて、行政の責任について言及しないようになっている展示が多く存在する。それは、行政が公害問題の利害関係者の一人であり、完全に中立の立場を取ることができないこととも関係することは研究史でも確認したとおりである。一方、被害者団体が行う展示は視点が明確で、行政の展示とのギャップが存在する。

また、公害は基本的にその課題を乗り越えてきたということを強調する立場に立つことが特に行政の展示では多く、そういったことを伝える場になっており、そのことが環境学

習との結びつきを強くさせている。

ここではそういったことを考えるうえで重要な視点を提供している水俣病の事例と、四日市ぜんそくの事例を取り上げ、公害を展示することの特徴や課題について考えていきたい。

なお、本節に関わる公害をテーマとする展示施設の調査一覧は表 10 のとおりである。

第 1 項　具体的な展示の事例

・水俣市立水俣病資料館【表 10№.2】

展示の全体のイメージは、公式見解的な水俣病の歴史の紹介であり、初めて水俣病を学ぶにはわかりやすい展示となっている（写真 141)。基本的な姿勢は、水俣病の全体像、概要、取り組み、そしてそれらを通して未来に向かって考えるきっかけ作りに徹底している（写真 142)。ただし、おどろおどろしい感じもなければ、被害者の声も少ない。被害者に向き合うともう少し辛く厳しい内容が増えると思われるが、そういった展示にはなっていない。

後述する水俣病歴史考証館の職員によると、市の博物館は小学 5 年生の学習向けで、わかりやすく、キレイにまとめているとのことである[279]。

・水俣病歴史考証館【表 10№.3】

こちらは被害者を支援する団体が運営する博物館で、展示を見る際には、基本的に職員の方が解説をするとのことである。

建物は水俣病の患者の方がかつて働いていたキノコ工場だっだそうで、少し不便なところにあるのは、他も当たったが誰も土地を貸してくれなかったからだとのことである[280]。このあたりにまだ差別的な意識が残っていることを感じる。

こちらの展示は基本的に被害者側の視点で語られていて、市では語られないことにも触れている（写真 143、144)。ただし、水俣病の難しさは被害と加害という二項対立では語りきれないということが解説から理解できた。

それは、直接の原因を作ったチッソは、そもそも水俣の人が誘致した企業であること、被害を受けた漁村の人は後から水俣の外からやって来た人であること、被害にあった人の関係者もチッソで働いていたこと、今でもチッソの後継の企業が存在していること、企業城下町であること、市長もチッソの関係者であることなど複雑な事情が絡んでいる。市民としてもチッソと対立していてもチッソを潰したいわけでもなく、もっと町のためにがんばってほしいと思っていたりするなど､色々な感情が入り交じっている様子が理解できた。

展示内容もチッソや行政に向き合い続けたり、厳しい視線を浴びせてきた市民との関係だったりと、やはり市の博物館とは趣が異なっている。

公立の博物館の展示のあり方、私設の博物館の展示のあり方、それを同じ水俣病をテーマにした展示を通して比較できるという意味で、両者を見比べることで見えてくることがあり、とても参考になる事例といえる。

・四日市市公害と環境未来館【表 10№.1】

こちらは、教育委員会所管の市立博物館と、行政部局所管の公害と環境未来館が併設というより、一体となっていて、入口が博物館、出口が公害と環境未来館と繋がった展示スタイルとなった館である。

解説をしている方の一人は、長く市民運動をしていた人だそうで、そういう人の努力と

当時の市長の判断がこういう館の建設に繋がったとのことである[281]。

その解説の方の話では、公害の博物館としての開館は四大公害の中で一番遅く、市に要望していたが、なかなか作ってもらえなかったということであった[282]。そして、被害を訴え続けてきた人の話にはあまり細かく触れてもらえなかった[283]ということで、事実を伝えることと、被害の実態は分かりやすくまとめられているものの、その過程、特に被害者の側に立って動いていた人たちの動きは確かに見えない。市民運動していた時の写真も使われてはいるのだが、年表の背景としてあえてわかりにくくして使われていることも教えていただいた（写真 145、146）[284]。

そう言われてみると、四日市ぜんそくについて学ぶ施設としては十分だし、分かりやすく伝えてはいるが、被害者目線が足りないのか、行政としてそのあたりの視点をずらすような展示のつくりとなっていることがわかる。

四日市ぜんそくという公害の記録とそこに生活していた人々の記憶の記録はまた少し異なることを示している。

第 2 項　公害を主題とする展示から見えること

ここまで確認してきたように、公害を主題とする展示では、特に公立館と私設館の違いが顕著に現れていた。水俣病の事例でも四日市ぜんそくの事例でも、公式見解的かつ初学者にもわかりやすい展示は公立館で行われていることが確認できる。また公立館には学校利用も多くある。しかし、より踏み込んで学ぶには不十分で、当事者の声を聞ける私設館の方にも足を運ぶことでより多角的に公害について学ぶことができるようになる。それは今回紹介しなかったが、イタイイタイ病でも同様であった。一方水俣病歴史考証館では、被害者支援にあたる直接の被害者ではない世代の人による語りがなされており、語りの装置として世代を超えた取り組みが確認できた。これは展示を見に来た人に対する解説を行うという活動のたまもので、展示の解説を通した記憶の継承活動であり、来館者との対話の機会を生み出している。

さらに、展示室を意識して見ていくと、水俣市立水俣病資料館も四日市市公害と環境未来館も、公害に苦しむ人々を紹介する展示の際は、全体的に黒を基調とする色で統一するのに対し、行政が環境対策に取り組んでからの展示は真っ白な背景で展示が展開する（写真 147)。これは展示手法としての印象操作だと思うが、行政による展示では選択的にこういった配色が行われている。

他にも、展示全体を確認していくと、公立館と私設館による立場の違いが明確に存在している。公立館は公害とどう向き合いどう改善してきたかに力点があるため、被害者の実態がわかりにくい。一方、私設館では公害にどう苦しめられ、公害と闘ってきたかに力点があることがわかる。そのうえで、公立館では環境学習という面を前面に出すことで、行政が環境対策に取り組んでいることをアピールする施設として利用していることも見て取れる。その結果、現在も苦しんでいる人がいることが伝わりにくくなっているのではないかと考える。それは、人々の姿が見えると、来館者が被害にあわれた方に共感する可能性が高いので、公立館ではあえてそういう機会を与えないようにしているのではないかと思えるほどである。

公害は、加害者、被害者の単純な二項対立では語れない面があるが、その分、展示をよく見ていくことで様々な課題に目を向けることができるともいえる。全体として整理する

なら、公立館は学びの入口として有効であり、より深く学ぶ場としては私設館を位置付けられると考える。こういった機能分化がされていると考えた方が、腑に落ちる面はある。

加害と被害について考える展示としては、公害ではないが東日本大震災の事例で確認した東京電力による廃炉資料館やハンセン病に関連する展示を挙げることができる。ハンセン病の関係では国立ハンセン病資料館があり[285]、ハンセン病は国による隔離政策が行われ続けたことを踏まえ、国を相手取った訴訟が起こされ、国がその責任を認めるという結論を得たものである。そういった経緯を踏まえ博物館も構成されており、ある意味では加害者によって被害者の名誉回復を図るとともに、これまでの被害の実態を伝えるという、他ではあまり見られない形での展示がなされている。

こういった加害の立場からの展示のあり方と、公害のように加害と被害という問題を含むできごとを展示するものとを比較することで見えてくることもあるのではないかと考えるが、このことについては今後の課題としたい。

第 5 節　ダムに沈んだ村を主題とする展示

ダムに沈んだ村の事例は、現代社会へと繋がる高度経済成長期の影の部分を伝えるものであり、そこで生活していた人にとって博物館がどういう意味を持つのか、また、ダムに沈んだ村のことを学ぼうとする人にとってどうあってほしいのかといった視点が存在し、展示をする人、展示される人、それを見る人という関係について考えることに繋がる事例といえる。

ダムに沈んだ村の存在は、現代社会に暮らす人々にとって普段意識されることがほとんどなく、まして、ダムが建設されたことで奪われた生活があることはほとんど顧みられることはない。近年ではダム愛好家も多く存在するが、ダムそのものの造形美や構造などに関する関心が高まっているのであって、なかなかその裏に存在した人々に思いを馳せる機会が多いとは思えない。

しかし、その地に暮らしていた人たちにとっては奪われた日常であり、ある意味では震災と同じような災害ともいえるできごとである。第一、ダム建設話が持ち上がったところから村は推進派と反対派が分裂状態になるなど、多くの課題を抱える。そして震災と決定的に違うことは、元いた場所には二度と戻れないという現実である。

ダムは国策であるものの、建設された時期には幅があり、戦前から工事に着工するダムもあれば、平成に入ってから完成するダムも存在する[286]。また、ダムは日本の経済成長にふりまわされた地域の歴史を語る一つのできごとであるが、完成した時期によるのか、関係する博物館ができる場合とできない場合が存在する。さらには、ダムに沈む集落が村のどれくらいの割合を占めるのかといったことにも博物館の有無が左右されているようである。村の範囲が大きく、湖底に沈む集落の割合が小さいと、博物館があってもあまり大きくそのことに触れられないケースがある他[287]、湖底に沈んだ集落があったということを知ってもらう施設や、ダムのことには触れずにそこに暮らしていた人々の生活を伝える施設など、その在り方も様々である。

ここでは、そういった状況も踏まえ、博物館に求められている役割について考えることのできる事例や、人々の記憶との関係を考えることに繋がる事例について確認していきたい。

なお、本節に関わるダムに沈んだ村をテーマとする展示施設の調査一覧は表 11 のとおりである。

第 1 項　具体的な展示の事例

・徳山民俗資料収蔵庫【表 11№3】

こちらは、徳山ダム建設によりダムの底に沈んでしまった、昭和 62 年 3 月 31 日に廃村となった旧徳山村についての展示と、徳山村で使われていた民具が収蔵展示されている。展示室には村内にいた全世帯の家族写真も掲出されている。

また、国指定有形民俗文化財である徳山の山村生産用具 5890 点が整然と整理された状態で収蔵管理、展示されている。これらの文化財は、昭和 59 年に個人補償の話が具体化する中、徳山村を記録するものを残さなければならないと、民俗資料、古文書、考古資料などが集められる中から生まれたものである[288]。

しかし、問題はそれだけではなく、村がなくなり、村民が誰もいなくなる中で、国指定有形民俗文化財として指定を受けた資料の保存施設をどうするか、どう管理するのか、そして何より誰が管理するのかという問題が発生する。結果、編入合併先の藤橋村（現揖斐郡揖斐川町）の理解を得て、現在の資料館へと繋がるとのことであるが[289]、村がなくなるということは一大事である。

地域の記憶の残し方として、村がなくなる中で、文化財指定により村の記憶を残すことに繋がったというのは貴重な事例であるとともに、管理者さえもいなくなる事態にどう向き合うべきか考えさせられる事例でもある。

・石川県立白山ろく民俗資料館【表 11№10】

手取川ダムの建設に伴い、地域の振興策として昭和 54 年に開館したそうだが[290]、ダムに沈んだ集落の話に特化しているのではなく、手取川ダムの存在する上流域の特殊な生活様式を伝えることを目的として展示はされている。

屋外にはダムに沈んだ集落にあった住宅を始め、もう少し広い山間部全体を地域として捉え、住宅も移築しているが（写真 148)、ダムとの関係はこれらの移築住宅の説明の中で一部触れている程度となっている。

・手取川総合開発記念館【表 11№11】

こちらは石川県の水道部門がやっている資料館で、ダムを開発した側が運営するこれまで見てきた多くの資料館では、ダムの必要性、有益性といった話をしているのに対し、こちらでは事業の概要よりも、「事業にご協力いただいた方々への感謝の意をこめて、郷土のおいたちや、古里の思い出、白山麓の豊かな自然などをご紹介しております」[291]と開発事業の趣旨というあいさつにある通り、ダムに沈んだ経緯も含めた地域の展示となっているのが特徴といえる。

展示によれば、ダム建設計画発表が昭和 46 年、完成が昭和 53 年、この資料館は昭和 57 年にできている[292]。展示室内にはダム建設反対の看板が掲げられている時の写真も展示されている。水没したのは白峰村、尾口村、河内村合わせて 345 戸とあり、ダムと集落との関係は分かりやすくまとめられている。

最後にあるあいさつにも「水没地域をはじめとする関係住民の方がたの尊い犠牲とご協力により（中略）しゅん工いたしました。ここに、関係各位のご尽力に対し心から感謝します」[293]とある。こういう気持ちをしっかりと表明している施設も珍しい。

・只見町ブナセンター付属民俗資料館ふるさと館田子倉【表 11№14】

ここは、かつて田子倉ダムに沈んだ集落の出身者が個人で建てた資料館である。2004 年に開館し、2015 年には只見町で取得し、改装を行い 2016 年に只見町ブナセンターの分館として開館し、現在に至る[294]。

昭和 34 年に完成した田子倉ダムの底に沈んでしまった集落は、50 戸で 290 名が移転したという[295]。他にも、只見川周辺のダム開発の様子が語られている。田子倉ダムはもちろん、滝ダム（水没当初予定 54 戸、後に約 100 戸）、只見ダム（水没 68 戸、移転は 93 戸）とそれらの建設に伴いダムに沈むことになった集落の闘争の様子がそれぞれパネル一枚にまとめられている。

昭和 34 年は高度経済成長期に突入する頃で、まだ戦後復興もままならないはずで、東京オリンピックが戦後復興の象徴なのだから、ダム建設の時期は早い。国のために協力しようという雰囲気もあったというが、反対運動も強かったそうである。一方で電力会社や県からの切り崩しも激しかったとある。限られた説明の中で、そういうやり取りの話にもしっかりと触れられているのは、元々私設の博物館だからなのか、ダムによるお金が入っていないからなのか、それとも時間が経ってから開設されたからなのかと考えてしまう。

資料館を作られた方は、この田子倉地区で実際に生活した記憶のある人がいなくなる前にと、自宅を改装して私設の資料館を開設したとのことである。

第 2 項　ダムに沈んだ村を主題とする展示から見えること

ダムの事例から確認できることは、それぞれ館の立ち位置が異なるということである。1 つには、その存在を証明するものとしての徳山ダムでの事例で、村の記憶を継承すべき住民が、全員離村してしまい、誰がその記憶を伝えていくのかという課題を示している。

また、筆者のような他所から来た者にとって、ダムに沈んだ村の存在を知るための手段として例えば手取川総合開発記念館のような博物館が必要なことはいうもでもないが、一方で、元々その地に住んでいた人にとっては、石川県立白山ろく民俗資料館のように、沈んだという事実より､沈んだことで失われてしまった生活に後から改めて触れられること、懐かしい思い出に触れられることに意味があるように感じる。それは取り扱う内容、テーマが明確であっても、利用する人の立場によって、求められる施設のあり方が異なることを示唆している。

さらに、ダムに沈んだ集落が行政範囲のどれくらいの割合を占めるかによっても、博物館においてダムに沈んだことに対する取り扱いが異なるように感じる。というのも、徳山村のように全村がダムにより失われることになったところでは、村の歴史の全てがダムに関わることになるが、先述した北杜市のように行政面積の一部がダムにより失われた場合は他にも触れるべき歴史があることからパネル 1 枚で伝えるということになることもやむを得ないと考える。

他にも、いつダムができたかによっても博物館ができるかどうかが異なるようである。例えば只見町ブナセンター付属民俗資料館ふるさと館田子倉のように、早い時期のダム建設では失われる生活について博物館をつくって記録し、後世に伝えていくという発想はなかったであろうことが展示からも見て取れる。そのように見ていくと、ダムに村が沈んだら必ずそのことを示す博物館ができるということではないことがわかる。

ダムをめぐっては様々な視点が交差することから、自分たちがここに住んでいたという

ことを知ってもらいたいという気持ちが表明されることや、そのことを学びたいという人に向けた展示というものは容易に理解できるが、自分たちの生活の基盤としていた生活はこういうものであったということを子孫に語るための場というものも必要だということを石川県立白山ろく民俗資料館の事例は示している。

ダムの存在は、普段生活をする中ではなかなか意識することがないうえ、流域の人にとっても、ダム建設に伴い離村した人々のことが広く知られているとは言い難い。そういう意味では、多くの人に知ってもらうために、写真や映画といったアートの分野が大きく貢献することが理解できる[296]。このことは戦争や公害の事例にも通じる部分がある。

第 6 節　現在生きている人々が経験したできごとを、経験していない世代の人々に伝えていく博物館活動から見えること

本章を通して確認してきた負の記憶を伴うできごとは、現代史を語る上でも大きな位置を占めている。そのため、負の記憶を主題とした展示施設が多く作られているとも考えられるが、第 2 節で触れたように、これらのできごとは常設展示の中ではあまりスペースを取って語られていない状況が存在する。戦争については全国的な問題であることや、戦前と戦後とでは社会を取り巻く状況が大きく変化することもあり、比較的多くの博物館で取り上げられてはいるが、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの自然災害については、スペースが十分に取られているとは言い難い現状がある。

このことは、本稿の大きなテーマともいえる、いつの時代までを常設展示で取り上げるのかということにも関係する。特に現代史に繋がる負の記憶は、政治的な立ち位置を明確にせざるを得ないということもあり、展示内容として避けられているという可能性も否定できない。

また、戦争の事例で確認したように、被害の立場に徹することでようやく展示として語ることができるという面が、少なからず公立館では見られる。立場という面でいうなら、戦争では公立館を中心に被害者の立場に立つことから加害責任についても触れるべきだという議論が起きることがあるが、公害の場合だと、行政が関係者でもあり、その行政が展示を行う際にはその立場が不明確になりやすい状況も見て取れた。民間の立場、とりわけ被害者の対場から公害に向き合えば、被害者の側からの展示に徹することもできるが、こと公立館においては、被害者や加害者という立場を見せずに、第三者的な立場に立ちつつ、展示の後半に至って行政としては公害発生後に環境対策に力を入れてきたということを強調する事例がほとんどである。それはある種の行政のＰＲ施設と化している面もあるが、その時に行政は環境学習という視点を前面に出すことで、公害問題から視点をずらしているようにも感じられる。これらの事例は、まさに博物館の持つイデオロギー的な面が強く表れているといえるだろう。

問題は、行政が行う展示であることから、来館者は一種の公的な見解だと勘違いをしてしまう可能性が高いことである。私設博物館がある水俣病やイタイイタイ病のような公害であれば、私設の博物館にも足を運ぶことで、被害者側からの視点なども学ぶことができるが、私設の博物館は被害者団体が運営していることから、そこに政治的な運動を行っているイメージがついてしまうのか、かえって一般の来館者から敬遠されるケースもあるのではないかと考える。とはいえ、少なくとも公害に関しては、行政が行う展示にも政治的

な意味合いが強く表れていることをここでは確認しておきたい。

ダムに沈んだ村の事例では、ダムに沈んでしまった村の住民側の視点で語られるものが比較的多く存在するが、中にはダムを作った側の視点に立ち、ダムに沈んでしまった元の住民に対して感謝の意を表する手取川総合開発記念館のような事例が存在した他、沈んでしまった村を紹介するのでもなく、その地域に元々存在した生活の様子を民俗学的に示すことで、元の住民が当時の生活に立ち戻ることができるような石川県立白山ろく民俗資料館があるなど、その在り方は多様な状況を示している。さらに、それらの中にも公立のものと私設のものとが存在し、行政としてダムに沈んだ村の歴史を語る場合と、そういった公的な形で記憶を伝える施設がないことから私設博物館を立ち上げる事例までさまざまな事例が存在する。この違いについては、ダムに沈んでしまう範囲が行政面積のどれくらいの割合を占めるのかといったことや、ダムができた時期差による影響があるのではないかという予測は立てたが、その検証までは行えておらず、今後の課題としたい。

なおダムに沈んだ村をめぐる立場は複雑で、特に来館者がそういった沈んでしまったという事実を学びに来る場合においては、沈んだ村の人々は展示を見られる側になるが、その展示施設そのものが、自分たちがそこで生存していたことを示す生存証明として成立している場合もあるし、時には沈んでしまったということを抜きにして、懐かしい生活の様子に触れることができる場として機能することも確認できた。

この他にも、負の遺産を通して確認してきたものの一つに語りの装置としての展示というものが存在する。戦争でいうならのぼり平和資料室や公害でいうなら水俣病歴史考証館、前章で取り上げた東日本大震災でいえば閖上の記憶などもそれにあたる。語りの装置としての展示は、直接または間接的にその体験をした人から話を聞くことができることから、来館者の受ける印象は大きくなる。特に、意識を持って訪れる来館者にとっては大きな意味を持つことになる。こういった語りの装置として機能するのは、人々の記憶にある時代を展示するからこそ可能となっている方法といえる。

今後、戦争を直接知る世代の方々がいなくなってしまう時代を見据え、ひめゆり平和祈念資料館のように取り組みを始めた施設もあることから、そういった取り組みがうまくいくかどうかは今後検証していかなければならないが、1 つの成功事例としては、水俣病歴史考証館を挙げることができる。水俣病歴史考証館では、被害者の方々を支援し続けてきた直接の被害者ではない世代の人たちが、実際に被害者の方々と触れる中で得た自身の経験を基にした語りを行っている。自分の言葉として語りかけるということは、自分事化ができていることに他ならないし、記憶の継承もされているといえる。さらに支援をしている方々の語りは、直接の体験者からではないにしても聞く側の心に直接働きかけることにもなり、来館者が自分事として水俣病をどう捉えるべきか考えるきっかけとなる。そういう意味でも語りの装置としての展示が持つ可能性を強く示している。

さらに、負の記憶として語られるできごとには、必ず奪われた生活というものが背後に存在する。奪っていったできごとと、その後の地域での動きなどはもちろん大きな意味を持っているが、その背景にある失われた生活というものの存在により、改めて日常生活というものの持つ意味が見えてくると考える。奪われた日常なくして負の記憶はありえない。水俣病歴史考証館でも、その奪われる前の生活が展示されているし、ダムに沈んだ村にあってもその展示主体はダムに沈む前の生活の様子である。こういった普段気にすることの

少ない日常の生活にこそ尊い価値があることを、これらの事例は改めて示している。

これまで確認してきたように、負の記憶を展示することは、経験をした人がそのできごとを語るための装置として重要であり、直接語ることができなくなったとしても、その思いや語りを引き継いでいくことができる場であり、将来に向けて重要な意味を有していることが確認できたところである。

これらの博物館は負の記憶についての学びのきっかけを与える場でもある。ただし、公害について述べる論文にもあったとおり、必ずしも多くの人に知られているとはいえない施設が多く存在する。それらの施設を知ってもらうためのきっかけも必要になる。

調査を行った施設の中でも、映画の関係で来館者が増えたといった事例は多く聞かれた。例えば、映画『永遠の 0』[297]のロケ地となった筑波海軍航空隊記念館で来館者が増えたとか、映画『男たちの大和／YAMATO』[298]で呉市海事歴史科学館の人気が出たなどの事例である。

執筆時で言えば、映画『MINAMATA　－ミナマタ－』[299]が公開されており、水俣病についても関心を持つ層が増えるのではないかと期待される。もっとも水俣病は、この映画の基となったユージン・スミスによる写真集『MINAMATA』[300]が芸術を通して人々に与えた影響は大きいし、同じ水俣病であれば、文学作品である石牟礼道子の『苦海浄土　わが水俣病』[301]なども知られており、芸術がこういったできごとに対する興味を持つきっかけとなることはこれまでも多く存在する。

他にも広島の原爆なら、土門拳による写真集『ヒロシマ』[302]や石内都による写真集『ひろしま』[303]などの写真表現であるとか、丸木夫妻による≪原爆の図≫[304]などの絵画表現であるとか、ダムに沈んだ集落であれば増山たづ子による写真集『故郷　私の徳山村写真日記』[305]などの写真表現や、映画『水になった村』[306]などの映画表現、アートイベントであるが天若湖アートプロジェクト[307]などのアートプロジェクトなども存在する。

それは、例えば日本人にとってそれほど馴染みがあったとは思えないタイタニック号の沈没事故について、映画『タイタニック』[308]によって人々に知られるようになったように、芸術作品としてそういった歴史に残るようなできごとを取り上げることで、多くの人に知ってもらうきっかけとなることはこれまでも知られてきたところである。

そういった歴史的なできごとと芸術の関係について考えるなら、テーマとして取り上げるできごとを知ってもらう入口としてのアートという存在があって[309]、それらをより深く学ぶきっかけを与えるのが博物館展示であり、さらにそういったできごとについて深く学ぶために調査報告書や学術論文、書籍などが存在するともいえる。加えて、人々の記憶にある時代であれば、場合によっては聞き取りというものも効果を発揮するだろう。

もちろん、実際にはたまたま手に取った本でそのできごとを知ることもあれば、博物館の展示が初見となることもありうる。ただ、博物館だけではさらなる広がりをもたせることは難しい。博物館に足を運ぶ層は一定の限られた人になっている現実があるからだ。アートにも幅はあると思うが、楽しさも含めより堅さのない形で接することができるツールであり、客層が異なることも含め、博物館は今後アートとの積極的な関わりを持つことも求められている。

そうすることで、展示の自分事化にもつながる可能性がある。博物館の展示はやはりどちらかというと堅くて難しい、とっつきにくいというイメージがついて回る。そこで、実

際に起きたできごとなどをアニメ仕立てにすることで、子どもにもわかりやすく伝えることができるのではないかといった試みもされている。これは東日本大震災を扱う展示施設の事例であるが、石巻市にあるMEET門脇では、震災の体験をアニメ化したものを展示室内で上映している[310]。これは子ども向けの防災教育の一環ということだが、他にもゲームの要素を取り入れて考えてもらうなどの取り組みは、日本科学未来館で行われていた「震災と未来」展でも確認できた。阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターでもHUGというゲームを作成し、遊びながら災害について考えるキットを開発するなどしており、広い意味でのアートとの関わりが自分事化にもつながるものと考える。

終章　博物館で現代資料を扱う意味、可能性、今後の課題

これまでに現代資料を用いた展示や現代のできごとを取り扱った博物館での展示について確認してきたが、ここではこれまで確認してきたこれらの取り組みについて、いくつかの視点から整理していきたい。それらの作業を通して、博物館で現代資料を扱う意味や可能性、今後の課題について検討していきたい。

第 1 節　各章のまとめ

本稿の目的は、現在生きている人々の記憶にある時代を博物館でどう取り扱っているのかを調査し、今後地域博物館で人々の記憶にある時代の資料をどのように取り扱い、どのように展示を行っていくべきかを考察していくものである。調査対象としたのは、昭和 30 年代以降の生活の道具を用いた展示の事例【モノを中心とした事例】と、戦争や災害などのテーマを取り扱った展示施設での事例【できごとを中心とした事例】である。

序章ではこの目的を示すとともに、考察を進めるにあたり意識していく視点を 2 点提示した。1 つ目の視点は、「フォーラムとしての博物館」という概念である。2 つ目の視点は「自分事化」である。これらの視点から、モノとできごとに関わる展示活動を確認していくことで、現代資料を博物館で扱うことで得られる効果、可能性を指摘し、今後の博物館活動に活かすとともに、使用経験のある資料との出会いを通じた対話の機会の創出の可能性、新たな博物館活動の目的、意義について見出すこと、さらには使用経験のある現代資料との出会いにより想起される記憶をうまく形にしていくことで、博物館をめぐる立場の転換を企図し、これまでにない博物館活動のありかたについて考察していくことを確認した。そのうえで、人々の記憶があればどんなモノであってもエピソードを添えることで博物館資料にすることができることを指摘した。

第 1 章では、懐かしい記憶の想起に繋がる昭和 30 年代以降の道具を用いた常設展示についての調査を報告した。調査の初期の目的の中に、平成の展示は行われないのかというものがあったが、全国の博物館の事例から考察する限り、平成の時代を再現展示の形にしていくことの難しさを指摘した。また、道具だけの展示より再現展示の方が懐かしさの想起に繋がりやすいことを確認した。また、何気ない日常を記録することの意義について指摘するとともに、道具以外にも音楽や映像も懐かしい思い出に直結するコンテンツであることを指摘した。

第 2 章は、企画展示における現代資料の取り扱い状況を確認した。平成の時代は、道具のデジタル化が進んだ時代であり、道具の変遷という視点からは平成の頃は展示に値する時代であることを指摘した。特に、ファミコンから続く家庭用ゲーム機に対する需要が現段階では大きく存在することも確認した。少なくともファミコン現役世代である今の 40 代なら懐かしい感情が大きく湧き上がってくることは想像に難くない。また、昔の道具展においても現代資料に対する意識が働いていることがうかがえた。福井県立若狭博物館のように洗剤一式を買いそろえるという大胆な事例も確認できたところである。さらには平成展を取り上げたが、平成展からは共通項を見出すことはできなかった。ただ、平成が終わり令和の時代を迎え、平成という時代に大きな関心が払われたことと、そういった展示を通して平成を懐かしむという動きが見られたことは間違いない。こういった事例を確認していくと、懐かしさは 40 代くらいから積極的に語られるようになるのかもしれない。こ

のことは、展示でこれらの世代の人々にとって懐かしさを生み出すことに繋がっている背景に、40代くらいの学芸員が展示の主担当として企画の中心を担えるようになってきていることも関係している可能性を指摘した。

第3章は、高齢者の認知症予防として昭和30年代の道具を用いる回想法の取り組みについて整理した。まず北名古屋市における地域回想法と北名古屋市歴史民俗資料館との関係を確認した。その後、福祉施設などで行う活動に対し資料を貸し出す事例、博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法、回想法の視点を提示した常設展示、昔の道具展で回想法の視点を提示している事例について確認した。そのうえで、その応用として、回想法を懐かしい思い出を語るためのツールとして捉え直した活動の実践報告を行い、それらを通して世代を越えた対話の機会を創出することの可能性について指摘した。ただし具体的な方法論の確立にはまだ課題が存在することも指摘した。

第4章は、現在進行形のできごとに向き合う博物館活動として、新型コロナウイルスと東日本大震災に向き合う博物館の事例を確認した。これらからは、渦中にあるうちに、日々消費されてしまうエフェメラ資料の収集に取り組む必要性と、資料収集に合わせて、関連するエピソードを収集することの重要性を確認した。また、東日本大震災をテーマにした展示施設と博物館の活動の違いについても検討し、博物館という施設が展示を通して来館者の心に何かを伝えるということを実践する場であることを改めて確認した。さらに震災というテーマを前に、専門に関わらず意識的な活動を行ってきた学芸員の姿勢と心意気が博物館を博物館たらしめていることが確認できた。

第5章は、戦争、公害、ダムに沈んだ村などの一昔前のできごとで、まだ当時のことを経験した人が健在な中で博物館がこれらのテーマに対してどう向き合っているのか確認した。これらの事例は、様々な立ち位置からの展示がなされており、展示をする側の視点ならびに来館者の視点の整理が必要となった。

戦争、公害、ダムに沈んだ村については、展示における立ち位置が複雑で、特に公害は行政が関係者であることから、イデオロギーが強く表明されていることを確認した。また、具体的な事例を通し、語りの装置としての展示の重要性を指摘した。戦争でも公害でも震災でも、そのできごとを経験した人が展示を通して語ることで、来館者との対話を行っている。対話を行うことはまさにフォーラムとしての博物館で目指すところである。

語りの装置として語り部が活躍する展示施設へ来館することは、そのできごとを体験した人から直接話を聞くことに繋がる。その時得られるインパクトは、一人でただ展示を見た時と比べて大きなものであり、話を聴いた人の意識にも残りやすく、共感に繋がる可能性も高い。さらに、語りの装置としての展示は、水俣病歴史考証館での事例から、記憶の継承に繋がる可能性も高いことを指摘した。他にも、負の記憶の背景に、奪われた生活が存在することを確認した。そのうえで、これらのできごとを多くの人に知ってもらうためには、芸術との関わりを深めることも必要なのではないかと指摘したところである。

第2節　今後建設予定の博物館における人々の記憶の取り扱いとの関係

これまで実際に行われている展示事例を中心に確認作業を行ってきたが、ここでは改めて序章で取り上げた、（仮称）豊田市博物館の計画について確認をし、これまで確認してきたことが、どれほど実現に向けて議論されているのかということについて見ていきたい。

第１項　『（仮称）豊田市博物館基本計画』に見る人々の記憶と博物館活動の関係

『（仮称）豊田市博物館基本計画』[311]によると、「新博物館では、豊田市で暮らしてきた、暮らしている人々の記憶やライフヒストリーを集積するとともに、市民自らが思い思いの方法で『とよた』に興味を持ち、楽しみながら探求し、伝えることができます。」[312]という記載が確認できる。

そういった方針を踏まえ、収集・保存事業として、現在の市民と過去の人々の記憶やライフヒストリーを語り投稿する“未来への記憶”を収集し、それらの情報をデジタル化し、検索できるアーカイブを構築するとうたわれている他、展示・公開事業では、常設展示において“未来への記憶”を活用し、モノと人の記憶で構成する展示を行うことが示され、さらに、出会い・交流事業では、思い出・記憶・ライフヒストリーを広く共有した“未来への記憶”を展開し、“未来への記憶”を閲覧・投稿するための設備を用意することも示されている[313]。

より具体的には、収集活動では館内での投稿システムによる投稿の他、個人のパソコンやスマートフォンから投稿できる仕組みについても検討し、管理についても収集した情報をデジタル化し、分類したうえでデータベースを構築することや、公開・活用としては、館内の閲覧ブースでの情報端末での閲覧の他、紙媒体によるシートの作成や情報誌の発行、さらに人による発信として、語り部、紙芝居、寸劇、発表会、講座での活用を示し、加えて常設展示などにおいて実物資料とともに紹介するとある[314]。

さらに展示計画では、展示の基本方針として「市民の記憶や記録など『人』と『暮らし』を伝える展示」というものを取り上げ、「過去だけでなく、今を生きる人々やその暮らしについても発信します」「展示資料と併せて、市民の体験や出来事、先人たちの想いを収集した“未来への記憶”を紹介するとともに、モノの背景に存在する人やストーリーに着目し、豊田市ならではの情報を発信します」などとしている[315]。

具体的な展示室のイメージでは、導入展示部分について、「モノ（＝資料）と人の記憶で構成する導入展示」として「実物資料と共に、関連する市民の記憶や記録を展示し、モノの背景にある市民や先人たちの姿を描き出します」[316]とか、「“未来への記憶”で収集した情報をモノと併せて展示することで、ストーリー性や親しみを生み出します」[317]といったことを掲げ、加えて「使い方がわからない民具や撮影場所が特定できない写真などを展示し、利用者から情報や意見を収集するなど、新たなコミュニケーションの場としても活用します」「記憶や懐かしさを呼び起こす回想法の展示としても利用でき、世代間交流の創出に寄与します」[318]などとしている。

テーマ展示部分では、「人が見える、人が語る展示」として「展示テーマの解説文や資料のキャプション（写真や図版の説明文）は、市民の記憶や先人たちの記録を活かして構成・展示します」「展示資料に関する情報や思い出を自由に書き込んだり、集まった情報によりキャプションの内容が更新されたりするなど、利用者が展示に参加できる仕組みを検討します」[319]と掲げている。

ここでは、人々の記憶に関わる部分の一部を抜き出したところではあるが、展示全体に人々の思い出を活かしていくことが具体的な方法とともに示されている。この計画で示されていることの多くは、これまでの調査から得られた知見をどう具体的な博物館活動に反映していくかという方向と共通するものと考えられることから、具体的にどのような形で

展示が実現されるのか筆者個人としては楽しみにしているところである。そして、この計画を読む限り、これまで筆者が検討してきた方向性について、これからの新しい博物館の在り方として目指すべき方向を向いていることをある意味では証明していると捉えることができよう。

第２項　『（仮称）豊田市博物館基本計画』から見えること

豊田市における計画や取り組みについてはこのようなものであるが、本稿を通して確認してきたように、モノとともにエピソードを収集することは重要である。そうやって収集されたエピソードに触れることができることや、人々の記憶に繋がりやすい展示を通した回想法の活用も、本稿で確認してきたことがらを具体的に実現するものとして大いに期待できる。ある意味では、本稿を通して検討してきたことの多くが実現されようとしているともいえる。

しかし、そういう状況にあるからこそ本稿を通して考えてきた現在生きている人々の記憶にある時代を博物館でどう取り扱うのかということや、現代資料と懐かしい思い出の関係についてもう一度考えてみたい。

１つは、語りだしたくなる仕掛けをどう作りだすかということである。本稿では、第３章において、展示資料の近くに関連する懐かしい思い出を呼び覚ましやすい質問を掲出する方法を提示した。そういう意味では、（仮称）豊田市博物館ではどのような形で人々の記憶を呼び覚ます工夫を行うのか注視していきたい。

２つ目は、収集したエピソードの活用についてである。エピソードを検索することで映像や音声を見たり聞いたりするシステムでは、多くの場合来場者からスルーされてしまう可能性があることは、これまで多くの博物館で確認してきたことである。本稿ではそういったことを踏まえ、比較的短文のエピソードを資料と連動する形で展示することが効果的であることを広島平和記念資料館の事例を通して指摘したところである。モノに適度な長さのエピソードを添えることで、懐かしい思い出を呼び覚まし、博物館の展示に共感することができ、自分事化へと繋がりやすくなると考える。そのあたりの工夫が、実際にどう行われるのかについても関心を持っていきたい部分である。

いずれにしても、2020 年を過ぎてもフォーラムとしての博物館の視点が有効であり、かつ、博物館において現在生きている人々の記憶にあるエピソードを収集し、展示に活用しようという流れができていることも確認することができた。

そのうえで本稿との違いを挙げるとすれば、『（仮称）豊田市博物館基本計画』からは、人々の持っている記憶を活用することについては読み取れるが、現代資料をどれほど積極的に収集しようとしているかまでは読み取れない。本稿では、現代資料にこそ懐かしい思い出が詰まっていて、来館者の発話を促すものと考えるが、（仮称）豊田市博物館では、エピソードの収集に関しては多くの分量を割いているものの、どのような資料を集めていくかについてまでは読み取ることができなかった。エピソードを伴う資料は必然的に現代資料だということなのかもしれないが、本稿でいう現在進行形のエフェメラ資料まで意識が及んでいるのかどうかは、注視していきたいところである。

第３節　本稿を通して見えてきたこと

博物館ではまだまだ現代資料を展示する事例は限られている。しかし、実際には平成の

道具であっても、収集活動が行われていることは第 2 章などで確認してきたとおりである。

現代資料が展示されない原因の一つは、現代資料がまだ文化財的価値を認められる存在とはなっていないことが挙げられる。国における文化財政策においても、将来文化財となりうるモノを失われる前から保護していくために、登録文化財制度を導入したのはここ数年の話であるが、現代資料も将来的に文化財となる可能性を秘めている。しかし、現に文化財的な価値が認められないということは、資料収集における優先度が低いことを意味する。ただし、文化財的な価値が認められなくても、モノにエピソードを加えることで、そのものが使われてきた時代を表すとともに、そのモノが使われてきた当時の様子を語る際に必要な博物館資料とすることができることは、序章で述べたとおりである。

現代資料の多くは工業製品であり大量生産されたものである。それゆえ多くの人に使用経験があり、それぞれの人の記憶にも繋がりやすい存在である。特に学校や子どもの頃の経験は、経験する世界が限定的であることから、共有できる要素が多く含まれることになる。同様に、従来民俗学で取り上げてきた衣食住といった分類は、社会生活を送る上で多くの人々の共通項となりうる指標となっていて、これらに関連する道具も多くの場合は共通した使用経験を有し、懐かしい思い出を来館者どうしで共有することも可能であることは第 2 章で述べてきたところである。

共有できる懐かしい思い出は外部に表出すること[320]で、他の人との間で共感を生みやすい存在となる。その懐かしい思い出を外部へ表出するためのきっかけとしては、回想法のように懐かしい思い出をよみがえらせやすい質問を投げかけるという手法が有効であることは第 3 章で述べたとおりである。

展示においても多くの人に使用経験のある現代資料について、できればその使用状況に近い再現展示の手法を用いたうえで、展示された現代資料の近くに懐かしい思い出を語りだしたくなるような質問を掲出することで、展示を通して懐かしい思い出を外部へ表出するためのきっかけを与えることができるようになる。その時、現代資料であれば小学生から高齢者まで懐かしい思い出を聞き出せるような優れた質問を設定することができたならば、それにより世代を越えた対話を生み出すことも可能となる。対話は一義的には一緒に来館した人や博物館の職員などと行うことになるが、思い出を記入してもらい掲出することができれば、それは他の来館者との対話にも繋がる。

人々に使用経験のある現代資料は、これまであまり意識されることもなく、収集の対象になっていなかった可能性もあるが、それぞれのモノには人々のこだわりや好みも含め、懐かしい思い出に繋がる可能性を持つ資料であり、使用に伴うエピソードが存在するはずであり、そういったエピソードとともに資料を収集することで博物館資料化できる。そうやって収集された資料は、将来の人にとって、2021 年なら 2021 年の日常を研究する際の貴重な資料にもなりうるのである。

さらに、収集した資料を展示することで、展示資料を通した対話を生み出す可能性を指摘し、資料とエピソードを合わせて展示することにプラスして、思い出話が広がるような回想法を意識した質問を付すことで、より積極的にその思い出を活用していくことができるのではないかと具体的な現代資料の活用法を提案するものである。

その時の 1 つの具体的な方向としては、それぞれの人にとって懐かしい思い出を語るための装置となるような展示の工夫が挙げられる。そうすることで、博物館に新たな役割を

与えることができるのではないだろうか。語りの装置として博物館の展示が機能すれば、回想法のように脳を活性化させる効果も期待できるし、記憶を継承していく効果も期待できる。さらには、閑上の記憶のようなセラピーとしての効果があることも確認した。語り伝えなければならないほど社会に大きな影響を与えるようなできごとについては、本来地域博物館でも展示すべき内容ではあるが、第4章、第5章で確認したように、そのできごとを伝えるための展示施設が作られているのが現状である。と同時に、普段の何気ない日常の記憶もまた、本来伝えるべき歴史の一部であることについても確認してきたところである。

こういった活用を行うことで、地域博物館は来館者にとってこれまでの何か新しいことを学びに行く場から、自分の知っていることを語りに行く場へと転換させるとともに、展示を見る側だった来館者を展示の世界に引き込み、時に展示する側に、時に展示される側にと自由にその立場を行き来できるようにする効果があるのではないかとフォーラムとしての博物館の視点を踏まえて提起するものである。

地域博物館にとっては、思い出を語り、掲出する場として機能するようになれば、それは博物館が従来担っていた何か知らないことを学ぶ場としての機能からの解放を意味する。すなわち、地域博物館が懐かしい思い出を語る場としての新たな役割を得たことになる。従来からある何か知らないことを学ぶ場としての機能が不要になったということではなく、そこに新たな機能をも加えることができ、機能の拡張が果たせるというのが筆者の考えである。

こういったことを可能にするためには、懐かしい思い出に繋がるモノの収集をまず行う必要がある。失ってしまう前に、今という時代を語る上で欠くことができなくなる資料となりうるものに目をつけ、収集を始める能力がこれからの学芸員には求められる。また、そうやって資料を収集保存していくことは、自然災害等で人々の生活が失われてしまった際には極めて貴重な資料となる。社会を大きく揺るがすような大きなできごとが起きると、当然その前と後とでは生活もまた大きく変化が生じることになる。失われる前と後とを比較することは東日本大震災の事例でも良く用いられる手法である。

新型コロナウイルスによって、何気ない日常に改めて目が向けられるようになった今こそ、現代資料の収集に取り組むべき時であって、そういった何気ない日常を感じることのできる博物館の展示づくりを行うことで、現代資料を通した博物館機能を拡張する可能性がある。

これまでも民俗学の分野では、人々の記憶を聞き書きにより記録し、人々の生活のあり様を見つめてきた。今改めて博物館が人々の生きている時代の記憶を記録する意味は、まさに現代を生きている人々のあり様を将来の歴史に反映することである。後藤和民が言う「名もなき民衆の歴史」[321]を叙述するには、当時を生き抜いてきた人々の歴史について、その当時を知る人の生の証言を基に構成していくことが現代史を語る上で重要な位置を占める。

博物館で現在生きている人々の記憶にある時代を記録する意味はこういった所にあると考える。

第4節　全体のまとめと残された課題

本稿では、博物館における現代資料の取り扱いについて、収集や展示の視点を中心に確認してきた。人々にとって使用経験のある現代資料は、これまであまり意識されることもなく、収集の対象になっていなかった可能性もあるが、日用品や日用雑貨は日々消費され失われていくものであるものの、それぞれのモノは人々のこだわりや好みも含め、使用する人にとって懐かしい思い出に繋がる可能性を持つ資料といえる。さらに、それぞれの人にエピソードがあるはずで、そのエピソードとともに収集することで普段は目もくれない何気ないモノであっても、博物館資料化できるのである。

普段意識しないような何気ない日常は、震災や新型コロナウイルスのように社会生活に大きな変化をもたらすできごとに直面した時、改めてふりかえられるものであるが、失われてから収集を行うことは困難を極める。今当たり前に存在しているうちに博物館が意識を持って収集にあたる必要があるだろう。そうやって収集された資料は、博物館で収蔵するという性質上、原則として半永久的に収蔵され、保存されることになる。そのことが将来の人にとって、2021 年なら 2021 年の日常を研究する際の貴重な資料にもなりうる。

また、収集した資料を同時代において展示することは、展示資料を通した対話を生み出す可能性も秘めている。そういった活用を図るには、展示にあたって、同時に収集したエピソードを添えることが、展示を見た人の懐かしい思い出を想起させることに役立つことは間違いない。そうやって懐かしい思い出を想起させるだけでなく、より積極的にその思い出を活用していくことも可能である。それは、展示資料やエピソードにプラスして、対話を生み出すことに繋がりやすい質問を付すという方法である。懐かしい思い出を引き出す質問と、そうやって引き出された思い出を語ることや、記入してもらうことで、他の人の思い出を刺激する仕組みを、例えば思い出掲示板のようなものを用意することが、より効果的と考える。

このようにして新しいエピソードを収集し、世代を越えた対話に繋がる質問を置くことで、博物館はこれまでの何か新しいことを学びに行く場から、自分の知っていることを語りに行く場へと転換させるとともに、展示を見る側だった来館者を展示の世界に引き込み、時に展示する側に、時に展示される側にと自由にその立場を行き来できるようにする効果をも期待することができるのではないだろうか。

新型コロナウイルスのように、全国、いや、全世界規模で社会生活に影響を与えたできごとは数十年に一度あるかないかというできごとではないかと思うが、そういうできごとに直面したことで、これまでの日常に目を向けることになったのも事実であり、こういう時を活かして、新しい博物館活動を起こしていくことが今の時代に期待される。

収蔵庫のスペースの問題もあり、何でもかんでも収集することが難しい状況にあることも理解するが、すべてを収集しなくても、その中から特徴的と捉えられることがらにフォーカスをして、そこから収集、展示を行うことも良いだろう。

豊田市のように新しい博物館建設がなされ、具体的な活動としての実践まで規定されればこれほど素晴らしいことはないが、そうでなくても福生市郷土資料室での実践例のように展示スペースのごく一部を使う形でもいいし、もしかしたらこれからの時代はデジタルコンテンツを用いた活動や SNS を用いた思い出の収集活動など、新しい活動を行うこともできるのではないだろうか。

博物館において現代資料を取り扱うということは、ほんの一工夫することで、同時代に

向き合い、未来の来館者とも向き合うことに繋がる。そして、現代資料をエピソードとともに収集し、対話のきっかけ作りとして意識的に用いることが、これからの現代資料を取り巻く博物館活動となりうるのである。

博物館は従来、知らない何かを、新しい何かを学びに行く場所として機能してきた。そういった機能はこれからも必要なことではあるが、これまで確認してきたように、現代の博物館にはフォーラムとしての博物館としての機能が求められており、これまでの展示を見る、見られるの関係ではなく、展示を通して人と人とが見つめ合い、語り合う、そんな場としていくことが、これからの博物館に求められている現代的な意義として存在するのではないだろうか。

今後の課題としては、人と人とが見つめ合い、語り合う場となるよう、具体的な実践としてどのように取り組んでいくべきかということが挙げられる。筆者はまず、回想法の応用実践を継続し、来館者の参加をより進めるための技術的な改善に取り組む必要があるが、合わせて、こういった視点を持つ人々との様々な交流を通した実践方法の開拓を行っていきたい。

さらに、筆者の勤務する福生市郷土資料室の入る中央図書館の建物はこれから大規模な改修工事が予定されており、それに伴い、現在常設で展示している展示内容についても大幅な変更を余儀なくされている。本研究を通して得られた知見を少しでも実際の展示の中に反映することもまた具体的な取り組みといえよう。

その際には、ただ懐かしいだけではない、地域的な特徴を示せるような形に持っていくことが求められよう。例えばそれは、空襲の話でも地域ごとの差があり、公害でも地域ごとに特徴があった。そういう地域的な特徴を活かしながら、懐かしさがよみがえれば、語り出す内容も自ずと地域性のある思い出になるはずだ。そういう意味でも、地域性のある再現展示ならびに回想法的な視点を示した質問の設置などを試みてみたいと考える。

具体的には、四日市公害と環境未来館の話の中で、註でではあるが、防災行政無線のスピーカーを窓の外に掲出するという方法について述べたところである。さらに言うなら、横田基地を抱える町として飛行機の姿なども掲出すると、それだけで福生でしか語れない共通の思い出を語ることができる可能性が高い。スピーカーからは夜9時の放送が鳴ったら、「もう9時になったから寝なさい」と言われて育った福生の子どもはどれ程いるだろうか。飛行機の音が大きくて、テレビドラマの良いところの会話が聞けなかった経験をしたことはないだろうか。毎日夕方5時に横田基地から君が代とアメリカ国歌が流れるのを聞いている人もたくさんいるはずである。そういった福生ならではの思い出を共有し、語り合える場はよく考えれば確かに存在しない。福生はよくある住宅地だと思っているが、よくある住宅地ではなさそうである。そういう地域の記憶を集めておくことは、地域博物館の重要な役割だ。

ただ懐かしいのではなく、福生ならではの懐かしい思い出がよみがえり、語りたくなり、語ったことで共感を生みだすような展示を作ることは本研究を通して得られた一つの成果である。名もなき庶民の歴史を叙述しようとすれば、やはり地域の人の話に耳を傾けなければならない。そういうきっかけを与えるエピソードや質問を設置しながら、人と人とが見つめ合い、語り合う場となるよう努めていきたい。

最後になるが、本稿作成にあたりこれまでの間、多くの博物館を調査する機会を得た。

取り上げるべきテーマが多岐にわたることもわかり、その分だけ数々の視点を得ることができた。多くの事例を確認する中で得られた知見、疑問、見えてきた課題は数えきれない。それらのほとんどに手を付けることができないまま筆をおくことになった。ついては、今後さらに研究を進めながら、こうして得た知見を基に、よりよい博物館活動を見出すべく地域博物館の抱える課題に向き合い続けていきたい。

（138722 文字）

謝辞

本研究ならびに本稿執筆にあたり、多くの博物館関係者の協力を得ました。とりわけ福生市郷土室の職員には、本稿で報告している実践活動において、また、本稿執筆にあたり様々な調整に応じていただきました。さらに、本研究における博物館の調査にあっては、本学の 2020 年度大学院 研究・制作・発表助成を受け実施することができました。様々御指導いただいた先生方をはじめ御支援いただいた全ての方に、この場を借りて感謝の意を表します。

[1] 寺農織苑「玩具の保存と継承　－ファミリーコンピュータを例に－」神奈川大学日本常民文化研究所編『民具マンスリー』第 53 巻 8 号、神奈川大学日本常民文化研究所、2020 年、pp. 1-10
[2] 同論文 p. 4
[3] 青海伸一「常設展示部分における展示内容のリニューアルについて」東京都三多摩公立博物館協議会編『東京都三多摩公立博物館協議会会報　ミュージアム多摩』第 37 号、東京都三多摩公立博物館協議会、2016 年
[4] 吉田憲司『文化の「発見」　現代人類学の射程』岩波書店、1999 年、p. 216
[5] 福島県立博物館令和 2 年度冬の企画展「震災遺産を考える　次の 10 年へつなぐために」展示パンフレットより
[6] 林美帆「公害資料館利用拡大の試み　－西淀川・公害と環境資料館と公害教育－」『アーカイブズ学研究』第 23 巻、日本アーカイブズ学会、2015 年、p. 66
[7] 志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』岩波書店、2020 年、p. 10
[8] 松浦雄介「思想の拡張　文化遺産は誰のものか」木村至聖、森久聡編『社会学で読み解く文化遺産　新しい研究の視点とフィールド』新曜社、2020 年、p. 39 他
[9] 高野光平『昭和ノスタルジー解体　「懐かしさ」はどう作られたのか』晶文社、2018 年他
[10] 荻野昌弘編『文化遺産の社会学　ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社、2002 年
[11] 同前
[12] 木村至聖、森久聡編『社会学で読み解く文化遺産　新しい研究の視点とフィールド』新曜社、2020 年
[13] 同前
[14] 長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年
[15] 後藤和民「歴史博物館」新井重三編『博物館学講座　第 1 巻　博物館学総論』雄山閣、1978 年、p. 148
[16] 金子淳『博物館の政治学』青弓社、2001 年、p. 10
[17] 柘植信行「歴史博物館」加藤有次、鷹野光行、西源二郎、山田英徳、米田耕司編『新版・博物館学講座　第 5 巻　博物館資料論』雄山閣、1999 年、pp. 228-229
[18] 同書 p. 229
[19] 同前
[20] 今和次郎『考現学　今和次郎集』第 1 巻、ドメス出版、1971 年、p. 42
[21] 伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館、1993.1 など
[22] 加藤幸治『文化遺産シェア時代　価値を深掘る“ずらし”の視角』社会評論社、2018 年、pp. 123-125
[23] 国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か　国立歴史民俗博物館フォーラム　歴史系博物館の現在・未来』アム・プロモーション、2003 年
[24] 久留島浩「国立歴史民俗博物館フォーラム『歴史系博物館の現在・未来』開催にあたって」国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か　国立歴史民俗博物館フォーラム　歴史

系博物館の現在・未来』アム・プロモーション、2003 年、p. 12
[25] 吉田憲司前掲書、p. 216
[26] 吉田憲司「ICOM 京都大会を振り返る－成果と課題」『別冊博物館研究』公益財団法人日本博物館協会、2020 年、p. 48
[27] 吉田憲司前掲書（4）p. 219
[28] 同書 p. 209
[29] 「記憶と記録とエピソード展　茶碗」あいさつ文より
[30] 笠井博子編『別れの博物館　あなたとわたしのお別れ展』展示図録、別れの博物館実行委員、2018 年、p. 6
[31] 一つ一つのモノに出会いやそのモノに対する思い、別れの経緯など様々なエピソードが詰まっていて、それらのモノを手元から離すことで心の整理をつける人や、場合によってはそのモノを大切に残してもらいたいといった思いも伝わってくる。しかも、必ずしも悲しいエピソードばかりではなく、甘い思い出が詰まっていることもあり、見る側にも様々な感情が沸き上がってくる。
[32] 笠井博子編前掲図録 p. 6
[33] いいたてミュージアムあいさつ文より
[34] せんだいメディアテーク HP「どこコレ？- おしえてください昭和のセンダイ」https://www.smt.jp/projects/doko/2021/06/--6.html（2021 年 11 月 5 日閲覧）
[35] 「どこコレ？信州篇　－信州のまちのキオクをキロクしよう－」2019 年 4 月 27 日～6 月 30 日開催
[36] 「どこコレ？＠信州」2019 年 4 月 27 日～6 月 30 日開催
[37] 「どこコレ？＠信州」2019 年 4 月 27 日～6 月 30 日開催
[38] 「どこコレ？　－東京篇－」2019 年 4 月 27 日～6 月 30 日開催
[39] 筆者が見学したのは本文で述べたものであるが、2019 年度は他にも熊本会場としてくまもと森都心プラザ図書館で、東京会場として新宿区立四谷図書館、高松会場として情報通信交流館 e-とぴあ・かがわで、小樽会場として小樽市立小樽図書館でも開催されていた。
[40] せんだいメディアテーク HP「『どこコレ？』のつくり方～開催をお考えの方へ」https://www.smt.jp/projects/doko/2021/07/post-88.html（2021 年 11 月 1 日閲覧）
[41] 豊田市教育委員会教育行政部文化財課『（仮称）豊田市博物館基本計画』豊田市教育委員会教育行政部文化財課、2019 年、pp. 25-29
[42] 豊田市郷土資料館に掲示されていた「『未来の記憶』プロジェクト」紹介文より
[43] 吉田憲司前掲書（4）p. 4
[44] 広島平和記念資料館における焦げた弁当箱と共感を生む展示との関係は、2019 年 11 月 10 日に仙台国際センターで開催された世界防災フォーラム一般公開セッション「東日本大震災メモリアルシンポジウム　～経験をつなぐ、その意味とその姿～」において広島平和記念資料館前館長の志賀賢治によって発表された発言内容を基に、筆者が再整理したものである。
[45] ここで、自分事化できた状態について、一人称として表現することを指摘したが、山内宏泰はリアス・アーク美術館における東日本大震災の常設展示について述べる中で、「我われは東日本大震災という出来事のなんたるかを、まず覚えていただきたいのであ

る。覚えるためには内容を理解し、繰り返し学習し、覚えようとする内容を自分の言葉に置き換え、第三者に伝えるという一連の行為が必要である。学習の成果は表現することで記憶される。」（山内宏泰「結びに…編集者からのメッセージ」山内宏泰編『リアス・アーク美術館常設展示図録　東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館、2014 年、p. 173）と述べており、自分事化という表現ではないが、自分のものとすることは表現することであるということを述べており、自分事化ができた状態と重なる部分があることが述べられている。

[46] 調査対象となる博物館に関しては、筆者の情報収集にも限界があり、実際には展示を行っていても、筆者が把握できていない展示や、把握できたとしても会期との関係で足を運ぶことができなかった展示も存在する。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、臨時休館となった博物館がある他、緊急事態宣言等により県を越えた移動を自粛せざるを得ない状況等も発生し、見学を予定していたものの、見学できないまま論文執筆にあたらざるを得ない事例も存在する。

[47] 2000 年 11 月から 2011 年 10 月にかけて、東京都江戸東京博物館展示ガイドボランティアとして活動していた。

[48] 北名古屋市歴史民俗資料館の市橋芳則は、北名古屋市歴史民俗資料館が考古資料や農具、養蚕の道具を展示していた博物館から昭和日常博物館へと変貌する過程について、「家屋などの建て壊しの際に、昭和時代を伝えるさまざまな日用品から電化製品、学用品などの資料が顧みられず焼却されたり、粗大ごみに出されたりしている現状を目の当たりにしました。そこで、昭和時代の資料の大切さを伝え残していくことが急務であると思われたことが変貌の原点にあります。」（市橋芳則「地域回想法・博物館資源の活用」、ＮＰＯシルバー総合研究所編『地域回想法ハンドブック　地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、p. 231）と述べている。

[49] 「現行の博物館法に定める日本国内の博物館で、恒常的にファミコンを展示しているところはない」（寺農織苑前掲論文、p. 4）

[50] 府中市郷土の森博物館で 2017 年 4 月 1 日から 2018 年 3 月 11 日まで開催していたミニ展「1987　博物館の船出」という開館 30 周年を記念する展示において、開館当時を象徴する道具としてファミコンとドラゴンクエストⅢのソフトが展示されていた。

[51] 2011 年 4 月 1 日から 2016 年 3 月 31 日まで福生市郷土資料室に勤務していた。なお、2020 年 4 月 1 日から再び福生市郷土資料室に戻り、現在も引き続き勤務している。

[52] 初めて常設展示室で昭和 30 年代の再現展示を行ったとされる葛飾区立郷土と天文の博物館の開館年は平成 3 年である。

[53] 山崎貴監督『ALWAYS 三丁目の夕日』2005 年公開

[54] 「昭和 30 年代がはじめてノスタルジーの対象になったのは、一九七〇年代の中盤だった。」（高野光平『昭和ノスタルジー解体　「懐かしさ」はどう作られたのか』晶文社、2018 年、p. 335）

[55] 市川孝一が挙げる 4 つは、①テーマパーク・商業施設、②町並み保存・町おこし、③博物館・展示企画、④出版である。（市川孝一「昭和 30 年代はどう語られたか　――“昭和 30 年代ブーム”についての覚書」『マス・コミュニケーション研究』76 号、日本マス・コミュニケーション学会、2010 年）

[56] 「この展示を公開して以降の新聞、雑誌などのマスメディアからの取材の多くの基調

も、松戸市の住宅地化を意図したものは少なく、集約するとほとんどは戦後の代表的な生活としての団地生活のイメージを良く現している展示、昭和 30 年代の懐かしい生活の展示として記された。新しい生活を目指し実現しつつある家族の生活は、幸せな生活として印象づけられた。この展示を懐かしさの対象とする記事の多くは、昭和 30 年代をテーマとして演出した架空の街のアミューズメントパークと同じ紙面でノスタルジアの対象として紹介された。そこには、市域の急激な住宅地化を表現した展示意図とは明らかに隔たりがあった」（青木俊也「現代史展示『常盤平団地の誕生』の新しい姿　－展示リニューアルのための基礎的な考察―」『松戸市立博物館紀要』第 21 号、松戸市立博物館、2014 年、p. 12）

[57] 青木俊也「現代史展示『常盤平団地の誕生』の新しい姿　－展示リニューアルのための基礎的な考察―」『松戸市立博物館紀要』第 21 号、松戸市立博物館、2014 年、pp. 5-14

[58] 青木俊也「戦後生活資料へのアプローチ」『松戸市立博物館紀要』第 16 号、松戸市立博物館、2009 年、pp. 20-34 や、青木俊也「戦後生活再現展示の研究」『松戸市立博物館紀要』第 18 号、松戸市立博物館、2011 年、pp. 1-28、青木俊也「戦後生活を展示する意味を考える」『松戸市立博物館紀要』第 23 号、松戸市立博物館、2016 年、pp. 1-18、青木俊也「現代生活史展示と社会　－『２ＤＫ生活再現展示』の『文献メディアによる展示利用』の推移－」『松戸市立博物館紀要』第 26 号、松戸市立博物館、2019 年、pp. 1-19 など。

[59] 青木俊也「生活再現展示をつくる思考　－展示利用者調査の試行－」『松戸市立博物館紀要』第 10 号、2003 年、p. 91

[60] 市川孝一「昭和 30 年代はどう語られたか　――“昭和 30 年代ブーム”についての覚書」『マス・コミュニケーション研究』76 号、2010 年

[61] 以前は杉並区西田小学校郷土資料展示室という小学校の空き教室を利用した展示スペースで再現展示が行われていたが、2020 年度に学校の都合もあり、杉並区立郷土博物館へ移設されたもの。

[62] 例えば窓枠が木製からアルミサッシに変えられる他、水回りも土間にかまどが置いてある時とステンレスのキッチンが置かれるなど変更が行われる。

[63] 2018 年 4 月より現名称。それ以前は日本昭和村として営業していた。

[64] 福島県会津若松市にある昭和なつかし館では地域のモノでそろえているようだが、実際にこういう町並みがあったわけではない。また、岐阜県高山市にある高山昭和館では地名の入った看板などが多くあったが、福岡、大阪、千葉など様々な地域のモノを寄せ集めていることは明らかであった。

[65] イメージの中の昭和 30 年代を再現することについて、寺尾久美子は、「空間構成とノスタルジア　――博物館の「昭和のくらし」展示から――」（『日本民俗学』238 号、日本民俗学会、2004 年）の中で、ノスタルジアとは「現在の捉え方との関係で設定される、特定の過去の捉え方の一様式であり、基本的には、過去を肯定的に捉え美化する心情となってあらわれる」（p. 91）と定義している。ここでも触れられているが、過去について懐かしさを感じる時に、美化ということが 1 つキーワードとして取り上げられており、イメージの中の昭和 30 年代の再現にも多分に美化がされていて、それがかえってイメージに近づくことになるという循環も生じていると考えられる。

[66] 昭和のくらし博物館の生活再現度の高さについては、註 65 で触れた寺尾久美子の「空間構成とノスタルジア　――博物館の「昭和のくらし」展示から――」の中で比較した 6 館の「昭和のくらし」展示のうち、もっともノスタルジア装置としての有効性が高いという評価を得ている（p. 96）ことからも窺える。

[67] 鉄道と人々の思い出との関係は、特に都心部においては大きいと考える。通勤通学の足として、多くの人の思い出と結びつく存在であることは疑う余地がない。例えば、自動改札になる前、駅員が切符に鋏を入れる光景などを懐かしく思う人は多く存在するだろう。

[68] 東京都青梅市の青梅駅前商店街（写真 60）や山形県東置賜郡高畠町の昭和縁結び通り（写真 61）の事例などもある。ただし、青梅駅前商店街では、町の特徴であった映画看板について、その製作をしていた方が亡くなってしまったことや、近年の台風の影響もありここで映画看板の取り外しをしてしまった（朝日新聞多摩版 2018 年 10 月 19 日「『昭和のまち』映画看板と別れ　青梅の商店街支え 24 年」https://www.asahi.com/articles/ASLBL6GV8LBLUTIL049.html（2021 年 6 月 24 日閲覧））。

[69] 市川孝一は註 55 で触れた「昭和 30 年代はどう語られたか　――“昭和 30 年代ブーム”についての覚書」の中で、昭和 30 年代ブームの大きなきっかけは 2005 年公開の映画『ALWAYS　三丁目の夕日』であったということがほぼ定説となっているとしたうえで、この映画以前の 1990 年代からブームは始まっていたとし、そのブームについて①テーマパーク・商業施設、②町並み保存・町おこし、③博物館・展示企画、④出版の 4 つの分野を挙げており、本事例はまさに②にあたる。

[70] 東京都江戸東京博物館の展示の後半部分は東京ゾーンということで、明治時代から戦後までを中心に取り上げる展示コーナーとなっており、そちらにもそれぞれの時代を象徴するような住宅の再現などが見られるが、ここでは前半部分の展示を中心に述べたものである。

[71] 展示解説のためのパネルはないが、解説の人は展示室にいて、説明を聞くことはできる。

[72] 「常設展示において入居者の当時の生活意識から導き出した団地生活を表現した『２ＤＫ生活再現展示』は、明日への希望があった昭和 30 年代などのイメージを表現するものとして、多くのマスコミの取材を通して認識されるようになった」（青木俊也「現代史展示『常盤平団地の誕生』の新しい姿　－展示リニューアルのための基礎的な考察－」『松戸市立博物館紀要』第 21 号、松戸市立博物館、2014 年、p. 14

[73] 福井県立博物館における昭和 30 年代の再現展示導入に至る経緯は、浅岡隆裕「見出された『昭和 30 年代』――メディア表象の論理と過程から――」『応用社会学研究』47 号、立教大学、2005 に詳しい。概略を述べると、福井県立歴史博物館では 2003 年 3 月に「昭和のくらし」ゾーンをオープンさせたが、たまたま時期が前後して、特別展『ちょっとむかしのくらしぶり』を行ったところ、非常に人気を博し、普段の 3 倍の入場者数を記録するとともに、たくさんの資料提供があったこともあり、この人気を常設展に持ってこられないか、展示に反映できないかということになり、テーマとして採用され、2002～2003 年にかけてリニューアル工事が行われたことが紹介されている（p. 38）。

　このことに関連して青木俊也は「戦後生活を展示する意味」（『松戸市立博物館紀要』第

23 号、松戸市立博物館、2016 年）の中で、戦後生活再現展示に懐かしさを対象とする表現の影響があることを指摘したうえで、集客などを目的として戦後生活再現展示が作られたことは、この展示の本質的な意味、内在する課題を見失う結果を招くことになるのではないだろうかと指摘している（p. 3）。

[74] ベランダから見える景色という手法をうまく使えば、地域性を演出できる可能性があることを感じた。例えば、福生市郷土資料室であれば防災行政無線のスピーカーの写真を掲出すると、2019 年 12 月 31 日まで夜 9 時に防災行政無線から流れていた放送について、地元の人にしかわからないことかもしれないが地域性を感じる思い出と直結する事柄として表現できるかもしれないと感じた。具体的には、夜 9 時の放送は、子どもに対して「もう 9 時になったから寝る時間ですよ」という利用が多くの家庭で行われていて、そういった経験が思い起こされる可能性があると感じたところである。

[75] 現代資料の中でも特に平成に近い時代の道具で、親世代が懐かしさを感じることができるのかどうかについて、2017 年 8 月に福生市郷土資料室において、事業として検証を行った（詳細は資料 1「実践報告」参照）。その中でも、子ども向け学習を通じて、親世代においても懐かしさを感じることができることは確認できた。

[76] 最新のものではピピッとコンロやエネファームなども展示されているが、これらはまだ懐かしさを感じないものの、時代が経ると懐かしく感じる時代が来るのかもしれない。

[77] 携帯電話はそろそろ集めた方が良いのではないかと考えていたところ、やはり数が集まることでその変遷などもわかりやすく伝わるとともに、特に携帯電話には様々な思い出が詰まっている資料であることも窺える。

[78] 例えば、パナソニックミュージアムものづくりイズム館では、美容関連商品を展示するコーナーで、「きれいなおねえさんは、好きですか。」という有名なＣＭの映像を流していた。

[79] 都城市総合政策部秘書広報課編『広報都城』令和 2 年 7 月号、都城市総合政策部秘書広報課、2020 年、p. 11

[80] 東京新聞 2019 年 9 月 22 日「『おかあさんといっしょ』世代を超えて愛され 60 年　体操や背景色　幼児教育の専門家交え制作」https://www.tokyo-np.co.jp/article/7319（2021 年 6 月 29 日閲覧）

[81] NHK のコンテンツと関連して、杉並アニメミュージアムで 2018 年 1 月 18 日～3 月 25 日に開催されていた企画展「日本のアニメ 100 周年展　Part2　みんなのうたの世界展」についても触れておきたい。ＮＨＫで 55 年放送されている「みんなのうた」の歴史や作品などについての紹介する展示である。「みんなのうた」もＮＨＫが持つ懐かしい思い出に直結するコンテンツの 1 つである。歌は脳裏に焼き付いていて、久しぶりに接することになった音楽もスラスラと歌詞が出てきたりするほど記憶に残っているものである。特に、子どもの頃の記憶は多くの人の間で共有しやすい。そういう意味では「みんなのうた」も懐かしい思い出として共有しやすいものである。

[82] 昭和 30 年代は、元気な日本を象徴する時代、もしくはその始まりとも位置付けられる。バブル経済がはじけるまでの昭和という時代（厳密には平成に入るのだが）は、公害問題などの問題も多く存在したが、それでも全体としては右肩上がりの時代であり、元気があったと見られている。それは、昭和という時代が終わり、バブル経済がはじけたことで、一気に昭和に対する懐かしさ（ノスタルジー）や憧れといった形で認識されるに至っ

たともいえよう。
[83] 展示の面では、東京では戦後復興の象徴として東京オリンピックが取上げられることが多いが、大阪では大阪万博が取上げられることが多く、地域によって社会的な節目となるできごとに差があることも興味深い。
[84] 戦後は家電製品の登場以来、道具の変化も確かに見られるが、昭和 30 年代にある程度形としても機能としても完成の域に入っており、展示という面では、平成に入ったからといって 30 年代の道具から平成の道具にとって変える意味はほとんどなかったのかもしれない。
[85] 昭和 30 年代以降は、なし崩し的に町が農村から住宅街へと変容していくので、何かを象徴的に取り上げ町が変化していく様を伝えるには、大きなイベント（大阪万博とか）がない限り、歴史展示には向かないのかもしれない。それはとりもなおさず、現在に続く日常の展示となるからであり、まだ歴史の一部となっていないからかと思える。
[86] バブル崩壊後の不景気は平成に入ってから長く続く。そして時代の変わり目を捉えるできごととしては 21 世紀に入ったということはあったかもしれないが、むしろバブル経済との関係で考えるなら、まだ 90 年代までは元気な時代の名残があったのかもしれない。
[87] 都心部などでタワーマンションが建設されるようになったことをのぞけば、多くの自治体では平成になって何か大きく町が変わったということはないのではないだろうか。あるとすれば平成の大合併くらいだろう。そう考えると、時代を象徴する建物としての展示物の作成は難しいと考えざるを得ない。
[88] 松戸市立博物館の青木俊也は、松戸市立博物館における再現展示に関する考察の中で、「ありふれた戦後の日常生活そのものに対して価値を見いだすことで身近な過去を親しめる形で表現したならば、戦後生活再現展示自体が現代史展示の公害問題などの多様なテーマを覆いかくしてしまう危険性を持つ」と述べており（青木俊也「戦後生活再現展示の研究」『松戸市立博物館紀要』第 18 号、松戸市立博物館、2011 年、p. 18)、私設博物館における凝縮かつ美化した形での展示にも同様の効果があることを示唆している。
[89] 憧れの団地生活に共感できる人々はもちろん多いと思うが、一方で、邸宅で生活していた人や地方の大型農家などで育ってきた人にとっては懐かしさが生じない可能性もある。逆に多くの人にとっては、お金持ちの人の家が再現されていても懐かしさは感じないかもしれない。それは、民俗展示でかつての大型農家の再現を見てもそこに懐かしさを感じることができる人が少なくなってしまったこと近い関係が考えられる。
[90] 「小学校 3 年生の社会科の教科書に対応した」展覧会、いわゆる『昔のくらし展』においても、手作業を基本としたくらしの道具とともに戦後に使われ始めた家電製品などの生活資料を展示する機会も増えている」（青木俊也「戦後生活を展示する意味を考える」『松戸市立博物館紀要』第 23 号、松戸市立博物館、2016 年、p. 3）
[91] 岡田清一「民具資料の活用から見た博物館の役割」追手門学院大学編『Musa 博物館学芸員課程年報』第 30 号、追手門学院大学文学部博物館学研究室、2016 年 pp. 1-7
[92] 福士道太「新学習指導要領とこれからの出前授業」青森県立郷土館編『青森県立郷土館研究紀要』第 43 号、青森県立郷土館、2019 年、pp. 183-186
[93] 相川保敏、森和久、三浦友久「小学校 3 年生の社会科における今後の『歴史学習』の在り方についての考察－新内容『市の様子の移り変わり』を取り上げて－」椙山女学園大

学教育学部紀要編集委員会編『椙山女学園大学教育学部紀要』第 14 号、椙山女学園大学教育学部、2021 年

[94] 寺農織苑前掲論文

[95] 北名古屋市歴史民俗資料館 HP 2016 年 1 月 25 日「『平成日常博物館』を考える－①」https://www.city.kitanagoya.lg.jp/rekimin/activity/index2.cgi?st=21&keyword=（2021 年 6 月 29 日閲覧）より

[96] 平成 20 年度に告示された小学校の学習指導要領のうち社会科〔第 3 学年及び第 4 学年〕には、次のような内容に触れるよう記載がある。

「地域の人々の生活について，次のことを見学，調査したり年表にまとめたりして調べ，人々の生活の変化や人々の願い，地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。 ア　古くから残る暮らしにかかわる道具，それらを使っていたころの暮らしの様子　イ　地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事　ウ　地域の発展に尽くした先人の具体的事例」

なお、平成 29 年度の新しい学習指導要領が告示されており、関連するカ所については次の様な記述となった。

「市の様子の移り変わりについて、学習の問題を追及・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。　ア　次のような知識及び技能を身に付けること　（ア）　市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたこと。（イ）　聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。　イ　次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。　（ア）　交通や公共交通、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現すること。

[97] 学校における展示状況の把握は、同じ内容の方がしやすいのではないかと考えたが、担任の先生は毎年変わるので、展示内容がガラッと変わっていても、先生からするとあまり関係ない可能性も否定はできない。ただし、学習内容が変わらない状況を踏まえるならば、毎年毎年様々な先生方から意見をいただきつつ、毎年マイナーチェンジを繰り返していくことが結果的に学校からの期待に応えることになっているとも考えられる。このあたりについては今後さらなる検証を重ねていきたい。

[98] これまで道具の展示を主体とした展示内容だったものが、交通の関係や町の変遷、学校の変遷、土地利用の変遷などについても触れるように昔の道具展の展示内容が大幅に変更された展示も存在する。例えば、神戸市埋蔵文化財センターで 2021 年 1 月 16 日～3 月 7 日まで開催されていた令和 2 年度春季企画展「神戸うつりかわる町とくらし」では、これまでは住宅の再現展示もなされていたのがなくなり、展示の後半 1/3 程度が道具の展示ではなく町の移り変わりを伝える展示に変更になっていた。また、さいたま市立博物館では 2018 年度の展示から道具主体の展示から交通との関係で町の移り変わりを伝える展示へとシフトしていた。同様に吹田市立博物館でも 2020 年 12 月 8 日～2021 年 4 月 4 日まで開催されていた特別企画「昔のくらしと学校」の展示内容が、道具を主体としたものから、市の移り変わり、学校の移り変わりを伝えるコーナーにスペースを割くように変更されていた。さらに名古屋市博物館では、これまで常設展示室にて昔の道具を展示していたが、2021 年 1 月 9 日～3 月 7 日まで特別展示室にて学習指導要領に対応した企画展「なごやのうつりかわり－うみ・やま・まちのくらし－」を開催していた。この他

にも展示の内容を学習指導要領に対応させたことが窺える展示は、行田市郷土博物館、松戸市立博物館、調布市郷土博物館などでも確認できた。

[99] 例えば、2014 年 9 月 6 日～11 月 24 日まで福生市郷土資料室で開催した「福生市郷土資料室企画展示　収蔵鉄道資料展」において、筆者は展示担当者として展示作業を行った。その際、展示構成や展示スペース、展示ケースの配置上の都合から、自身が所有するポケット時刻表を展示した他、他の職員の親族が所有するオレンジカード等を展示したことがあり、展示全体の計画を実現するために、個人蔵の資料を用いたことがある。

[100] 福井県立若狭博物館「ちょっとむかしのくらし展　洗濯へん」キャプションより

[101] 寺農織苑前掲論文

[102] 同論文 p. 3

[103] 日本玩具博物館「平成おもちゃ文化史」あいさつ文より

[104] 同前

[105] 同前

[106] 同前

[107] ドラゴンクエストもⅠ、Ⅱの頃は、カセット本体に記録機能がなかったことから、復活の呪文というものをメモしないとゲームを再開できなかった。そのため、復活の呪文を記録するノートなどが必要だったのだが、そういったモノも、実際の使用状況を示すものとして展示資料にする価値がある。しかも多くの場合これらは残っていない。なお、2011 年 10 月 8 日～12 月 4 日森アーツセンターギャラリー「誕生 25 周年記念ドラゴンクエスト展」でも、復活の呪文が書かれたノートが再現展示されており、ドラゴンクエストにまつわる思い出の品の 1 つであることがわかる。

[108] 後述する生駒ふるさとミュージアムでの平成展においてもおもちゃが展示されていたが、展示を担当した学芸員からも城陽市歴史民俗資料館の展示が紹介されるほど、大きな反響があったことが窺える。なお、城陽市歴史民俗資料館の図録も売り切れとなっている。

[109] 生駒ふるさとミュージアム「さよなら平成」あいさつ文より

[110] 「となりのトトロ」、「魔女の宅急便」、「平成狸合戦ぽんぽこ」、「もののけ姫」のポスターが見られた。

[111] 八千代市立郷土博物館「くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～」あいさつ文より

[112] CCGA 現代グラフィックアートセンター「ヘイセイ・グラフィックス」あいさつ文より

[113] あべのハルカス近鉄本店「読売新聞号外報道でふりかえる　平成プレイバック展」あいさつ文より

[114] 参考に、それぞれどのような号外が出ていたかまとめておきたい。①天皇崩御、即位、皇太子様婚約、ご結婚、雅子さまご懐妊、雅子さまご出産、紀子さま男子ご出産、天皇陛下生前退位のお気持ち表明、②新元号「平成」、美空ひばり死去、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、朝原彰晃逮捕、原爆ドーム世界遺産に、脳死移植はじまる、拉致被害者 5 人帰国、福知山線脱線事故、新潟県中越地震、大坂知事に橋本氏、東日本大震災、福島第一原発放射能漏れ、自民総裁安倍氏、山中教授ノーベル賞、東京五輪決定、ノーベル物理学賞赤崎・天野・中村氏、オバマ大統領広島で追悼、藤井四段 29 連勝、藤井

聡太最年少 V、2025 大坂万博決定、「令和」新元号決まる、③湾岸戦争、ゴルバチョフ大統領辞任、金日成死去、ダイアナ妃事故死、金大中ノーベル平和賞、9.11 同時多発テロ、アフガン戦争、北朝鮮ミサイル発射、金正日死去、北朝鮮が核実験、パリ同時テロ、アメリカ大統領トランプ氏、北朝鮮ミサイル日本通過、米朝首脳会談、④バルセロナオリンピック女子マラソン有森裕子銀、男子マラソン森下広一銀、長野オリンピックスキージャンプラージヒル船木金・原田銅、シドニーオリンピック女子柔道田村亮子悲願の金、女子マラソン高橋尚子夢の金、アテネオリンピック競泳男子 100m 平泳ぎ北島康介金、トリノオリンピック女子フィギュアスケート荒川静香金、北京オリンピックソフトボール金（上野由岐子）、バンクーバーオリンピック女子フィギュアスケート浅田真央銀、ロンドンオリンピック体操男子個人総合内村航平金、ソチオリンピック男子フィギュアスケート羽生結弦金、リオデジャネイロオリンピックレスリング女子 58kg 級伊調馨 4 連覇、ピョンチャンオリンピック男子フィギュアスケート羽生結弦金、スピードスケート女子 500m 小平奈緒金、⑤サッカー初のワールドカップ出場（フランス大会）、横浜高校春夏連覇（松坂大輔）、近鉄 12 年ぶり優勝、サッカーワールドカップ決勝トーナメント進出（日韓大会）、阪神優勝、イチロー大リーグ新記録、ワールドベースボールクラシック王ジャパン金、ワールドベースボールクラシック連覇、サッカーワールドカップ決勝トーナメント進出（南アフリカ大会）、サッカー女子ワールドカップなでしこ世界一、錦織圭準優勝、桐生祥秀 9 秒 98、サッカーワールドカップ決勝トーナメント進出（ロシア大会）、大坂なおみ全米テニス V。

[115] 厳密には、平成というよりは 2000 年前後に変化があるのかもしれないが、音楽シーンもＣＤはすでにあったし、ＭＤも出ていたが、完全に音楽はダウンロードする時代へと移行してしまった。90 年代はＣＤがミリオンセラーになるということは当たり前の時代であったが、今ではＣＤそのものが売れない時代になってしまった。

映像分野もビデオからＤＶＤへ、さらにインターネットでの閲覧へと移行している。テレビでさえも地デジに移行した。1997 年に公開され一世を風靡した映画『タイタニック』でさえ、当時はＤＶＤではなくビデオテープで販売された。

さらにその影響を大きく受けたのは電話部門だろう。博物館ではいまだに黒電話を紹介していると思うが、携帯電話が出現し、小型化が進み、一人一台時代へと着々と進み、メールができ、カメラ機能が付き、音楽が聴け、映像も見られ、ゲームもできるようになっている。さらにはインターネットと繋がった。もはやスマートフォンは電話というくくりで良いのかさえわからない。しかも現在のスマートフォンを博物館で展示したら、もはや電話かどうかもわからない。通話ボタンも電話番号を押すためのボタンさえもついていない。この道具は 100 年後に埋蔵文化財として発掘されたらなんだかわからないものとして処理されてしまうのではないかと心配にさえなる。

このように、いくつかの事例を振り返っただけでも、2000 年を前後に道具は大きく変化を遂げていることがわかる。

[116] ファミコンは昭和 58 年発売のため平成の道具ではないが、ファミコン用ソフトであるドラゴンクエスト 4 の発売が平成 2 年であることから、平成に入っても使われていた道具ではある。

[117] Withnews 2019 年 1 月 2 日「黒電話が博物館に入る時代に…　奈良の触れる展示＆使い方解説が人気」

https://withnews.jp/article/f0190412004qq000000000000000W00o10101qq000019042A（2021 年 6 月 26 日閲覧）など

[118] 梅本充子「回想法とは」NPO 法人シルバー総合研究所編『地域回想法ハンドブック　地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、p. 29

[119] 同書 pp. 29-30

[120] 同書 p. 30

[121] 2018 年 5 月 19 日、20 日に北名古屋市健康ドーム開催された「健康高齢者との地域回想法基礎研修」に筆者が参加する中で学んだものである。

[122] 来島修二「地域回想法とは」NPO 法人シルバー総合研究所編『地域回想法ハンドブック　地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、p. 51

[123] 日本民具学会第 43 回大会公開シンポジウムの趣旨文では、「『回想法』とは、昔の体験を思い出し、互いに語り合うことで脳を活性化する非薬物療法である。さらに、昔懐かしい民具を見て、触れて、互いに語り合うことによって、病院や施設などの介護ケア現場だけでなく、認知症予防のための地域のより多くの人びとに広げる試みが『地域回想法』である」（日本民具学会第 43 回大会実行委員会「日本民具学会第 43 回大会公開シンポジウム『民具の活用と地域回想法』の趣旨」『民具研究』第 160 号、日本民具学会、2020 年、p. 27）と述べており、やはり認知症予防が主目的と捉えられていることがわかる。

[124] 青木俊也「戦後生活を展示する意味を考える」『松戸市立博物館紀要』第 23 号、松戸市立博物館、2016 年、pp. 9-11

[125] 市橋芳則「地域回想法・博物館資源の活用」NPO 法人シルバー総合研究所編『地域回想法ハンドブック　地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、pp. 225-266 など。

[126] 小谷超「博物館が市民と連携して実施する『地域回想法』について」氷見市立博物館編『特別展「思い出をつむぐ　くらしを知る」－博物館と地域回想法－』氷見市立博物館、2017 年、pp. 42-48 など。

[127] 岩崎竹彦『福祉のための民俗学　回想法のすすめ』慶友社、2008 年、pp. 23-64 など。

[128] 六車由実『驚きの介護民俗学』医学書院、2012 年

[129] 加藤幸治『復興キュレーション　語りのオーナーシップで作り伝える〝くじらまち〟』社会評論社、2017 年、p. 102

[130] 六車由実『介護民俗学へようこそ！「すまいるほーむ」の物語』新潮社、2015 年、p. 13

[131] 加藤幸治前掲書 pp. 100-103

[132] 来島修志前掲書 p. 51、p. 59

[133] 小島恵美「地域回想法の伸展と町づくり」NPO 法人シルバー総合研究所編『地域回想法ハンドブック　地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社、2007 年、pp. 141-166

[134] 職員の方の話によると、回想法センターは市域の外れの方にあるとのことで、現在回想法スクールを行う際は市内の他の公共施設を使って行ったりもしているそうで、ここはあくまでも回想法の拠点の一つとして機能していることになる。

[135] 市橋芳則前掲書 p. 231

[136] 北名古屋市歴史民俗資料館の受付の方への聞き取り（2018 年 9 月 26 日）
[137] 市橋芳則前掲書 p. 242
[138] 小谷超前掲書 pp. 44-45
[139] 愛媛県歴史文化博物館ホームページ「れきハコ」https://www.i-rekihaku.jp/school/rekihako/（2021 年 6 月 29 日閲覧）
[140] 宮崎県総合博物館ホームページ「昔の道具貸出キット」https://www.miyazaki-archive.jp/museum/riyo/borrowed/kashidashi_kit/（2021 年 6 月 29 日閲覧）
[141] 東近江市能登川博物館ホームページ「回想法セット貸出」https://e-omi-muse.com/notohaku/kaiso.html（2021 年 6 月 29 日閲覧）
[142] 市橋芳則前掲書　p. 242。なお同書では、同梱品はビデオテープとなっているが、現在ではＤＶＤとなっていることを北名古屋市のホームページ「回想法キットの貸出し」https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000079.php（2021 年 6 月 29 日閲覧）で確認したので、本文ではＤＶＤと表記した。
[143] 小谷超前掲書 pp. 43-44
[144] 同書 p. 45
[145] 和歌山市立博物館ホームページ「和歌山市立博物館回想法プログラム」http://www.wakayama-city-museum.jp/document/kaisoho.pdf（2021 年 6 月 29 日閲覧）
[146] なおこの別室は、自由に見学できる展示室とは異なり、一般の見学者が普通に見学に行っても見ることはできない。
[147] 調布市では 2014 年から 17 年にかけて 3 名の議員から回想法に関して一般質問がなされている（調布市議会会議録簡易検索ホームページ http://chofucity.gijiroku.com/voices/index2.html での「回想法」という語での検索結果（2021 年 7 月 14 日閲覧））。これは 2014 年に議会で行った視察を踏まえた質問で、質問先は全て調布市郷土博物館であることから、視察に行った議員も地域回想法を博物館の活動と理解したようである。
[148] 調布市郷土資料館学芸員への聞き取り（2018 年 2 月 18 日）
[149] 小山博「博福連携事業『博物館で思い出を語ろう！』について　－宮崎県総合博物館の試み－」宮崎県総合博物館編『宮崎県総合博物館研究紀要』第 38 輯、宮崎県総合博物館、2018 年、p. 145 や、市橋芳則「『博福連携』で高齢者とミュージアムを結ぶ　－新たなコレクションの構築と人生 100 年時代への発信－」小川義和・五月女賢司編『発信する博物館　接続可能な社会に向けて』ジダイ社、2021 年、p. 195 など
[150] 益田市立歴史民俗資料館「若返りの間」入口の掲示物より
[151] 職員の方に聞いた話では、筆者が訪問した 2018 年 12 月 8 日現在、入室記念証をはじめてから日が経ち、もらう人は少ないそうだが、展示室自体はリピーターがいるほど人気とのことであった。
[152] 久保埜企美子「－視点３－　Communication－会話を楽しむ－」北区飛鳥山博物館編『北区飛鳥山博物館研究報告』第 22 号、2020 年、p. 16
[153] ホウキとバケツ、雑巾の横には「小さい頃、掃除の手伝いをしましたか？」とか、庭先に植えられた木の横には「あなたが育った家の周りには、どんな木が植えられていましたか？」といった質問も見られた。また、コーナーはじめのパネルに「無理に思い出そう

としたり、辛いことや悲しいことを思い出すことはお避けください」「ご同伴の方がいらしたら、ぜひご一緒に思い出話を楽しんでください」と、回想法の基本を踏まえた注意書きも見られた。（2018 年 3 月 20 日、2021 年 4 月 17 日の 2 回見学した）

[154] 八千代市立郷土博物館　令和元年度「くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～」あいさつ文より

[155] 群馬県立歴史博物館群馬県立歴史博物館第 16 回テーマ展示「昭和のくらしをのぞいてみよう」あいさつ文より

[156] 豊田市郷土資料館豊田市郷土資料館企画展「－くらしのうつりかわり－『食べものと道具』」あいさつ文より

[157] 新潟市歴史博物館「みなとぴあむかしのくらし展『にいがたの昭和』」パンフレット　あいさつ文より

[158] 益田市立歴史民俗資料館職員への聞き取り（2018 年 12 月 8 日）

[159] 2018 年 9 月 16 日に開催された認知症の方への回想法基礎研修を受講した際、筆者と同年代の参加者と、体験として回想法に取り組んだ時の話題で、懐かしい遊びの中にファミコンの話題が出てきて盛り上がったことがある。

[160] この時用意した質問は、「好きだった給食メニューは？」「子どもの頃どんな音楽が流行ってましたか？」「遠足はどこに行きましたか？」「オリンピックの金メダル選手といえばズバリ誰？」などである。

[161] 青海伸一「常設展示における来館者参加型プロジェクトの実施について　－民俗展示コーナーの資料を活用した、世代を超えた対話の創出へ向けての取り組み－」福生市郷土資料室編『福生市郷土資料室研究紀要』第 2 号、2021 年度刊行予定

[162] 同前

[163] 青海伸一「2020 年度企画委員会・編集委員会合同調査『新型コロナウイルス対応アンケート』集計結果報告一東京都三多摩公立博物館協議会加盟館における新型コロナウイルス対策の状況と今後の課題一」東京都三多摩公立博物館協議会編『東京都三多摩公立博物館協議会会報　ミュージアム多摩』第 42 号、東京都三多摩公立博物館協議会、2021 年

[164] 例えば、東日本大震災・原子力災害伝承館が福島県双葉郡双葉町に 2020 年 9 月 20 日に開館した他、みやぎ東日本大震災津波伝承館が宮城県石巻市に 2021 年 6 月 6 日に開館した。

[165] 持田誠「コロナ関係資料収集の意義と必要性」『博物館研究』第 55 巻第 11 号、公益財団法人日本博物館協会、2020 年、pp. 21-24

[166] 持田誠「コロナ関係資料からみえてくるもの」デジタルアーカイブ学会編『デジタルアーカイブ学会誌』第 5 巻第 1 号、デジタルアーカイブ学会、2021 年、pp. 47-52

[167] 五月女賢司「吹田市立博物館における新型コロナ資料の収集と展示」デジタルアーカイブ学会編『デジタルアーカイブ学会誌』第 5 巻第 1 号、デジタルアーカイブ学会、2021 年、pp. 53-55

[168] 後藤隆基「演劇が失われた時間　－コロナ禍による中止・延期公演の調査と資料収集」『博物館研究』第 55 巻第 11 号、公益財団法人日本博物館協会、2020 年、pp. 28-31

[169] 青海伸一「福生市郷土資料室における新型コロナウイルス関連資料の収集と展示」公益財団法人たましん地域文化財団歴史資料室編『多摩のあゆみ』第 182 号、公益財団法

人たましん地域文化財団、2021 年、pp. 14-21

[170] 矢田部圭介「2 つの断絶に橋を架ける　－リアス・アーク美術館『東日本大震災の記録と津波の災害史』展－」『ソシオロジスト』第 20 号、武蔵社会学会、2018 年、pp. 49-85 や、石垣悟「学芸員資格の課題と可能性　～東京家政学院大学の博物館実習を通して」『東京家政学院生活文化博物館年報』第 29 号、東京家政学院生活文化博物館、2020 年、pp.66-70 などがある。

[171] 後藤忍「福島県環境創造センター交流棟の展示説明文の内容分析」『福島大学地域創造』第 28 巻第 2 号、国立大学法人福島大学地域創造支援センター、2017 年、pp. 97-103

[172] 川延安直、小林めぐみ、筑波匡介、塚本麻衣子（実行委員会事務局）編『福島で「いのち」と「くらし」を考える　ライフネットミュージアムネットワーク活動記録集』ライフミュージアムネットワーク実行委員会、2019 年の他、川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、筑波匡介、塚本麻衣子（実行委員会事務局）編『ライフミュージアムネットワーク 2019 活動記録集』ライフミュージアムネットワーク実行委員会、2020 年や、川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、筑波匡介、塚本麻衣子、山口拡、原恵理子、平澤慎（実行委員会事務局）編『ライフミュージアムネットワーク 2020 活動記録集』ライフミュージアムネットワーク実行委員会、2021 年などがある。

[173] 内山大介編『震災遺産を考える　－次の 10 年へつなぐために－』福島県立博物館、2021 年

[174] 山内宏泰編『リアス・アーク美術館の常設展示図録　東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館、2014 年

[175] 山内宏泰「記憶の回収と修復から、表現の創出へ」赤坂憲雄編『フィールド科学の入口　災害とアートを探る』玉川大学出版部、2020 年、pp. 158-171 などがある。

[176] 東京新聞 2020 年 11 月 4 日「『撮影禁止』の福島県・原子力災害伝承館　双葉町の展示要望には応じず」https://www.tokyo-np.co.jp/article/66233（2021 年 10 月 27 日閲覧）

[177] 朝日新聞 2021 年 9 月 6 日「石巻の津波伝承館、評判さんざん　監修者語る『盛大な失敗』の決定打」https://www.asahi.com/articles/ASP9575SVP86UNHB00B.html（2021 年 10 月 27 日閲覧）

[178] いいたてまでいの会編『いいたてミュージアム　までいの未来へ記憶と物語プロジェクト【記録集】』いいたてまでいの会、2016 年や、いいたてまでいの会編『いいたてミュージアム　～までいの未来へ記憶と物語プロジェクト～　記録集 2』いいたてまでいの会、2017 年、いいたてまでいの会編『いいたてミュージアム　～までいの未来へ記憶と物語プロジェクト～　記録集 3　2017 年度勉強会より』いいたてまでいの会、2018 年などがある。

[179] 佐藤正実編『3.11 定点観測写真アーカイブ・プロジェクト　公開サロン「みつづける、あの日からの風景」』NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台、2014 年や、佐藤正実、小林美香編『3.11 オモイデアーカイブ』3.11 オモイデアーカイブ、2018 年などがある。

[180] 深谷直弘「福島県における東日本大震災の記憶を残す活動とアーカイブ拠点施設の構築　－原子力災害（原発事故）を伝える資料の特徴と課題」『福島大学地域創造』第 31 巻第 1 号、国立大学法人福島大学地域創造支援センター、2019 年、p. 62

[181] 同論文 pp. 63-64
[182] 同論文 p. 66
[183] 豊田市郷土資料館「スペイン風邪とコロナウイルス」パンフレットより
[184] 持田誠前掲書（165）p. 21
[185] 鉄道の減便については首都圏でも終電の繰り上げが行われるなどの対応が行われていたが、筆者は写真記録を行う対象から漏らしてしまった事例の 1 つであり、特に目についた資料であった。
[186] 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館　「ロスト・イン・パンデミック　失われた演劇と新たな演出表現の地平」あいさつ文より
[187] 青海伸一前掲論文（169）pp. 17-19
[188] 岩手県立博物館トピック展示「コロナ禍における祈りの造形　－アマビエさまの大集合－」解説パネルより
[189] 盛岡経済新聞 2020 年 11 月 11 日「岩手県立博物館が新型コロナウイルス関連資料を収集・展示　未来に歴史伝えて」https://morioka.keizai.biz/headline/3187/（2021 年 10 月 27 日閲覧）
[190] 山梨県立博物館で収集していることは NHK の HP でも紹介されている（NHK HP 2020 年 6 月 4 日「新型コロナによる社会変化を後世に 資料を収集 山梨の博物館」https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200604/k10012457221000.html（2021 年 10 月 27 日閲覧））。
[191] 持田誠前掲論文（165）p. 22
[192] 青海伸一前掲論文（169）p. 14
[193] 3.11 伝承ロードには「震災伝承施設」として次の要件を満たすもののうち申請があり認められたものが登録されている。「東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設で、以下のいずれかの項目に該当する施設です。①災害の教訓が理解できるもの②災害時の防災に貢献できるもの③災害の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの④災害における歴史的・学術的価値があるもの⑤その他（災害の実情や教訓の伝承と認められるモノ）」（3.11 伝承ロードパンフレットより）。なお、このネットワークに必ずしもすべての施設が参加しているわけではないが、かなり多くの施設が参加している。
[194] 展示の内容に集中してもらうためには、パネルが曲がったりしていてはいけないということは、学芸員課程でいやというほど教え込まれたことである。パネルが曲がっていると、本来伝えたい展示の内容よりも、パネルが曲がっていることに目が行ってしまうからである。同様に、少し写真を学べば、水平垂直が取れていることの重要性がわかる。そういう心得があるかないかが博物館のスキルとして現れていることに感心した。
[195] ここではキーワードとして示された学芸員の視点、考えるべき視点についていくつか紹介しておきたい。
・記憶……≪ガレキ≫
　瓦礫（ガレキ）とは、瓦片と小石とを意味する。また価値のない物、つまらない物を意味する。
　被災した私たちにとって『ガレキ』などというものはない。それは破壊され、奪われた大切な家であり、家財であり、何よりも、大切な人生の記憶でもある。例えごみのような姿になっていても、その価値が失われたわけではない。しかし世間ではそれを放射能まみ

れの有害毒物、ガレキと呼ぶ。大切な誰かの遺体を死体、死骸とは表現しないだろう。ならば、あれをガレキと表現するべきではない。

・記憶……≪被災物≫

被災した人を被災者と呼ぶように、被災した物は被災物と呼べばいい。ガレキという言葉を使わず、被災物と表現してほしい。

・記憶……≪思い出≫

東日本大震災によって失ったものは様々だ。思い出は記憶であり物体ではない。ゆえに物理的な力でそれを破壊することはできない。しかし、思い出というものは記憶の中に100％保存されているわけではない。思い出はそれにまつわる様々な『物』に宿っている。そしてその『物』に触れることで、思い出が出てくるのである。思い出を宿した『物』が失われることで、思いが出るきっかけは失われる。私たちは、やはり多くの思い出を失ったのだろう。（山内宏泰編『リアス・アーク美術館常設展示図録　東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館、2017 年、pp. 127-128

[196] 解説パネル「【解説】被災物の展示について」より

[197] 閖上の記憶案内の方への聞き取り（2020 年 11 月 25 日）

[198] 閖上の記憶パンフレットより

[199] 桑山紀彦『心理社会的ケアマニュアル　－傷ついた心に寄り添うために』福村出版、2017 年、p. 126

[200] 福島県立博物館企画展「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」あいさつ文より

[201] 同展展示解説パネルより

[202] 同前

[203] 同前

[204] 福島県立博物館テーマ展示「いいたてミュージアム」あいさつ文より

[205] 南相馬市博物館「南相馬の震災 10 年」展示解説パネルより

[206] 同展あいさつ文より

[207] 国立民族学博物館で行われた展示は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で見学に行けなかったが、2021 年 5 月 9 日に行われた近畿民具学会の例会にて展示解説及び質疑応答の機会を得た。なお展示解説の様子は HP でも公開されている（国立民族学博物館 HP「『復興を支える地域の文化－3.11 から 10 年』展示解説映像」https://www.minpaku.ac.jp/ai1ec_event/14525（2021 年 10 月 21 日閲覧）。

[208] 国立民族学博物館 HP「『復興を支える地域の文化－3.11 から 10 年』展示解説映像」36 分～37 分頃 https://www.minpaku.ac.jp/ai1ec_event/14525（2021 年 10 月 21 日閲覧）

[209] 山内宏泰編前掲書 p. 3

[210] 関係者向けに開催された福島県立博物館企画展「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」オンライン展示解説会における展示担当学芸員からの説明による（2021 年 3 月 15 日）

[211] 陸前高田市にある岩手県が運営する東日本大震災津波伝承館いわて TSUNAMI メモリアルがそれにあたる。（第 40 回日本展示学会研究大会における、同施設による口頭発表での質疑応答より（2021 年 6 月 13 日））

[212] だからといって、県の施設にその機能を集約すればいいという議論が出てくるようでは本末転倒だが、福島県立博物館の職員の方の話では、県の施設があるのにどうして博物館でも震災について扱うのかといった声があったとのことである（関係者向けに開催された福島県立博物館企画展「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」オンライン展示解説会における展示担当学芸員からの説明による（2021 年 3 月 15 日））

[213] 鳥取県北栄町において民具の除籍を行った事例があり、そのことについて樫村賢二が３回にわたり報告している（樫村賢二「鳥取県北栄町主催『明治一五〇年民具資料のお別れ展』と民具の『除籍（廃棄）』について（その一）」『民具マンスリー』第 52 巻 6 号、神奈川大学、2019 年、樫村賢二「鳥取県北栄町主催『明治一五〇年民具資料のお別れ展』と民具の『除籍（廃棄）』について（その二）」『民具マンスリー』第 52 巻 9 号、神奈川大学、2019 年、樫村賢二「鳥取県北栄町主催『明治一五〇年民具資料のお別れ展』と民具の『除籍（廃棄）』について（その三）」『民具マンスリー』第 53 巻 9 号、神奈川大学、2020 年）。

[214] たとえ内容や品質に対するこだわりではなく、それが安いからという理由であっても、安いからということは充分に理由として成り立っている。

[215] 例えば、普段の何気ない会話の中で、トイレットペーパーはシングル派かダブル派かで話が盛り上がることがある。ある時はシングル派の人がダブル派の人に対し、「そんなのは 2 倍巻いて使えばいいんだ」と言っていたかと思えば、ダブル派の人が「2 倍にまけばいいという問題じゃない。ダブルの肌触りはシングルを 2 倍巻いても再現できない」と熱い議論になったことがある。

[216] 持田誠前掲論文（165）p. 22

[217] 木村至聖、森久聡編前掲書 p. 127 他

[218] 井出明「ダークツーリズムとは何か？」『DARKtourism JAPAN』第 1 号、ミリオン出版、2015 年、pp. 2-9

[219] 東京 2020 オリンピック競技大会を通して語られた「レガシー」という語がこれにあたる可能性があるが、ここではそれが負の遺産に対峙する言葉として適切かどうか、今後そういった意味合いで使われていくようになる語であるかどうかを判断するものではない。

[220] 竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶　－戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂、2015 年

[221] 木村至聖、森久聡編前掲書 p. 127 他

[222] 荻野昌弘編前掲書他

[223] 向井良人「記憶をめぐる行為と制度」『保健科学研究誌』第 9 号、熊本保健科学大学、2012 年、p. 51

[224] 同前

[225] 竹沢尚一郎編前掲書

[226] 竹沢尚一郎「はしがき」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶　－戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂、2015 年、p. iii

[227] 竹沢尚一郎「フォーラムとしてのミュージアム」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶　－戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂、2015 年、p. 29

[228] 荻野昌弘「保存する時代　－文化財と博物館を考える－」『ソシオロジ』第 42 巻第 2 号、社会学研究会、1997 年、P. 107
[229] 向井良人前掲論文 p. 53
[230] 乙須翼「博物館展示から考える『人間の苦痛』の教育的利用　－教員に求められる資質と倫理－」『長崎国際大学論叢』第 15 巻、長崎国際大学、2015 年、p. 10
[231] 暉峻僚三「公立平和館の役割と意義　川崎平和館と平和学を視点として」『住民と自治』第 664 号、自治体研究社、2018 年、p. 14
[232] 吉田菜美「長崎原爆その『記憶と表現』　－原爆展示史の一考察－」『架橋』第 8 号、長崎大学教育学部政治学研究室、2007 年、pp. 1-109
[233] 山根和代「平和ミュージアムと平和教育」『住民と自治』第 664 号、自治体研究社、2018 年、p. 12
[234] 乙須翼前掲論文、pp.9-10 や、乙須翼「『人間の苦痛』の鑑賞と展示　－教育学的考察の試み－」『長崎国際大学論叢』第 12 巻、長崎国際大学、2012 年、pp.8-12 など
[235] 寺岡聖豪「原爆投下とミュージアム」『福岡教育大学紀要第 4 分冊教職科編』第 68 号、福岡教育大学、2019 年、pp. 13-24。
[236] 筆者と寺岡では、展示する側、される側、それを見る側との対話についての認識は異なるようである。特に筆者は展示する側にいることから、よりフォーラムとしてのミュージアムを実現させるためにどういう工夫が必要かと考えていることから、寺岡とはとらえ方が異なる可能性が高いが、記憶の継承にフォーラムとしてのミュージアムの視点の有効性を指摘しているという点では、大きな意味での方向性は同じものかと考える。
[237] 福島在行「『フォーラム』としての平和博物館は可能か？　～吉田憲司の提言から考える～」『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』第 7 号、立命館大学国際平和ミュージアム、2006 年、pp. 1-10
[238] 同論文 pp. 6-7
[239] 同論文 pp. 6-8
[240] 林美帆「公害を学ぶ今日的意義　－公害資料館連携から見た公害教育－」『環境教育』第 25 巻第 1 号、2015 年、pp. 70-81 や、林美帆「公害資料館ネットワークの意義と未来」『大原社会問題研究所雑誌』第 709 号、法政大学大原社会問題研究所、2017 年、pp. 4-17、林美帆「公害資料館ネットワークの活動と資料保存」『記録と史料』全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、2018 年、pp. 72-76 などがある
[241] 林美帆「公害を学ぶ今日的意義　－公害資料館連携から見た公害教育－」『環境教育』第 25 巻第 1 号、2015 年、p. 72
[242] 同前
[243] 同論文 p. 73
[244] 同前
[245] 林美帆「公害資料館利用拡大の試み　－西淀川・公害と環境資料館と公害教育－」『アーカイブズ学研究』第 23 巻、日本アーカイブズ学会、2015 年、p. 71
[246] 同前
[247] 林美帆「公害資料館ネットワークの意義と未来」『大原社会問題研究所雑誌』第 709 号、法政大学大原社会問題研究所、2017 年、pp. 4-17
[248] 平井京之助「運動する博物館　－水俣病歴史考証館の対抗的実践－」『国立民族学博

物館研究報告』第 36 巻第 4 号、人間文化研究機構国立民族学博物館、2012 年、pp. 531-559

[249] 池田理知子「メディアとしてのミュージアム、その可能性　『四日市公害と環境未来館』を起点として」谷島貫太、松本健太郎編『[シリーズ] メディアの未来 9　記憶と記録のメディア論』ナカニシヤ出版、2017 年

[250] 寺田匡宏「災害遺産とミュージアム　体験を次の世代にどう伝えるか」山本博之、西芳美編著『国際シンポジウム／ワークショップ報告書　災害遺産と創造的復興　－地域情報学の知見を活用して』京都大学地域研究統合情報センター、2012 年、p. 67

[251] 関俊明「我が国の火山系列の博物館について」『國學院大學博物館學紀要』第 37 輯、國學院大學博物館研究室、2012 年、pp. 83-106

[252] 深井美貴「震災の経験と教訓を未来に伝えるための阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターの取組み」『記録と史料』全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、2016 年、pp. 17-20 や、杉本弘幸「災害展示の現状と課題　－人と防災未来センター資料室の事例から－」『全国科学博物館協議会第 25 回研究発表大会資料集』全国科学博物館協議会、2018 年、pp. 85-93 など

[253] 奥村弘「大規模災害の記憶の共振とその歴史化　－阪神・淡路大震災と東日本大震災の資料から考える－」『神戸大学都市安全研究センター研究報告』第 19 号、神戸大学都市安全研究センター、2015 年、pp. 241-242

[254] 同論文 p. 246

[255] 阪本真由美「記憶のメディアとしての災害ミュージアム」阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター編『災害の記憶・記録に関する調査報告　―災害ミュージアム研究塾－』第 29 号、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター、2013 年、p. 101

[256] 阪本真由美「災害の記憶の想起の装置としてのミュージアム」『日本文化人類学会第 50 回研究大会要旨集』日本文化人類学会、2016 年、p. D05

[257] 木村一夫「多目的ダム開発と“揖斐谷”住民の変転」『水資源・環境研究』第 1990 巻第 4 号、水資源・環境学会、1990 年、pp. 15-23 や、関沢まゆみ「昭和 30 年代初めのダム建設と集団移転」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 207 集、国立歴史民俗博物館、2018 年、pp. 11-40 などがある。

[258] 私設博物館では東京新聞で伝えられている群馬県にあるあたご歴史資料館のように、施設を運営する人たちの高齢化などを理由とした閉館が確認できるところである。（東京新聞 2019 年 9 月 22 日「前橋空襲の継承　7 年で幕　あたご歴史資料館　来年 3 月閉館」https://www.tokyo-np.co.jp/article/5618（2021 年 10 月 27 日閲覧））

[259] 竹沢尚一郎前掲書 p. 29

[260] ただしリアス・アーク美術館のように学芸員が積極的に展示とすべく力を入れているというよりは、前章で取り上げたような行政が行うパネル展示を主体とした津波伝承館に近い展示スペースが博物館内に設けられているような印象を受けたところである。それでも博物館の中にコーナーを持っていることは大きな意味があると考える。

[261] 「いわて文化史展示室」とは別の「いわて自然史展示室」内には、「東日本大震災と被災文化財等救援活動」というコーナーがある他、建物の外に「仮説陸前高田市立博物館被災文化財等保存修復施設」があり、資料の保存修復活動の実際の様子を見学できるようになっているが、これらは歴史や民俗などの歴史系の展示の位置づけにはなっていないの

で、ここでは註での紹介にとどめたい。
[262] 関係者向けに開催された福島県立博物館企画展「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」オンライン展示解説会における展示担当学芸員からの説明による（2021 年 3 月 15 日）
[263] 福生市郷土資料室企画展示「子どもと学ぶ『平和のための戦争資料展』」2021 年 7 月 3 日～9 月 12 日など。
[264] 福島県立博物館　令和 2 年度冬の企画展「震災遺産を考える　次の 10 年へつなぐために」2021 年 1 月 16 日～3 月 21 日など。
[265] 志賀賢治前掲書 p. 33
[266] この案内をしてくださる方は、厳密には原爆を知る世代ではないが、原爆直後を知る地元の人として貴重な存在である。佐々木禎子さんの話も、自分の小学 3 年生の時の担任が佐々木禎子さんの担任であったことなども後から知ったというが、他人事ではなく自分事になっていることを案内を通して感じた。なお、資料はたくさんあっても、先生は定期的に動いてしまうので、その由来などもわからなくなる中、前の校長先生に言われ、自由に語っておられるとのこと。また、子どもたちへの配慮として、あまりに生々しい悲惨な様子は避けているとのこと。それは自身も原爆資料館が怖くて行けなかったこととも関係している。さらに、地域出身の人の話や、子どもの頃聞いた昔話なども入れるようにし興味を引いてもらえるよう工夫している。実際の校内での学習では、先生に資料提供をしたりするそうだが、言って聞かせるとなかなか自分のものにならなく忘れてしまうので、子どもたちによる調べもの学習とその調べたことを低学年の子に話して聞かせる活動を行っているとのことである。
[267] 呉市海事歴史科学館の展示をめぐっては、賛否両論で語られている。
[268] 北九州平和資料館職員への聞き取り（2021 年 2 月 12 日）
[269] 2020 年 10 月 31 日現在
[270] ひめゆり平和祈念資料館あいさつ文より
[271] 同前
[272] 同前
[273] リニューアル後の展示についても確認を行う予定にしていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言の度重なる延長などがあり、本稿提出までに新しくなった展示を実見することはかなわなかった。今後実見を経たうえで、ひめゆり平和祈念資料館の活動についてはさらに検討していきたい。
[274] ひめゆり平和祈念資料館展示解説パネルより
[275] 戦没画学生慰霊美術館無言館展示キャプションより
[276] 同前
[277] ただし遺書については、そのままでは読めない若い世代が多く存在することが、知覧特攻平和会館を見学する中で確認された。より多くの人にその内容を伝えようと思えば、読み下し文を用意するなどの工夫は必要かと考える。
[278] 以前東京都江戸東京博物館で展示解説ボランティアをしていた時、戦争のコーナーを外国人に案内することについて、ドイツ語と英語を話すことができるボランティア仲間の方から聞いた話では、アメリカ人に話すとやりにくいが、ドイツ人だと同じ敗戦国なので話しやすいとのことであった。同じ展示であっても、見る人の所属する立場によって見え

方が違うことを示す事例といえる。
[279] 水俣病歴史考証館において解説をいただいた職員の方からの聞き取り（2019 年 9 月 22 日）。
[280] 同前
[281] 四日市公害と環境未来館の解説ボランティアの方からの聞き取り（2017 年 9 月 18 日）
[282] 同前
[283] 同前
[284] 同前
[285] 全国には 18 の施設があり（国立ハンセン病資料館 HP「ハンセン病を学べる全国の施設」https://www.nhdm.jp/others/link/（2021 年 10 月 27 日閲覧））、本研究においても調査対象としていたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い国立ハンセン病資料館のみの調査となった。公害関係の博物館展示とハンセン病関係の博物館等における展示との類似性や共通性、あるいは相関関係などについては今後の課題としたい。
[286] 筆者が見学しただけでも、秩父市にある浦山ダムや、南丹市にある日吉ダム、村上市の奥三面ダムなどがある。
[287] 北杜市立博物館では市内にある塩川ダムについて、パネル一枚で紹介している。ただし、これはダムに沈んだ村を主題として扱う展示ではないため、ダムに沈んだ村のことを伝えることが、展示の主たる目的としていないからとも考えられる。
[288] 1985 年度に専門家を依頼し資料整理を開始。その年には国の重要指定有形民俗文化財へと話が進み、1986 年 12 月 27 日に申請件数が 5890 件に上ることが判明。1987 年 1 月 10 日の申請期限に間に合わせ、2 月 17 日文化財保護審議会で指定の答申。3 月 3 日に重要指定有形民俗文化財としての告示がなされ、「徳山村が存在する間に指定を」という村の願いがかなえられたとのこと（徳山民俗資料収蔵庫展示解説パネルより）。
[289] 徳山民俗資料収蔵庫展示解説パネルより
[290] 石川県立白山ろく民俗資料館あいさつ文より
[291] 手取川総合開発記念館あいさつ文より
[292] 同前
[293] 同前
[294] 只見町ブナセンター付属民俗資料館ふるさと館田子倉あいさつ文より
[295] 只見町ブナセンター付属民俗資料館ふるさと館田子倉展示解説パネルより
[296] 徳山ダムに関連する芸術活動としては、増山たづ子写真展、映画「水になった村」などの存在が挙げられる。
[297] 山崎貴監督『永遠の 0』2013 年公開
[298] 佐藤純彌監督『男たちの大和／YAMATO』2005 年公開
[299] アンドリュー・レビタス監督『MINAMATA　－ミナマタ－』2021 年公開
[300] ウィリアム・ユージン・スミス、アイリーン・美緒子・スミス『ＭＩＮＡＭＡＴＡ』、クレヴィス、1975 年
[301] 石牟礼道子『苦海浄土　わが水俣病』講談社、1969 年
[302] 土門拳『ヒロシマ』研光社、1958 年
[303] 石内都『ひろしま』集英社、2008 年

[304] 丸木位里、丸木俊≪原爆の図　第一部　幽霊≫1950 年、屏風四曲一双、縦 1.8m×横 7.2m、原爆の図丸木美術館蔵他
[305] 増山たづ子『故郷　私の徳山村写真日記』じゃこめてい出版、1983 年
[306] 大西暢夫監督『水になった村』2007 年公開
[307] 京都府南丹市にある日吉ダムで行われているアートプロジェクト。日吉ダムは平成 10 年に完成したダムであり、当然ダムの底に沈んだ集落が存在する。天若湖アートプロジェクトでは、実際に水没した集落の一戸一戸の家の位置を正確に割り出し、その真上の湖面に灯りを設置することで、土地の記憶をよみがえらせる「あかりがつなぐ記憶」をメインプログラムとして開催しているイベントである（天若湖アートプロジェクト実行委員会編『あかりがつなぐ記憶　天若湖アートプロジェクト』キョートット出版、2009 年）。
[308] ジェームズ・キャメロン監督『タイタニック』1997 年公開
[309] もちろんアートに求められる役割はそれだけではないが、博物館との関わりという意味で単純化して考える時の一つの効果としてそういう側面がある。
[310] 被災体験を基にした話を漫画家によって描いてもらい、声優に声を入れてもらったアニメを数本上映している。
[311] 豊田市教育委員会教育行政部文化財課前掲書
[312] 同書 p. 21
[313] 同書 pp. 25-31
[314] 同書 p. 38
[315] 同書 p. 60
[316] 同書 p. 65
[317] 同前
[318] 同前
[319] 同書 p. 67
[320] 外部への表出方法の多くは言語化であるが、必ずしも言語化でなくても良く、自分の外に出すことができれば絵を描くといったことでも構わないことは、序章で既に述べてきたとおりである。
[321] 後藤和民「考古研に言い遺し置くべきこと」『創価考古』創刊号、2001 年、p. 54

参考文献一覧

・青木俊也「生活再現展示の思考」『人類文化研究のための非文字資料の体系化』第 4 号、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2007 年
・赤坂憲雄編『フィールド科学の入口　災害とアートを探る』多摩川大学出版部、2020 年
・赤坂憲雄、玉野井麻里子、三砂ちづる『歴史と記憶　－場所・身体・時間』藤原書店、2008 年
・阿知良洋平「平和学習における住民の『気づき』と学習機会」『住民と自治』第 664 号、自治体研究社、2018 年
・粟津賢太「集合的記憶のエージェンシー　集合的記憶の社会学的構築のために」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 147 集、国立歴史民俗博物館、2008 年
・池田理知子「ミュージアムが語る戦争の記憶」『九州コミュニケーション研究』第 15 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2017 年
・石川直章「『今』を記録する　地域博物館の役割」『博物館研究』第 47 巻第 9 号、財団法人日本博物館協会、2012 年
・石原凌河「災害遺構に対する価値構成に関する研究　－雲仙普賢岳の噴火災害遺構『旧大野木場小学校被災校舎』の事例調査」『都市計画論文集』第 53 巻第 3 号、日本都市計画学会、2018 年
・市川虎彦「地域の記憶と戦争博物館」『松山大学論集』第 17 巻第 4 号、松山大学学術研究会、2005 年、pp. 43-65
・伊藤寿朗『ひらけ、博物館』岩波書店、1991 年
・今井信雄「均質化する災害の記憶？　－日本における災害の経験を事例として」『日仏社会学会年報』第 26 巻、日仏社会学会、2015 年
・今村文彦監修、鈴木親彦責任編集『デジタルアーカイブ・ベーシックス 2　災害記録を未来に活かす』勉誠出版、2019 年
・岩崎竹彦「民具を活用した地域博物館における回想法・回想ワーク　－その意義と可能性－」『民具研究』第 142 号、日本民具学会、2010 年
・岡田清一「民具資料の活用から見た博物館の役割」『Musa　博物館学芸員課程年報』第 30 号、追手門学院大学博物館研究室、2016 年
・小田康徳「歴史学の立場から見る公害資料館の意義と課題」『大原社会問題研究所雑誌』第 709 号、法政大学大原社会問題研究所、2017 年
・小谷超「博物館が市民と連携して実施する『地域回想法』について」『民具研究』第 151 号、日本民具学会、2015 年
・片桐新自「『昭和ブーム』を解剖する」『関西大学社会学部紀要』第 38 巻第 3 号、関西大学、2007 年
・金子淳「公害という沈黙　－四日市公害の記憶とその表象をめぐって－」『静岡大学生涯学習教育研究』第 13 号、静岡大学生涯学習教育研究センター、2011 年
・金子淳「戦争観の形成と戦争展示」『静岡大学生涯学習教育研究』第 14 号、静岡大学生涯学習教育研究センター、2012 年
・金子淳「ノスタルジー研究の現在と博物館における昭和ノスタルジーのゆくえ」『静岡県民俗学会誌』第 28・29 号、静岡県民俗学会、2013 年
・金子淳「歴史系博物館における『未来』の表象」『桜美林論考．人文研究』第 7 号、桜美林大学、2016 年

・金子淳「博物館における場所性とオーセンティシティ」『桜美林論考．人文研究』第 10 号、桜美林大学、2019 年
・金子淳「博物館を取り巻く『物語性』をめぐって　～『観光立国』政策と日本遺産を中心に～」『桜美林論考．人文研究』第 11 号、桜美林大学、2020 年
・北名古屋市歴史民俗資料館編『博物館資料化の資源化－昭和日常博物館の可能性』北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 1 、北名古屋市歴史民俗資料館、2007 年
・北名古屋市歴史民俗資料館編『地域回想法の可能性－多様な導入形態と地域への効果』北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 3 、北名古屋市歴史民俗資料館、2009 年
・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和のくらしに学ぶ－学習素材としての展示』北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 4 、北名古屋市歴史民俗資料館、2010 年
・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和を探る展覧会の視点－紙上展覧会へようこそ』北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 8 、北名古屋市歴史民俗資料館、2014 年
・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和日常博物館ワークショップ小論－昭和時代の日常を伝え・学び・アートする－』北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 9 、北名古屋市歴史民俗資料館、2015 年
・北名古屋市歴史民俗資料館編『昭和日常博物館的コレクション・セレクション－昭和の生活資料コレクション展示の試み－』北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要 10、北名古屋市歴史民俗資料館、2016 年
・君塚仁彦「ハンセン病回復者の記憶と博物館展示に関する基礎的研究（1）　－在日朝鮮人回復者の展示をめぐる研究視点－」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』第 65 集、東京学芸大学学術情報委員会、2014 年
・君塚仁彦「ハンセン病回復者の記憶と博物館展示に関する基礎的研究（2）　－ハンセン病博物館の歴史的段階と課題としての教育活動－」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』第 69 集、東京学芸大学学術情報委員会、2018 年
・楠見孝編『心理学叢書　なつかしさの心理学　－思い出と感情』誠信書房、2014 年
・黒沢浩編『博物館教育論』講談社、2015 年
・桑山紀彦『心理社会的ケアマニュアル　－傷ついた心に寄り添うために』福村出版、2017 年
・古賀紀江、横山ゆりか「場所記憶と回想」『日本生理人類学会誌』第 12 巻第 2 号、日本生理人類学会、2007 年
・古賀紀江、横山ゆりか「場所の写真に対する自立高齢者の語りについての研究　知識語り・回想語りと居住地域の環境」『人間・環境学会誌』第 10 巻第 1 号、2007 年
・後藤和民「博物館の運営と職員」伊藤寿朗、森田恒之編『博物館概論』学苑社、1978 年
・後藤和民「文化財保護と博物館」広瀬鎮編『博物館学講座　第 4 巻　博物館と地域社会』雄山閣、1979 年
・後藤和民「郷土博物館」広瀬鎮編『博物館学講座　第 4 巻　博物館と地域社会』雄山閣、1979 年
・後藤和民「歴史系博物館」広瀬鎮編『博物館学講座　第 4 巻　博物館と地域社会』雄山閣、1979 年
・後藤和民「歴史系博物館」新井重三、佐々木朝登編『博物館学講座　第 7 巻　展示と展示法』雄山閣、1981 年
・小山茂喜「博物館を活用した研修プログラムの開発　－長野県立歴史館での実践を例に－」『教職研究』第 5 巻、信州大学全学教育機構教職教育部、2012 年
・権安理「廃校の社会理論　－なぜ廃校は活用を求められるのか－」『応用社会学部』第 54 号、立教大

学社会学部研究室、2012 年
・阪本真由美、木村周平、松多信尚、松岡格、矢守克也「自身の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究　－トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から－」『京都大学防災研究所年報』第 52 号 B、京都大学防災研究所、2009 年
・阪本真由美、矢守克也「災害ミュージアムを通した記憶の継承に関する一考察　－地震災害のミュージアムを中心に－」『自然災害科学』第 29 巻第 2 号、自然災害科学会、2010 年
・篠木由喜「歴史系博物館の展示教育についての考察」『MUSEUM STUDY』第 25 号、明治大学学芸員養成課程、2014 年
・柴田剛「『場所』／『記憶』／『物語』」『空間・社会・地理思想』第 12 号、大阪市立大学文学部地理学教室、2008 年
・嶋根克己「負の記憶が造る文化財　－フランス、ドイツにおけるユダヤ人虐殺関連の資料館から－」『専修大学人文科学研究所月報』第 237 号、専修大学人文科学研究所、2008 年
・清水透「フィールドワークと歴史学」『三田社会学』第 15 号、三田社会学会、2010 年
・清水万由子「公害経験の継承における課題と可能性」『大原社会問題研究所雑誌』第 709 号、法政大学大原社会問題研究所、2017 年
・清水善仁「特集にあたって」『大原社会問題研究所雑誌』第 709 号、法政大学大原社会問題研究所、2017 年
・下田健太郎『水俣の記憶を紡ぐ　－響き合うモノと語りの歴史人類学』慶應義塾大学出版会、2017 年
・新海智弘「長崎原爆と朝鮮人、中国人被爆者のまなざし」『九州コミュニケーション研究』第 16 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2018 年
・角南聡一郎「モノはいかに保存・活用するべきか　－近現代物質文化を題材に－」『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005　2003 年度報告書』総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2、2004 年
・関嘉寛「博物館という空間　－記憶の伝承に関する一考察－」『大阪大学人間科学研究科紀要』第 30 巻、大阪大学大学院人間科学研究科、2004 年
・髙谷和生「熊本の戦争遺産を未来に伝える」『九州コミュニケーション研究』第 15 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2017 年
・筑波匡介「新潟県中越地震における震災関連資料の収集・保全と展示について」『2019 年度日本地理学会秋季学術大会発表要旨集』日本地理学会、2019 年
・手塚薫「フォーラムとしてのミュージアム」『北海道開拓記念館研究紀要』第 27 号、北海道開拓記念館、1999 年
・寺田匡宏「『負の記憶』の継承の側面から見た津波 7 年後のアチェ　－博物館・災害遺産の側面から」山本博之、西芳美編著『国際シンポジウム／ワークショップ報告書　災害遺産と創造的復興　－地域情報学の知見を活用して』京都大学地域研究統合情報センター、2012 年
・出利葉浩司、池田貴夫、青柳かつら「展示会『お茶の間からリビングへ－家族をとりまく道具の変化－』を企画して　－現代を展示するのに、なぜ Wii と iPod は必要だったのか－」『北海道開拓記念館研究紀要』第 39 号、2011 年
・出利葉浩司「博物館展示はなにを伝達するのだろうか？　－学芸員はなにを語ろうとしたのか？開拓記念館アイヌ文化展示のコンセプト－」『北海道開拓記念館研究紀要』第 28 号、2000 年

・東条さやか「金沢くらしの博物館における回想法への取り組み」『月間社会教育』第 63 巻第 2 号、国土社、2019 年
・直野章子「広島の記憶風景　－国民の創作と不気味な時空間－」『社会学評論』第 60 巻 4 号、日本社会学会、2010 年
・中江圭「新しいミュージアム構想に関する一提言」『常民文化』第 33 号、成城大学大学院、2010 年
・中野浩「高校水産教育に記された水俣病　－『公害』と『環境』の乖離構造の考察に向けて－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 48 号、東京大学大学院教育学研究科、2009 年
・鳴瀬麻子「回想法を用いた博物館の新たな機能に関する考察　－シニア世代と若者世代の文化伝播を円滑にするための新たなシステムの構築にむけて－」『人間生活文化研究』第 2013 巻第 23 号、大妻女子大学人間生活文化研究所、2013 年
・西山暁義「ヨーロッパ国境地域における歴史意識と博物館　－アルザス・モーゼル記念館の事例－」『共立女子大学総合文化研究所紀要』第 20 号、共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所、2014 年
・畠山均「長崎純心大学が語り継いできた被爆体験と平和教育」『九州コミュニケーション研究』第 15 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2017 年
・初澤敏生、佐川朋子、鈴木英里「北海道・東北地方における地域博物館と学校との連携活動に関する調査報告」『福島大学地域創造』第 28 巻第 2 号、国立大学法人福島大学地域創造支援センター、2017 年
・浜日出夫「記憶のトポグラフィー」『三田社会学』第 5 号、三田社会学会、2000 年
・浜田弘明『博物館の新潮流と学芸員』神奈川大学 21 世紀 COE 研究成果叢書神奈川大学評論ブックレット 34、御茶の水書房、2012 年
・林茂伸「全国一の開拓民を送り出した長野県　満蒙開拓平和記念館－戦争と自治体－」『住民と自治』第 664 号、自治体研究社、2018 年
・平野順也「経験・記憶・忘却について」『九州コミュニケーション研究』第 17 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2019 年
・平松建人、小野田泰明、佃悠「惨禍を伝承するための展示室構成と場所との関係」『日本建築学会技術報告書』第 25 巻第 60 号、日本建築学会、2019 年
・深谷直弘「被爆建造物の保存と記憶の継承　－長崎・新興善小学校一部校舎保存問題を事例に－」『社会学評論』第 65 巻第 1 号、日本社会学会、2014 年
・藤川賢「地域社会における公害経験の意味と普遍化」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』第 133 号、明治学院大学社会学会、2010 年
・藤喜一樹「四日市公害体験者の世界　－三重県四日市市磯津集落の元漁師の生活史から－」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』第 63 輯、愛知大学綜合郷土研究所、2018 年
・福田珠己「第 5 回講演　再現された『生活空間』　－ミュージアム・商業施設の現在－」『女性学連続講演会　第 13 期　家族の空間／空間のなかの家族　－ジェンダー化される生活空間をめぐって－』大阪府立大学女性学研究センター、2009 年
・福田匡朗、中村友昭「考古学ミュージアム主催講演会記録　博物館展示と昭和の時代　－記憶をたどる展示の試み－」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第 12 号、鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム、2015 年
・松岡葉月「博物館の体験学習における児童の歴史意識の発達的変容　－小学校第三学年単元『昔のく

らし』からの考察－」『社会科教育研究』第 97 号、日本社会科教育学会、2006 年
・宮前良平『復興のための記憶論　野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー』大阪大学出版会、2020 年
・森俊貴、永野三智、石原明子「水俣エッセイ『複雑の中で生きる』」『公共空間』2014 年秋号、京都大学公共政策大学院『公共空間』編集委員会、2014 年
・森村敏己「記憶とコメモレイション　－その表象機能をめぐって－」『歴史学研究』第 742 号、歴史学研究会、2000 年
・山下善寛「水俣の環境問題と健康被害」『九州コミュニケーション研究』第 14 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2016 年
・矢守克也「博物館における震災体験の記憶と伝達　－『北淡町震災記念公園（野島断層保存館）』をめぐってー」『奈良大学大学院研究年報』第 7 号、奈良大学大学院、2002 年
・湯浅隆「歴史学の動向と歴史博物館の展示」『教職・学芸員課程研究』創刊号、東京女子大学『教職課程・学芸員課程』編集委員会、2018 年
・横溝彰彦「外国人学生対象の平和教育における原爆の記憶の継承　－加害者と被害者という言説－」『九州コミュニケーション研究』第 16 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2018 年
・横溝彰彦「（自主）規制される長崎原爆の語り　－被爆者の多様性を隠す『被爆者』というラベル－」『九州コミュニケーション研究』第 17 号、日本コミュニケーション学会九州支部、2019 年
・吉村智博「博物館における表象行為と社会的差別　－差異の表象をめぐって－」『人文学報』第 100 号、京都大学人文科学研究所、2011 年
・米家泰作「歴史と場所　－過去認識の歴史地理学－」『史林』第 88 巻第 1 号、史学研究会、2005 年

資料一覧

1　実践報告　福生市郷土資料室夏休み自由研究応援企画「親子対話によるむかしの道具調べ」の報告

【資料 1】

実践報告

福生市郷土資料室夏休み自由研究応援企画「親子対話によるむかしの道具調べ」の報告

平成 29 年 8 月に、筆者が福生市郷土資料室から離れている期間に福生市郷土資料室の協力を得て実施した実践活動の報告である。

今回報告する活動は、お父さんお母さん世代が子どもの頃に使った道具（以下「平成の道具」という）を用いて、お父さんお母さんが平成の道具を通して思い出を語る場を設定し、地域回想法では高齢者が思い出を語ることを想定しているのに対し、若い世代であっても博物館資料を通して思い出を語ることができるのではないかということについて、福生市郷土資料室での事業として実践し確認したものである。

高齢者が認知症予防に役立つということも含めて、思い出を語り合うということ自体は、場の設定をうまくすれば実践可能であることは北名古屋市をはじめ、氷見市博などの事例からも明らかである。しかし、30 代 40 代の人が平成の道具を見て思い出を語る場を設定することはなかなか難しいことから、今回の実験では、子どもをだしに使い、夏休みの自由研究を応援するという名目で、平成の道具について親子で対話しながら調べ学習を行うという場を設定することとした。そのため、小学校が夏休みの期間中に事業を行う必要があることから、平成 29 年 8 月 20 日（日）に福生市郷土資料室の事業として実施することとなった。

以下に、事業の概要と感想をはじめ、見えてきた課題などについてまとめてみたい。

【事業名】

夏休み自由研究応援企画「親子対話によるむかしの道具調べ」

【実施時期】

平成 29 年 8 月 20 日（日）10:00～16:00

【実施場所】

福生市郷土資料室展示室内

【対象】

小学校 3～6 年生とその保護者（実際には小学校 2 年生で参加してくれた子が 2 人いた。また、親ではなく祖母が対応してくれたケースが 1 組あった。）

【周知方法】

広報ふっさ平成 29 年 8 月 1 日号（参考資料 1)、福生市郷土資料室内での掲示（写真 1)、福生市郷土資料室での案内パンフの配布

【参加者】

4 組（2 組は事前申し込み。1 組は青海による声掛けによる参加。1 組は当日飛び入り参加。青海の声掛けによる参加者のみ祖母と孫で実施。そのほかは母と子による実施となった。）

【事前準備】

・ワークシートの作成

青海作成の最低限の項目を盛り込んだ素案をもとに、福生市郷土資料室の主催事業でもあるため、福生市郷土資料室として調べ物学習、自由研究に必要と思われる項目を加え、デザインを整えてもらった（参考資料 2)。

・調べ物の対象の選定

展示してある道具のすべてを対象とすると、展示室の資料は「お手を触れないでください」としていることや、職員でも説明に困ることが起こりうることなどの理由から、今回は福生市郷土資料室の方で、あらかじめ「カセットテープレコーダー」「ファミコン」「携帯電話」の 3 つに絞って、自由に触れても良い収蔵資料をあらかじめ用意して実施することとなった。

・保護者向けの回答例の作成

子どもがワークシートを作成するにあたって、親としてどんなことを話してあげると良いのかということについてわかりやすくするために、回答例を作成し、親子対話のサポートを行うこととした（参考資料 3）

・机やイス、むかしの道具、鉛筆や定規等の準備

当日は、子どもたちが道具を調べたりワークシートに記入をしたりするために必要となる机等を用意し対応した。

・道具について理解を進めるための準備

ファミコンは実際にテレビにつなげるか試したがうまくいかなかったため、ファミコンの画面をプリントアウトしたものを用意した。また、テープレコーダーは実際に音楽を聞けるように、音楽入りのカセットテープを用意してもらった。

【実施してみての感想・課題】

基本的には私一人で対応するつもりでいたが、実際には同じタイミングで子どもたちがやってきて、2 組の対応を同時にしないといけないという事態も発生し、他の職員による手伝いをいただいた。ただし私の意図しているところが対応してくださった職員にうまく伝わっていなかった部分があり、一部想定していた動きとは異なる動きが出てきてしまった。

具体的には、絵を描くのは話を聞き終わってから実施することを想定していた（話を聞くことで子どもだけでは気づかないようなことまで目が行くようになる可能性があるのではないかと想定してのこと）が、先に絵を描いてしまうなどのことがおきた。特にこのことは、最後に絵を描いている時間を使って保護者からアンケートに答えてもらおうと考えていたので、アンケートに回答してもらう時間を確保することができないということにもつながった。

また、絵を先に描くことになった原因でもあるが、ワークシートを上から順に進めると、かなり早い段階で絵を描かないといけないので、子ども自身もそこに集中してしまい、後の項目を埋める頃には飽きが出てきてしまっていた（これは、ワークシートをそのまま自由研究として学校に提出できるようにと意図したため、絵を描く位置は上の方が良いだろうと判断したことによる）。

所要時間は 30 分程度を想定していたが、子どもの集中力の問題（道具に触れるのに夢中になってしまうなど）や、絵を描く際に細部に凝りはじめてしまうなどのこともあり、実際にはもう少し時間がかかってしまった。

親世代の人は、実際の道具を見ると思い出すことも多くあるようで、同じような年代を過ごした経験を持ってサポートにあたっていた私や他の職員との会話が弾む場面も多々見られた。

一方で、ワークシートにはお母さんの思い出を書く欄を用意していたが、あまりたくさんは記入していないようだった。

道具に触れることができるように準備してもらったり、実際に音楽を聞けるようにしてもらったりと福生市郷土資料室の職員に配慮してもらったので、子どもたちも実際の道具に触ったり聞いたりしながら学ぶことができた。展示品の多くは触れることができないので、貴重な機会となったのではないかと思う。

なお、アンケートについては、もう少し工夫が必要だった。特に「今後、お子さんと話をするのに、どんな道具が展示してあったら良いと思いますか？」という設問については、具体的な商品名（例えば、ビックリマンシール、キンケシ、ミニ四駆、シルバニアファミリー、ウォークマンなど）の記入があるとより参考となるデータが取れたと思うので、今後工夫していきたい。もしかしたら、こういうデータを取るなら、自分と同年代に対する別の形でのアンケートも役に立つかもしれないと後から思った。

実践を通して見えてきたこと

今回簡単なアンケートではあったが、「なつかしくて楽しい」とか「自分が使っていたものなので、ちょっと昔というのがおもしろかった」という意見があり、当初課題設定した若い世代であっても、自分たちが使ったことのある道具に触れることで懐かしく思い出を語れることが確認できた。

また、親子でのやり取りのサポートをしている中で、お母さんの思い出を引き出すよう会話を進めると、例えば、ファミコンの話になった時には、「ドラゴンクエストの復活の呪文を書くために専用のノートを持っていた」とか「高橋名人が 16 連射をした」といった話が出てくるなど、同世代だから楽しく懐かしく語れる話題があることも改めて実感した。

一方で、こういった話が子どもたちにどの程度伝わったのかということについては、実際に体験したことがないので理解しづらかったかもしれないと感じた。

ほかにもアンケートの中で、「子供が自由研究に困っていたので、とても助かりました」という声もあり、子どもをだし(・・)に使ったとはいえ、自由研究という場を使って親子で昔の道具を使った会話の機会を創出するという作戦自体も成功だったと感じた。

今後は、地域回想法の手法（ここでは昔の道具に触れる中で思い出を語ることとしているが）を生かした事業の展開や、今回実施した事業をより精度を高める方法等の研究を進め、さらにサンプル数を増やし、より充実したデータを得られるよう努めたい。

参考資料

1　広報ふっさ 8 月 1 日号
2　ワークシート
3　ワークシートの保護者向け回答例
4　夏休み自由研究応援企画アンケート集計結果

写真

1　福生市郷土資料室内での掲示の様子
2　夏休み自由研究応援企画実施状況写真

市役所は祝日の土曜日を除き、一部の部署で毎週土曜日開庁しています

費用の記載のない事業は無料です

中央体育館事業 あなたにピッタリな教室は!?『中央体育館スポーツ教室《体験参加》』

中央体育館ではさまざまな教室を用意しています！ 体験参加は、途中からでもほかの教室に切り替えられます。

あなたの目的は？		あなたの現状は？		あなたにぴったりの教室は？		いつやっているの？
最近太ってしまい、ダイエットしたい！	→	日ごろから、あまり運動をしていない	→	**「誰でもかんたんエクササイズ」**、**「美ボディコントロール」**、**「健康ストレッチ」**など。効率的かつ運動初心者の方でも安心して楽しめます。	→	**〈誰でもかんたんエクササイズ〉**日曜日、午後3時30分～4時30分 **〈美ボディコントロール〉**土曜日、午後7時30分～8時30分 **〈健康ストレッチ〉**火・金曜日、午後2時40分～3時40分
		運動習慣があり、それなりの動きにもついていける	→	**「金曜ワークアウト」**、**「水曜モーニングエアロ」**など。音楽に合わせて体を動かす有酸素運動です。しっかり汗をかきたい方におすすめです。	→	**〈金曜ワークアウト〉**金曜日、午後7時30分～8時30分 **〈水曜モーニングエアロ〉**水曜日、午前10時～11時
肩こりや腰痛に悩んでいるので、少しでも改善したい	→	夜、仕事帰りなどに活動したい	→	**「ナイトストレッチ」**「**ナイトヨガ**」など。仕事帰りなどにリフレッシュしたい方に最適です。	→	**〈ナイトストレッチ〉**火曜日、午後7時30分～8時30分 **〈ナイトヨガ〉**水曜日、午後8時～9時
		昼間の空いた時間を活用したい	→	**「リラックスストレッチ」**「**金曜ヨガ**」など。普段使っていない筋肉を刺激し、血行を良くすることで肩こりや腰痛を改善します。	→	**〈リラックスストレッチ〉**水曜日、午後2時～3時 **〈金曜ヨガ〉**金曜日、正午～午後1時

【参加方法】開始15分前までに、直接中央体育館窓口へ。
【参加費】350円～500円（教室によって異なります。）※詳細は市ホームページをご覧いただくか、お問い合わせください。
【問合せ】中央体育館☎552・5511 ※8月は教室が休みの場合がありますので、事前にお問合せください。

弓道（和弓）秋季教室開催のお知らせ

【日時】9月2日㈯～10月21日㈯の間の毎週土曜日午後2時～（約1時間30分・全8回）
【場所】中央体育館弓道場
【定員】先着10人
【対象】高校生以上
【費用】2,000円（用具代等、当日徴収します。）
【持ち物】道具はすべて貸し出しますので、動きやすい服装でお越しください。上衣はなるべくボタンのないものを着用してください。また靴下の着用もお願いします。※足袋でも可
【申込み】8月5日㈯から電話（椎名☎551・6185、池田☎090・2552・4798）、ホームページ（http://fussakyudorenmei.sakura.ne.jp）または、直接中央体育館弓道場へお申し込みください。

楊名時太極拳福生同好会「楓」無料太極拳体験教室

ゆっくりとした動きで健康づくりをしませんか、ぜひご参加ください。
【日時】9月6日・13日・20日・27日の毎週水曜日の午前10時～11時30分（申込み不要）
【場所】かえで会館
【対象】老若男女問わず動きやすい服装でご参加ください。
【問合せ】太極拳連盟・大類☎553・9913

ジュニア卓球教室

卓球を上手になりませんか？

【日時】9月9日㈯・16日㈯・24日㈰午後1時30分～3時30分
【場所】中央体育館卓球場
【対象】小・中学生（小学3年生以上）
【持ち物】運動ができる服装、運動靴、飲み物、タオル。貸し出し用のラケットもあります。
【定員】先着16人
【指導】福生市卓球連盟指導員
【主管】福生市卓球連盟（福生市ジュニア育成地域推進事業）
【主催】東京都、（公財）東京都体育協会、NPO法人福生市体育協会
【申込み】電話で午後7時～9時の間に成末☎530・4220へ。

山の日ボルダリング体験

オリンピック種目になったクライミングを体験してみませんか？
ロープなどを使わずに手軽にできるボルダリングなので、小さなお子さんから体験できます。
【日時】8月11日㈷午前9時～午後9時
初めての方やワンポイント指導を受けたい方は次の時間帯にお越しください。
①午前10時～正午
②午後2時～4時
【対象】3歳から（未就学児は保護者の付添いが必要です）
【参加費】大人150円、小人70円（90分間）※スペースに限りがありますので、来館時にすぐに利用できない場合もあります。
【持ち物】動きやすい服装、室内履き、ふた付の水分補給用飲料、タオル等
【申込み】当日に直接熊川地域体育館（☎552・1980）受付へお越しください。
［ホームページ］http://www.tama-spo.com/fussa

市民文化教室参加者募集

▼書道コース

初心者対象の教室です。基礎からしっかり楽しく書道を学んでいきます。
【日時】8月26日～11月18日の間の毎週土曜日午後2時～4時※10月28日、11月4日・11日を除く（全10回）
【場所】さくら会館第2集会室
【対象】市内在住・在勤・在学の初心者の方
【定員】先着20人
【講師】石川幹子（いしかわみきこ）氏（祥香墨（しょうかすみ）の会）
【申込み】8月3日㈭午前9時から公民館公民館係☎552・2118へ。

福生地域体育館コース参加型教室【問合せ】福生地域体育館☎530・8811

事業名	対象	曜日	時間	期間	回数	定員	参加費
転ばん塾	高齢者	木	午後1時30分～3時	9月7日㈭～11月30日㈭※11月23日㈷は休講	12回	30人	4,800円（初日一括払い）と参加毎150円
幼児体操（年少）	年少児	木	午後4時～4時50分	9月7日㈭～12月21日㈭※11月23日㈷は休講	15回	15人	4,500円（初日一括払い）と参加毎70円
キッズダンス	年中長児	土	午後1時20分～2時20分	9月2日㈯～12月23日㈷※9月23日㈷、10月7日㈯は休講	15回	20人	4,500円（初日一括払い）と参加毎70円
低学年ダンス	小学1～3年生	土	午後0時10分～1時10分	9月2日㈯～12月23日㈷※9月23日㈷、10月7日㈯は休講	15回	30人	6,000円（初日一括払い）と参加毎70円

【申込み】8月15日㈫（必着）までに往復はがき、またはホームページ（http://www.tama-spo.com/fussa）から①教室名②住所③氏名（ふりがな）④生年月日（学年）⑤電話番号⑥返信用宛名（往復はがきのみ）⑦メールアドレス（ホームページのみ）を記入のうえ、〒197-0013 福生市武蔵野台1-8-7 福生地域体育館教室係へ。※申込み多数の場合は抽選。

郷土資料室からのお知らせ

▼夏休み自由研究応援企画「親子対話によるむかしの道具調べ」参加者募集

郷土資料室で展示中の家庭用ゲーム機やビデオデッキなど、一世代前の道具に関する思い出を保護者の方がお子さんにお話しし、お子さんが自由研究としてまとめる学習活動のお手伝いをします。
【日時】8月20日㈰午前10時～午後3時※この時間帯のうち、約30分程度（正午～午後1時を除く）
【場所】郷土資料室
【対象】小学3～6年生とその保護者※お子さんと保護者で一緒にお申し込みください。
【定員】10組程度※事前申込制
【持ち物】鉛筆、消しゴム、色鉛筆（ワークシートを用意します）
【申込み】8月5日㈯午前10時から生涯学習推進課文化財係☎530・1120へ。

～空より青い、市営プール2017～イベント情報！

▼フードドライブ開催！ 福生発の支援活動

賞味期限まで2か月以上あるカップ麺・ジュース・菓子類等の新品不要品（酒類・開封品不可）がありましたら、市営プールにお持ちください。収集した食品は、閉場後にフードバンク・NPO法人セカンドハーベスト・ジャパンへ寄贈します。また、賛同いただけた方へは、心ばかりの謝礼をさせていただきます。
ぜひ「福生発被災地など食に困る方々への支援活動」にご協力お願いします。
【受付期間】8月1日㈬～31日㈭の間の営業時間中

▼8月1日「水の日」イベント開催

①中学生以下入場無料
②当日場内でミネラルウォーターを購入した方は入場無料（①②ともに2時間分）
※当日は午前9時～午後4時までの短縮営業（最終入場は午後3時30分）
③変形プールで親水特別イベント（午後1時～3時）※ウォーターチューブ無料体験

▼「ライフガード体験教室」を開催

【日時】8月20日㈰午前10時～11時50分（悪天候による中止の際は8月27日㈰へ延期）
【対象】小学生～中学生（小学1・2年生は、必ず保護者の方がご引率ください。イベント中は近くで見学できます。）
【定員】先着10人
【参加費】500円（入場料別、無料利用券使用可・保険代等の諸費用含む）
【参加賞】記念Tシャツ・ファーストエイドポーチ
【応募方法】市営プールホームページ、または直接市営プールでお申し込みください。
【募集締め切り】8月13日㈰
【問合せ】有限会社ブイフィールド（市営プール指定管理者）☎042・677・4897（平日午前10時～午後5時）

自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

小学校　　年　　組　　名前

1．調べた道具の名前：

2．道具のスケッチ

3．道具の大きさ

幅　　センチ

高さ　　センチ

奥行　　センチ

4．道具の材質

5．なにをする道具か：

6．　　さんが何歳ごろ使っていた道具か：

7．今はどんな道具になったか：

8．今の道具のほうが良いところ：

9．もっと昔はどんな道具だったか：

10．　　さんとこの道具の思い出：

11．この道具について思ったこと：

自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

小学校　　年　　組　　名前

1．調べた道具の名前：*カセットテープレコーダー*

2．道具のスケッチ

お子さんにスケッチさせてください。

なるべく道具の特徴がわかるアングルがよいです。

3．道具の大きさ

幅　　センチ

高さ　　センチ

奥行　　センチ

4．道具の材質

プラスチック・金属

5．なにをする道具か：*カセットテープに録音して、音楽などを聞く道具*

6．　　さんが何歳ごろ使っていた道具か：*○才あるいは○年生*

7．今はどんな道具になったか：*CDプレイヤー等*

8．今の道具のほうがよいところ：*きれいな音が出る。一枚のディスクにたくさんの曲を録音できる。CDはカセットテープより壊れにくい。好きな曲をすぐに再生できる。ディスクは薄くて場所を取らない。ディスクはカセットテープより薄い。*

9．もっと昔はどんな道具だったか：*それ以前はオープンリールレコーダーがあったが、値段が高くて持っている人は少なかった。*

10．　　さんとこの道具の思い出：*買ったときの気持ち、どんな音楽を録音したか、周りの友達は持っていたか、カセットは何本くらい持っていたか等*

11．この道具について私が思ったこと：*お子さんの率直な感想を書かせてください。*

自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

小学校　　年　　組　　名前

1．調べた道具の名前：*ファミコンもしくはファミリーコンピューター*

2．道具のスケッチ

お子さんにスケッチさせてください。

なるべく道具の特徴がわかるアングルがよいです。

3．道具の大きさ

幅　　センチ

高さ　　センチ

奥行　　センチ

4．道具の材質

プラスチック・金属

5．なにをする道具か：*テレビでゲームができる道具*

6．　　さんが何歳ごろ使っていた道具か：*○才あるいは○年生*

7．今はどんな道具になったか：*プレステ4・WiiU*

8．今の道具とほうがよいところ：*回線を使って離れた人と対戦できる。画面がきれい。コントローラーのボタンが多く、いろいろな動作ができる。ディスクはカセットより小さいなど。*

9．もっと昔はどんな道具だったか：*それ以前、家でできるテレビゲームは高価でほとんどの家にはなかった。ゲームセンターにはテレビゲームがあったが、一回ごとにお金を払った。*

10．　　さんとこの道具の思い出：*買ったときの気持ち、最初に誰とあそんだか、周りの友達は持っていたか、どんなソフトが好きでどのようなゲーム内容か等*

11．この道具について私が思ったこと：*お子さんの率直な感想を書かせてください。*

自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

小学校　　年　　組　　名前

1．調べた道具の名前：*携帯電話*

2．道具のスケッチ

お子さんにスケッチさせてください。

なるべく道具の特徴がわかるアングルがよいです。

3．道具の大きさ

幅　　センチ

高さ　　センチ

奥行　　センチ

4．道具の材質

プラスチック・金属

5．なにをする道具か：*どこでも電話ができる道具*

6．　　さんが何歳ごろ使っていた道具か：*○才あるいは○年生*

7．今はどんな道具になったか：*スマートフォン*

8．今の道具のほうが良いところ：*インターネット検索ができる。ゲーム、地図のナビゲーションなどができる。画面が大きくて見やすい。*

9．もっと昔はどんな道具だったか：持ち運びのできない固定電話、持ち運びできるが電話がかかってきたことを知らせるだけのポケベル

10．　　さんとこの道具の思い出：*買ったときの気持ち、最初に誰と電話したか、周りの友達は持っていたか、料金はいくらくらいで誰が払っていたか、音質はどうだったか、電池はながもちしたかなど。*

11．この道具について私が思ったこと：*お子さんの率直な感想を書かせてください。*

アンケート集計結果

アンケートは参加４組のうち３組から回答を得た。

・福生市郷土資料室に、お父さんお母さんが子どもの頃に使った道具が展示されているのを知っていましたか？

はい　１名　／　いいえ　２名

・今回の事業に参加してみての感想を教えてください。

・なつかしくて楽しいと思いました。
・子供が自由研究に困っていたので、とても助かりました。自由研究を昔の道具にしようと思っていたのが、ちょっと昔というのがおもしろかったです（自分が使っていたものなので）
・昔の事を孫と一緒に話したり、実物を見る事で文化を知ることができてとても勉強になりました

・今後、お子さんと話をするのに、どんな道具が展示してあったら良いと思いますか？

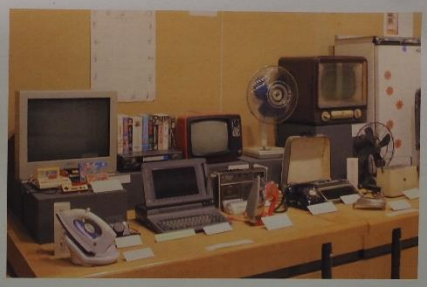
・もっと昔の道具
・昔の自分たちが使っていたおもちゃとかあると、子供と話がはずみそうです。
・昔遊びをした道具など

・その他、ご意見があれば教えてください。

・ここの資料室で昔の道具を子供はきょうみをもって見ているのでこのような機会があればいいと思いました
・自由研究に困っている親子が他にもいると思うので、市でも色々他にも参加できる事があるといいと思いました。

なつやす　じゆうけんきゅうおうえんきかく
夏休み自由研究応援企画

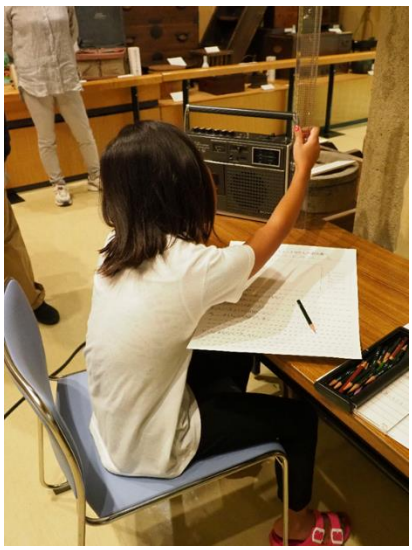
おやこたいわ
親子対話による
どうぐしら
むかしの道具調べ

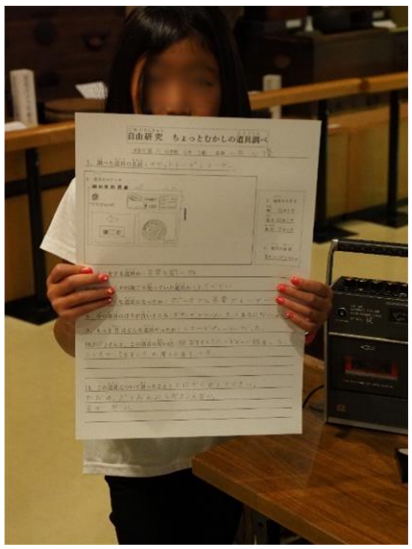


郷土資料室に展示中の家庭用ゲーム機やビデオデッキなど、一世代前の道具に関する思い出を保護者の方がお子さんにお話しし、お子さんが自由研究にまとめる学習活動のお手伝いをします。
※ワークシートをご用意しています。

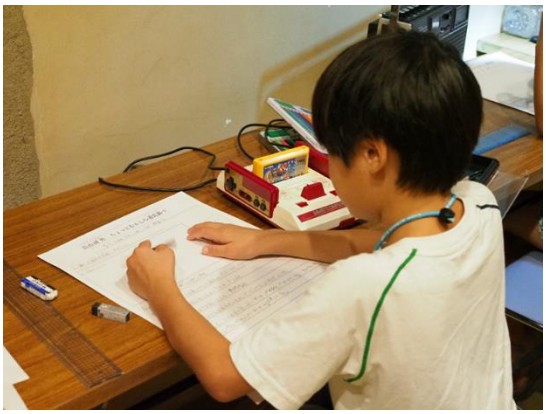
【日　時】　８月２０日(日)午前１０時～午後３時のうち３０分程度（正午～午後１時を除く）
【場　所】　郷土資料室
【対　象】　小学生とその保護者　１０組程度
【持ち物】　鉛筆、消しゴム、色鉛筆等
【申込み】　８月５日(土)より　　福生市郷土資料室（℡530 - 1120）

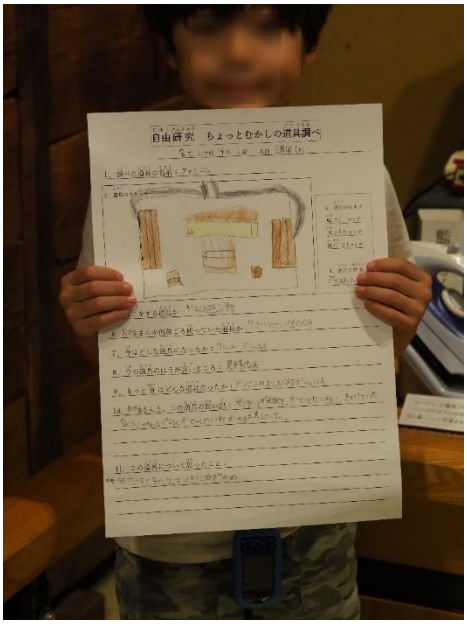
かせき　れぷりか　つく　　小学生わくわく土曜日




自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

自由研究　ちょっとむかしの道具調べ




自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

自由研究　ちょっとむかしの道具調べ

写真一覧

1　福生市郷土資料室の民俗コーナーの展示の様子
2　京都芸術大学「記憶と記録とエピソード展 茶碗」展示の様子
3　アーツ千代田 3331「別れの博物館」の展示資料
4　福島県立博物館「いいたてミュージアム」の展示資料
5　もりおか歴史文化館「Where is This？」展示の様子
6　広島平和記念資料館の展示の様子
7　松戸市立博物館の昭和 30 年代の再現展示
8　愛媛県歴史文化博物館の昭和 30 年代の再現展示
9　東京都江戸東京博物館の 2000 年代の道具の展示
10　北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示①
11　北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示②
12　北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示③
13　府中市郷土の森博物館で展示されていたファミコン
14　松戸市郷土博物館の常盤平団地
15　国立歴史民俗博物館の赤羽台団地
16　東京都江戸東京博物館のひばりが丘団地の内部
17　四日市公害と環境未来館の高花平団地の内部
18　流山市立博物館の江戸川台団地
19　足立区立郷土博物館の都営住宅
20　香川県立ミュージアムの県営住宅の内部
21　石川県立歴史博物館の円光寺住宅
22　北九州市立いのちのたび博物館の中原住宅
23　葛飾区立郷土と天文の博物館の再現住宅の内部
24　岐阜県博物館の再現住宅
25　愛媛県歴史文化博物館の再現住宅
26　宮崎県総合博物館の再現住宅
27　姶良市歴史民俗資料館の再現住宅
28　北海道博物館の再現展示
29　港区立郷土歴史館の再現展示
30　杉並区立郷土博物館の再現展示
31　金沢くらしの博物館の再現住宅の内部
32　氷見市立博物館の再現展示
33　滋賀県立琵琶湖博物館の再現住宅
34　箕輪町郷土博物館の再現住宅
35　東近江市能登川博物館の再現住宅の内部
36　東北歴史博物館の駄菓子屋兼住宅の再現展示
37　新潟県立歴史博物館の町並み再現展示

38　福井県立歴史博物館の町並み再現展示
39　愛媛県歴史文化博物館の町並み再現展示
40　瀬戸蔵ミュージアムの再現工房
41　宮崎県総合博物館の駄菓子屋の再現
42　昭和なつかし館の展示風景
43　人力車＆昭和レトロ館の展示風景
44　氷見昭和館の展示風景
45　高山昭和館の展示風景
46　ぎふ清流里山公園内「昭和パビリオン」の展示風景
47　湯布院昭和館の展示風景
48　新横浜ラーメン博物館の様子
49　滝見小路の様子
50　なにわ食いしんぼ横丁の様子
51　台場一丁目商店街の様子
52　みろくの里内「いつか来た道」の様子
53　西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子①
54　西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子②
55　西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子③
56　西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子④
57　昭和の暮らし博物館の外観
58　集合住宅歴史館の蓮根団地の内部
59　電車とバスの博物館の高津駅の再現展示
60　青梅駅前商店街の様子
61　高畠町昭和縁結び商店街の様子
62　四日市公害と環境未来館の再現住宅ベランダの外の景色
63　岩手県立博物館の展示の様子
64　北名古屋市歴史民俗資料館の道具の展示状況
65　福井県立博物館の道具の展示状況
66　昭和レトロ商品博物館展示風景
67　アトンおもちゃ館の展示風景
68　みろくの里内「電話博物館」の展示風景
69　駄菓子屋さん博物館の展示風景
70　昭和博物館～私はレトロ～の展示風景
71　東芝未来科学館の展示風景
72　パナソニックミュージアムものづくりイズム館の展示風景
73　シャープミュージアムの展示風景
74　ガスミュージアムの展示風景
75　ＮＴＴ技術史料館の展示風景
76　富良野市博物館の展示の様子
77　赤穂市立民俗資料館の展示の様子①

78　赤穂市立民俗資料館の展示の様子②
79　東京都江戸東京博物館の 2000 年代までの道具の展示
80　滋賀県立琵琶湖博物館の 2010 年代までの道具の展示
81　南風原町立南風原文化センターの展示の様子
82　尼崎市立歴史博物館の展示の様子
83　アドミュージアム東京の展示風景
84　NHK 放送博物館のにこにこぷんの着ぐるみ
85　武豊町歴史民俗資料館「むかしのくらし展」展示風景
86　川越市立博物館「むかしの勉強・むかしの遊び展」展示風景①
87　岐阜市歴史博物館「ちょっと昔の道具たち」展示風景①
88　岐阜市歴史博物館「ちょっと昔の道具たち」展示風景②
89　川越市立博物館「むかしの勉強・むかしの遊び展」展示風景②
90　川越市立博物館「むかしの勉強・むかしの遊び展」展示風景③
91　入間市博物館「むかしのくらしと道具展」の角栄団地の再現展示
92　愛荘町立歴史文化博物館「玩具伝説　－おもちゃの 60 年史－」の展示風景①
93　愛荘町立歴史文化博物館「玩具伝説　－おもちゃの 60 年史－」の展示風景②
94　日本玩具博物館「平成おもちゃ文化史」の展示風景
95　横須賀市自然・人文博物館「さよなら平成展」の展示風景
96　生駒ふるさとミュージアム「さよなら平成」の展示風景
97　八千代市立郷土博物館「くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～」の展示風景
98　中之条町歴史と民俗の博物館ミュゼ「平成展 1989→2019　30 年の記憶と足跡」の展示風景
99　パナソニックミュージアムものづくりイズム館「THE "平成 KADEN"」の展示風景
100　あべのハルカス近鉄本店「読売新聞号報道でふりかえる　平成プレイバック展」の展示風景
101　北名古屋市回想法センターの様子①
102　北名古屋市回想法センターの様子②
103　北名古屋市回想法センターの様子③
104　北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示①
105　北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示②
106　北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示③
107　東郷町郷土資料館の展示室の様子
108　北区飛鳥山博物館「＜回想のための＞テーマ展示　オボエテマスカ？－懐かしの暮らしと道具－」の質問パネル
109　新潟市歴史博物館「にいがたの昭和」の「あたしの昭和」コーナーの様子
110　福生市郷土資料室来館者参加型展示の様子
111　豊田市郷土資料館「スペイン風邪とコロナウイルス」の展示風景
112　豊田市郷土資料館「スペイン風邪とコロナウイルス」の体験収集の様子
113　吹田市立博物館「新型コロナと生きる社会　～私たちは何を託されたのか～」の展示風景①
114　吹田市立博物館「新型コロナと生きる社会　～私たちは何を託されたのか～」の展示風景②
115　浦幌町立博物館の新型コロナウイルス見本展示の様子

116　浦幌町立博物館「コロナな時代のマスク美術館」の展示風景①
117　浦幌町立博物館「コロナな時代のマスク美術館」の展示風景②
118　浦幌町立博物館「コロナな時代を語り継ぐために」の展示風景①
119　浦幌町立博物館「コロナな時代を語り継ぐために」の展示風景②
120　杉並区立郷土博物館「家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし」の展示風景
121　武蔵野市立武蔵野ふるさと館「武蔵野のくらしとそのうつりかわり」の展示風景
122　福生市郷土資料室「福生市郷土資料室のコレクション展」の展示風景
123　尼崎市立歴史博物館現代展示室の展示風景
124　リアス・アーク美術館の展示風景①
125　リアス・アーク美術館の展示風景②
126　リアス・アーク美術館の展示風景③
127　福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景①
128　福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景②
129　福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景③
130　福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景④
131　福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景⑤
132　南相馬市博物館「南相馬の震災 10 年」の展示風景
133　広島平和記念資料館の展示風景
134　呉市海事歴史科学館の展示風景
135　回天記念館の展示風景
136　舞鶴引揚記念館の展示風景
137　北九州平和資料館の展示風景①
138　北九州平和資料館の展示風景②
139　南風原町立南風原文化センターの展示風景①
140　南風原町立南風原文化センターの展示風景②
141　水俣市立水俣病資料館の展示風景①
142　水俣市立水俣病資料館の展示風景②
143　水俣病歴史考証館の展示風景①
144　水俣病歴史考証館の展示風景②
145　四日市市公害と環境未来館の展示風景①
146　四日市市公害と環境未来館の展示風景②
147　四日市市公害と環境未来館の展示風景③
148　石川県立白山ろく民俗資料館の移築住宅

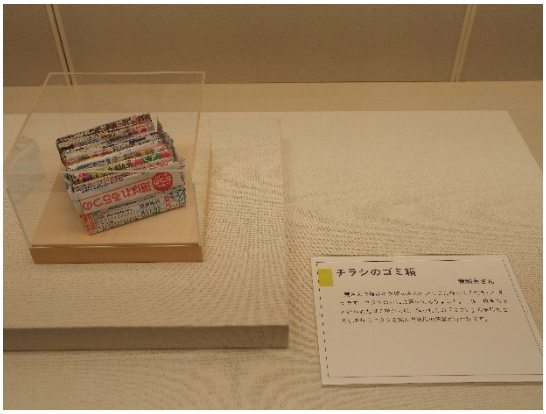
※撮影日については、別表調査館一覧参照

写真

（写真１）福生市郷土資料室の民俗コーナーの展示の様子

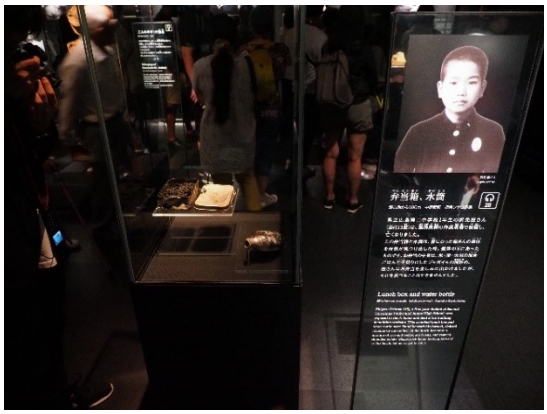
（写真 2）京都芸術大学「記憶と記録とエピソード展 茶碗」展示の様子

（写真 3）アーツ千代田 3331「別れの博物館」の展示資料



（写真 4）福島県立博物館「いいたてミュージアム」の展示資料

（写真 5）もりおか歴史文化館「Where is This？」展示の様子



（写真 6）広島平和記念資料館の展示の様子

（写真 7）松戸市立博物館の昭和 30 年代の再現展示

（写真 8）愛媛県歴史文化博物館の昭和 30 年代の再現展示

（写真 9）東京都江戸東京博物館の 2000 年代の道具の展示

（写真 13）府中市郷土の森博物館で展示されていたファミコン

（写真 10）北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示①

（写真 14）松戸市郷土博物館の常盤平団地

（写真 11）北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示②

（写真 15）国立歴史民俗博物館の赤羽台団地

（写真 12）北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示③

（写真 16）東京都江戸東京博物館のひばりが丘団地の内部

（写真 17）四日市公害と環境未来館の高花平団地の内部

（写真 18）流山市立博物館の江戸川台団地

（写真 19）足立区立郷土博物館の都営住宅

（写真 20）香川県立ミュージアムの県営住宅の内部

（写真 21）石川県立歴史博物館の円光寺住宅

（写真 22）北九州市立いのちのたび博物館の中原住宅

（写真 23）葛飾区立郷土と天文の博物館の再現住宅の内部

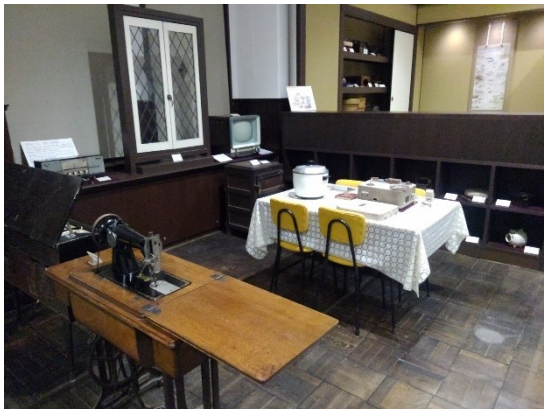
（写真 24）岐阜県博物館の再現住宅

（写真 25）愛媛県歴史文化博物館の再現住宅

（写真 26）宮崎県総合博物館の再現住宅

（写真 27）姶良市歴史民俗資料館の再現住宅

（写真 28）北海道博物館の再現展示



（写真 29）港区立郷土歴史館の再現展示

（写真 30）杉並区立郷土博物館の再現展示

（写真 31）金沢くらしの博物館の再現住宅の内部

（写真 32）氷見市立博物館の再現展示

（写真 33）滋賀県立琵琶湖博物館の再現住宅

（写真 34）箕輪町郷土博物館の再現住宅

（写真 35）東近江市能登川博物館の再現住宅の内部

（写真 36）東北歴史博物館の駄菓子屋兼住宅の再現展示

（写真 37）新潟県立歴史博物館の町並み再現展示

（写真 38）福井県立歴史博物館の町並み再現展示

（写真 39）愛媛県歴史文化博物館の町並み再現展示

（写真 40）瀬戸蔵ミュージアムの再現工房

（写真 41）宮崎県総合博物館の駄菓子屋の再現

（写真 42）昭和なつかし館の展示風景

（写真 43）人力車＆昭和レトロ館の展示風景

（写真 44）氷見昭和館の展示風景

（写真 45）高山昭和館の展示風景

（写真 46）ぎふ清流里山公園内「昭和パビリオン」の展示風景

（写真 47）湯布院昭和館の展示風景

（写真 48）新横浜ラーメン博物館の様子

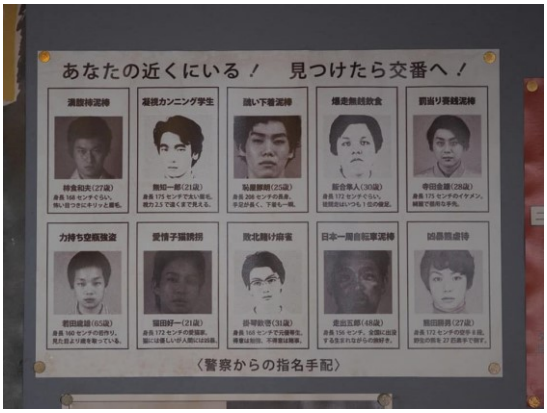
（写真 49）滝見小路の様子

（写真 50）なにわ食いしんぼ横丁の様子

（写真 51）台場一丁目商店街の様子

（写真 52）みろくの里内「いつか来た道」の様子

（写真 53）西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子①



（写真 54）西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子②

（写真 55）西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子③

（写真 56）西武園ゆうえんち「夕日の丘商店街」の様子④

（写真 57）昭和の暮らし博物館の外観

（写真 58）集合住宅歴史館の蓮根団地の内部

（写真 59）電車とバスの博物館の高津駅の再現展示

（写真 60）青梅駅前商店街の様子

（写真 61）高畠町昭和縁結び商店街の様子

（写真 62）四日市公害と環境未来館の再現住宅ベランダの外の景色

（写真 63）岩手県立博物館の展示の様子

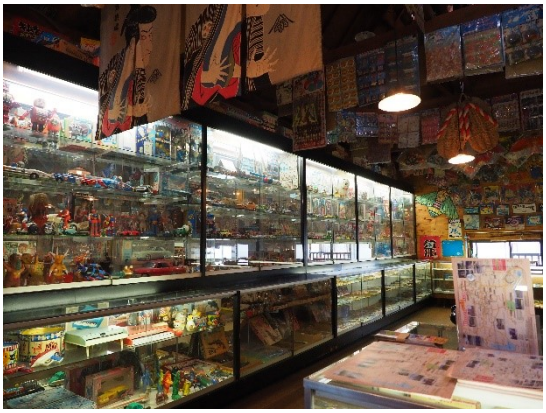
（写真 64）北名古屋市歴史民俗資料館の道具の展示状況

（写真 65）福井県立歴史博物館の道具の展示状況

（写真 66）昭和レトロ商品博物館展示風景

（写真 67）アトンおもちゃ館の展示風景

（写真 68）みろくの里内「電話博物館」の展示風景



（写真 69）駄菓子屋さん博物館の展示風景

（写真 73）シャープミュージアムの展示風景

（写真 70）昭和博物館～私はレトロ～の展示風景

（写真 74）ガスミュージアムの展示風景

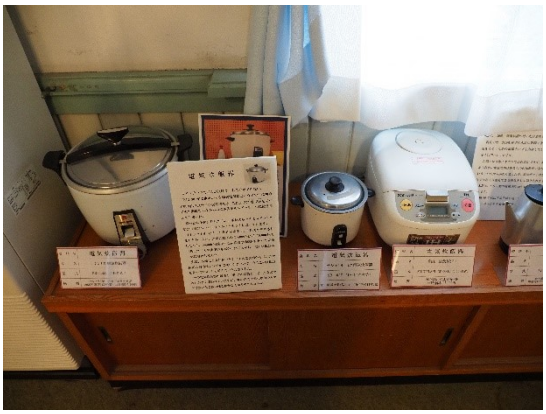
（写真 71）東芝未来科学館の展示風景

（写真 75）ＮＴＴ技術史料館の展示風景

（写真 72）パナソニックミュージアムものづくりイズム館の展示風景

（写真 76）富良野市博物館の展示の様子

（写真 77）赤穂市立民俗資料館の展示の様子①



（写真 78）赤穂市立民俗資料館の展示の様子②

（写真 79）東京都江戸東京博物館の 2000 年代までの道具の展示

（写真 80）滋賀県立琵琶湖博物館の 2010 年代までの道具の展示

（写真 81）南風原町立南風原文化センターの展示の様子

（写真 82）尼崎市立歴史博物館の展示の様子

（写真 83）アドミュージアム東京の展示風景

（写真 84）NHK 放送博物館のにこにこぷんの着ぐるみ

（写真 85）武豊町歴史民俗資料館「むかしのくらし展」展示風景

（写真 86）川越市立博物館「むかしの勉強・むかしの遊び展」展示風景①

（写真 87）岐阜市歴史博物館「ちょっと昔の道具たち」展示風景①

（写真 88）岐阜市歴史博物館「ちょっと昔の道具たち」展示風景②

（写真 89）川越市立博物館「むかしの勉強・むかしの遊び展」展示風景②

（写真 90）川越市立博物館「むかしの勉強・むかしの遊び展」展示風景③

（写真 91）入間市博物館「むかしのくらしと道具展」の角栄団地の再現展示

（写真 92）愛荘町立歴史文化博物館「玩具伝説　－おもちゃの 60 年史－」の展示風景①

（写真 93）愛荘町立歴史文化博物館「玩具伝説　－おもちゃの 60 年史－」の展示風景②

（写真 94）日本玩具博物館「平成おもちゃ文化史」の展示風景

（写真 95）横須賀市自然・人文博物館「さよなら平成展」の展示風景

（写真 96）生駒ふるさとミュージアム「さよなら平成」の展示風景

（写真 97）八千代市立郷土博物館「くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～」の展示風景

（写真 98）中之条町歴史と民俗の博物館ミュゼ「平成展 1989→2019　30 年の記憶と足跡」の展示風景

（写真 99）パナソニックミュージアムものづくりイズム館「THE "平成 KADEN"」の展示風景

（写真 100）あべのハルカス近鉄本店「読売新聞号外報道でふりかえる　平成プレイバック展」の展示風景

（写真 101）北名古屋市回想法センターの様子①

（写真 102）北名古屋市回想法センターの様子②

（写真 103）北名古屋市回想法センターの様子③

（写真 104）北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示①

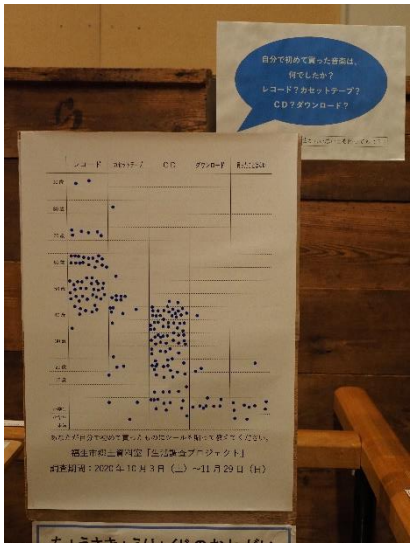
（写真 105）北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示②

（写真 106）北名古屋市歴史民俗資料館の昭和 30 年代の再現展示③

（写真 107）東郷町郷土資料館の展示室の様子

（写真 108）北区飛鳥山博物館「<回想のための>テーマ展示　オボエテマスカ？－懐かしの暮らしと道具－」の質問パネル

（写真 109）新潟市歴史博物館「にいがたの昭和」の「あたしの昭和」コーナーの様子



（写真 110）福生市郷土資料室来館者参加型展示の様子

（写真 111）豊田市郷土資料館「スペイン風邪とコロナウイルス」の展示風景

（写真 112）豊田市郷土資料館「スペイン風邪とコロナウイルス」の体験収集の様子

（写真 113）吹田市立博物館「新型コロナと生きる社会　～私たちは何を託されたのか～」の展示風景①

（写真 114）吹田市立博物館「新型コロナと生きる社会　～私たちは何を託されたのか～」の展示風景②

（写真 115）浦幌町立博物館の新型コロナウイルス見本展示の様子

（写真 116）浦幌町立博物館「コロナな時代のマスク美術館」の展示風景①

（写真 117）浦幌町立博物館「コロナな時代のマスク美術館」の展示風景②

（写真 118）浦幌町立博物館「コロナな時代を語り継ぐために」の展示風景①

（写真 119）浦幌町立博物館「コロナな時代を語り継ぐために」の展示風景②

（写真 120）杉並区立郷土博物館「家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし」の展示風景

（写真 121）武蔵野市立武蔵野ふるさと館「武蔵野のくらしとそのうつりかわり」の展示風景

（写真 122）福生市郷土資料室「福生市郷土資料室のコレクション展」の展示風景

（写真 123）尼崎市立歴史博物館現代展示室の展示風景

（写真 124）リアス・アーク美術館の展示風景①

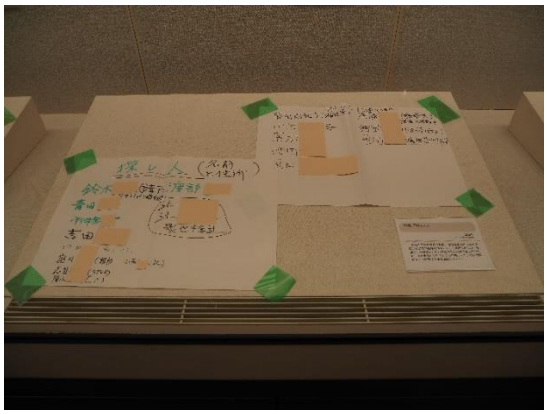
（写真 125）リアス・アーク美術館の展示風景②

（写真 126）リアス・アーク美術館の展示風景③

（写真 127）福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景①

（写真 128）福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景②

（写真 129）福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景③



（写真 130）福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景④

（写真 131）　福島県立博物館「震災遺産を考える　次の 10 年につなぐために」の展示風景⑤

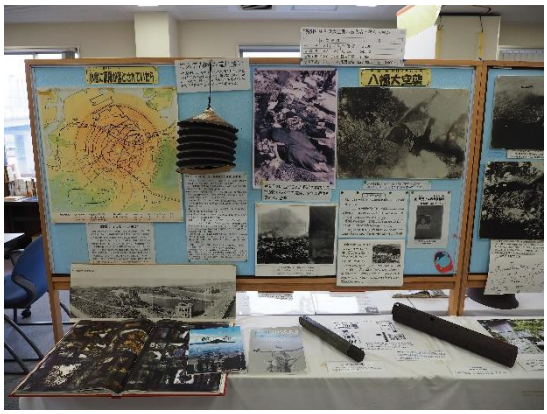
（写真 132）　南相馬市博物館「南相馬の震災 10 年」の展示風景

（写真 133）　広島平和記念資料館の展示風景

（写真 134）呉市海事歴史科学館の展示風景

（写真 135）回天記念館の展示風景

（写真 136）舞鶴引揚記念館の展示風景



（写真 137）北九州平和資料館の展示風景①

（写真 138）北九州平和資料館の展示風景②

（写真 139）南風原町立南風原文化センターの展示風景①

（写真 140）南風原町立南風原文化センターの展示風景②

（写真 141）水俣市立水俣病資料館の展示風景①

（写真 142）水俣市立水俣病資料館の展示風景②

（写真 143）水俣病歴史考証館の展示風景①

（写真 144）水俣病歴史考証館の展示風景②

（写真 145）四日市市公害と環境未来館の展示風景①

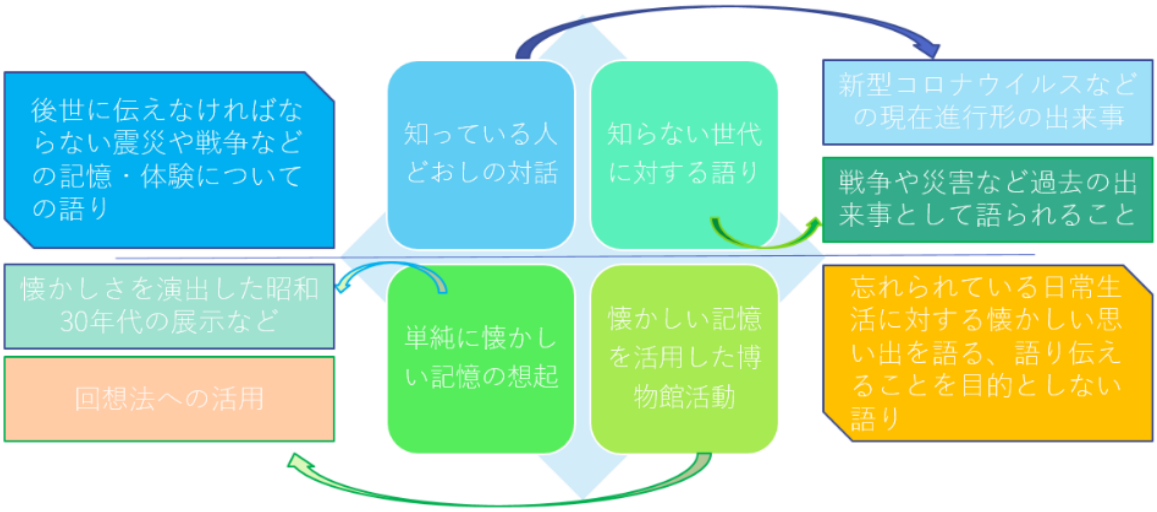
（写真 146）四日市市公害と環境未来館の展示風景②

（写真 147）四日市市公害と環境未来館の展示風景③

（写真 148）石川県立白山ろく民俗資料館の移築住宅

図版一覧

図 1　既知の資料との出会いを通じた対話の機会の方向
表 1　昭和 30 年代以降の道具を常設展示している博物館等調査館一覧
表 2　昔の道具展調査館一覧
表 3　昔の道具展において平成に近い道具を展示していた博物館の資料一覧
表 4　平成展調査館一覧
表 5　回想法まとめ
表 6　新型コロナウイルス関係調査館一覧
表 7　東日本大震災他自然災害関係調査館一覧
表 8　オリンピック、万博、サミット等関係調査館一覧
表 9　戦争関係調査館一覧
表 10　公害関係調査館一覧
表 11　ダムに沈んだ村関係調査館一覧
表 12　その他本研究に関係する博物館等調査館一覧



（図 1）既知の資料との出会いを通じた対話の機会の方向

表1　昭和30年代以降の道具を常設展示している博物館等調査館一覧

番号	調査日	館名	所在地	博物館の種類	開館時期／リニューアル時期	専用住宅	併用住宅	店舗	街並み	室内のみ	道具のみ	教室	その他
1	29.7.8	国立歴史民俗博物館	千葉県佐倉市	1国立博物館	現代展示室2010 民俗展示室2013(リ)	○							
2	30.7.12	北海道博物館	北海道札幌市厚別区	2県立博物館	2015					○	○		
3	30.4.6	岩手県立博物館	岩手県盛岡市	2県立博物館	1980					○	○		
4	29.6.23	東北歴史博物館	宮城県多賀城市	2県立博物館	1999		○						
5	30.7.21	茨城県立歴史館	茨城県水戸市	2県立博物館	1974					○	○	○	スバル360
6	29.10.29	栃木県立博物館	栃木県宇都宮市	2県立博物館	1982						○		
7	30.1.6	群馬県立歴史博物館	群馬県高崎市	2県立博物館	2017(リ)								スバル360
8	30.7.29	埼玉県立歴史と民俗の博物館	埼玉県さいたま市大宮区	2県立博物館	1971,2006統合あり			○		○	○		スバル360
9	29.6.4	東京都江戸東京博物館	東京都墨田区	2県立博物館	2015(リ)	○					○		
10	30.1.7	江戸東京たてもの園	東京都小金井市	2県立博物館	1993		○	○	○				
11	30.7.29	神奈川県立歴史博物館	神奈川県横浜市中区	2県立博物館	1968						○		
12	29.7.9	新潟県立歴史博物館	新潟県長岡市	2県立博物館	2000			○	○				
13	29.9.23	石川県立歴史博物館	石川県金沢市	2県立博物館	2015(リ)	○							
14	29.8.11	福井県立歴史博物館	福井県福井市	2県立博物館	2003(リ)	○		○	○		○		
15	2.7.24	福井県教育博物館	福井県坂井市	2県立博物館	2017							○	
16	30.8.25	岐阜県博物館	岐阜県関市	2県立博物館	1976	○					○		
17	29.7.16	滋賀県立琵琶湖博物館	滋賀県草津市	2県立博物館	1996	○					○		
18	1.8.4	兵庫県立歴史博物館	兵庫県姫路市	2県立博物館	1983			○			○		
19	30.12.7	兵庫県立人と自然の博物館	兵庫県三田市	2県立博物館	1992					○	△		
20	30.9.23	奈良県立民俗博物館	奈良県大和郡山市	2県立博物館	1974					○	○		
21	29.9.3	岡山県立博物館	岡山県岡山市北区	2県立博物館	1971	○							
22	29.8.12	香川県立ミュージアム	香川県高松市	2県立博物館	1999	○							
23	29.9.1	愛媛県歴史文化博物館	愛媛県西予市	2県立博物館	1994	○		○	○				
24	29.12.17	宮崎県総合博物館	宮崎県宮崎市	2県立博物館	1998(リ)	○		○	△		○		
25	29.12.16	鹿児島県立歴史資料センター黎明館	鹿児島県鹿児島市	2県立博物館	1983						○		
26	31.3.17	志摩市歴史民俗資料館	三重県志摩市	3地域博物館	2012					○	○	○	
27	30.7.13	旭川市博物館	北海道旭川市	3地域博物館	1993						○		
28	30.7.14	帯広百年記念館	北海道帯広市	3地域博物館	1982					△	○		
29	30.7.14	夕張市石炭博物館	北海道夕張市	3地域博物館	2018(リ)						○		炭鉱
30	2.9.15	富良野市博物館	北海道富良野市	3地域博物館	2002	○					○		
31	2.9.16	新ひだか町博物館	北海道日高郡新ひだか町	3地域博物館	2015					○	○	○	
32	30.11.10	八戸市南郷歴史民俗資料館	青森県八戸市	3地域博物館	2014			○	○	○	○		
33	30.11.10	八戸市博物館	青森県八戸市	3地域博物館	1983					○	○		
34	30.4.6	遠野市立博物館	岩手県遠野市	3地域博物館	2010(リ)					○	○		
35	30.11.11	仙台市歴史民俗資料館	宮城県仙台市宮城野区	3地域博物館	2001			△			○		
36	30.7.21	水戸市博物館	茨城県水戸市	3地域博物館	1980					○	○		
37	30.7.21	龍ヶ崎市歴史民俗資料館見学	茨城県龍ヶ崎市	3地域博物館	1990			○		△	○		
38	2.9.29	大田原市歴史民俗資料館	栃木県大田原市	3地域博物館	2005						○		
39	2.8.11	戸田市立郷土博物館	埼玉県戸田市	3地域博物館	2020(リ)	○							
40	2.7.17	坂戸市立歴史民俗資料館	埼玉県坂戸市	3地域博物館	1980					○	○		
41	2.12.13	千葉市郷土博物館	千葉県千葉市中央区	3地域博物館	2010(リ)					○			
42	29.6.1	松戸市郷土博物館	千葉県松戸市	3地域博物館	1993	○							
43	29.6.3	流山市立博物館	千葉県流山市	3地域博物館	1978	○							
44	30.2.11	八千代市立博物館	千葉県八千代市	3地域博物館	1993					○			
45	29.6.1	浦安市郷土博物館	千葉県浦安市	3地域博物館	2001	○		○	○				
46	29.8.27	港区立港郷土資料館 (2018に港区立郷土歴史館へ移転)	東京都港区	3地域博物館	1982 触れる展示室は1999					○	○		
47	30.12.28	港区立郷土歴史館	東京都港区	3地域博物館	2018					○			
48	30.7.24	下町風俗資料館	東京都台東区	3地域博物館	1980			○		○	○		銭湯
49	30.2.24	大田区立郷土博物館	東京都大田区	3地域博物館	2009(リ)					○	○		
50	29.5.21	杉並区西田小学校郷土資料展示室	東京都杉並区	3地域博物館	1995	△				△			
51	3.1.9	杉並区立郷土博物館	東京都杉並区	3地域博物館	2015(リ)、住宅再現展示は2020設置	○							
52	29.6.4	北区飛鳥山博物館	東京都北区	3地域博物館	2001(リ)	○							
53	29.5.27	荒川区立荒川ふるさと文化館	東京都荒川区	3地域博物館	1998	○			○				
54	29.5.21	石神井公園ふるさと文化館	東京都練馬区	3地域博物館	2010	○		○	○				

表1　昭和30年代以降の道具を常設展示している博物館等調査館一覧

55	29.5.27	足立区立郷土博物館	東京都足立区	3地域博物館	2009(リ)	○							
56	29.5.19	葛飾区立郷土と天文の博物館	東京都葛飾区	3地域博物館	1991	○		○					
57	29.8.20	八王子市郷土資料館	東京都八王子市	3地域博物館	1967 (再現展示の開始時期は不明)					○	○		
58	29.11.12	相模原市立博物館	神奈川県相模原市中央区	3地域博物館	1995						○		
59	30.3.4	海老名市温故館	神奈川県海老名市	3地域博物館	2011					○	○		
60	3.1.23	柏崎市立博物館	新潟県柏崎市	3地域博物館	2018					○	○		
61	29.6.10	氷見市立博物館	富山県氷見市	3地域博物館	1982 (再現展示の開始時期は不明)					○			
62	29.9.23	金沢くらしの博物館	石川県金沢市	3地域博物館	2016(リ)	△				△	○		
63	29.11.5	箕輪町郷土博物館	長野県上伊那郡箕輪町	3地域博物館	1974	○							
64	2.2.8	瀬戸蔵ミュージアム	愛知県瀬戸市	3地域博物館	2005			○	○				駅舎
65	30.9.22	安城市歴史博物館	愛知県安城市	3地域博物館	1991						○		
66	30.12.9	知多市歴史民俗博物館	愛知県知多市	3地域博物館	1999(リ)						○		
67	30.12.9	田原市民俗資料館	愛知県田原市	3地域博物館	1968						○		
68	29.3.20	北名古屋市歴史民俗資料館昭和博物館	愛知県北名古屋市	3地域博物館	1993	○		○	○		○		
69	30.12.9	東郷町郷土資料館	愛知県愛知郡東郷町	3地域博物館	2004	○					○		
70	31.2.10	武豊町歴史民俗資料館	愛知県知多郡武豊町	3地域博物館	1985					○			
71	29.9.18	四日市公害と環境未来館	三重県四日市市	3地域博物館	2015	○							
72	1.12.28	松阪市歴史民俗資料館	三重県松阪市	3地域博物館	1978					○			
73	30.1.14	東近江市能登川博物館	滋賀県東近江市	3地域博物館	1997					○			
74	30.6.2	亀岡市文化資料館	京都府亀岡市	3地域博物館	1985					○	○		
75	30.12.7	赤穂市立民俗資料館	兵庫県赤穂市	3地域博物館	1983						○		
76	29.9.17	和歌山市立博物館	和歌山県和歌山市	3地域博物館	1985						○		
77	30.12.8	益田市立歴史民俗資料館	島根県益田市	3地域博物館	1983						○		
78	30.12.8	浜田市金城歴史民俗資料館	島根県浜田市	3地域博物館	1978						○		
79	30.1.13	柵原鉱山資料館	岡山県久米郡美咲町	3地域博物館	1998	○		○	○				鉱山、駅
80	30.12.8	庄原市口和郷土資料館	広島県庄原市	3地域博物館	1982						○		
81	29.9.2	北九州市立いのちのたび博物館	福岡県北九州市八幡東区	3地域博物館	2013(リ)	○							
82	1.8.29	福岡市博物館	福岡県福岡市早良区	3地域博物館	2013(リ)	○							
83	1.8.27	大野城心のふるさと館	福岡県大野城市	3地域博物館	2018	○							
84	1.8.25	鞍手町歴史民俗博物館	福岡県鞍手郡鞍手町	3地域博物館	1985					○	○		
85	3.2.16	熊本市立熊本博物館	熊本県熊本市中央区	3地域博物館	2018(リ)	○							
86	2.12.22	都城歴史資料館	宮崎県都城市	3地域博物館	2020(リ)					○	○		
87	2.12.21	ミュージアム知覧	鹿児島県南九州市	3地域博物館	1993					○	○		
88	29.12.16	姶良市歴史民俗資料館	鹿児島県姶良市	3地域博物館	1988	○							
89	2.12.8	沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリート	沖縄県沖縄市	3地域博物館	2018				○	○			
90	2.1.31	南風原町立南風原文化センター	沖縄県島尻郡南風原町	3地域博物館	2009			○			○		
91	30.7.14	昭和ナツカシ館	北海道帯広市	4私設博物館	2008						○		
92	30.4.7	山の駅　昭和の学校	岩手県花巻市	4私設博物館	2016			○	○	○	○		
93	30.4.6	昭和の思い出博物館レトロ館	岩手県久慈市	4私設博物館	2008			○	○		○		銭湯
94	1.5.6	白石人形の蔵	宮城県白石市	4私設博物館	1995						○		
95	29.9.10	昭和なつかし館	福島県会津若松市	4私設博物館	2003	○		○	○		○		
96	29.10.29	人力車＆昭和レトロ館	栃木県那須郡那須町	4私設博物館	2015	○		○	○				
97	29.9.10	伊香保おもちゃと人形自動車博物館	群馬県北群馬郡吉岡町	4私設博物館	1994			○	○				
98	29.6.4	昭和のくらし博物館	東京都大田区	4私設博物館	1999	○							
99	3.9.5	柴又のおもちゃ博物館	東京都葛飾区	4私設博物館	2004			○			○		
100	29.7.8	昭和レトロ商品博物館	東京都青梅市	4私設博物館	1999			○			○		
101	29.6.10	氷見昭和館	富山県氷見市	4私設博物館	2011	○		○	○		○		
102	2.2.22	氷見昭和館	富山県氷見市	4私設博物館	2011			○	○		○		
103	29.9.23	和倉昭和博物館とおもちゃ館	石川県七尾市	4私設博物館	2007	○		○	○		○		
104	29.9.18	高山昭和館	岐阜県高山市	4私設博物館	不明			○	○		○	○	
105	30.5.26	小さな駄菓子屋さん博物館	大阪府大阪市平野区	4私設博物館	1993,2013(リ)						○		
106	29.9.17	アトンおもちゃ館	奈良県高市郡明日香村	4私設博物館	2002						○		
107	30.1.13	湯郷温泉てつどう模型館＆レトロおもちゃ館	岡山県美作市	4私設博物館	2008						○		
108	30.1.13	あの日のおもちゃ箱昭和館	岡山県美作市	4私設博物館	2010					○	○	△	
109	30.6.23	駄菓子屋さん博物館	長崎県雲仙市	4私設博物館	不明						○		

表1　昭和30年代以降の道具を常設展示している博物館等調査館一覧

110	30.6.24	昭和レトロショップ懐かし屋	熊本県菊池郡大津町	4私設博物館	不明						○		
111	29.9.2	昭和レトロテーマパーク　湯布院昭和館－ALWAYS	大分県由布市	4私設博物館	2010	○		○	○		○	○	
112	29.12.16	重富民俗資料館	鹿児島県姶良市	4私設博物館	不明					○	○		
113	2.12.8	民俗資料博物館	沖縄県名護市	4私設博物館	2005						○		
114	30.1.25	昭和博物館～私はレトロ～	沖縄県島尻郡与那原町	4私設博物館	2017			○			○		
115	29.7.15	大型児童館ビッグバン	大阪府堺市南区	5児童館	1999			○	○				
116	29.9.24	NHK放送博物館	東京都港区	6企業博物館	2016(リ)					○			人形、映像
117	30.2.3	アドミュージアム東京	東京都港区	6企業博物館	2017(リ)								広告
118	30.3.28	容器文化ミュージアム	東京都品川区	6企業博物館	2012						○		
119	30.9.17	ガスミュージアム	東京都小平市	6企業博物館	1991						○		
120	30.12.13	集合住宅歴史館	東京都八王子市	6企業博物館	1998	○							
121	30.12.28	NTT技術史料館	東京都武蔵野市	6企業博物館	2000						○		
122	29.9.9	東芝未来科学館	神奈川県川崎市幸区	6企業博物館	2014(リ)						○		
123	29.9.24	電車とバスの博物館	神奈川県川崎市宮前区	6企業博物館	2016(リ)								駅舎
124	31.4.6	パナソニックミュージアム	大阪府門真市	6企業博物館	2018(リ)						○		
125	1.8.9	シャープミュージアム	奈良県天理市	6企業博物館	1981						○		
126	3.10.11	西武園ゆうえんち	埼玉県所沢市	7テーマパーク	2021(リ)			○	○				
127	29.8.27	台場一丁目商店街	東京都港区	7テーマパーク	2002			○	○				
128	29.8.27	ナムコナンジャタウン	東京都豊島区	7テーマパーク	1996	○		○	○				
129	30.1.7	新横浜ラーメン博物館	神奈川県横浜市港北区	7テーマパーク	1994			○	○				
130	29.9.18	日本昭和村（現ぎふ清流里山公園）	岐阜県美濃加茂市	7テーマパーク	2003	○		○	○				
131	30.5.26	滝見小路	大阪府大阪市北区	7テーマパーク	2013(リ)			○	○		○		
132	30.5.26	なにわ食いしんぼ横丁	大阪府大阪市港区	7テーマパーク	2002			○	○				
133	29.9.3	みろくの里	広島県福山市	7テーマパーク	1998			○	○		○	○	
134	29.9.2	昭和ロマン蔵・昭和の町	大分県豊後高田市	7テーマパーク?	2001	○					○	○	
135	30.1.25	昭和レトロ展	沖縄県浦添市	8イベント	2018					○	○		
136	30.5.17	ビジネスホテルマスターチ	静岡県静岡市葵区	9その他	不明						○		
137	30.5.18	三州足助屋敷	愛知県豊田市	9その他	1980					○	○		
138	30.12.7	阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	兵庫県神戸市中央区	9その他	2002				△		○		
139	29.12.1	童謡・唱歌とおもちゃのミュージアムわらべ館	鳥取県鳥取市	9その他	1995			○	○		○	○	
140	30.12.22	軍艦島デジタルミュージアム	長崎県長崎市	9その他	2015					○			

表2 昔の道具展調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	30.1.6	群馬県立歴史博物館	第94回企画展　昭和なくらし、そしてスバル。	群馬県高崎市	2017/12/16～2018/2/25
2	30.2.25	さいたま市立博物館	昔の道具とくらし展	埼玉県さいたま市大宮区	2017/12/2～2018/2/25
3	30.2.25	さいたま市立浦和博物館	ちょっと昔のくらしと道具展	埼玉県さいたま市緑区	2017/12/16～2018/3/25
4	30.2.25	川越市立博物館	第28回　むかしの勉強・むかしの遊び展	埼玉県川越市	2018/1/13～2/25
5	30.3.10	行田市郷土博物館	博学連携展示　むかしのくらし	埼玉県行田市	2018/2/3～4/8
6	30.2.25	春日部市郷土資料館	第34回小学校地域学習展　くらしのうつりかわり　～懐かしの暮らしと道具展～	埼玉県春日部市	2017/10/3～2018/3/18
7	30.2.12	狭山市立博物館	Let's キャリー展　収蔵品にみる運びもの	埼玉県狭山市	2017/11/3～2018/2/25
8	30.2.12	入間市博物館	第21回　むかしのくらしと道具展	埼玉県入間市	2018/1/6～2/14
9	30.2.25	毛呂山町歴史民俗資料館	平成29年度ミニ展示　昔のくらし　電気がなかったころはどうしていたの？	埼玉県入間郡毛呂山町	2018/1/13～3/4
10	30.2.11	市川市立歴史博物館	平成29年度市立市川歴史博物館企画展示　発見・体験昔のくらし	千葉県市川市	2017/11/3～2018/2/18
11	30.3.10	船橋市郷土資料館	船橋市市制施行80周年記念企画展（写真展）　ちょっと昔と今×居間＠郷土資料館	千葉県船橋市	2018/1/28～3/11
12	30.3.10	松戸市立博物館	平成29年度学習資料展　昔のくらし探検	千葉県松戸市	2018/1/13～3/25
13	30.2.11	八千代市立郷土博物館	平成29年度　くらしのうつりかわり展　－変わりゆく学び舎	千葉県八千代市	2017/12/12～2018/2/18
14	30.2.24	目黒区めぐろ歴史資料館	冬の企画展　昔のくらしと道具展　～農家のしごと・農家のくらし～	東京都目黒区	2017/12/12～2018/3/4
15	30.2.24	杉並区立郷土博物館	収蔵資料展　家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし	東京都杉並区	2017/12/9～2018/2/25
16	29.11.11	豊島区立郷土資料館	リニューアル記念企画展第1弾　学びと暮らし	東京都豊島区	2017/10/1～2018/1/28
17	30.2.24	北区飛鳥山博物館	平成29年度小学校3年生対応事業　来て、見て、さわって！　昔の道具展	東京都北区	2018/1/6～2/28
18	30.2.12	立川市歴史民俗資料館	企画展 「暮らしと道具　－むかしの生活－」	東京都立川市	2018/1/16～2/18
19	30.3.11	青梅市立郷土博物館	収蔵品展　なんだこれ!?　－むかしの道具展－	東京都青梅市	2018/1/23～4/15
20	30.2.18	府中市郷土の森博物館	企画展　ちょっとむかしのくらし～その2～	東京都府中市	2017/11/11～2018/3/18
21	30.2.18	調布市郷土博物館	調布市郷土博物館＊郷土学習展　ちょっと昔の暮らし	東京都調布市	2018/1/4～3/25
22	30.1.21	東村山ふるさと歴史館	小学校社会科見学対応展示　なつかしい暮らしと道具たち	東京都東村山市	2018/1/11～3/11
23	30.2.18	くにたち郷土文化館	民具案内関連企画展　むかしのくらし展	東京都国立市	2018/1/12～3/12
24	29.11.26	羽村市郷土博物館	特別展　食事の道具　－デザインと機能から見た羽村の暮らし－	東京都羽村市	2017/9/16～12/23
25	30.2.12	横浜市歴史博物館	企画展　銭湯と横浜　ちょっと昔のお風呂屋さんへようこそ	神奈川県横浜市都筑区	2018/1/24～3/21
26	30.2.12	相模原市立博物館	学習資料展　ちょっと昔のくらし13　～ジイジ・バアバ、パパ・ママの子ども時代～	神奈川県相模原市中央区	2017/11/14～2018/2/25
27	30.3.4	横須賀市自然・人文博物館	特別展示　なつかしの道具展　～遊んで学ぶ博物館～	神奈川県横須賀市	2017/12/16～2018/4/8
28	30.3.4	大磯町郷土資料館	平成29年度大磯町郷土資料館春季企画展　ちょっと昔の暮らしと道具	神奈川県中郡大磯町	2018/2/3～3/31
29	30.1.14	名古屋市博物館	くらしのうつりかわり展／暮らし体験学習室	愛知県名古屋市瑞穂区	2018/1/5～3/4
30	30.1.14	東近江市能登川博物館	第124回企画展　ちょっと昔の道具たち2018　あたたか～い道具大集合	滋賀県東近江市	2017/12/22～2018/2/18
31	31.1.26	川越市立博物館	むかしの勉強・むかしの遊び展	埼玉県川越市	2019/1/19～3/3
32	31.1.26	飯能市立博物館	むかしのくらし　～民家の台所再現～	埼玉県飯能市	2019/1/8～2/11
33	31.1.26	入間市立博物館	第22回　むかしのくらしと道具展	埼玉県入間市	2019/1/6～2/13
34	31.1.27	羽村市郷土博物館	企画展　むかしのくらし	東京都羽村市	2019/1/8～1/27
35	31.1.27	立川市歴史民俗資料館	企画展　暮らしの道具　－むかしの生活－	東京都立川市	2019/1/16～2/17
36	31.2.2	八千代市立博物館	平成30年度　くらしのうつりかわり展　土地の使われ方からみる八千代の100年	千葉県八千代市	2018/12/15～2019/2/17
37	31.2.2	市川市立歴史博物館	平成30年度市立市川歴史博物館企画展示　発見・体験昔のくらし	千葉県市川市	2018/11/3～2019/2/17
38	31.2.2	松戸市立博物館	平成30年度学習資料展　昔のくらし探検	千葉県松戸市	2019/1/12～2/24
39	31.2.2	流山市立博物館	企画展　ちょっと昔のくらし	千葉県流山市	2019/1/12～3/17
40	31.2.2	船橋市郷土資料館	平成30年度船橋市郷土資料館企画展　くらしの道具展　－道具が語るくらしの歴史－	千葉県船橋市	2019/2/1～5/19
41	31.2.3	杉並区立郷土博物館	収蔵資料展　家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし	東京都杉並区	2018/12/15～2019/2/24
42	31.2.3	豊島区立郷土資料館	特集展示　むかしの道具をくらべてみよう！	東京都豊島区	2018/10/26～2019/2/10
43	31.2.3	北区飛鳥山博物館	来て、見て、さわって！昔の道具展	東京都北区	2019/1/5～2/28
44	31.2.9	さいたま市立博物館	昔の道具とくらし展　～さいたま市のうつり変わりと人々のくらし～	埼玉県さいたま市大宮区	2018/12/1～2019/2/24
45	31.2.9	ふじみ野市立大井郷土資料館	昔のくらしと昔の学校	埼玉県ふじみ野市	2019/1/24～2/18
46	31.2.9	ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館	昔のくらしと昔の学校	埼玉県ふじみ野市	2019/1/15～2/28
47	31.2.9	所沢市立生涯学習推進センター	所沢市生涯学習推進センターふるさと研究冬季企画展　昔さがし展　食べ物とくらし	埼玉県所沢市	2019/1/15～3/3
48	31.2.10	三重県立総合博物館	第22回企画展　くらしの道具　～いま・むかし～	三重県津市	2018/12/15～2019/2/17
49	31.2.10	四日市市立博物館	開館25周年記念企画展　昭和のくらし昭和のまちかど　あの頃の四日市を語りあわへん？	三重県四日市市	2019/1/2～2/27
50	31.2.10	弥富市歴史民俗資料館	愛知県弥富市歴史民俗資料館企画展　“きみ”の知らない昭和	愛知県弥富市	2019/1/16～3/10
51	31.2.10	武豊町歴史民俗資料館	むかしのくらし展	愛知県知多郡武豊町	2018/12/15～2019/2/10
52	31.2.11	奈良県立民俗博物館	コーナー展　冬のくらしとあたたまる道具	奈良県大和郡山市	2018/12/8～2019/2/24
53	31.2.11	大阪くらしの今昔館	見て、さわって、調べよう。昔のくらし	大阪府大阪市北区	2018/12/17～2019/2/22
54	31.2.11	大阪狭山池博物館	平成30年度大阪狭山市立郷土資料館企画展　くらしの道具展	大阪府大阪狭山市	2019/2/5～3/3
55	31.2.11	神戸市埋蔵文化財センター	平成30年度冬季企画展　昭和のくらし・昔のくらし13	兵庫県神戸市西区	2019/1/19～3/3
56	31.2.12	柏原市立歴史資料館	平成30年度冬季企画展　ちょっと昔の道具たち　伝える	大阪府柏原市	2019/1/5～3/10
57	31.2.12	堺市博物館	教育普及展　むかしの暮らし　－ふしぎな道具の世界－	大阪府堺市堺区	2019/1/8～3/3
58	31.2.12	松原市民ふるさとびあプラザ	平成30年度企画展　むかしの道具展　－食にまつわる道具あれこれ－	大阪府松原市	2019/1/12～3/10
59	31.2.12	箕面市立郷土資料館	箕面市立郷土資料館企画展　くらしのどうぐ展	大阪府箕面市	2018/12/7～2019/2/27

表2 昔の道具展調査館一覧

60	31.2.12	大東市立歴史民俗資料館	ちょっとむかしのくらし	大阪府大東市	2019/1/12～3/3
61	31.2.13	東近江市能登川博物館	第129回企画展 ちょっと昔の道具たち2019 ～道具の移りかわりあれこれ～	滋賀県東近江市	2019/1/5～2/24
62	31.2.17	東村山ふるさと歴史館	小学校社会科見学対応展示 なつかしい暮らしと道具たち	東京都東村山市	2019/1/10～3/10
63	31.2.24	熊谷市立熊谷図書館	～エコな生活を探ろう～ 昔のくらし展	埼玉県熊谷市	2019/1/26～2/24
64	31.2.24	相模原市立博物館	まなべる くらべる 学習資料展 ～便利になった道具とふるさといろはかるたで見る移り変わり～	神奈川県相模原市中央区	2018/11/1～2019/2/24
65	31.3.3	豊田市郷土資料館	豊田市郷土資料館企画展 古い道具と昔のくらし「物語と民具」	愛知県豊田市	2018/12/15～2019/3/3
66	31.3.3	岡崎市美術博物館	平成30年度収蔵品展 暮らしのうつりかわり	愛知県岡崎市	2019/1/26～3/24
67	31.3.3	名古屋市博物館	くらしのうつりかわり	愛知県名古屋市瑞穂区	2018/12/26～2019/3/24
68	31.3.3	一宮市博物館	企画展 くらしの道具 ～ことばになったモノたち～	愛知県一宮市	2019/1/12～3/10
69	31.3.3	岐阜市歴史博物館	企画展 ちょっと昔の道具たち	岐阜県岐阜市	2018/12/25～2019/3/10
70	31.3.10	さいたま市立浦和博物館	ちょっと昔のくらしの道具展	埼玉県さいたま市浦和区	2018/12/15～2019/3/24
71	31.3.10	川口市文化財センター分館郷土資料館	企画展 変わる街 変わる暮らし	埼玉県川口市	2019/1/16～3/10
72	31.3.10	川口市文化財センター	企画展 変わる街 変わる暮らし	埼玉県川口市	2019/1/16～3/10
73	31.3.10	調布市郷土博物館	郷土学習展 ちょっと昔の暮らし	東京都調布市	2019/1/8～3/24
74	31.3.10	府中市郷土の森博物館	企画展 ちょっとむかしのくらし ～その3～	東京都府中市	2018/11/10～2019/3/17
75	31.3.10	くにたち郷土文化館	民具案内関連企画展 むかしのくらし展	東京都国立市	2019/1/14～3/11
76	31.3.14	歴史館いずみさの	市制施行70周年記念 歴史館いずみさの 平成30年度 冬季企画展 くらしの道具展	大阪府泉佐野市	2019/1/12～3/24
77	31.3.14	池田市立歴史民俗資料館	企画展 ちょっと昔のくらしの道具	大阪府池田市	2018/12/14～2019/4/7
78	31.3.14	吹田市立博物館	特別企画 体験型展示 むかしのくらしと学校	大阪府吹田市	2018/12/11～2019/3/31
79	31.3.17	蒲郡市博物館	企画展 小さなひらめき豊かな暮らし 昭和のおもしろ道具発明展	愛知県蒲郡市	2019/2/2～3/31
80	31.3.23	春日部市郷土資料館	第35回小学校地域学習展 くらしのうつりかわり ～懐かしい昔の道具展～	埼玉県春日部市	2018/10/2～2019/3/24
81	31.3.24	行田市郷土博物館	博学連携展示 むかしのくらし	埼玉県行田市	2019/2/2～4/7
82	31.3.24	関宿城博物館	昔のくらし展	千葉県野田市	2019/1/22～4/14
83	31.3.24	久喜市立郷土資料館	平成30年度収蔵品展 ちょっとむかしの道具たち	埼玉県久喜市	2019/2/5～3/31
84	31.4.25	武蔵野ふるさと歴史館	平成30年度第4回企画展 古老が語る、武蔵野のくらし	東京都武蔵野市	2019/1/19～4/25
85	1.8.9	奈良県立民俗博物館	昔のくらし関連展② 夏のくらしと涼む道具	奈良県大和郡山市	2019/7/6～9/1
86	1.8.11	高知県立歴史民俗資料館	昭和から平成へ ーくらしのうつりかわりー	高知県南国市	2019/7/19～9/16
87	1.9.16	鈴鹿市考古博物館	企画展 今の道具 昔の道具 ずーーっと昔の道具	三重県鈴鹿市	2019/7/13～9/16
88	1.12.1	新潟市歴史博物館	第16回むかしのくらし展 布とむかしのくらし	新潟県新潟市中央区	2019/9/14～12/8
89	1.12.14	池田市立歴史民俗資料館	企画展 ちょっと昔のくらしの道具	大阪府池田市	2019/12/13～2020/3/8
90	1.12.14	吹田市立博物館	特別企画 体験型展示 むかしのくらしと学校	大阪府吹田市	2019/12/10～2020/4/5
91	1.12.15	大東市立歴史民俗資料館	ちょっとむかしのくらし	大阪府大東市	2019/12/7～2020/3/8
92	1.12.24	杉並区立郷土博物館	収蔵資料展 家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし	東京都杉並区	2019/12/14～2020/3/1
93	1.12.28	三重県立総合博物館	第26回企画展 1960年代の熱気を未来につなぐ 出来事でふりかえる60年の歩み	三重県津市	2019/12/21～2020/2/24
94	1.12.28	松阪市歴史民俗資料館	館蔵品展 暖と温 ～冬の暮らし～	三重県松阪市	2019/12/17～2020/3/8
95	1.12.28	大阪くらしの今昔館	企画展 ちょっと いい 昔の暮らし展	大阪大阪市北区	2019/12/16～2020/2/14
96	2.1.4	府中市郷土の森博物館	企画展 ちょっとむかしのくらし ～その4～	東京都府中市	2019/11/9～2020/3/15
97	2.1.4	相模原市立博物館	相模原市立博物館学習資料展 ちょっと昔のくらし ～第18回東京オリンピックの頃～	神奈川県相模原市中央区	2019/11/1～2020/2/24
98	2.1.4	春日部市郷土資料館	第36回小学校地域学習展 くらしのうつりかわり ～なつかしい昔の道具展～	埼玉県春日部市	2019/10/1～2020/3/22
99	2.1.12	四日市市立博物館	特別企画展 昭和のくらし 昭和の面影 ～サカツ・コレクション 珠玉のポスターとともに～	三重県四日市市	2020/1/2～3/1
100	2.1.12	岐阜市博物館	企画展 ちょっと昔の道具たち	岐阜県岐阜市	2019/12/17～2020/3/15
101	2.1.13	名古屋市博物館	くらしのうつりかわり	愛知県名古屋市瑞穂区	2019/12/25～2020/3/22
102	2.1.13	一宮市博物館	企画展 くらしの道具 ～博物館にすむ妖怪たち～	愛知県一宮市	2020/1/11～3/8
103	2.1.13	武豊町歴史民俗資料館	武豊町歴史民俗資料館企画展 むかしのくらし展	愛知県知多郡武豊町	2019/12/14～2020/2/9
104	2.1.19	東近江市能登川博物館	第133回企画展 ちょっと昔の道具たち2020 子どもたちの道具あれこれ	滋賀県東近江市	2020/1/5～2/23
105	2.1.19	栗東歴史民俗博物館	特集展示 栗東歴史民俗博物館の“昔のくらし”	滋賀県栗東市	2019/12/7～2020/3/1
106	2.1.25	飯能市立博物館	むかしのくらし ～民家の台所再現～	埼玉県飯能市	2020/1/5～2/9
107	2.1.25	入間市立博物館	第23回 むかしのくらしと道具展	埼玉県入間市	2020/1/7～2/14
108	2.1.25	東村山ふるさと歴史館	小学校社会科見学対応展示 なつかしい暮らしと道具たち	東京都東村山市	2020/1/9～3/13
109	2.1.25	くにたち郷土文化館	民具案内関連企画展 むかしのくらし展	東京都国立市	2020/1/14～3/6
110	2.1.25	秦野市桜土手古墳展示館	冬季企画展 昔のくらし、秦野の風景 －1964 HADANO－	神奈川県秦野市	2019/12/7～2020/1/26
111	2.1.26	奈良県立民俗博物館	昔のくらし関連展④ 冬のくらしとあたたまる道具	奈良県大和郡山市	2019/12/14～2020/2/2
112	2.1.26	柏原市立歴史資料館	令和元年度冬季企画展 ちょっと昔の道具たち おいしいお米ができるまで	大阪府柏原市	2020/1/4～3/8
113	2.1.26	東大阪市立郷土博物館	東大阪市郷土博物館令和元年度冬季企画展示 昭和の東大阪のくらし ー東京オリンピック・大阪万国博覧会	大阪府東大阪市	2019/12/12～2020/3/1
114	2.1.26	神戸市埋蔵文化財センター	令和元年度冬季企画展 昭和のくらし・昔のくらし14	兵庫県神戸市西区	2020/1/11～3/8
115	2.2.8	瀬戸蔵ミュージアム	瀬戸蔵ミュージアム中央通りギャラリー企画展 むかしの道具展	愛知県瀬戸市	2019/11/16～2020/2/24
116	2.2.8	豊田市郷土資料館	豊田市郷土資料館企画展 ーくらしのうつりかわりー『食べ物と道具』	愛知県豊田市	2019/12/14～2020/3/8
117	2.2.8	岡崎市美術博物館	令和元年度収蔵品展 暮らしのうつりかわり	愛知県岡崎市	2020/1/25～3/22
118	2.2.8	弥富市歴史民俗資料館	弥富市歴史民俗資料館昔のくらし展 なつかしあたらし！ あの日の昭和展	愛知県弥富市	2020/1/15～3/8
119	2.2.11	さいたま市立博物館	さいたま市のうつり変わりと人々のくらし展	埼玉県さいたま市大宮区	2019/12/7～2020/2/24
120	2.2.11	ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館	ミニ展示 昔のくらしと昔の学校	埼玉県ふじみ野市	2020/1/14～2/26

表2 昔の道具展調査館一覧

121	2.2.15	八千代市立郷土博物館	令和元年度 くらしのうつりかわり展 ～昭和と平成のくらし～	千葉県八千代市	2019/12/14～2020/2/16
122	2.2.15	市川市立歴史博物館	令和元年度企画展示 発見・体験昔のくらし	千葉県市川市	2019/11/3～2020/2/16
123	2.2.15	北区飛鳥山博物館	令和元年度小学校3年生対応事業 来て、見て、さわって、昔の道具展	東京都北区	2020/1/7～3/1
124	2.2.15	ふじみ野市立大井郷土資料館	昔のくらしと昔の学校	埼玉県ふじみ野市	2020/1/14～2/17
125	2.2.15	目黒区めぐろ歴史資料館	令和元年度めぐろ歴史資料館 冬の企画展 昔のくらしと道具展 くらしのうつりかわり	東京都目黒区	2019/11/23～2020/3/1
126	2.2.16	群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館第13回テーマ展示 くらしのうつりかわり2	群馬県高崎市	2019/12/14～2020/2/24
127	2.2.16	所沢市立生涯学習推進センター	所沢市生涯学習推進センターふるさと研究グループ令和元年度冬季企画展 昔さがし展 水とくらし	埼玉県所沢市	2020/1/21～3/8
128	2.2.16	立川市歴史民俗資料館	企画展 暮らしと道具 －むかしの生活－	東京都立川市	2020/1/15～2/16
129	2.2.16	川越市立博物館	第30回 むかしの勉強・むかしの遊び展	埼玉県川越市	2020/1/18～3/1
130	2.2.22	高岡市立博物館	館蔵品展 昔の道具とくらし	富山県高岡市	2020/2/1～7/12
131	2.2.23	小松市立博物館	しらべてみよう！むかしのくらし	石川県小松市	2019/12/14～2020/3/15
132	2.2.24	都城歴史資料館	昭和・平成タイムトラベル ～キオク・ツナグ・モノ～	宮崎県都城市	2019/12/13～2020/3/1
133	2.3.1	箕面市立郷土資料館	箕面市立郷土資料館企画展 くらしのどうぐ展	大阪府箕面市	2019/12/20～2020/3/25
134	2.3.1	堺市博物館	教育普及展 むかしの暮らし －ふしぎな道具の世界－	大阪府堺市堺区	2020/1/11～3/8
135	2.3.1	生駒ふるさとミュージアム	令和元年度特別展 生駒市誕生前夜 －むかしの暮らし、むかしの生駒－	奈良県生駒市	2020/2/11～3/24
136	2.3.7	福井県立若狭歴史博物館	令和元年度わかはくテーマ展示 わかさちいきのむかしの道具から見る ちょっとむかしのくらし展	福井県小浜市	2019/12/13～2020/3/22
137	2.3.7	明石市立文化博物館	明石市制施行100周年記念 企画展 くらしのうつりかわり展 子どもの頃の記憶	兵庫県明石市	2020/2/9～3/22
138	2.3.8	上越市立歴史博物館	企画展 探検！むかしのくらし	新潟県上越市	2019/11/16～2020/3/8
139	2.3.15	福生市郷土資料室	福生市制50周年特別展示 むかしの道具	東京都福生市	2020/2/1～4/12
140	2.3.17	調布市郷土博物館	郷土学習展 ちょっと昔の暮らし	東京都調布市	2020/1/7～5/24
141	2.4.5	栃木県立博物館	人文系テーマ展 おじいさんやおばあさんの子どものころの暮らし	栃木県宇都宮市	2019/12/14～2020/4/5
142	2.8.10	奈良県立民俗博物館	夏の道具と戦時下のくらし	奈良県	2020/8/1～8/30
143	2.9.29	久喜市立郷土資料館	ちょっとむかしの道具たち	埼玉県久喜市	2020/6/20～9/30
144	2.9.29	栃木県立博物館	人文系テーマ展 おじいさんやおばあさんの子どものころの暮らし	栃木県宇都宮市	2020/7/18～12/13
145	2.10.13	御宿町歴史民俗資料館	甦る、昭和の生活展	千葉県夷隅郡御宿町	2020/6/2～10/18
146	2.10.23	北上市立博物館	企画展「ちょっと昔の北上市」	岩手県北上市	2020/8/22～10/25
147	2.10.27	群馬県立歴史博物館	第16回テーマ展示「昭和のくらしをのぞいてみよう」	群馬県高崎市	2020/10/3～2021/2/7
148	2.10.27	新潟市歴史博物館	みなとぴあ むかしのくらし展「にいがたの昭和」	新潟市中央区	2020/9/12～11/3
149	2.11.14	奈良県立民俗博物館	古民家展示② 昔のくらし	奈良県大和郡山市	2020/9/5～12/6
150	2.11.15	知立市歴史民俗資料館	市制50周年企画展 市制のしかれた頃の知立	愛知県知立市	2020/10/3～11/17
151	2.11.28	上越市立歴史博物館	企画展 探検！むかしのくらし	新潟県上越市	2020/11/14～2021/3/7
152	2.11.29	府中市郷土の森博物館	企画展 昔の学校/むかしのくらし	東京都府中市	2020/11/14～2021/3/14
153	2.12.13	市川市立市川歴史博物館	企画展示 昔のくらし	千葉県市川市	2020/9/4～2020/12/13
154	2.12.13	八千代市立郷土博物館	くらしのうつりかわり展 ～思い出の総合体育祭～	千葉県八千代市	2020/12/12～2021/2/14
155	2.12.27	武豊町歴史民俗資料館	企画展 むかしのくらし展	愛知県知多郡武豊町	2020/12/19～2021/2/7
156	2.12.27	三重県総合博物館	トピック展 昔の道具を考える 電気が変えた道具とくらし	三重県津市	2020/12/19～2021/2/28
157	2.12.28	小松市立博物館	企画展 しらべてみよう！むかしのくらし	石川県小松市	2020/12/12～2021/3/14
158	2.12.29	岐阜市歴史博物館	企画展 ちょっと昔の道具たち	岐阜県岐阜市	2020/11/28～2021/3/7
159	3.1.3	四日市市立博物館	企画展 昭和のくらし 昭和の風景	三重県四日市市	2021/1/2～2/28
160	3.1.3	福井県立若狭歴史博物館	ちょっとむかしのくらし展 洗濯へん	福井県小浜市	2020/12/15～2021/3/14
161	3.1.9	飯能市立博物館	むかしのくらし ～民家の台所再現～	埼玉県飯能市	2021/1/5～2/7
162	3.1.9	東村山ふるさと歴史館	小学校社会科見学対応展示 昔のくらしと道具	東京都東村山市	2021/1/8～3/7
163	3.1.9	目黒区めぐろ歴史資料館	冬の企画展 昔のくらしと道具展 ～くらしのうつりかわり～	東京都目黒区	2020/12/5～2021/3/7
164	3.1.9	杉並区立郷土博物館	収蔵資料展 家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし	東京都杉並区	2020/12/19～2021/2/28
165	3.1.10	さいたま市立博物館	さいたま市のうつり変わりと人々のくらし展	埼玉県さいたま市大宮区	2020/12/5～2021/2/23
166	3.1.10	相模原市立博物館	開館25周年記念企画 学習資料展 道具が変えるわたしのくらし ～過去から未来へ向かう記憶～	神奈川県相模原市中央区	2020/12/5～2021/1/31
167	3.1.12	羽村市郷土博物館	小学校社会科郷土学習関連展示 企画展 むかしのくらし	東京都羽村市	2021/1/5～1/26
168	3.1.12	くにたち郷土文化館	民具案内関連企画展 むかしのくらし展	東京都国立市	2021/1/12～3/14
169	3.1.17	箕面市立郷土資料館	企画展 くらしのどうぐ展	大阪府箕面市	2020/12/18～2021/3/24
170	3.1.17	大東市立歴史民俗資料館	令和2年度冬季企画展 ちょっとむかしのくらし 時代とともにうつりかわる、道具とくらし	大阪府大東市	2021/1/16～3/7
171	3.1.18	安中新田会所跡旧植田家住宅	冬季企画展 昔のくらしはエコなくらし	大阪府八尾市	2021/1/6～3/15
172	3.1.19	和歌山市立博物館	冬季企画展 歴史を語る道具たち	和歌山県和歌山市	2021/1/5～2/28
173	3.1.19	堺市博物館	令和2年度教育普及展 昔のくらし～堺の今昔探検隊～	大阪府堺市堺区	2021/1/5～1/31
174	3.1.19	鴻池新田会所	鴻池家寄贈民具展 むかしの道具いろいろ	大阪府東大阪市	2021/1/13～2/28
175	3.1.19	柏原市立歴史資料館	令和2年度冬季企画展 ちょっと昔の道具たち モノをハカる	大阪府柏原市	2021/1/5～3/7
176	3.1.23	十日町市博物館	昔の道具展	新潟県十日町市	2020/12/19～2021/1/24
177	3.1.23	柏崎市立博物館	2020年度冬季収蔵資料展 むかしのくらしと道具 －子ども時代を支えたモノたち－	新潟県柏崎市	2020/12/12～2021/3/14
178	3.1.24	調布市郷土博物館	郷土学習展 ちょっと昔の暮らし	東京都調布市	2021/1/13～5/16
179	3.1.24	立川市歴史民俗資料館	企画展 暮らしと道具 －きれいな生活のために	東京都立川市	2021/1/19～2/21

表2 昔の道具展調査館一覧

180	3.2.11	入間市博物館	むかしのくらしと道具展	埼玉県入間市	（2021/1/6～2/17） 新型コロナウイルスにより 全期間休館
181	3.2.13	春日市奴国の丘歴史資料館	令和2年度民俗企画展　不思議な道具が大集合！　ナニコレ！？民具展	福岡県春日市	2021/1/16～2/28
182	3.2.13	太宰府市文化ふれあい館	第25回　くらしのうつりかわり展	福岡県太宰府市	2021/1/5～3/14
183	3.2.13	久留米市立六ツ門図書館	令和2年度　むかしのくらし展「着る・食べる・住まう」	福岡県久留米市	2021/1/23～3/21
184	3.2.17	西脇市郷土資料館	第84回特別展　これなあに？　昔の道具25	兵庫県西脇市	2020/11/28～2021/2/21
185	3.2.17	神戸市埋蔵文化財センター	令和2年度冬季企画展　神戸うつりかわる町とくらし　～昭和ノスタルジー～	兵庫県神戸市西区	2021/1/16～3/7
186	3.2.17	明石市立文化博物館	企画展　くらしのうつりかわり展　米づくりの春夏秋冬	兵庫県明石市	2021/2/7～3/21
187	3.2.20	ふじみ野市立大井郷土資料館	昔のくらしと昔の学校	埼玉県ふじみ野市	2021/1/18～3/4
188	3.2.20	ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館	昔のくらしと昔の学校	埼玉県ふじみ野市	2021/1/18～3/4
189	3.2.20	東海道かわさき宿交流館	昔のくらしと道具展	神奈川県川崎市川崎区	2020/12/8～2/28
190	3.2.20	土浦市立博物館	収蔵品展　昔のくらしの道具展	茨城県土浦市	2020/12/9～2/28
191	3.2.21	福島県立博物館	ポイント展　道具とくらしのうつりかわり　－食事を彩る道具たち－	福島県会津若松市	2020/11/27～2021/2/23
192	3.2.27	浜松市博物館	小展示　道具たちの100年	静岡県浜松市中区	2020/12/8～2021/3/7
193	3.2.27	岡崎市立美術博物館	くらしのうつりかわり　魅せます！土人形素朴な造形美の魅力	愛知県岡崎市	2021/1/23～3/21
194	3.2.27	名古屋市博物館	企画展　なごやのうつりかわり－うみ・やま・まちのくらし－	愛知県名古屋市瑞穂区	2021/1/9～3/7
195	3.2.27	一宮市博物館	企画展　くらしの道具　～民話の世界から～	愛知県一宮市	2021/1/16～3/14
196	3.3.1	亀山市歴史博物館	”昔の道具”を展示しています	三重県亀山市	2021/1/23～3/7
197	3.3.2	松原市民ふるさとぴあプラザ	令和2年度　企画展　むかしの道具展　－入れ物あれこれ－	大阪府松原市	2021/1/9～3/7
198	3.3.2	大阪狭山池博物館	令和2年度　大阪狭山市立郷土資料館企画展　くらしのどうぐ展	大阪府大阪狭山市	2021/2/10～3/3
199	3.3.2	尼崎市立歴史博物館	尼崎市立歴史博物館第一回企画展　むかしのくらしむかしの小学校	兵庫県尼崎市	2021/1/9～3/28
200	3.3.2	島本町立歴史文化資料館	歴史文化資料館企画展　むかしの道具展　～暖まる～	大阪府三島郡島本町	2021/2/3～3/14
201	3.3.2	高槻市立歴史民俗資料館	昔の道具　これなあに？　～今では珍しい生活道具～	大阪府高槻市	2020/10/24～2021/4/11
202	3.3.6	水戸市立博物館	水戸市立博物館40周年記念特別展　昭和浪漫　思い出の宝石箱　－思い出は煌めく星のように－	茨城県水戸市	2021/2/6～3/14
203	3.3.6	茨城県立歴史館	2階ギャラリー展　ちょっと昔のくらし	茨城県水戸市	2021/2/9～3/31
204	3.3.7	所沢市立生涯学習推進センター	令和2年度冬季企画展　昔さがし展　着るものとくらし	埼玉県所沢市	2021/2/9～3/14
205	3.3.7	松戸市立博物館	学習資料展　こどもミュージアム　松戸探検　90年前からのくらしのうつりかわり	千葉県松戸市	2021/1/20～3/31
206	3.3.8	武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野のくらし、そのうつりかわり	東京都武蔵野市	2021/1/16～4/22
207	3.3.13	美濃加茂市民ミュージアム	二〇二〇年度収蔵品展　ていねいな暮らしと道具展	岐阜県美濃加茂市	2020/9/12～2021/3/14
208	3.3.13	弥富市立歴史民俗資料館	昔のくらし展　みんなの「おうち時間」	愛知県弥富市	2021/1/13～3/28
209	3.3.15	八尾市立歴史民俗資料館	民具コーナー展示　昔っておもしろい　－道具から昔を知ろう－	大阪府八尾市	2021/1/23～3/22
210	3.3.21	東大阪市立郷土博物館	令和2年度冬季企画展示　昭和のくらしの知恵	大阪府東大阪市	2020/12/17～2021/3/31
211	3.3.21	池田市立歴史民俗資料館	企画展　ちょっと昔のくらしの道具	大阪府池田市	2021/2/10～2021/4/11
212	3.3.21	吹田市立博物館	特別企画　昔のくらしと学校	大阪府吹田市	2020/12/8～2021/4/4
213	3.3.27	戸田市立郷土博物館	第19回昔のくらし展　たんけん昔のくらし	埼玉県戸田市	2021/1/16～3/28
214	3.3.30	千葉県立関宿城博物館	昔のくらし展	千葉県野田市	2021/1/19～4/18
215	3.3.30	行田市郷土博物館	博学連携展示　行田市のうつりかわり	埼玉県行田市	2021/2/6～4/4
216	3.4.11	東大和市立郷土博物館	企画展示　道具今むかし	東京都東大和市	2021/3/20～5/5
217	3.4.11	川越市立博物館	むかしの勉強・むかしの遊び展	埼玉県川越市	2021/3/13～5/16
218	3.4.17	船橋市郷土資料館	企画展　くらしの道具展－道具が語るくらしの歴史－	千葉県船橋市	2021/2/9～5/9
219	3.7.5	新宿歴史博物館	新宿歴史博物館所蔵資料展　憧れのかたち　－家電に見る昭和の暮らし	東京都新宿区	2021/6/5～8/29
220	3.7.8	調布市郷土博物館	企画展　調布にオリンピックがやって来た！　～1964年あの頃～	東京都調布市	2021/7/6～9/20
221	3.8.11	瑞穂町郷土資料館けやき館	さわってみよう昔の道具	東京都西多摩郡瑞穂町	2021/8/2～8/29

表3　昔の道具展において平成に近い道具を展示していた博物館の資料一覧

番号	調査日	館名	展示資料	所在地	開催時期
1	30.1.6	群馬県立歴史博物館	IHクッキングヒーター、大型冷蔵庫、ドラム式洗濯機	群馬県高崎市	2017/12/16～2018/2/25
4	30.2.25	川越市立博物館	ファミコン	埼玉県川越市	2018/1/13～2/25
8	30.2.12	入間市博物館	ファミコン、セガ・マークⅢ、メガドライブ、ビックリマンシール、キン消し	埼玉県入間市	2018/1/6～2/14
10	30.2.11	市川市立歴史博物館	ビックリマンシール、ファミコン、スーパーファミコン、たまごっち	千葉県市川市	2017/11/3～2018/2/18
13	30.2.11	八千代市立郷土博物館	ワープロ、パソコン	千葉県八千代市	2017/12/12～2018/2/18
18	30.2.12	立川市歴史民俗資料館	ワープロ、携帯電話	東京都立川市	2018/1/16～2/18
20	30.2.18	府中市郷土の森博物館	ワープロ、フロッピーディスク	東京都府中市	2017/11/11～2018/3/18
26	30.2.12	相模原市立博物館	ワープロ、キン消し、ファミコン	神奈川県相模原市中央区	2017/11/14～2018/2/25
27	30.3.4	横須賀市自然・人文博物館	ノートパソコン、ポケベル、ウォークマン、ワープロ、ツインファミコン、ドリームキャスト、ファミコン、スーパーファミコン、セガサターン、たまごっち、ゲームボーイ、メガドライブ、ゲームキューブ、プレイステーション、ニンテンドー64	神奈川県横須賀市	2017/12/16～2018/4/8
31	31.1.26	川越市立博物館	ビックリマンシール、キン消し、ファミコン	埼玉県川越市	2019/1/19～3/3
33	31.1.26	入間市立博物館	ファミコン、キン消し、携帯電話、iPhone、防犯ブザー、ミニ四駆、液晶テレビ、トレーディングカードゲーム、たまごっち	埼玉県入間市	2019/1/6～2/13
35	31.1.27	立川市歴史民俗資料館	ワープロ、携帯電話	東京都立川市	2019/1/16～2/17
36	31.2.2	八千代市立博物館	ワープロ、フロッピーディスク、IHクッキングヒーター	千葉県八千代市	2018/12/15～2019/2/17
37	31.2.2	市川市立歴史博物館	ファミコン、スーパーファミコン、たまごっち	千葉県市川市	2018/11/3～2019/2/17
40	31.2.2	船橋市郷土資料館	携帯電話	千葉県船橋市	2019/2/1～5/19
44	31.2.9	さいたま市立博物館	ウォークマン、レンズ付きフィルム、ワープロ、ファミコン、液晶テレビ、デジカメ、デジタルウォークマン、ノートパソコン、ニンテンドーDS、携帯電話、スマートフォン	埼玉県さいたま市大宮区	2018/12/1～2019/2/24
49	31.2.10	四日市市立博物館	ウォークマン、8mmビデオカメラ、ワープロ	三重県四日市市	2019/1/2～2/27
50	31.2.10	弥富市歴史民俗資料館	ファミコン	愛知県弥富市	2019/1/16～3/10
53	31.2.11	大阪くらしの今昔館	ファミコン	大阪府大阪市北区	2018/12/17～2019/2/22
55	31.2.11	神戸市埋蔵文化財センター	ワープロ、ウォークマン、ファミコン、スーパーファミコン、携帯電話	兵庫県神戸市西区	2019/1/19～3/3
61	31.2.13	東近江市能登川博物館	携帯電話、液晶テレビ	滋賀県東近江市	2019/1/5～2/24
64	31.2.24	相模原市立博物館	携帯電話、パソコン	神奈川県相模原市中央区	2018/11/1～2019/2/24
71	31.3.10	川口市文化財センター分館郷土資料館	PHS、スマートフォン、ファミコン、ワープロ	埼玉県川口市	2019/1/16～3/10
74	31.3.10	府中市郷土の森博物館	ファミコン	東京都府中市	2018/11/10～2019/3/17
77	31.3.14	池田市立歴史民俗資料館	IH炊飯器	大阪府池田市	2018/12/14～2019/4/7
80	31.3.23	春日部市郷土資料館	ファミコン、ゲームボーイ、8mmビデオカメラ	埼玉県春日部市	2018/10/2～2019/3/24
81	31.3.24	行田市郷土博物館	ワープロ、ポケベル	埼玉県行田市	2019/2/2～4/7
83	31.3.24	久喜市立郷土資料館	携帯電話、ファミコン、ゲームボーイ	埼玉県久喜市	2019/2/5～3/31
86	1.8.11	高知県立歴史民俗資料館	ウォークマン、CDウォークマン、ワープロ、電子辞書、ファミコン、スーパーファミコン、ゲームボーイカラー、ゲームボーイアドバンス、ニンテンドーDSLite	高知県南国市	2019/7/19～9/16
87	1.9.16	鈴鹿市考古博物館	IHクッキングヒーター	三重県鈴鹿市	2019/7/13～9/16
89	1.12.14	池田市立歴史民俗資料館	IH炊飯器、LED電灯	大阪府池田市	2019/12/13～2020/3/8
92	1.12.24	杉並区立郷土博物館	ファミコン、ツインファミコン、スーパーファミコン、セガサターン、デジタルモンスター、ゲームボーイポケット、ゲームボーイアドバンス、ポケベル、携帯電話、ウォークマン、MDウォークマン、iPod、レンズ付きフィルム	東京都杉並区	2019/12/14～2020/3/1
94	1.12.28	松阪市歴史民俗資料館	ユニクロフリースジャケット	三重県松阪市	2019/12/17～2020/3/8
98	2.1.4	春日部市郷土資料館	ファミコン、ゲームボーイ、	埼玉県春日部市	2019/10/1～2020/3/22
99	2.1.12	四日市市立博物館	ウォークマン、ワープロ、携帯電話	三重県四日市市	2020/1/2～3/1
107	2.1.25	入間市立博物館	ファミコン、ビックリマンシール、キン消し、防犯ブザー、液晶テレビ、トレーディンググカードゲーム、たまごっち、ミニ四駆、携帯電話、スマートフォン	埼玉県入間市	2020/1/7～2/14
118	2.2.8	弥富市歴史民俗資料館	ファミコン	愛知県弥富市	2020/1/15～3/8
119	2.2.11	さいたま市立博物館	ウォークマン、レンズ付きフィルム、ワープロ、ファミコン、液晶テレビ、デジカメ、デジタルウォークマン、ノートパソコン、ニンテンドーDS、携帯電話、スマートフォン	埼玉県さいたま市大宮区	2019/12/7～2020/2/24
121	2.2.15	八千代市立郷土博物館	ワープロ、パソコン、フロッピーディスク、携帯電話、ファミコン、スーパーファミコン、ニンテンドーWii、ポケベル、フロッピーディスク、MDウォークマン、2000円札、たまごっち	千葉県八千代市	2019/12/14～2020/2/16
122	2.2.15	市川市立歴史博物館	ファミコン、スーパーファミコン、たまごっち	千葉県市川市	2019/11/3～2020/2/16
123	2.2.15	北区飛鳥山博物館	電動ミシン	東京都北区	2020/1/7～3/1
125	2.2.15	目黒区めぐろ歴史資料館	携帯電話、キン消し、ビックリマンシール、カードダス、ゲームボーイ	東京都目黒区	2019/11/23～2020/3/1
128	2.2.16	立川市歴史民俗資料館	ワープロ、携帯電話	東京都立川市	2020/1/15～2/16
129	2.2.16	川越市立博物館	レンズ付きフィルム、デジカメ、SDカード、ミニ四駆、たまごっち、パソコン、ファミコン、ゲームボーイ、ゲームボーイカラー、ウォークマン、ポケベル	埼玉県川越市	2020/1/18～3/1
132	2.2.24	都城歴史資料館	スマートフォン、ニンテンドー3DS、ファミコン、ウォークマン、CDウォークマン、MDプレイヤー、ニンテンドーDS、小型ノートパソコン	宮崎県都城市	2019/12/13～2020/3/1
137	2.3.7	明石市立文化博物館	ファミコン、スーパーファミコン	兵庫県明石市	2020/2/9～3/22
138	2.3.8	上越市立歴史博物館	携帯電話、スマートフォン、ウォークマン、CDウォークマン、MDプレイヤー、液晶テレビ	新潟県上越市	2019/11/16～2020/3/8
139	2.3.15	福生市郷土資料室	ワープロ、ファミコン	東京都福生市	2020/2/1～4/12
143	2.9.29	久喜市立郷土資料館	ファミコン	埼玉県久喜市	2020/6/20～9/30
146	2.10.23	北上市立博物館	ファミコン、ハイパーヨーヨー	岩手県北上市	2020/8/22～10/25
148	2.10.27	新潟市歴史博物館	ウォークマン、ファミコン	新潟市中央区	2020/9/12～11/3
151	2.11.28	上越市立歴史博物館	MDプレイヤー、液晶テレビ、デジカメ	新潟県上越市	2020/11/14～2021/3/7
153	2.12.13	市川市立市川歴史博物館	ファミコン、たまごっち	千葉県市川市	2020/9/4～2020/12/13
154	2.12.13	八千代市立郷土博物館	ワープロ、パソコン、フロッピーディスク	千葉県八千代市	2020/12/12～2021/2/14
156	2.12.27	三重県総合博物館	IHジャー炊飯器、IHクッキングヒーター、遠赤外線ヒーター、アースノーマット、ハンディーファン、デジタル体重計、CDウォークマン、ウォークマン、MDプレイヤー、iPod、ルンバ	三重県津市	2020/12/19～2021/2/28
159	3.1.3	四日市市立博物館	携帯電話、ワープロ	三重県四日市市	2021/1/2～2/28
160	3.1.3	福井県立若狭歴史博物館	各種洗剤、柔軟剤、漂白剤等	福井県小浜市	2020/12/15～2021/3/14
164	3.1.9	杉並区立郷土博物館	政府支給のマスク、手作りマスク、アマビエグッズ、ノートパソコン、携帯電話、ルンバ	東京都杉並区	2020/12/19～2021/2/28
165	3.1.10	さいたま市立博物館	ウォークマン、レンズ付きフィルム、ワープロ、ファミコン、液晶テレビ、デジカメ、デジタルウォークマン、ノートパソコン、ニンテンドーDS、携帯電話、スマートフォン	埼玉県さいたま市大宮区	2020/12/5～2021/2/23
166	3.1.10	相模原市立博物館	携帯電話、FAX付き電話機、ワープロ、エコバッグ、マスク、フェイスシールド、除菌グッズ、アマビエグッズ	神奈川県相模原市中央区	2020/12/5～2021/1/31
169	3.1.17	箕面市立郷土資料館	充電式電池	大阪府箕面市	2020/12/18～2021/3/24
173	3.1.19	堺市博物館	ポケベル、携帯電話、スーパーファミコン	大阪府堺市堺区	2021/1/5～1/31
178	3.1.24	調布市郷土博物館	ゲームボーイ	東京都調布市	2021/1/13～5/16
179	3.1.24	立川市歴史民俗資料館	携帯電話	東京都立川市	2021/1/19～2/21

表3　昔の道具展において平成に近い道具を展示していた博物館の資料一覧

180	3.2.11	入間市博物館	ファミコン、ビックリマンシール、キン消し、ウォークマン、CDウォークマン、MDウォークマン、MD、スマートフォン、SDカード、携帯電話、防犯ブザー、液晶テレビ、トレーディンググカードゲーム、たまごっち、ミニ四駆	埼玉県入間市	(2021/1/6～2/17)新型コロナウイルスにより全期間休館
184	3.2.17	西脇市郷土資料館	PHS、携帯電話、スマートフォン、スーパーファミコン、ゲームボーイ、ワープロ	兵庫県西脇市	2020/11/28～2021/2/21
192	3.2.27	浜松市博物館	LED照明、CDウォークマン	静岡県浜松市中区	2020/12/8～2021/3/7
194	3.2.27	名古屋市博物館	IH炊飯器、LED電灯	愛知県名古屋市瑞穂区	2021/1/9～3/7
206	3.3.8	武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	ノートパソコン、iPhone、マスク	東京都武蔵野市	2021/1/16～4/22
211	3.3.21	池田市立歴史民俗資料館	ウォークマン、CDウォークマン、8ミリビデオカメラ、デジカメ	大阪府池田市	2021/2/10～2021/4/11
213	3.3.27	戸田市立郷土博物館	ワープロ、ノートパソコン、ファミコン	埼玉県戸田市	2021/1/16～3/28
216	3.4.11	東大和市立郷土博物館	デジカメ、8ミリビデオカメラ、ワープロ、ノートパソコン、フロッピーディスク、CD-R、DVD、ブルーレイディスク	東京都東大和市	2021/3/20～5/5
217	3.4.11	川越市立博物館	ファミコン、スーパーファミコン、ゲームボーイ、ニンテンドー64、ゲームキューブ、セガサターン、ニンテンドー3DS、ミニ四駆、カードダス、たまごっち、ビックリマンシール、チョロQ、レンズ付きフィルム	埼玉県川越市	2021/3/13～5/16

表4　平成展調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	31.2.9	狭山市立博物館	わがまち狭山の平成展　－出来事に見る30年の軌跡－	埼玉県狭山市	2018/12/19～2019/2/17
2	31.4.6	パナソニックミュージアム	ものづくりイズム館企画展　THE“平成”KADEN	大阪府門真市	2019/3/7～4/20
3	31.4.28	あべのハルカス近鉄本店	読売新聞号外でふりかえる　平成プレイバック展	大阪府大阪市阿倍野区	2019/4/18～4/29
4	1.5.3	横須賀市立自然・人文博物館	トピック展示　さよなら平成展	神奈川県横須賀市	2019/1/12～5/6
5	1.5.5	中之条町歴史と民俗の博物館	中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」第109回企画展　30年の記憶と足跡	群馬県吾妻郡中之条町	2019/4/27～6/16
6	1.5.6	CCGA現代グラフィックアートセンター	ヘイセイ・グラフィックス	福島県須賀川市	2019/3/1～6/9
7	1.5.11	港区立郷土歴史館	港区立郷土歴史館企画展　平成と港区	東京都港区	2019/2/16～5/26
8	1.8.4	日本玩具博物館	平成おもちゃ文化史	兵庫県姫路市	2019/3/26～2020/3/10
9	1.8.11	高知県立歴史民俗資料館	企画展　昭和から平成へ　－くらしのうつりかわり	高知県南国市	2019/7/19～9/16
10	1.9.7	生駒ふるさとミュージアム	令和元年度夏季企画展　さよなら平成	奈良県生駒市	2019/7/28～9/23
11	2.1.28	三郷市立郷土資料館	令和元年度三郷市立郷土資料館企画展　さかのぼり三郷　－平成の三郷をふりかえる－	埼玉県三郷市	2019/12/14～2020/3/1
12	2.2.15	八千代市立郷土博物館	令和元年度　くらしのうつりかわり展　～昭和と平成のくらし～	千葉県八千代市	2019/12/14～2020/2/16

表5　回想法まとめ

	北名古屋市における地域回想法	福祉施設などで行う活動に、博物館資料を貸し出す支援活動	博物館職員が博物館資料を用いて行う回想法	回想法の視点を提示した展示	回想法的な視点が提示されている「昔の道具展」	回想法の手法を用いた博物館展示
目的	地域で活躍する人材の育成	認知症予防	認知症予防	認知症予防	小学3年生向け昔の道具調べ対応	世代を超えた対話の機会の創出
実施主体	福祉部門	福祉部門	博物館	博物館	博物館	博物館
実施場所	回想法センターなど	老人ホームや回想法センターなど	老人ホームへの出張や会議室など	展示室	展示室	展示室
形態	グループワーク	グループワーク	グループワーク	展示	展示	展示
きっかけの提示	リーダーによる話題提供や道具の提示	リーダーによる話題提供や道具の提示	リーダーによる話題提供や道具の提示	回想法の紹介文、回想を促す質問	あいさつ文	思い出を語りたくなるような質問の設置、アンケート形式での調査の導入など
発話の聞き手	他の参加者やリーダー、コ・リーダー	他の参加者やリーダーやコ・リーダー	他の参加者や学芸員、担当者	一緒に来館した人や職員など	一緒に来館した家族など	来館者どおし、職員、掲示によるなら次の来館者
発話する人・対象	高齢者	高齢者	高齢者	高齢者	高齢者、保護者世代	全世代（小学生等も含む）
課題	認知症予防という認識を持っている市民が存在し、参加に繋がらないケースがある。	実物資料を用意するのが困難。 リーダーなどを行える人材の確保が難しい。	福祉部門との連携がうまくいっていない事例が見られる。	回想の成果を図ることが困難。（益田市立歴史民俗資料館の入室記念証の取り組みは良い）	回想は一回性のもので、継続的な利用に繋がらない。	質問の設定に工夫が必要。記入式のアンケートは心理的ハードルがある。
博物館としての関わり方	資料の貸し出し、展示室におけるお出かけ回想法など	博物館による資料の貸し出し	博物館事業として出張回想法や来館しての回想法対応	回想を促す展示を行う	回想を促すあいさつ文や、回想した内容を共有できる掲示を行う	常設展示の中に、思い出を語りたくなるきっかけを提示する
本論で触れた具体的な博物館例	北名古屋市歴史民俗資料館	氷見市立博物館 愛媛県歴史文化博物館 宮崎県総合博物館 東近江市能登川博物館	氷見市立博物館 和歌山市立博物館 調布市立博物館	益田市立歴史民俗資料館 東郷町郷土資料館 北区飛鳥山博物館	八千代市立郷土博物館 群馬県立歴史博物館 豊田市郷土資料館 新潟市歴史博物館 相模原市立博物館	福生市郷土資料室

表6　新型コロナウイルス関係調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	2.8.4	世田谷美術館	作品のない展示室	東京都世田谷区	2020/7/4～8/27
2	2.8.8	港まちポットトラックビルディング	み(ん)なとまちをつくるアーカイブプロジェクト5　まちを残す	愛知県名古屋市港区	2020/6/27～9/26
3	2.8.9	吹田市立博物館	新型コロナと生きる社会　～私たちは何を託されたのか～	大阪府吹田市	2020/7/18～8/23
4	2.9.15	浦幌町立博物館	企画展　コロナ時代のマスク美術館	北海道十勝郡浦幌町	2020/8/1～9/27
5	2.11.15	北名古屋市歴史民俗資料館	開館30周年記念特別展　くらしの移り変わりを知る”collection”30	愛知県北名古屋市	2020/11/1～2021/1/31
6	2.11.15	豊田市立郷土資料館	企画展　スペイン風邪とコロナウイルス	愛知県豊田市	2020/7/14～11/29
7	3.1.9	杉並区立郷土博物館	収蔵資料展　家族で語ろう！昔のくらしと今のくらし	東京都杉並区	2020/12/19～2021/2/28
8	3.1.10	相模原市立博物館	開館25周年記念企画　学習資料展　道具が変えるわたしのくらし　～過去から未来へ向かう記憶～	神奈川県相模原市中央区	2020/12/5～2021/1/31
9	3.3.2	尼崎市立歴史博物館		兵庫県尼崎市	
10	3.3.8	武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	企画展・学校教育連携展示　武蔵野のくらし、そのうつりかわり	東京都武蔵野市	2021/1/16～4/22
11	3.4.4	浦幌町立博物館	企画展　コロナな時代を語り継ぐために	北海道十勝郡浦幌町	2021/2/27～4/11
12	3.7.5	早稲田大学演劇博物館	ロスト・イン・パンデミック　失われた演劇と表現演出の地平	東京都新宿区	2021/5/17～8/6
13	3.10.9	岩手県立博物館		岩手県盛岡市	
14		福生市郷土資料室	福生市制施行50周年記念企画展示　福生市郷土資料室のコレクション展	東京都福生市	2021/2/6～4/18

表7　東日本大震災他自然災害関係調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	1.5.6	福島県立博物館	テーマ展　いいたてミュージアム	福島県会津若松市	2019/4/13～6/23
2	1.5.6	福島県立博物館	福島県立博物館平成31年度春の企画展　とりもどすきずなつながるみらい	福島県会津若松市	2019/4/27～6/9
3	1.6.30	阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター		兵庫県神戸市中央区	
4	1.7.1	北淡震災記念公園		兵庫県淡路市	
5	1.9.21	旧大野木場小学校被災校舎		長崎県南島原市	
6	1.9.21	土石流被災家屋保存公園		長崎県南島原市	
7	1.9.21	がまだすドーム（雲仙普賢岳記念館）		長崎県島原市	
8	1.10.27	せんだい3.11メモリアル交流館		宮城県仙台市若林区	
9	1.10.27	旧荒浜小学校		宮城県仙台市若林区	
10	1.10.27	震災遺構仙台市荒浜地区住宅基礎		宮城県仙台市若林区	
11	1.10.27	東北リサーチとアートセンター	3.11思い出アーカイブ展　～見る、聴く、話す。それぞれの3.11～（ちゃぶ台で聴きましょ）	宮城県仙台市青葉区	2019/10/4～10/27
12	1.11.10	東松島市震災復興メモリアルパーク（復興伝承館、旧野蒜駅）		宮城県東松島市	
13	1.11.10	KIBOTCHA（旧野蒜小学校）		宮城県東松島市	
14	1.12.15	神戸ルミナリエ		兵庫県神戸市中央区	2019/12/6～12/15
15	2.3.14	福島県立博物館	ライフミュージアムネットワーク2019成果報告展　福島から、「いのち」と「くらし」を、考える	福島県会津若松市	2020/1/11～3/15
16	2.3.14	福島県立博物館	特集展　震災遺構を考える　－それぞれの9年－	福島県会津若松市	2020/2/11～4/12
17	2.6.15	箱根ジオミュージアム		神奈川県足柄下郡箱根町	
18	2.7.13	川口きずな館		新潟県長岡市	
19	2.7.13	震央メモリアルパーク		新潟県長岡市	
20	2.7.13	おぢや震災ミュージアムそなえ館		新潟県小千谷市	
21	2.7.13	妙見メモリアルパーク		新潟県小千谷市	
22	2.7.13	信濃川妙見記念館		新潟県長岡市	
23	2.7.13	やまこし復興交流館おらたる		新潟県長岡市	
24	2.7.13	木籠メモリアルパーク		新潟県長岡市	
25	2.7.13	長岡震災アーカイブセンターきおくみらい		新潟県長岡市	
26	2.7.23	地震断層観察館		岐阜県本巣市	
27	2.7.25	立山カルデラ砂防博物館		富山県中新川郡立山町	
28	2.8.31	西湖いやしの里根場砂防資料館		山梨県南都留郡富士河口湖町	
29	2.9.1	震災復興祈念館　絆		長野県下水内郡栄村	
30	2.9.6	かしわざき市民活動センター中越沖地震メモリアルまちから		新潟県柏崎市	
31	2.9.7	みやぎ生協文化会館東日本大震災学習・資料室		宮城県仙台市泉区	
32	2.9.14	そうべつ道の駅そうべつ情報館;火山防災学び館		北海道有珠郡壮瞥町	
33	2.9.14	洞爺湖町火山科学館		北海道虻田郡洞爺湖町	
34	2.9.14	金比羅火口災害遺構散策路		北海道虻田郡洞爺湖町	
35	2.9.14	1977年火山遺構公園		北海道有珠郡壮瞥町	
36	2.10.4	いわきライブミュウじあむ		福島県いわき市	
37	2.10.4	いわき震災伝承みらい館		福島県いわき市	
38	2.10.4	みんなの交流館ならは		福島県双葉郡楢葉町	
39	2.10.4	震災遺構旧中浜小学校		宮城県亘理郡山元町	
40	2.10.4	旧山下駅		宮城県亘理郡山元町	
41	2.10.4	山元町防災拠点山下地域交流センター		宮城県亘理郡山元町	
42	2.10.5	新地町東日本大震災慰霊碑		福島県相馬郡新地町	
43	2.10.5	埒浜防災緑地		福島県相馬郡新地町	
44	2.10.5	磯山展望緑地		福島県相馬郡新地町	
45	2.10.5	東日本大震災慰霊碑		宮城県亘理郡山元町	
46	2.10.5	相馬市伝承鎮魂祈念館		福島県相馬市	
47	2.10.5	相馬市東日本大震災慰霊碑原釜慰霊碑		福島県相馬市	
48	2.10.5	東日本大震災慰霊碑		福島県相馬市	
49	2.10.5	金沢慰霊碑		福島県南相馬市	
50	2.10.5	鳥崎慰霊碑		福島県南相馬市	
51	2.10.5	右田慰霊碑		福島県南相馬市	
52	2.10.5	北右田慰霊碑		福島県南相馬市	
53	2.10.5	3.11南相馬希望の灯り		福島県南相馬市	
54	2.10.5	泉慰霊碑		福島県南相馬市	
55	2.10.5	殉職消防団員顕彰碑		福島県南相馬市	
56	2.10.5	南萱浜慰霊碑		福島県南相馬市	
57	2.10.5	雫慰霊碑		福島県南相馬市	
58	2.10.5	大甕地区鎮魂感謝闘争の碑		福島県南相馬市	
59	2.10.5	大井慰霊碑		福島県南相馬市	

表7　東日本大震災他自然災害関係調査館一覧

60	2.10.5	川原田慰霊碑		福島県南相馬市	
61	2.10.5	村上慰霊碑		福島県南相馬市	
62	2.10.5	東京電力廃炉資料館		福島県双葉郡富岡町	
63	2.10.5	東日本大震災・原子力災害伝承館		福島県双葉郡双葉町	
64	2.10.5	富岡町東日本大震災慰霊碑		福島県双葉郡富岡町	
65	2.10.9	アイデムフォトギャラリー　シリウス	岩波友紀写真展「One last hug」	東京都新宿区	2020/10/8～10/14
66	2.10.19	立命館大学国際平和ミュージアム	2020年度特別展「放射線像／Autoradiograph　放射線を可視化する」	京都府京都市北区	2020/9/19～11/7
67	2.10.31	東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル）		岩手県陸前高田市	
68	2.10.31	奇跡の一本松		岩手県陸前高田市	
69	2.10.31	震災遺構陸前高田ユースホステル		岩手県陸前高田市	
70	2.10.31	陸前高田復興まちづくり情報館		岩手県陸前高田市	
71	2.10.31	大船渡市立博物館		岩手県大船渡市	
72	2.10.31	いのちをつなぐ未来館		岩手県釜石市	
73	2.10.31	釜石祈りのパーク		岩手県釜石市	
74	2.10.31	大槌町文化交流センター「おしゃっち」		岩手県上閉伊郡大槌町	
75	2.10.31	イーストピアみやこ防災プラザ		岩手県宮古市	
76	2.11.1	震災メモリアルパーク中の浜		岩手県宮古市	
77	2.11.1	たろう潮里ステーション		岩手県宮古市	
78	2.11.1	田老第一防潮堤		岩手県宮古市	
79	2.11.1	震災遺構たろう観光ホテル		岩手県宮古市	
80	2.11.1	津波到達プレート		岩手県宮古市	
81	2.11.1	島越ふれあい公園		岩手県下閉伊郡田野畑村	
82	2.11.1	田野畑駅前津波到達地の碑		岩手県下閉伊郡田野畑村	
83	2.11.1	羅賀ふれあい公園		岩手県下閉伊郡田野畑村	
84	2.11.1	震災遺構明戸防潮堤		岩手県下閉伊郡田野畑村	
85	2.11.1	太田名部防潮堤		岩手県下閉伊郡普代村	
86	2.11.1	普代水門		岩手県下閉伊郡普代村	
87	2.11.1	野田村東日本大震災津波記念碑		岩手県下閉伊郡野田村	
88	2.11.1	震災遺構米田歩道橋の一部		岩手県下閉伊郡野田村	
89	2.11.1	久慈市防災展示館あーすぴあ		岩手県久慈市	
90	2.11.1	八戸市みなと体験館「みなっ知」		青森県八戸市	
91	2.11.2	3.11東日本大震災遠野市後方支援資料館		岩手県遠野市	
92	2.11.9	石田沢防災センター		宮城県宮城郡松島町	
93	2.11.9	石巻市復興まちづくり情報交流館中央館		宮城県石巻市	
94	2.11.9	おしかホエールランド		宮城県石巻市	
95	2.11.9	震災遺構旧女川交番		宮城県牡鹿郡女川町	
96	2.11.9	旧大川小学校		宮城県石巻市	
97	2.11.10	石巻南浜津波復興記念公園（がんばろう！石巻）		宮城県石巻市	
98	2.11.10	旧門脇小学校		宮城県石巻市	
99	2.11.10	震災伝承スペースつなぐ館		宮城県石巻市	
100	2.11.10	石巻3.11あすのためのミュージアム		宮城県石巻市	
101	2.11.10	南三陸町震災復興祈念公園		宮城県本吉郡南三陸町	
102	2.11.10	震災遺構高野会館		宮城県本吉郡南三陸町	
103	2.11.11	唐桑半島ビジターセンター		宮城県気仙沼市	
104	2.11.11	リアス・アーク美術館		宮城県気仙沼市	
105	2.11.11	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館		宮城県気仙沼市	
106	2.11.25	塩竈市津波防災センター		宮城県塩竈市	
107	2.11.25	仙台合同庁舎B棟東北地方整備局展示スペース		宮城県仙台市青葉区	
108	2.11.25	名取市震災復興伝承館		宮城県名取市	
109	2.11.25	名取市震災メモリアル公園		宮城県名取市	
110	2.11.25	閖上の記憶		宮城県名取市	
111	2.11.25	NHK仙台放送局		宮城県仙台市青葉区	
112	2.11.26	震災遺構鈴木家住宅		宮城県名取市	
113	2.11.26	東日本大震災メモリアルパーク千年希望の丘		宮城県岩沼市	
114	2.11.26	亘理町立郷土資料館		宮城県亘理郡亘理町	
115	2.11.26	福島県環境創造センター交流館コミュタン福島		福島県田村郡三春町	
116	2.11.30	東京家政学院生活文化博物館	特別展　復興から未来へ　～博物館と地域のこれから～	東京都町田市	2020/11/9～2021/2/5
117	2.12.22	桜島ビジターセンター		鹿児島県鹿児島市	
118	2.12.22	桜島国際火山砂防センター		鹿児島県鹿児島市	
119	2.12.22	黒神埋没鳥居		鹿児島県鹿児島市	
120	3.1.25	伊豆大島火山博物館		東京都大島町	

表7　東日本大震災他自然災害関係調査館一覧

121	3.1.25	大島町郷土資料館		東京都大島町	
122	3.1.25	ジオステーションおかた港		東京都大島町	
123	3.2.15	阿蘇火山博物館		熊本県阿蘇市	
124	3.2.21	福島県立博物館	福島県立博物館令和2年度冬の企画展　震災遺産を考える　次の10年につなぐために	福島県会津若松市	2021/1/16～3/21
125	3.3.13	弥富市歴史民俗資料館		愛知県弥富市	
126	3.3.21	蒲郡市立図書館	春の特別展　あれから10年　広告に見る忘れじの東日本大震災	愛知県蒲郡市	2021/3/5～3/28
127	3.3.22	日本科学未来館	特別企画 「震災と未来」展　－東日本大震災10年－	東京都江東区	2021/3/6～3/28
128	3.3.30	入間市博物館	震災から10年　東日本大震災写真パネル展	埼玉県入間市	2021/3/11～4/11
129	3.4.4	M7.8パネル館		北海道白糠郡白糠町	
130	3.5.3	南相馬市博物館	南相馬の震災10年	福島県南相馬市	2021/3/6～5/5
131	3.7.23	神戸市立博物館		兵庫県神戸市中央区	
132	3.8.11	国文学研究資料館	特別展示　復興を支える地域の文化　－3.11から10年	東京都立川市	2021/8/4～9/29
133	3.8.22	旭市防災資料館		千葉県旭市	
134	3.9.5	東京都復興記念館		東京都墨田区	
135	3.9.24	原子力災害考証館		福島県いわき市	
136	3.9.24	ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館		福島県双葉郡楢葉町	
137	3.9.24	南相馬市防災センター		福島県南相馬市	
138	3.9.25	みやぎ東日本大震災津波伝承館		宮城県石巻市	
139	3.9.25	伝承交流館MEET門脇		宮城県石巻市	
140	3.9.25	南浜つなぐ館		宮城県石巻市	
141	3.9.25	石巻ニューゼ		宮城県石巻市	
142	3.9.25	石巻市震災遺構大川小学校		宮城県石巻市	
143	3.9.25	佐藤信一常設写真展示館　南三陸の記憶		宮城県本吉郡南三陸町	
144	3.10.10	釜石市郷土資料館		岩手県釜石市	
145	3.10.16	高槻市立自然博物館あくあぴあ芥川	ふるさとを守る、学ぶ、記録する 『10年間ふるさとなみえ博物館』巡回展	大阪府高槻市	2021/9/18～10/17

※赤字は展示施設ではないが、東日本大震災や自然災害についての記憶を留めるための震災遺構や記念碑等であり、本研究との関係も大きいことから一覧に記載しているものである。

表8　オリンピック、万博、サミット等関係調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	31.2.12	太陽の塔		大阪府吹田市	
2	1.12.8	EXPO '70パビリオン		大阪府吹田市	
3	2.9.14	洞爺湖サミット記念館		北海道虻田郡洞爺湖町	
4	2.11.15	愛・地球博記念館		愛知県長久手市	
5	2.12.29	伊勢志摩サミット記念館サミエール		三重県志摩市	
6	3.8.2	長野オリンピックミュージアム		長野県長野市	
7	3.8.30	つくばエキスポセンター	科学万博－つくば' 85	茨城県つくば市	
8	3.10.10	ラグビーカフェ		岩手県釜石市	

表9 戦争関係調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	1.6.22	立命館大学国際平和ミュージアム	立命館大学国際平和ミュージアム2019年度春季特別展　よみがえる沖縄1935	京都府京都市北区	2019/4/13～6/29
2	1.9.23	長崎原爆資料館		長崎県長崎市	
3	1.9.23	浦上天主堂		長崎県長崎市	
4	1.9.28	舞鶴引揚記念館		京都府舞鶴市	
5	1.10.6	原爆ドーム		広島県広島市中区	
6	1.10.6	広島平和記念資料館		広島県広島市中区	
7	2.1.28	平和祈念展示資料館	企画展　女性たちの戦争展	東京都新宿区	2020/1/7～3/29
8	2.1.31	旧海軍司令部壕		沖縄県豊見城市	
9	2.1.31	南風原町立南風原文化センター		沖縄県島尻郡南風原町	
10	2.1.31	沖縄陸軍病院南風原壕群20号		沖縄県島尻郡南風原町	
11	2.1.31	沖縄県平和祈念資料館		沖縄県糸満市	
12	2.1.31	ひめゆり平和祈念資料館		沖縄県糸満市	
13	2.1.31	沖縄県立博物館・美術館		沖縄県那覇市	
14	2.2.1	世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム		沖縄県中頭郡読谷村	
15	2.6.16	岡山空襲展示室	第43回岡山戦災の記録と写真展　－戦後75年　資料と記憶の保存と継承－	岡山県岡山市北区	2020/6/9～7/5
16	2.6.17	福山市人権平和資料館		広島県福山市	
17	2.6.17	ホロコースト記念館		広島県福山市	
18	2.6.17	呉市海事歴史科学館		広島県呉市	
19	2.6.18	回天記念館		山口県周南市	
20	2.6.19	のぼり平和資料館		広島県広島市中区	
21	2.6.19	広島逓信病院旧外来棟被爆資料室		広島県広島市中区	
22	2.6.19	袋町小学校平和資料館		広島県広島市中区	
23	2.6.19	旧日本銀行広島支店		広島県広島市中区	
24	2.6.19	広島市役所旧庁舎資料展示室		広島県広島市中区	
25	2.6.19	シュモーハウス		広島県広島市中区	
26	2.7.17	原爆の図丸木美術館		埼玉県東松山市	
27	2.7.17	埼玉県平和資料館		埼玉県東松山市	
28	2.7.23	木曽川文化史料館各務原空襲資料室		岐阜県各務原市	
29	2.8.3	戦争博物館		栃木県那須郡那須町	
30	2.8.3	アウシュビッツ平和博物館		福島県白河市	
31	2.8.8	ピースあいち		愛知県名古屋市名東区	
32	2.8.9	吹田市立平和祈念資料館		大阪府吹田市	
33	2.8.10	滋賀県平和祈念館		滋賀県東近江市	
34	2.8.17	水戸市平和記念館		茨城県水戸市	
35	2.8.17	筑波海軍航空隊記念館		茨城県笠間市	
36	2.8.19	桶川飛行学校平和祈念館		埼玉県桶川市	
37	2.8.19	予科練平和記念館		茨城県稲敷郡阿見町	
38	2.8.27	武蔵村山市立歴史民俗資料館分館		東京都武蔵村山市	
39	2.8.31	山梨平和ミュージアム・石橋湛山記念館		山梨県甲府市	
40	2.9.6	長岡戦災資料館		新潟県長岡市	
41	2.9.7	仙台市戦災復興記念館		宮城県仙台市青葉区	
42	2.9.19	堺市立平和と人権資料館		大阪府堺市中区	
43	2.9.19	ピースおおさか		大阪府大阪市中央区	
44	2.9.22	満蒙開拓平和記念館		長野県下伊那郡阿智村	
45	2.10.12	世田谷区立平和資料館		東京都世田谷区	
46	2.10.13	東京都立第五福竜丸展示館		東京都江東区	
47	2.10.19	立命館大学国際平和ミュージアム		京都府京都市北区	
48	2.10.23	北上平和記念展示館		岩手県北上市	
49	2.11.24	神奈川県立地球市民プラザ「アースプラザ」国際平和展示室		神奈川県横浜市栄区	
50	2.11.30	わだつみのこえ記念館		東京都文京区	
51	2.11.30	アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館		東京都新宿区	
52	2.12.7	対馬丸記念館		沖縄県那覇市	
53	2.12.7	不屈館		沖縄県那覇市	
54	2.12.7	佐喜眞美術館		沖縄県宜野湾市	
55	2.12.8	民俗資料博物館		沖縄県名護市	
56	2.12.8	ヌチドゥタカラの家		沖縄県国頭郡伊江村	
57	2.12.9	八重山平和祈念館		沖縄県石垣市	
58	2.12.21	知覧特攻平和会館		鹿児島県南九州市	
59	2.12.21	ホタル館富谷食堂		鹿児島県南九州市	

表9 戦争関係調査館一覧

60	2.12.22	鹿屋航空基地史料館		鹿児島県鹿屋市	
61	2.12.22	海軍航空隊串良基地の地下壕第一通信室		鹿児島県鹿屋市	
62	2.12.22	都城歴史資料館		宮崎県都城市	
63	2.12.27	津市香良洲歴史資料館		三重県津市	
64	2.12.28	岐阜市平和資料室		岐阜県岐阜市	
65	3.2.12	北九州平和資料館		福岡県北九州市若松区	
66	3.2.12	福岡市立市民福祉プラザふくふくプラザ内資料展引揚港博多		福岡県福岡市中央区	
67	3.2.13	碓井平和祈念館		福岡県嘉麻市	
68	3.2.13	筑前町立大刀洗平和記念館		福岡県朝倉郡筑前町	
69	3.2.14	長崎市立山里小学校原爆資料室		長崎県長崎市	
70	3.2.14	長崎市立城山小学校平和祈念館		長崎県長崎市	
71	3.2.14	山王神社二の鳥居（一本柱鳥居）		長崎県長崎市	
72	3.2.14	岡まさはる記念長崎平和資料館		長崎県長崎市	
73	3.2.14	救護所メモリアル		長崎県長崎市	
74	3.2.15	菊池飛行場ミュージアム		熊本県菊池市	
75	3.2.17	明石市立文化博物館内平和資料室		兵庫県明石市	
76	3.2.17	神戸市立兵庫図書館内戦災記念資料室		兵庫県神戸市兵庫区	
77	3.7.20	平和資料館　草の家		高知県高知市	
78	3.7.23	高松市平和記念館		香川県高松市	
79	3.7.24	西宮市平和資料館		兵庫県西宮市	
80	3.7.24	西宮市大谷記念美術館	石内都展　見える見えない、写真のゆくえ	兵庫県西宮市	2021/4/3～7/25
81	3.7.25	豊川市平和交流館		愛知県豊川市	
82	3.8.2	戦没画学生慰霊美術館　無言館		長野県上田市	
83	3.8.2	松代大本営象山地下壕		長野県長野市	
84	3.8.2	もうひとつの歴史館・松代		長野県長野市	
85	3.8.2	気象庁松代地震観測所		長野県長野市	
86	3.8.3	川崎市平和館		神奈川県川崎市中原区	
87	3.8.10	愛知平和記念館		愛知県名古屋市中区	
88	3.8.10	愛知・名古屋戦争に関する資料館		愛知県名古屋市中区	
89	3.8.27	平和祈念展示資料館		東京都新宿区	
90	3.8.28	しょうけい館		東京都千代田区	
91	3.8.28	遊就館		東京都千代田区	
92	3.8.28	昭和館		東京都千代田区	
93	3.8.29	東京大空襲・戦災資料センター		東京都江東区	
94	3.9.5	東京都復興記念館		東京都墨田区	
95	3.10.9	青森空襲資料常設展示室		青森県青森市	
96	3.10.15	姫路市平和資料館		兵庫県姫路市	

表10 公害関係調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	1.8.13	四日市公害と環境未来館		三重県四日市市	
2	1.9.22	水俣市立水俣資料館		熊本県水俣市	
3	1.9.22	水俣病歴史考証館		熊本県水俣市	
4	1.12.1	新潟水俣病資料館		新潟県新潟市北区	
5	1.12.7	富山県立イタイイタイ病資料館		富山県富山市	
6	2.6.16	倉敷市環境学習センター		岡山県倉敷市	
7	2.7.27	清流会館		富山県富山市	
8	3.2.12	北九州市環境ミュージアム		福岡県北九州市八幡東区	
9	3.3.2	尼崎市立歴史博物館		兵庫県尼崎市	
10	3.10.15	西淀川・公害と環境資料館エコミューズ		大阪府大阪市西淀川区	

表11 ダムに沈んだ村関係調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	30.6.2	日吉ダム	天若湖アートプロジェクト　あかりがつなぐ記憶	京都府南丹市	2018/6/2～6/3
2	1.6.1	日吉ダム	天若湖アートプロジェクト　あかりがつなぐ記憶	京都府南丹市	2019/6/1～6/2
3	1.8.12	徳山民俗資料収蔵館		岐阜県揖斐川市	
4	1.8.12	徳山ダム		岐阜県揖斐川市	
5	1.8.12	徳山会館		岐阜県揖斐川市	
6	1.9.8	シアターセブン	映画「水になった村」	大阪府大阪市淀川区	
7	2.6.18	阿武川歴史民俗資料館		山口県萩市	
8	2.6.22	奥多摩水と緑のふれあい館		東京都西多摩郡奥多摩町	
9	2.7.20	秩父市浦山歴史民俗資料館		埼玉県秩父市	
10	2.7.24	石川県立白山ろく民俗資料館		石川県白山市	
11	2.7.24	手取川総合開発記念館		石川県白山市	
12	2.9.5	縄文の里・朝日		新潟県村上市	
13	2.9.5	奥三面ダム		新潟県村上市	
14	2.9.6	只見町ブナセンター付属民俗資料館ふるさと館田子倉		福島県南会津郡只見町	
15	2.9.15	滝里ダム		北海道芦別市	
16	2.9.16	平取町立二風谷アイヌ文化博物館		北海道沙流郡平取町	
17	2.9.16	沙流川歴史館		北海道沙流郡平取町	
18	2.9.16	萱野茂二風谷アイヌ資料館		北海道沙流郡平取町	
19	2.9.18	北杜市郷土資料館		山梨県北杜市	
20	2.11.26	七ヶ宿町水と歴史の館		宮城県苅田郡七ヶ宿町	
21	3.3.15	南丹市日吉町郷土資料館	日吉ダムのあゆみ　川とともに暮らした人びと	京都府南丹市	2021/1/9～3/21
22	3.4.11	東大和市立郷土博物館		東京都東大和市	
23	3.7.24	川西市立歴史民俗資料館		兵庫県川西市	
24	3.7.25	豊田市旭郷土資料館		愛知県豊田市	
25	3.9.5	東京都美術館	Walls＆Bridges　壁は橋になる　世界にふれる、世界を生きる	東京都台東区	2021/7/22～10/9

表12 その他本研究に関係する博物館等調査館一覧

番号	調査日	館名	展示名	所在地	開催時期
1	30.3.20	北区飛鳥山博物館	<回想のための>テーマ展示 オボエテマスカ？ ー懐かしの暮らしと道具ー	東京都北区	2018/3/10～6/17
2	30.3.25	東京工芸大学 杉並アニメーションミュージアム	杉並アニメーションミュージアム 日本のアニメ100周年Part3 みんなのうたの世界展	東京都杉並区	2018/1/18～3/25
3	30.4.14	アーツ千代田3331	別れの博物館 あなたとわたしのお別れ展	東京都千代田区	2018/3/31～4/14
4	30.7.14	夕張市石炭博物館		北海道夕張市	
5	30.9.8	国立歴史民俗博物館	ニッポンおみやげ博物誌	千葉県佐倉市	2018/7/10～9/17
6	30.11.11	もりおか歴史文化館	Where is this? ー写真の情報を探していますー	岩手県盛岡市	2018/9/19～12/17
7	31.2.2	国立科学博物館	千の技術展	東京都台東区	
8	1.5.5	仙台メディアテーク	どこコレ？ ーおしえてください昭和のセンダイー	宮城県仙台市青葉区	2019/4/27～6/30
9	1.6.15	長野県立長野図書館	どこコレ？ @県立長野図書館 信州篇 ー信州のまちのキオクをキロクしようー	長野県長野市	2019/4/27～6/30
10	1.6.15	伊那市立高遠町図書館	どこコレ？ 信州篇	長野県伊那市	2019/4/27～6/30
11	1.6.15	伊那市立伊那図書館	どこコレ？ 信州篇	長野県伊那市	2019/4/27～6/30
12	1.6.23	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA企画展 忘れようとしても思い出せない	滋賀県近江八幡市	2019/6/8～9/8
13	1.6.29	お茶ナビゲート	どこコレ？ ー東京篇ー	東京都千代田区	2019/4/27～6/30
14	1.7.13	LIXIL GALLERY	台所見聞録 人と暮らしの万華鏡	東京都中央区	
15	1.8.25	鞍手町石炭資料展示場		福岡県鞍手郡鞍手町	
16	1.8.25	直方市石炭記念館		福岡県直方市	
17	1.8.25	飯塚市歴史資料館		福岡県飯塚市	
18	1.8.25	田川市石炭・歴史博物館		福岡県田川市	
19	1.8.27	大野城心のふるさと館	大野城心のふるさと館開館1周年記念特別展 TOYs EXPO ー時代を越えて愛される おもちゃ・ゲームの世界展ー	福岡県大野城市	2019/7/20～9/1
20	1.9.16	北名古屋市歴史民俗資料館	企画展 ココロ・オドル・昭和NEWS・スクラップ	愛知県北名古屋市	2019/7/6～9/16
21	1.12.16	上京区総合庁舎	上京区の小学校に伝わる民具と地域のちから	京都府京都市上京区	2019/12/14～12/26
22	2.1.12	北名古屋市歴史民俗資料館	特別展 Re：ディスカバー・ミニチュア・ジャパン	愛知県北名古屋市	2019/11/1～2020/2/9
23	2.3.17	パルテノン多摩歴史ミュージアム	パルテノン多摩歴史ミュージアム企画コーナー展示 みんなで語る多摩の宝物 未来へつなげる地域遺産	東京都多摩市	2019/11/14～2020/3/31
24	2.5.30	大阪人権博物館		大阪府大阪市浪速区	
25	2.9.19	舳松人権歴史館		大阪府堺市堺区	
26	2.9.22	水平社博物館		奈良県御所市	
27	2.9.29	草加市立歴史民俗資料館	草加×東洋ーのマンモス団地展	埼玉県草加市	2020/8/1～10/4
28	2.11.15	北名古屋市歴史民俗資料館	開館30周年記念特別展 くらしの移り変わりを知る”collection”30	愛知県北名古屋市	2020/11/1～2021/1/31
29	2.11.16	京都芸術大学	記憶と記録とエピソード展「茶碗」	京都府京都市左京区	2020/11/11～11/18
30	2.8.10	愛荘町立歴史文化博物館	令和2年度特別展 玩具伝説 ーおもちゃの60年史ー	滋賀県愛知郡愛荘町	2020/7/23～8/30
31	3.2.12	北九州イノベーションギャラリー	昭和あそびの祭典	福岡県北九州市八幡東区	2021/1/9～2/21
32	3.3.29	グリナード永山、永山公民館、諏訪商店街、永山商店街	多摩ニュータウン初期入居50周年記念展示「諏訪・永山のあゆみ ～初期入居からの道のり～」	東京都多摩市	2021/3/7～3/29
33	3.4.17	北区飛鳥山博物館	<回想のための>テーマ展示 オボエテマスカ？ ー懐かしの暮らしと道具ー	東京都北区	2021/3/13～6/13
34	3.7.21	東温市立歴史民俗資料館収蔵庫		愛媛県東温市	
35	3.8.10	名古屋市博物館	ゲーセンミュージアム	愛知県名古屋市瑞穂区	2021/6/1～8/29
36	3.8.11	国立ハンセン病資料館		東京都東村山市	
37	3.8.29	佐倉市立美術館	収蔵作品展 ミテ・ハナソウカード作品展	千葉県佐倉市	2021/7/31～9/23
38	3.8.30	学校給食歴史館		埼玉県北本市	

発表論文一覧

・青海伸一「『新型コロナウイルス対応アンケート』集計結果報告　－東京都三多摩公立博物館協議会加盟館における新型コロナウイルス対策の状況と今後の課題－」／青海伸一「福生市郷土資料室における新型コロナウイルスの対応状況」東京都三多摩公立博物館協議会編『東京都三多摩公立博物館協議会　ミュージアム多摩』42 号、東京都三多摩公立博物館協議会、2021 年 3 月 31 日

・青海伸一「福生市郷土資料室における新型コロナウイルス関連資料の収集と展示」公益財団法人たましん地域文化財団歴史資料室編『多摩のあゆみ』182 号、公益財団法人たましん地域文化財団、2021 年 5 月 31 日

・青海伸一「常設展示における来館者参加型プロジェクトの実施報告　－民俗展示コーナーの資料を活用した、世代を越えた対話の機会の創出へ向けての取り組み－」福生市郷土資料室編『福生市郷土資料室研究紀要』第 2 号、福生市教育委員会、2022 年 3 月 31 日